

熊本県文化財調査報告第196集

すぎ の もと
杉の本遺跡

県営圃場整備事業（白水西部地区）に伴う埋蔵文化財の調査

2001.3

熊本県教育委員会

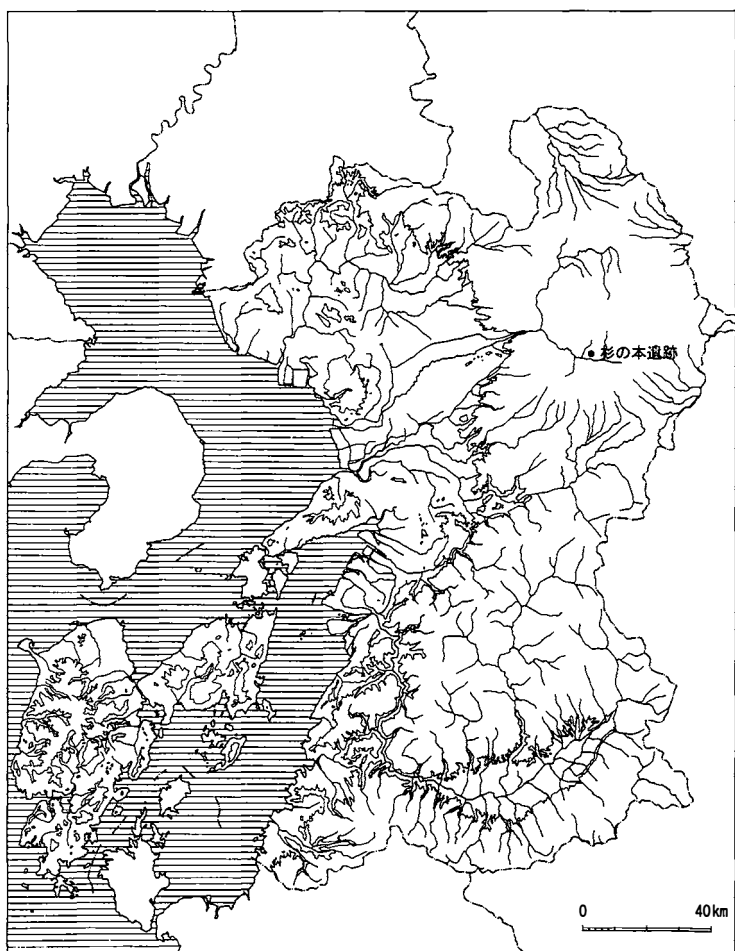


杉の本遺跡全景

すぎ の もと

杉の本遺跡

熊本県阿蘇郡白水村大字中松字杉の本所在の遺跡



2001.3

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、県営圃場整備事業（白水西部地区）に伴う埋蔵文化財調査として、阿蘇郡白水村に所在する杉の本遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、7世紀から9世紀にかけての大規模な集落跡が確認されました。とりわけ大型の掘立柱建物を中心とした集落の成り立ちは、南郷谷の拠点的な性格を推測させます。阿蘇地方においてこの時期の集落跡の発見は例がなく、律令期の集落の有様を復原するうえで貴重な遺跡である、ということが言えます。

このたび、杉の本遺跡報告書を刊行することになりましたが、本報告書が広く県民の皆様の埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与することができれば、誠に喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかった県農政部、県阿蘇事務所（現、阿蘇地域振興局）耕地課、白水村教育委員会及び地元の関係者の皆様、また御指導御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成13年 3月31日

熊本県教育長 田中 力男

例言

- 1 本書は、県営圃場整備事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、熊本県阿蘇郡白水村に所在する杉の本遺跡が対象となり、県農政部の依頼を受けて熊本県教育委員会が実施した。
- 3 遺物の整理は、熊本県文化財収蔵庫で行った。なお、遺物の保管も文化財収蔵庫である。
- 4 遺跡の発掘調査は、平成4年度に実施し、整理は平成11年度に行った。
- 5 本書の地形図は、県農政部から提供を受けたものをもとにした作成した。
- 6 現地調査での実測及び写真撮影は、古森政次・水野哲郎が行った。
- 7 遺物の実測は水野・竹田知美・宮崎まい子・前屋敷和美・上山光美・水上仁が行った。また、遺物実測の一部を（有）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。土器拓影は整理作業員4名であった。遺構製図及び遺物製図は竹田・宮崎・前屋敷・上山がおこなった。遺物の写真は村田百合子・水野・竹田が撮影した。
- 8 土壌分析は古環境研究所に依頼した。
- 9 本書の執筆は水野が行った。
- 10 本書の編集は水野があたり、校正に際しては竹田・前屋敷が補助した。

凡例

- 1 現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。

竪穴住居	20分の1
掘立柱建物	20分の1
土坑	10分の1
溝	20分の1

また、本書収録の際には以下の縮尺となった。

掘立柱建物	80分の1
竪穴住居	60分の1
土坑	30分の1
- 2 遺構図に示した方位は磁北である。
- 3 遺構は以下のように記号化した。

竪穴住居	= S I
掘立柱建物	= S B
土坑	= S K
溝	= S D
不明遺構	= S X
- 4 出土遺物の番号は、各図版ごとに通して付した。例えば、第5図の1番の遺物であれば5-1のように表記した。なお、縮尺は3分の1である。
- 5 須恵器は断面にスクリーントーンを貼って示した。その他の遺物は白いままである。
- 6 土師器甕の内面の調整で、ヘラ削りは矢印で削りの方向を示した。
- 7 出土遺物の解説は本文中に記した。

杉の本遺跡目次

序文	
例言・凡例	
第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	3
1 調査の契機	3
2 事業照会と予備調査の経過	3
3 発掘調査の進捗	3
4 調査の組織	3
第2節 調査の方法と経過	6
1 調査の方法	6
2 調査の経過	6
第Ⅱ章 遺跡の概要	9
第1節 遺跡の環境	11
1 地理的環境	11
2 歴史的環境	11
第2節 遺跡の概要	17
第3節 遺跡の層位と包含層	17
第Ⅲ章 調査とその成果	19
第1節 遺構とそれに伴う遺物	21
1 はじめに	21
2 竪穴住居 (S I)	21
3 掘立柱建物 (S B)	58
- 1 遺構	58
- 2 遺物	77
4 不明遺構 (S X)	80
- 1 遺構	80
- 2 遺物	81
5 溝 (S D)	85
- 1 遺構	85
- 2 遺物	85
第2節 その他の遺物	96
第Ⅳ章 自然化学分析	101
熊本県、杉の本遺跡のテフラ分析	103
第Ⅴ章 まとめ	111
遺物観察表	119
参考文献	122
写真図版	123
あとがき	159

插图目次

- 第1图 周边地形图（事業前）
- 第2图 周边地形图（事業後）
- 第3图 周边遺跡地区
- 第4图 全体遺構配置图
- 第5图 S I 01遺構実測图・出土遺物実測图
- 第6图 S I 02、04、05遺構実測图・出土遺物実測图
- 第7图 S I 04、05遺構実測图
- 第8图 S I 03遺構実測图・出土遺物実測图
- 第9图 S I 06遺構実測图・出土遺物実測图
- 第10图 S I 07、08、09、16遺構実測图
- 第11图 S I 09断面图・S I 07遺構実測图・S I 07竈実測图
- 第12图 S I 08、16遺構実測图
- 第13图 S I 16竈実測图・S I 07、16出土遺物実測图
- 第14图 S I 10、11、12遺構実測图①
- 第15图 S I 10、11、12遺構実測图②
- 第16图 S I 10、11、12遺構実測图③
- 第17图 S I 13遺構実測图・出土遺物実測图
- 第18图 S I 14遺構実測图・出土遺物実測图
- 第19图 S I 15遺構実測图・出土遺物実測图
- 第20图 S I 17、18、19遺構実測图
- 第21图 S I 17、18、19出土遺物実測图
- 第22图 S I 20、22、29遺構実測图
- 第23图 S I 20竈実測图・S I 20、22出土遺物実測图
- 第24图 S I 21、30遺構実測图①
- 第25图 S I 21、30遺構実測图②・出土遺物実測图
- 第26图 S I 24、25遺構実測图①
- 第27图 S I 24、25遺構実測图②・S I 24竈実測图・出土遺物実測图①
- 第28图 S I 24、25出土遺物実測图②
- 第29图 S I 26、27遺構実測图・S I 27竈実測图・出土遺物実測图
- 第30图 S I 28遺構実測图
- 第31图 S I 31遺構実測图・出土遺物実測图
- 第32图 S I 32、33遺構実測图①
- 第33图 S I 32、33遺構実測图②・S I 32、33貯蔵穴実測图
- 第34图 S I 32、33出土遺物実測图
- 第35图 S I 34遺構実測图・出土遺物実測图
- 第36图 S I 35遺構実測图
- 第37图 S B 01、02、03遺構実測图
- 第38图 S B 04遺構実測图
- 第39图 S B 05遺構実測图①
- 第40图 S B 05遺構実測图②
- 第41图 S B 06遺構実測图
- 第42图 S B 07遺構実測图
- 第43图 S B 08遺構実測图
- 第44图 S B 09遺構実測图
- 第45图 S B 10遺構実測图
- 第46图 S B 11遺構実測图
- 第47图 S B 12遺構実測图
- 第48图 S B 13遺構実測图
- 第49图 S B 14遺構実測图
- 第50图 S B 15遺構実測图
- 第51图 S B 16遺構実測图
- 第52图 S B 17、18遺構実測图
- 第53图 S B 19遺構実測图
- 第54图 S B 20、21遺構実測图①
- 第55图 S B 20、21遺構実測图②
- 第56图 S B 22遺構実測图
- 第57图 S B 23遺構実測图
- 第58图 S B 24、25遺構実測图
- 第59图 S B 出土遺物実測图
- 第60图 S X 01土層断面图
- 第61图 S X 01出土遺物実測图①
- 第62图 S X 01出土遺物実測图②
- 第63图 S X 01出土遺物実測图③
- 第64图 S D 01出土遺物実測图①
- 第65图 S D 01出土遺物実測图②
- 第66图 S D 01出土遺物実測图③

- 第67図 S D01出土遺物実測図④
 第68図 S D02出土遺物実測図
 第69図 その他出土遺物実測図①
 第70図 その他出土遺物実測図②

- 第71図 その他出土遺物実測図③
 第72図 遺構変遷図①
 第73図 遺構変遷図②
 第74図 遺構変遷図③

表 目 次

- 第1表 周辺遺跡地名表
 第2表 S I 観察表

- 第3表 S B 観察表
 第4表 遺物観察表

図 版 目 次

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 口絵 杉の本遺跡全景 | (28) S B08 |
| (1) S I 01 | (29) S B09 |
| (2) S I 02、04、05 | (30) S B10 |
| (3) S I 03 | (31) S B11 |
| (4) S I 06 | (32) S B12 |
| (5) S I 07、08、09、16 | (33) S B13 |
| (6) S I 07竈 | (34) S B14 |
| (7) S I 10、11、12 | (35) S B15 |
| (8) S I 13 | (36) S B16 |
| (9) S I 14 | (37) S B18 |
| (10) S I 15 | (38) S B19 |
| (11) S I 17、18、19 | (39) S B20、21 |
| (12) S I 20、22、29 | (40) S B22 |
| (13) S I 20竈 | (41) S B23 |
| (14) S I 21、30 | (42) S B24、25 |
| (15) S I 24、25 | (43) S X01 |
| (16) S I 26、27 | (44) S D01 |
| (17) S I 28 | (45) S D01、02 |
| (18) S I 31、32、33 | (46) II区 S I・S B 集中部 |
| (19) S I 32、33貯蔵穴 | (47) I区 S I・S B 集中部 |
| (20) S I 34 | (48) S I 31、32、33 |
| (21) S I 35 | (49) S I 01出土須恵器坏 |
| (22) S B01、02 | (50) S I 02出土土師器坏 |
| (23) S B03 | (51) S I 03出土土師器坏 |
| (24) S B04 | (52) S I 06出土須恵器坏 |
| (25) S B05 | (53) S I 16出土須恵器坏蓋 |
| (26) S B06 | (54) S I 16出土須恵器坏蓋 |
| (27) S B07 | (55) S I 13出土土師器坏 |

- (56) S I 13出土土師器小壺
- (57) S I 15出土須惠器坏
- (58) S I 25出土鉄製刀子
- (59) S I 25出土須惠器坏蓋
- (60) S I 25出土須惠器坏蓋
- (61) S I 25出土須惠器坏
- (62) S I 32、33出土土師器坏
- (63) S I 32、33出土土師器坏
- (64) S I 32、33出土土師器坏
- (65) S I 32、33出土土師器坏
- (66) S I 32、33出土土師器坏
- (67) S I 32、33出土須惠器盤
- (68) S I 32、33出土須惠器坏蓋
- (69) S I 32、33出土須惠器坏蓋
- (70) S I 34出土須惠器坏
- (71) S B 10出土土師器坏
- (72) S B 11出土土師器坏
- (73) S X 01出土土師器皿
- (74) S X 01出土土師器甕
- (75) S D 01出土須惠器坏
- (76) S D 01出土須惠器坏
- (77) 土師器皿
- (78) 土師器甕

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1. 調査の契機
2. 事業照会と予備調査の経過
3. 発掘調査の進捗
4. 調査の組織

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法
2. 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

1 調査の契機

1989（平成元）年度より県営圃場整備事業白水西部地区の事業が計画された。これは「区画形状の改善、道路網の配置、用排水の分離、暗渠排水等の総合的な整備を行い、大型機械化営農体系の確立と農地の高度利用並びに流動化を推進して、中核的担い手農家の利用集積、生産組織の強化、生産コストの低減を図り、農家経営の安定を目指す。」という、いわゆる農業の近代化を図る目的で着手されたものである。受益面積は265haの大規模な農業基盤整備事業である。

2 事業照会と予備調査の経過

県農政部から同事業の計画が提出されたことを受けて、文化課では1989（平成元）年度に遺跡台帳の照合と現地踏査を実施した。その結果、杉の本遺跡、二本木前遺跡、祇園遺跡、南鶴遺跡、吉田城跡などの地点を埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性が高いところと判断した。その後速やかに踏査結果を県農政部に報告し、試掘・確認調査の必要な旨を通知した。

杉の本遺跡の確認調査は、平成2年5月に実施した（文化財保護主事 木崎康弘、坂田和弘）。その結果、多数の柱穴などの遺構、土師器・須恵器などの遺物が多く確認され、当該地に埋蔵文化財包蔵地の存在が認められることと、その範囲や深度を明示した報告書を農政部に通知した。また、今後の措置として、工事施工の上で埋蔵文化財包蔵地を掘削する地域については、発掘調査が必要である旨を農政部局へ通知した。

その後の協議で、遺跡保存のために耕地設計の変更を要請し、設計上やむなく掘削せざる得ない面（第1図スクリーン部分）については発掘調査を実施することとなった。

3 発掘調査の進捗

調査は1992（平成4）年11月より調査着手。調査

面積は約5,500m²で、旧地形は棚田の重なる段差の激しいところであるため、特に比高差のあるところで調査区を2つに分けた。すなわち、便宜上南側をⅠ区（約2,000m²）、北側をⅡ区（約3,500m²）と名付け調査を進めた。調査地区の名前は調査に着手した順番で命名した。遺跡は開田等で削平が激しく、遺構はかろうじて確認できる程度であった。掘立柱建物や竪穴住居を中心に遺構の数は密であったが、包含層も少なく、遺構が著しく削平されているため、厳冬の阿蘇という悪条件にもかかわらず調査は順調に進んで、1993（平成5）年の3月31日には調査の全日程を終了した。

4 調査の組織

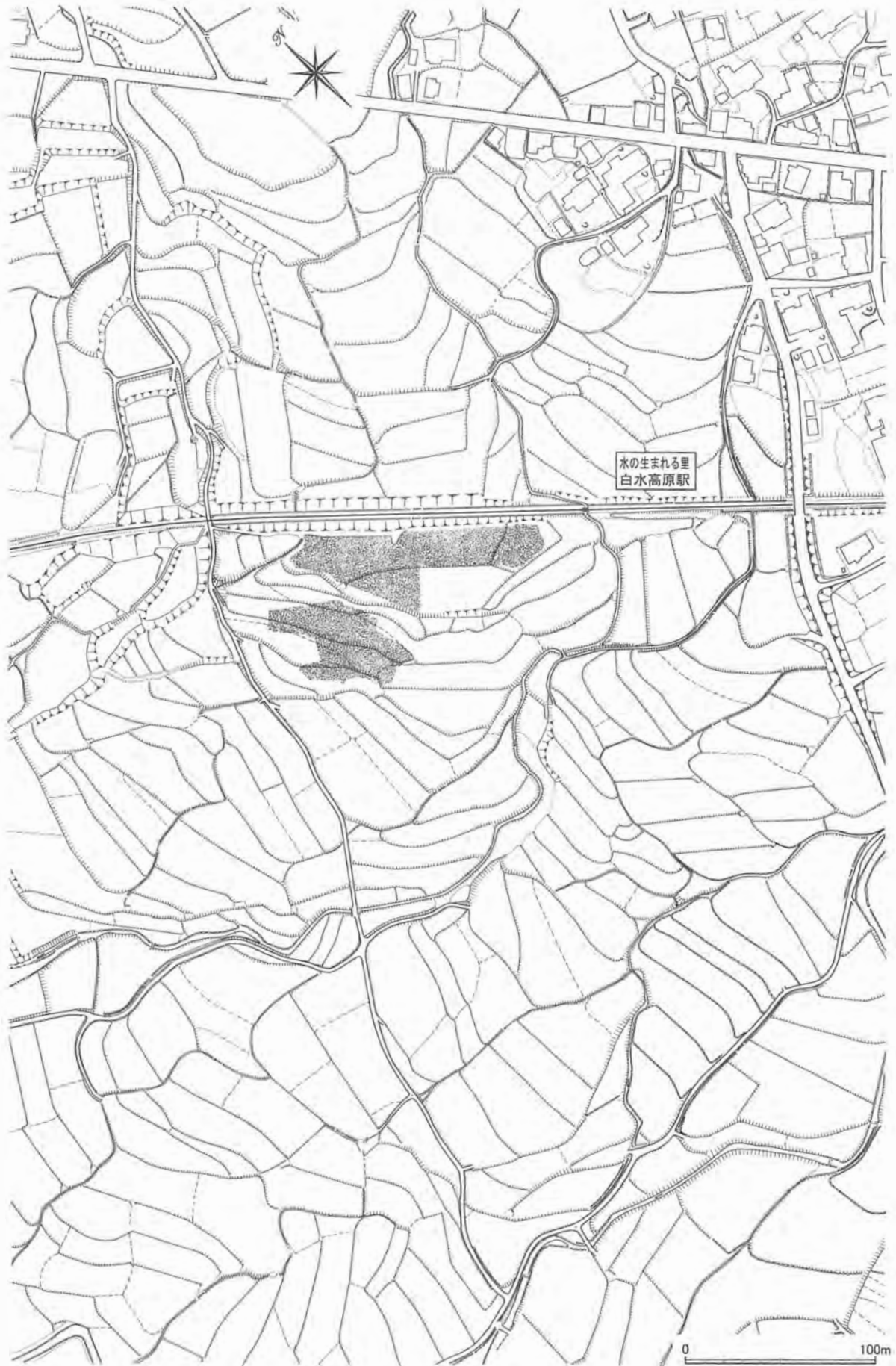
【1992（平成4）年度 発掘調査】

調査責任者 大塚正信（文化課長）
隈 昭志（教育審議員兼課長補佐）
調査総括 島津義昭（調査第1係長）
調査担当 古森政次（文化財保護主事）
水野哲郎（文化財保護主事）
調査事務局 松崎厚生（課長補佐）
木下英治（経理係長）
高濱保子（参事）
調査協力者 板楠和子（九州ルーテル大学教授）

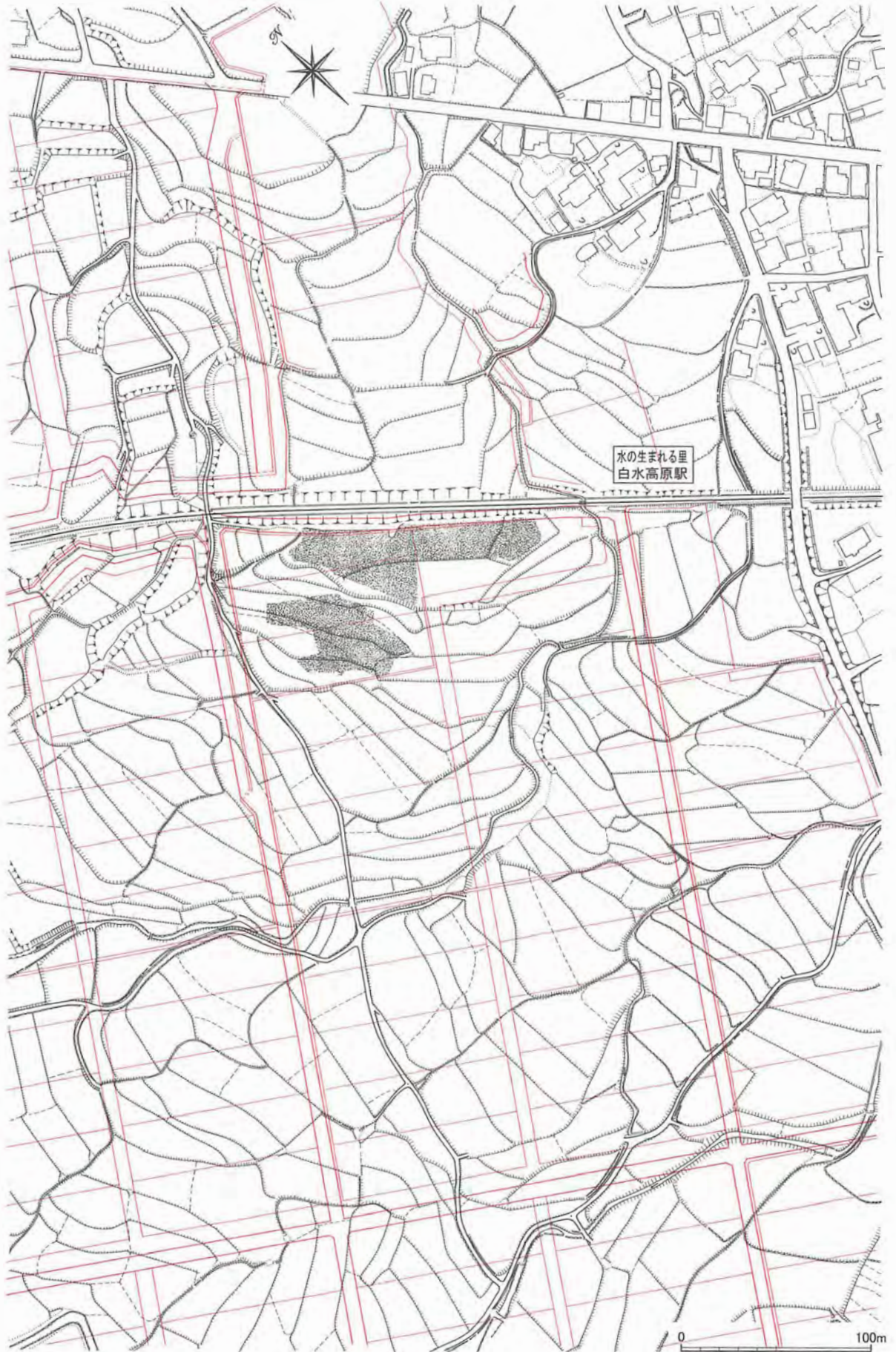
【1999（平成11）年度 報告書作成】

整理責任者 豊田貞二（首席教育審議員兼文化課長）
島津義昭（課長補佐）
整理総括 江本 直（主幹兼調査第2係長）
整理担当 水野哲郎（文化財保護主事）
竹田知美（嘱託）
宮崎まい子（嘱託）
前屋敷和美（臨時）
上山光美（臨時）
整理事務局 川上康治（課長補佐）
小斉久代（総務係長）
川口久夫（主事）
調査協力者 平川 南（国立歴史民俗博物館教授）
山本信夫（日本中世土器研究会）
網田龍生（熊本市教育委員会）
美濃口雅朗（熊本市教育委員会）

第1節 調査に至る経緯



第1図 周辺地形図（事業前）（1/3000）



第2図 周辺地形図（事業後）（1/3000）

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

まず重機による表土剥ぎを行い、作業員の手作業による清掃を行った。引き続き、実測図作成のために、工事区内の任意の点を基準にグリッドを調査区内に設定した。設定したグリッドの一辺の長さは10mであり、これを大グリッドと呼ぶ。また、北東を遺跡の上にしてそれぞれの大グリッドには下から上にA～J、左から右へ1～17までの番号を振り分け遺構の場所を示す基準とした。

調査地は遺物包含層が少なく、表土剥ぎは、遺物の検出できる黄褐色粘土層で止めている。埋土は黒褐色土であるため、遺構の認識は行いやすかった。

遺構には竪穴住居、掘立柱建物、溝、不明遺構などがあった。以下、それぞれについて調査方法を示す。

竪穴住居は、平面形を確認した後、平面形に合わせて実測の基準軸となる点を4つ設け、その点を結んで土層堆積状況を確認するためのベルトを十字に残し、発掘を行う。次に土層観察と土層断面図を作成し、その写真撮影をする。その後、ベルトを取り除いて平面図と断面図を完成させる。平面図は遺物を入れた状況を実測し、写真撮影を行う。その後遺物を取り除いた完掘写真を撮影し調査は完了する。実測図の縮尺は1/20である。

掘立柱建物は、調査区の清掃後に柱穴を観察し、柱穴の大きさ、埋土の状態、柱穴の配列・間隔などを考え併せて建物の単位を確定した。柱穴同士の切り合いより新旧が判断できたものもあった。その後、柱痕跡を確認し、写真撮影を行った。それぞれの柱穴について埋土を半割し、堆積状況を観察した上で平面図・断面図を完成させた。実測方法は、建物の平面にあわせて実測の基準軸4点を設け、平面図を作成した。実測図の縮尺率は1/20である。

溝の調査は、遺構の平面形を確認の後、土層の堆積状況を確認するためのベルトを残して発掘を行う。その後に土層の堆積状況を確認し、土層断面図と平面図を作成。縮尺率は1/20である。

写真はモノクロとカラースライドの2種類で撮影した。写真機の種類は35mmの一眼レフを用いた。撮影はそれぞれの遺構について2方向から3枚ずつを基本としている。また、調査の最終段階でラジコンヘリによる空中撮影をおこなった。

2 調査の経過

本調査は1992(平成4)年の11月より始まり、1993(平成5)年の3月に終了している。以下その経過を月ごとに記したい。

【11月】

初旬より調査開始。標高の高い同遺跡は11月はじめでも肌寒い。表土剥ぎを行い、遺構が大きく削平されていることがわかる。竪穴住居の検出や、掘立柱建物の柱穴の組み合わせなど、遺構検出に時間をかける。

【12月】

12月を迎えると寒さも一層増し、毎日のように降霜がある。遺構面を保護するために寒冷紗やシートで地面を覆うが効果はほどほど。I区では掘立柱建物もかなり検出が進み、竪穴住居の発掘も順調に進む。削平が激しく、遺構の埋土が少ないため発掘が早い。遺構内より出土する遺物も少ない。II区も遺構検出が順調に進む。

【1月】

年が明けて阿蘇の冬は厳しさを増して、現場は毎日のように凍結をする。遺構の精査も、昼の氷解を待たなければならない。調査面の氷が無くなった後、今度は現場がぬかるみ、いずれにしる困難な状況が続く。

発掘の中心はII区移り、I区では実測に追われる。

【2月】

調査期間もあと2ヶ月となり調査も大詰めに入る。遺構も掘立柱建物が20棟を越え、竪穴住居も20基ほど発掘を終える。

冬の寒さも本格化し、天候に係わらず必ず午後になると強い北風が襲う。降霜、凍結は毎日、降雪により作業を中止することもしばしばある。厳しい条件での調査である。

【3月】

北風が吹き付ける合間にしばしば暖かい南風も吹きはじめ、厳しい寒さが続く中にも春が近づいていることを感じる。調査も残り日数を数えながら順調に進捗する。

板楠先生に来跡いただき、助言を賜る。古環境研究所による土壌分析。ラジコンヘリによる空撮を終えて調査終了する。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の環境

- 1 地理的環境
- 2 歴史的環境

第2節 遺跡の概要

第3節 遺跡の層位と包含層

第1節 遺跡の環境

1 地理的環境

阿蘇地域での地理形成を見る場合に、特にその火山活動を看過することができない。ここでは約100万年以上前より数多くの火山活動を確認できるが、阿蘇外輪火山の噴火活動が活発になったのは約30年前程前である。数回の大規模な噴火により大量の火砕流を吐き出し、中部九州をほとんど覆い尽くした。その間、数回の陥没運動、断層運動が行われ、約2万5000年前までには現在のようなカルデラが形成された。その後カルデラ内は1万年以上の間湖であり、人々を寄せ付けぬ領域であった。

阿蘇郡はこのように形成された世界最大の阿蘇カルデラ、すなわち阿蘇山とその外輪山を中心とした地域の中に位置する。同郡を地域的に大別すれば、阿蘇カルデラ火山内部の中央火口丘山麓と火口原、および外輪山内壁斜面、外輪山外麓斜面とすることができる。内部の火口原は、中央火口丘を境として、北部の阿蘇谷と南部の南郷谷に分かれる。阿蘇谷は取り囲む外輪山頂部が平たく、その懐には広大な平坦地が広がっているのに対し、南郷谷の外輪山頂部は凹凸が激しく、しかも高い。後者では、火口丘と外輪山が迫っているために平坦部が狭く、東西に細長く弧を描いた谷部を形成している。谷中央部を切るようにして白川が流れ、南郷谷西端で阿蘇谷より流れ来る黒川と合流し、熊本平野へと流れ落ちる。集落は北の火口丘斜面、及び外輪山内壁斜面と平坦部の接点に発達し、白川に沿うよう続いている。

白水村はこのような南郷谷のほぼ中央部に位置し、北部の御竈門山や烏帽子岳などの1, の山々を背にした緩傾斜地上にある。杉の本遺跡は地籍上は熊本県阿蘇郡白水村大字中松字杉の本に位置する。一帯は、溶結凝灰岩を基盤として火山灰質の酸性土が覆い、土地は決して肥沃ではない。また、阿蘇山系の裾野にあたるため、村内至る所に湧水池が多く、古代より生活や農業・文化の面で村を潤す一方、同時に災厄ももたらしてきた。阿蘇山に降り注いだ大雨は土石流となって、谷の迫ったこの地域

を何度となく襲い被害を与えてきた。また、カルデラ内に人々の営みがはじまってからも、阿蘇山は激しい噴火を繰り返し、人々を不安に陥れた。火山灰によりしばしばもたらされる、家畜や農作物に対する被害をととも、この地域の人々の生活は古来、自然との闘いであったことは想像に難くない。

2 歴史的環境

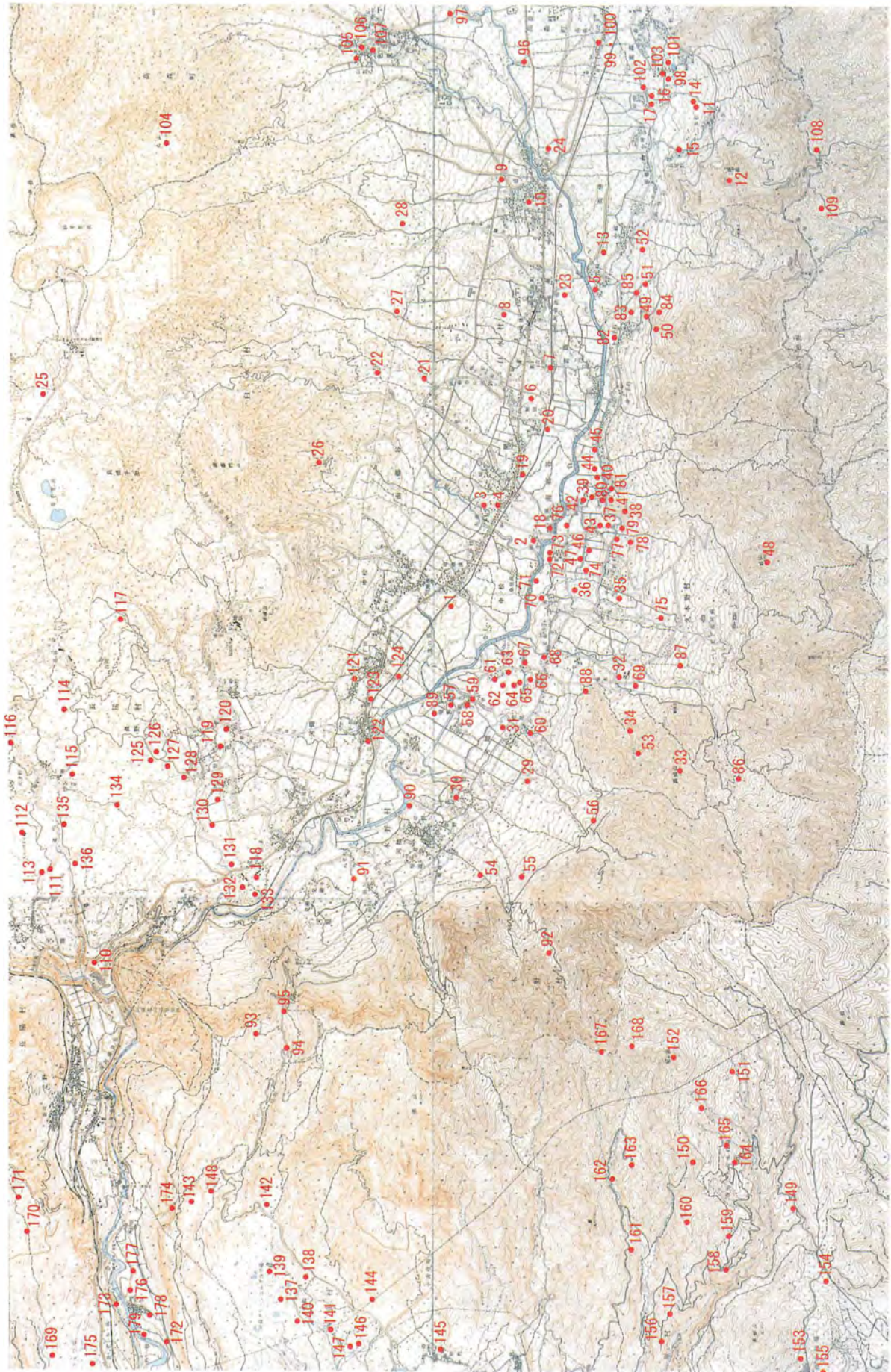
旧石器・縄文時代

阿蘇地方を概観した場合、旧石器時代の遺跡は外輪山内壁斜面・外麓斜面に点々と見られ、約30ヶ所が知られる。外輪山北部では下城遺跡（小国町）、大観望遺跡、湯浦遺跡、長倉坂遺跡（以上阿蘇町）、象ガ鼻遺跡（一の宮町）などがそれであるが、外輪山南西部では大矢野原（矢部町～西原村）に十数カ所の遺跡群がある。しかし、カルデラ内においては湖の形成の時期にあたるためか、旧石器の遺跡は発見されておらず、実態は不明である。

縄文時代の遺跡は、早期と晩期が多く、中期は極めて少ない。地理的には外輪山の縁辺部に集中し、カルデラ内への縄文人の進出は見られない。これは、カルデラ内が未だ湿地帯を形成しており、生活に適さなかったことを物語る。

また九州の中央部に位置する阿蘇山は、東西に流れる河川の分水嶺になっている。このことは河川を通じ、東西の文化の流入を可能にしていると言いうことができ、この地方が文化の交流点であったといえるであろう。西からは曾畑式土器を指標にすることが可能で、白川を通じて伝播してきたものであろう。この土器は九州西海岸から朝鮮半島、沖縄まで広く分布する土器として知られるが、阿蘇より東へは希薄である。また、東側からは瀬戸内地方や東九州の土器が出土している。

このような遺跡の特徴を概観すると、2種類に分けることができる。ひとつは各期土器が出土して長い期間存続したと見られる生活遺跡である。もうひとつは1時期の土器しか出土しない遺跡で、この中には土器を伴わず、石鏃を中心に石器のみ出土する外輪山高所の小遺跡も含む。この2つの遺跡のあり方は、センター的役割を持った拠点集落と狩猟採集



第3図 周辺遺跡地図 (1/75000)

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1表 周辺遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	杉ノ本	白水村中松 杉ノ本	古代・中世	包蔵地		
2	二本木前	白水村中松 (通称御寺)	古代・中世	包蔵地		阿蘇家居館跡
3	後藤又兵衛屋敷跡	白水村中松 (通称芹川)	近世	包蔵地		
4	円師庵跡	白水村中松 (通称円師庵)	中世	寺社		
5	竹崎屋敷跡	白水村両併 (通称竹崎)	中世	包蔵地		
6	南鶴	白水村吉田 南鶴	弥生	包蔵地		弥生土器片多数
7	吉田城跡	白水村吉田 城後	中世	城		
8	新町	白水村吉田 城後	縄文	包蔵地		縄文後期土器
9	孝女白菊墓	白水村白川 女辻	近世	墓		
10	白川水源地	白水村白川 出口	弥生?中世	包蔵地		
11	無量寺跡	白水村両併 寺山	中世	寺社		両併の阿弥陀仏
12	市下城跡	白水村両併 城山	中世	城		
13	中郷	白水村両併 中郷	古墳	古墳		現状1基
14	二本松	白水村両併 二本松	弥生	包蔵地		弥生 (重孤文)
15	桶口	白水村両併 桶口	縄文・弥生	包蔵地		縄文・弥生、石鏃
16	幅	白水村両併 幅	弥生	包蔵地		弥生、須恵器・石包丁
17	幅横穴群	白水村両併 幅	古墳	古墳		県道工事の時破壊 4基残存
18	祇園	白水村一関 祇園	古代・中世	包蔵地		阿蘇家居館跡
19	一関	白水村一関	弥生・中世	包蔵地		
20	無田	白水村一関 無田	弥生・中世	包蔵地		
21	一関A	白水村一関	古代?中世	包蔵地		
22	一関B	白水村一関	古代?中世	包蔵地		
23	南町	白水村吉田	縄文?中世	包蔵地		
24	御手水	白水村白川	弥生	包蔵地		
25	古坊中僧坊跡	白水村中松 古坊中	古代	寺社		阿蘇町との境界不明
26	壇城跡 (峰城跡)	白水村中松 壇城	中世	城		
27	上積	白水村吉田 上積	中世	石造物		
28	俱利伽羅谷	白水村白川 俱利伽羅谷	中世	包蔵地		
29	摺ノ尾	久木野村河陰 摺ノ尾	弥生	包蔵地		弥生土器・石器
30	柿野釈迦堂跡	久木野村河陰 西鶴	中世	寺社		
31	阿弥陀堂板碑	久木野村河陰 摺野	中世	石造物		
32	猶須A	久木野村河陰 猶須原	縄文	包蔵地		縄文早期中期土器
33	慈水城跡	久木野村河陰 猶須原	中世	城		中世城跡
34	羅漢窟	久木野村河陰 猶須原	古代	包蔵地		
35	平原	久木野村久石 (通称平原)	弥生	包蔵地		弥生土器片
36	柏木谷	久木野村久石 柏木谷	縄文・弥生	包蔵地	県	
37	片山寺跡	久木野村久石 桑原鶴	古代	寺社		
38	白禿山城跡	久木野村久石 上駄原	中世	城		南郷城跡か?
39	妙音寺跡	久木野村久石 本田	古代	寺社		
40	天徳寺跡	久木野村久石 西一丁田	古代	寺社		
41	恵良館跡	久木野村久石 (通称原尻)	中世	包蔵地		
42	本田	久木野村久石 本田	弥生?中世	集落		
43	ナンゾウ坊	久木野村久石 ナンゾウ坊	古代	寺社		
44	西一丁田	久木野村西一丁田	弥生・古墳	集落		古墳
45	東一丁田	久木野村東一丁田	弥生・古墳	集落		
46	小無田鶴	久木野村小無田鶴	縄文・弥生	集落		
47	小無田鶴	久木野村小無田鶴	縄文・弥生	集落		
48	駒返城跡	久木野村久石 (通称城山)	中世	城		
49	東福寺跡	久木野村久石 五の小石	中世	寺社		
50	陳林	久木野村久石 陳林	弥生	埋葬		
51	六の小石古墳群	久木野村久石 六の小石	古墳	古墳	村	
52	二子石	久木野村久石 (通称上二子石)	弥生	包蔵地		弥生土器
53	羅漢岩十六羅漢	久木野村久石	中世	石造物		
54	谷頭	久木野村河陰	縄文	包蔵地		石斧・石鏃・石匙
55	とりのこ塚の石仏	久木野村河陰	中世	石造物		
56	放生石仏	久木野村河陰	近世	石造物		
57	室町の板碑	久木野村河陰	中世	石造物		
58	観音寺跡	久木野村河陰	古代	寺社		
59	久木野神社眼鏡橋	久木野村河陰	近世	建造物		

第1節 遺跡の環境

No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
60	摺尾の釈迦堂	久木野村河陰	中世	寺社		近くに宝篋印塔あり
61	願成寺跡	久木野村河陰	中世	寺社		宝篋印塔あり
62	原口	久木野村河陰	弥生?中世	包蔵地		
63	原口	久木野村河陰	弥生?中世	包蔵地		
64	原口荒神さん板碑	久木野村河陰	中世	石造物		阿弥陀三尊
65	原口	久木野村河陰	弥生?中世	包蔵地		
66	千代前の墓碑	久木野村河陰		石造物		
67	彌須原	久木野村河陰	古墳・古代	包蔵地		
68	名称不明	久木野村河陰	中世	石造物		
69	彌須B	久木野村久石	縄文	包蔵地		
70	一の山の上石塔群	久木野村久石	中世	石造物		
71	おたまいさん板碑	久木野村久石	中世	石造物		
72	栗焼板碑1	久木野村久石	中世	石造物		
73	栗焼板碑2	久木野村久石	中世	石造物		
74	小無田鶴	久木野村久石	弥生?古代	包蔵地		
75	一の大平原板碑	久木野村久石	中世	石造物		現在は所在不明
76	御陳	久木野村久石	弥生	包蔵地		
77	桑原五輪塔	久木野村久石	中世	石造物		一石五輪
78	経塚古墳	久木野村久石	古墳	古墳		土師器出土、板碑(天文11年)あり
79	西左敷	久木野村久石	古代・中世	包蔵地		
80	原尻	久木野村久石	中世	包蔵地		
81	原尻の板碑群	久木野村久石	中世	石造物		
82	二の陣林豪族館跡	久木野村久石	中世	包蔵地		二子石九郎左衛門屋敷跡か、六角形の水堀あり。
83	六の小石	久木野村久石	古墳	包蔵地		古墳石材散乱
84	久石A	久木野村久石	古代?中世	包蔵地		
85	法華堂板碑	久木野村久石	中世	石造物		
86	河陰A	久木野村久石	縄文	包蔵地		
87	河陰B	久木野村久石	縄文?中世	包蔵地		
88	河陰C	久木野村久石	縄文?中世	包蔵地		
89	室町	久木野村可陰 室町	中世	包蔵地		
90	鼠土城跡	久木野村河陰 東屋	中世	城		中世城跡
91	八里木	久木野村河陰 八里木	縄文	包蔵地		縄文土器
92	隠谷御所	久木野村河陰 柿野上		包蔵地		長柄銚子・甲冑
93	扇ノ坂B	久木野村河陰	旧石器?縄文	包蔵地		
94	扇ノ坂C	久木野村河陰	旧石器?縄文	包蔵地		
95	扇ノ坂D	久木野村河陰	旧石器?縄文	包蔵地		
96	豆塚古墳(馬見塚)	高森町高森 豆塚	古墳	古墳	町	
97	長塚古墳	高森町色見 下中山	古墳	古墳	町	
98	年の神	高森町高森 小鶴	古墳	包蔵地		
99	柏塚相姫の墓	高森町高森 市下	近世	墓	町	
100	柏塚古沢元倫の墓	高森町	近世	墓	町	
101	津留大和守の碑	高森町高森 小鶴	中世	石造物	町	
102	津留大蔵の墓	高森町高森 大鶴	近世	墓	町	
103	高森村総庄屋及庄屋跡	高森町高森 小鶴	近世	包蔵地	町	
104	丸山城跡	高森町色見	中世	城		
105	山鳥	高森町色見 山鳥	中世	包蔵地		仏像・石観・かんざし
106	安楽寺跡観音堂	高森町色見 戸狩・中園前	中世	寺社	町	
107	色見六地藏	高森町色見 戸狩・中園前	中世	石造物	町	
108	山造第1	蘇陽町上差尾 山造	縄文	包蔵地		石鏃、土器片(縄文)
109	赤谷第1	清和村郷の原	縄文	包蔵地		
110	栃木	長陽村河陽 栃木	縄文	包蔵地		
111	佐川官兵衛の墓	長陽村河陽 黒川	近代	墓		
112	京大火山研究所	長陽村河陽 高野	縄文・弥生	包蔵地		
113	西南の役古戦場跡	長陽村河陽 高野	近代	軍事		
114	湯大迫の宝篋印塔	長陽村長野 湯大迫	中世	石造物		
115	乙ヶ瀬	長陽村長野(通称乙ヶ瀬)	弥生	包蔵地		
116	山久保	長陽村山久保	弥生	包蔵地		
117	吉岡の経塚	長陽村長野 吉岡	中世	経塚		
118	陽の丘	長陽村河陽 村下	弥生	包蔵地		弥生土器・石器
119	長野城跡	長陽村長野 陣内	中世	城		

第Ⅱ章 遺跡の概要

No	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
120	長徳寺跡	長陽村長野 中江ノ前	中世	寺社		
121	河陽	長陽村河陽 村の上	中世	包蔵地		唐・宗・明銭1850個、陶製壺
122	下田城跡	長陽村河陽 正伝寺	中世	城		
123	下田東城跡	長陽村河陽 東下田	中世	城		
124	光雲寺跡	長陽村河陽 宮寺鶴		寺社		
125	長野A	長陽村長野	弥生	包蔵地		
126	長野B	長陽村長野	弥生	包蔵地		
127	長野C	長陽村長野	弥生	包蔵地		
128	長野D	長陽村長野	弥生	包蔵地		
129	長野E	長陽村長野	縄文・弥生	包蔵地		
130	河陽A	長陽村河陽	縄文・弥生	包蔵地		
131	河陽B	長陽村河陽	弥生	包蔵地		
132	河陽C	長陽村河陽	弥生	包蔵地		
133	河陽D	長陽村河陽	弥生	包蔵地		
134	河陽E	長陽村河陽	弥生	包蔵地		
135	河陽F	長陽村河陽	縄文・弥生	包蔵地		
136	河陽G	長陽村河陽	縄文・弥生	包蔵地		
137	桑鶴古屋敷	西原村小森 桑鶴	縄文?古墳	包蔵地		縄文・弥生・古墳期土器出土
138	桑鶴扇坂の口(桑鶴古池サン)	西原村小森 桑鶴	縄文・弥生	包蔵地		縄文・弥生
139	桑鶴	西原村小森 桑鶴	弥生	包蔵地		弥生土器・土師器・須恵器
140	日南為	西原村鳥子 日南為	縄文?古代	包蔵地		
141	桑鶴土橋	西原村小森 桑鶴土橋	縄文・弥生	包蔵地		縄文・弥生土器、土師器
142	丸林	西原村小森 桑鶴	縄文?古代	包蔵地		
143	鳥子城	西原村鳥子 上鳥子	中世	城		中世城跡
144	うつさい	西原村小森 土橋	弥生	包蔵地		弥生後期土器
145	袴野	西原村小森 袴ノ罎	縄文・弥生	包蔵地		縄文前期・弥生土器
146	揺が池	西原村小森 桑鶴	弥生	包蔵地		弥生後期土器・土師器・須恵器
147	揺が池西側台地	西原村小森 桑鶴	縄文・弥生	包蔵地		縄文後晩期・弥生後晩期土器
148	扇ノ坂A	西原村 桑鶴	旧石器?縄文	包蔵地		土器片・剥片・石核採集
149	箱式石棺	西原村宮山 医王寺向	中世	古墳		地蔵尊
150	冠ヶ岳第1	西原村宮山 医王寺向	弥生	包蔵地		弥生土器出土
151	冠ヶ岳第2	西原村宮山 医王寺向		包蔵地		石槍
152	冠ヶ岳第3	西原村宮山 医王寺向		包蔵地		石鏃・石匙
153	河原第2	西原村河原 大野	旧石器	包蔵地		旧石器、縄文
154	冠ヶ岳第4	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
155	冠ヶ岳第5	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
156	冠ヶ岳第6	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
157	冠ヶ岳第7	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
158	冠ヶ岳第8	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
159	冠ヶ岳第9	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
160	冠ヶ岳第10	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
161	冠ヶ岳第11	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
162	冠ヶ岳第12	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
163	冠ヶ岳第13	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
164	冠ヶ岳第14	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
165	冠ヶ岳第15	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
166	冠ヶ岳第16	西原村宮山 医王寺向	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
167	河原第18	西原村河原 大野	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
168	河原第19	西原村河原 大野	旧石器?縄文	包蔵地		土器片、剥片・石核採集
169	瀬田裏	大津町瀬田 長袖ほか	縄文・古墳	包蔵地		
170	瀬田裏古墳群	大津町瀬田 瀬田裏	古墳	古墳		3?4基(石室のみ)、封土なし
171	瀬田裏E地点	大津町瀬田 瀬田裏	縄文	包蔵地		
172	南郷往還跡	大津町外牧	近世	建造物		石畳道、幅約2m長25m
173	上井出入口	大津町外牧 大鶴	近世	建造物		
174	岩戸神社岩かげ	大津町外牧 大鶴	縄文	包蔵地		岩陰遺跡
175	瀬田裏B	大津町瀬田	縄文	包蔵地		土器片、石鏃など
176	大鶴A	大津町外牧 大鶴	縄文	集落		県調査
177	大鶴B	大津町外牧 大鶴	縄文	集落		県調査
178	前畑	大津町外牧 前畑	縄文	包蔵地		内牧遺跡A

中の短期間の滞在を示すものと解釈できる。南郷谷では、点的な土器採集例はあるが、集落跡などのまとまった遺跡はなく、その実態は明らかでない。

弥生時代

阿蘇地方に弥生文化が前期末頃からその影響が見られるが、生活跡は不明である。遺構としては中期初頭、狩尾方無田遺跡（阿蘇町）の竪穴住居が最古のものである。後期になると阿蘇谷を中心に遺跡の数を増して行く。土器の様相より東西に門戸を開いた縄文以来の文化流入のルートは依然継続しており、白川流域、大野川流域、南部山岳地帯などを經由した文化の影響を看取できる。

南郷谷において、前期・中期の実態は明らかでなく、現在知られているものは、概して弥生後期の遺跡である。遺跡は主に、低地に臨む麓に立地するものと、丘陵地に立地するものがある。低地の遺跡を代表するものは、白水村の南鶴遺跡がある。後期の集落跡と考えられ、1974（昭和49）年の耕地整理作業中に大量の壺・甕・石斧・鏃などの遺物が発見された。一方丘陵地の遺跡では、西原村の谷頭遺跡がある。この遺跡は外輪山の西斜面標高約450mの高所にあり、水田耕作には不適の地である。注目されるのは、竪穴住居の中より多量の磨製石鏃の製品・未製品とともに、
ことである。長陽村沢津野遺跡も同様の性格の遺跡と思われるが、平坦部の水田耕作を中心とする集落との交流を想起させるものである。

先の南鶴遺跡に見るように、南郷谷に稲作が始まり、集落が形成されるのは少なくとも弥生後期からである。立地は火口丘より谷部へ延びる台地の先端部、もしくは外輪山内壁斜面であり、平坦部との境に湧き出す湧水を利用した水田耕作であったことが想像される。他に久木野村の西一丁田遺跡、柏木谷遺跡、摺尾遺跡、小無田鶴遺跡、二子石遺跡など、外輪山内壁斜面に弥生の集落が多く見られる。また、長陽村の長陽中学校遺跡や京大火山研究所遺跡も集落跡として知られる。

古墳時代

古墳時代になると南郷谷にも古墳が作られるが、阿蘇谷が中通古墳群を中心とした多くの古墳群によ

って華やかな古墳文化形作るのに対して、南郷谷の方は分布が希薄で系統的な整理に至っていない。大まかな分布は、谷中央部から東側部分にかけての外輪山丘陵尾根部や斜面に立地している。

高森町の上色見古墳群は6基以上の石棺が分布し、人骨とともに鉄剣が出土した。同町の上ノ園古墳群は、1基の円墳と2基の箱式石棺からなり、太刀、銀環、鉄鏃、馬具などが出土した。久木野村の六ノ小石古墳群は4基の円墳からなり、1号墳から金銅製鈴、水晶製切子玉、刀子、鉄鏃が出土し、遺物より6世紀後半のものと思われる。また、同村柏木谷遺跡では圃場整備にともなう調査が実施され、方形周溝墓12基、円形周溝墓9基、円墳1基の存在が確認された。円墳は4世紀代のもので推定されており、外径34.5mで、南郷谷では最大規模のものである。

古代

古代の遺跡は不明な点が多いが、4世紀以降、大和朝廷の影響下にあった阿蘇氏が国造として阿蘇地方を支配したものと思われる。古代律令制において南郷谷は阿蘇郡に属し、本遺跡の位置する白水村は、『和妙抄』の中の知保郷にあたるものと考えられている。阿蘇氏は、律令体制確立後も阿蘇社神主と郡司を兼任する存在として、南郷にもその影響力は及んでいたものであろう。さらに白河天皇の承暦年間に、阿蘇荘が四至を定めて立荘された（阿蘇文書）。すなわち、奈良・平安初期以来私営田領主として出発した阿蘇氏は、古代末期には、阿蘇郡においてその領主権を確立したのである。

ここ杉の本遺跡は奈良時代の大規模な掘立柱建物や竪穴住居の住居群が検出された。特に掘立柱建物は規模が大きく、当時の開発領主層の建物跡と推測され、南郷谷において本格的な荘園支配が始まる前の集落形態を示す遺跡として注目される。また、南郷谷には古代から中世にかけての神社・寺院が多く、中岳噴火口西方の西巖殿寺（古坊中）は8世紀に起源を持つと伝えられ、白水村の祇園社は9世紀に起源をもつものという伝承がのこる。

中世

阿蘇氏は、12世紀後半には阿蘇谷より南郷谷に拠点を移し、「南郷大宮司」として史料に登場するよ

うになる。その後、南北朝期には阿蘇氏も南朝方（矢部）北朝方（南郷）に分裂し、争乱を繰り返した。阿蘇両家の統一は中央よりも遅れて統一がなされ、拠点を矢部に移す15世紀前半まで南郷谷は政治の中心となったのである。そのため南郷谷には中世城や寺院跡、板碑などの石碑類が点在し、数も多い。

1994、5（平成6、7）年度に調査の行われた二本木前遺跡や祇園遺跡はその集中地区にあり、当該地域が中世において重要な地域であったことが想像される。1994、5（平成6、7）年度に調査の行われた二本木前遺跡からは、方一町の大規模な濠にかこまれた方形居館跡が検出されており、1995（平成7）年度調査の祇園遺跡からは大規模な掘立柱建物39棟検出され、大量の陶磁器が出土した。遺跡の内容や、歴史的環境から両遺跡は「南郷大宮司館」と推定することができる。

近世

天正15年、豊臣秀吉の九州出仕後、南郷は佐々領となり、その後加藤、細川領と変遷する。細川藩政では手永制が敷かれるが、現白水村は高森手永に属する。手永会所は最初高森に置かれたが、後に吉田新町に移され、白水村を中心とする南郷谷中央部は政治・経済の中心地と位置づけることができる。南郷谷の近世の遺跡はほとんど知られておらず、考古学的なアプローチがほとんど為されていないのが現状である。今後の資料の集積・整理が待たれる。

第2節 遺跡の概要

今回発掘した杉の本遺跡は、熊本県阿蘇郡白水村大字中松に所在している。前節でも見たように、立地する場所は阿蘇南郷谷中央、阿蘇五岳が白川に向けて緩やか下降する末端に位置する。旧地形では南郷谷を特長付ける魚鱗状の棚田の中にあり、近世以来の大幅な開田で田から田への段差も大きい。標高は約395～400mである。

発掘調査は県営圃場整備事業（白水西部地区）に伴って1982（平成4）年度に実施された。その結果、飛鳥～鎌倉時代の遺構が検出された。包含層には縄文後期の遺物も若干含まれていたが、遺跡の中心は

古代の遺構と遺物である。遺構の内容は竪穴住居、掘立柱住居、溝などで、ピークは7世紀中葉から9世紀中葉までである。他に中世の掘立柱建物と竪穴住居が若干確認できる。中でも古代の掘立柱建物の規模は大きく、遺跡の形成者は荘園体制が確立して行く時期の在地領主的な性格を持つ有力者であることを想像させる。遺構の変遷を見ると、竪穴住居から掘立柱建物への移り変わりを捉えることができ、興味深い。また、阿蘇地方において古代集落が調査された例はなく、本調査での成果は、律令制確立期から荘園制社会への移行期の村落の様相を示す例として貴重である。

第3節 遺跡の層位と包含層

本遺跡の立地は阿蘇山裾野の緩斜面の末端にあるり、幾重にも重なる棚田の下層に保存されていた。そのため、棚田の形成時からかなりの削平を受けており、遺構検出面もかなりの高低差があり、遺構自体もかなりの削平を受けていた。以下基本土層を示す。

①耕作土（約30cm）

②灰暗褐色土（約30cm）

後世の整地などによる攪乱層で、縄文晩期～近世までの遺物が混じる。

③黒褐色土

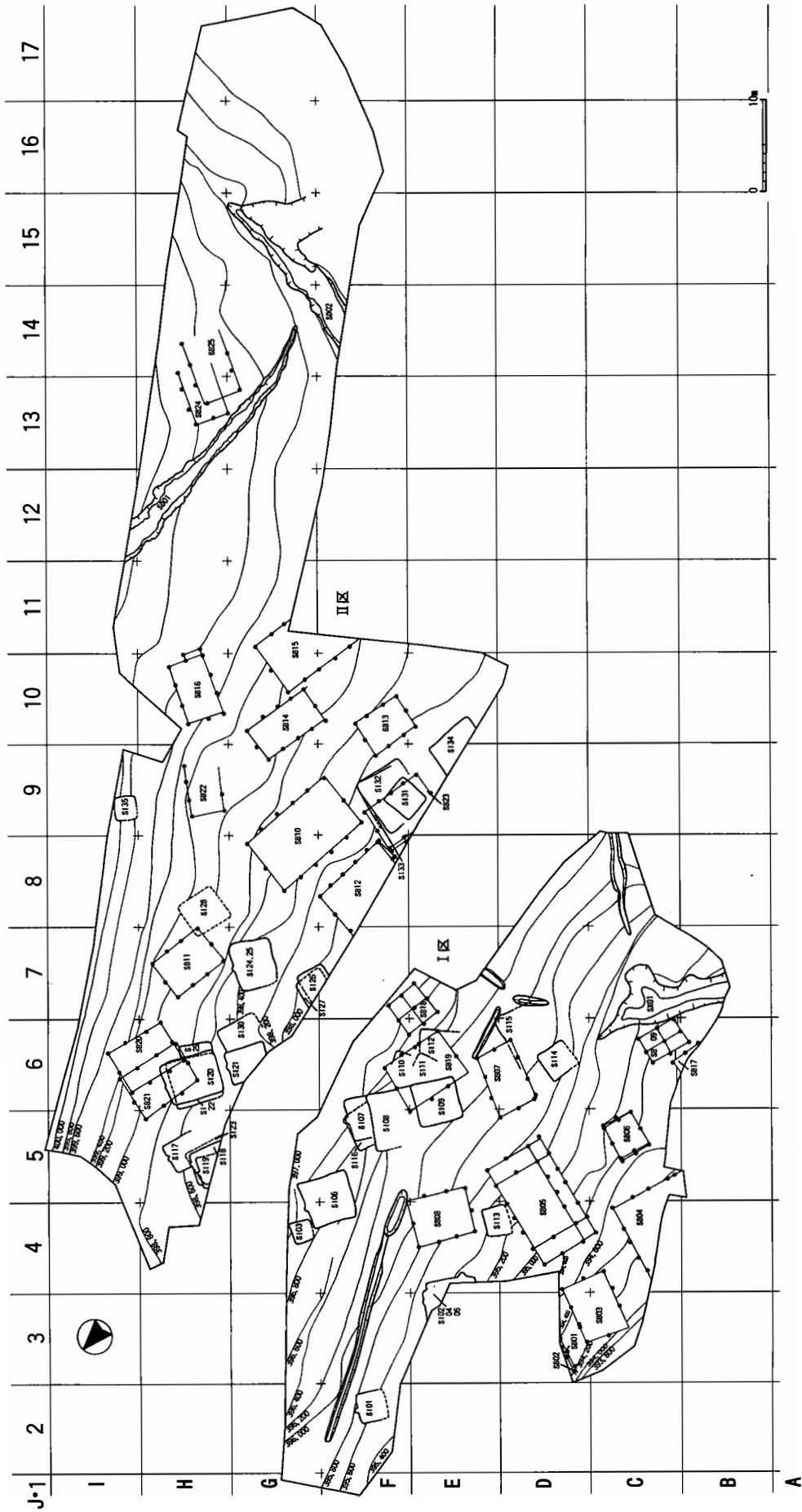
黒ボクにあたるが、良好に残るところは少ない。遺構の埋土。

④黄褐色土

遺構検出面。②の除去後に現れることが多い。

なお、④の下位層については、遺跡の近接地に地層の露頭した壁面があったため、古環境研究所に委託を行い地層観察を行った。詳しくは第4章に記してある。

第2節 遺跡の概要



第4図 全体遺構配置図 (1/600)

第三章 調査とその成果

第1節 遺構とそれに伴う遺物

- 1 はじめに
- 2 竪穴住居 (S.I)
- 3 掘立柱建物 (S.B)
 - 1 遺構
 - 2 遺物
- 4 不明遺構 (S.X)
 - 1 遺構
 - 2 遺物
- 5 溝 (S.D)
 - 1 遺構
 - 2 遺物

第2節 その他の遺物

第1節 遺構とそれに伴う遺物

1 はじめに

本遺跡は、阿蘇五岳が白川まで裾野を延ばす緩傾斜地上にある。旧地形では裾野を細かに刻む棚田が形成されており、遺構検出面は削平が激しく、遺構の残存状態はあまり良くなかった。このような傾斜地にも、古代においては集落が形成されていたことが、調査によって明らかにされた。ここでは遺構の主なものとして、竪穴住居35基、掘立柱建物25棟を取り上げる。

2 竪穴住居 (S I)

S I 01 (第5図)

【遺構】

I区西側(F-2区)に位置する遺構で、切り合いはない。遺構南側は削平を受け不明瞭であるが、ほぼ正方形プランを持つ小型の住居で、主軸方位はN30°Eである。

東西軸3.3m、南北軸3.0m。深さは15cmで、南側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は2本で中央より西により、直径25~40cm、深さ40~60cmと均一でない。硬化面は竈周辺に東西に延びる。硬化面下に直径約100cmの貯蔵穴状の土坑があり、住居建設時に作られたものがあるが、用途は不明。

竈は北側壁面ほぼ中央に位置する。煙道が北に延び、燃烧面は残るが、ソデは残っていない。

【遺物】

5-1 竈より出土した土師器坏。口径12.8cm。器高3.1cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なくきめ細か。底部からの立ち上がりに丸みを持ち、底径が小さめ。全体に丁寧なナデ調整で、体部下半は1条ヘラ削りを行っている。丹塗りで色調は橙色。内外面の一部にカーボンが付着する。

5-2 貯蔵穴より完形で出土した須恵器坏。口径12.8cm。器高4.2cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じりやや粗い。体部は口縁部にかけて真っ直ぐに伸びる。体部外面にはロクロ目が残る。見込みを横ナデする。色調はにぶい橙色。

5-3 貯蔵穴より出土した土師器甕。復原口径23.6cm。胎土は砂粒が多く粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内面にはハケ目で1周するように施文する。体部外面は縦にハケ目調整し、口縁部外面は横ナデを行う。体部内面は上方へヘラ削り。色調はにぶい橙色。

5-4 竈より出土した土師器甕。復原口径26.0cm。胎土は砂粒が混じり粗い。口縁部はゆるく外折する。口縁部内面にはハケ目で1周するように施文する。体部外面は縦にハケ目調整し、口縁部外面は横ナデを行う。体部内面は上方へヘラ削り。色調はにぶい橙色で、内外面にカーボンが付着する。

5-5 竈より出土した土師器甕。復原口径26.5cm。胎土は砂粒は少ないがやや粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内面にはハケ目で1周するようにうすく施文する。体部外面は縦にハケ目調整し、口縁部外面から体部上方にかけては横ナデを行う。体部内面は斜め上方へヘラ削り。色調はにぶい橙色で、外面にカーボンが付着する。

S I 02 (第6図)

【遺構】

I区西側(E-3・4区)に位置する遺構で、S I 04、05を切っている。遺構西側は調査区外であるため、プランの全容は不明である。主軸方位はN27°Eである。

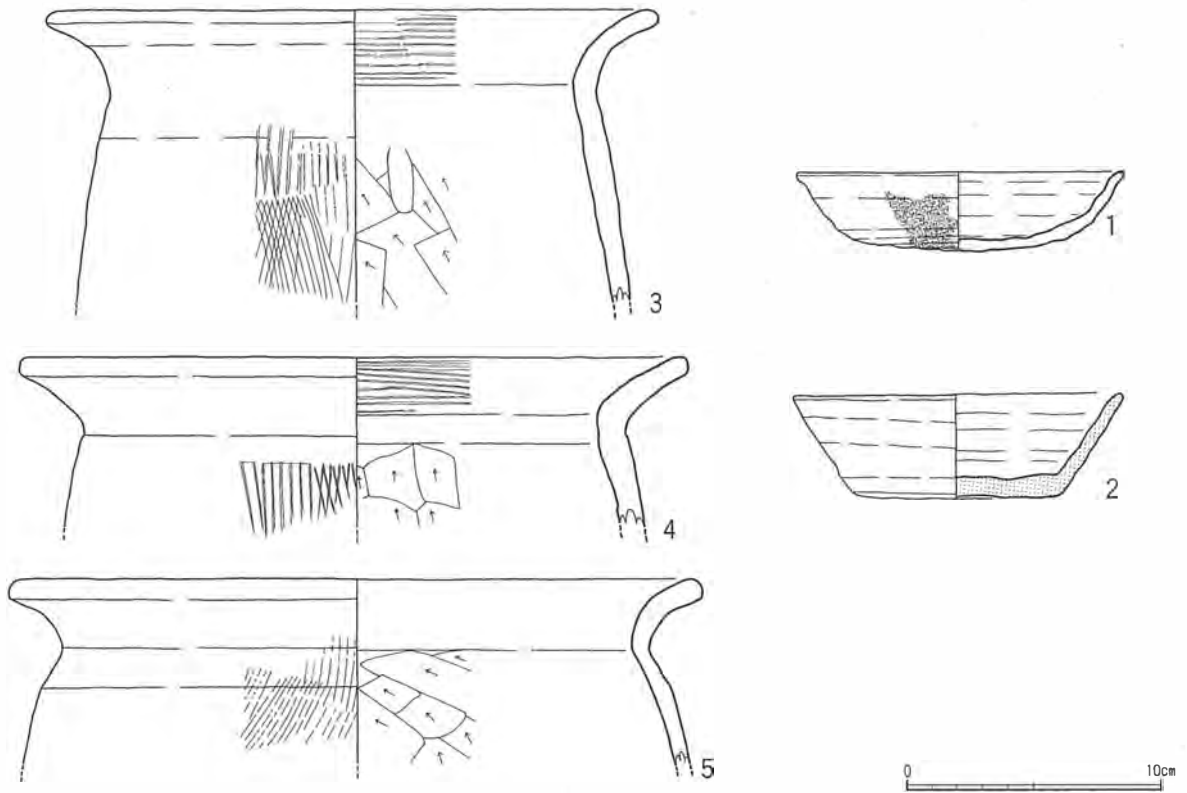
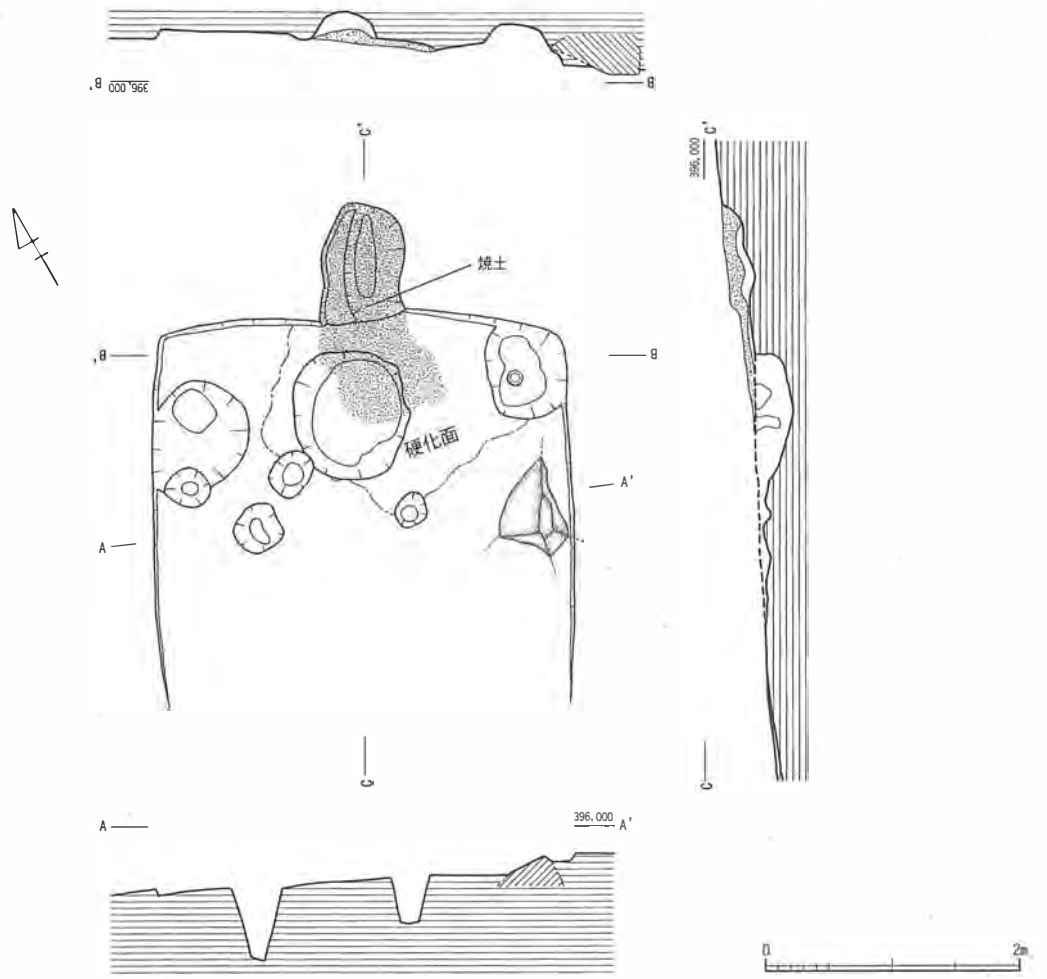
切り合いの北側に位置し、南北軸6.0m、東西軸(3.2m)。深さは15cmである。柱穴は伴うものは確認できなかった。硬化面は確認できなかった。遺構東側に直径80cmの貯蔵穴状の土坑がある。

竈は北側壁面に位置し、調査区の線の際にあるが、ほぼ中央に位置するものと思われる。黄色粘土のソデが東側に残っているが、ソデ石の抜き取り痕と粘土の広がりが確認できる。ソデより西側には燃烧面が残る。

【遺物】

6-1 土師器甕。復原口径23.7cm。胎土は砂粒が多く粗い。口縁部は外反する。口縁部内面はナデ調整。体部外面は残存率悪く、観察できる範囲ではナデ調整。体部内面は斜め上方へヘラ削り。色調はに

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第5図 S101遺構実測図(1/60)・出土遺物実測図(1/3)

ぶい橙色で、焼きむらにより黒変した部分がある。

6-2 土師器坏。復原口径12.9cm。器高3.2cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるが細かい。体部は口縁部にかけて真っ直ぐに伸びる。色調はにぶい橙色。

S104 (第6、7図)

【遺構】

I区西側(E-3・4区)に位置する遺構で、S105を切り、S102に切られている。遺構西側は調査区外であるため、プランの全容は不明である。主軸方位はN°27Eである。

切り合いの中央に位置し、南北軸4.8m、東西軸(2.6m)である。深さは15cmで、南側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は確認できなかった。硬化面は竈東側に南北に延びる。遺構東側に直径約100cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面ほぼ中央に位置する。土坑状の掘りこみと焼土が確認できたが、ソデは残っていない。

S105 (第6、7図)

【遺構】

I区西側(E-3・4区)に位置する遺構で、S102、04に切られる。遺構西側は調査区外であるため、プランの全容は不明である。主軸方位はN29°Eである。

切り合いの東側に位置し、南北軸4.0m、東西軸(3.2)mである。深さは15cmで、南側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は確認できなかった。硬化面も明瞭なものは確認できなかった。遺構東側に直径40cmの貯蔵穴状の土坑がある。

竈は北側壁面に位置する土坑状の掘りこみと焼土が確認できたが、ソデは残っていない。

S103 (第8図)

【遺構】

I区東側(G-4区)に位置する遺構で、切り合いはない。不定形の方形プランを持つ小型の住居で、主軸方位はN5°Eである。

南北軸2.4m、東西軸2.4m。深さは15cm。柱穴は

確認できない。硬化面も明瞭なものは確認できない。遺構の東側に貯蔵穴がある。

焼土が北側壁面ほぼ中央にある。燃焼面に伴う土坑があるが、ソデは確認できない。

【遺物】

8-1 土師器坏。復原口径12.7cm。器高2.7cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なくきめ細か。口縁部が大きく開き、底径が小さめ。底部付近は、深いロクロ目による凹線が1条付く。全体に丁寧なナデ調整。丹塗りで色調は橙色。

8-2 土師器坏。復原口径15.5cm。器高4.6cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒がやや混じるが、細か。口縁部は大きく開き、端部はやや外反する。体部内外面ともナデ調整で、外面はヘラによる凹線が数条入る。色調はにぶい黄橙色。

8-3 土師器坏。復原口径13.8cm。器高2.8cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なくきめ細か。口縁部が大きく開き、底径が小さめ。内外面ともナデ調整で、底部付近は深いロクロ目による凹線が1条付く。見込みを横ナデする。丹塗りで色調は橙色。底部に「手」という墨書がある。

8-4 土師器甕。復原口径22.8cm。胎土は砂粒が多く粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部外面は頸部まで縦のハケ目調整、口縁部外面はナデ調整。体部内面は斜め上方へヘラ削り。色調はにぶい橙色で、外面にカーボンが付着する。

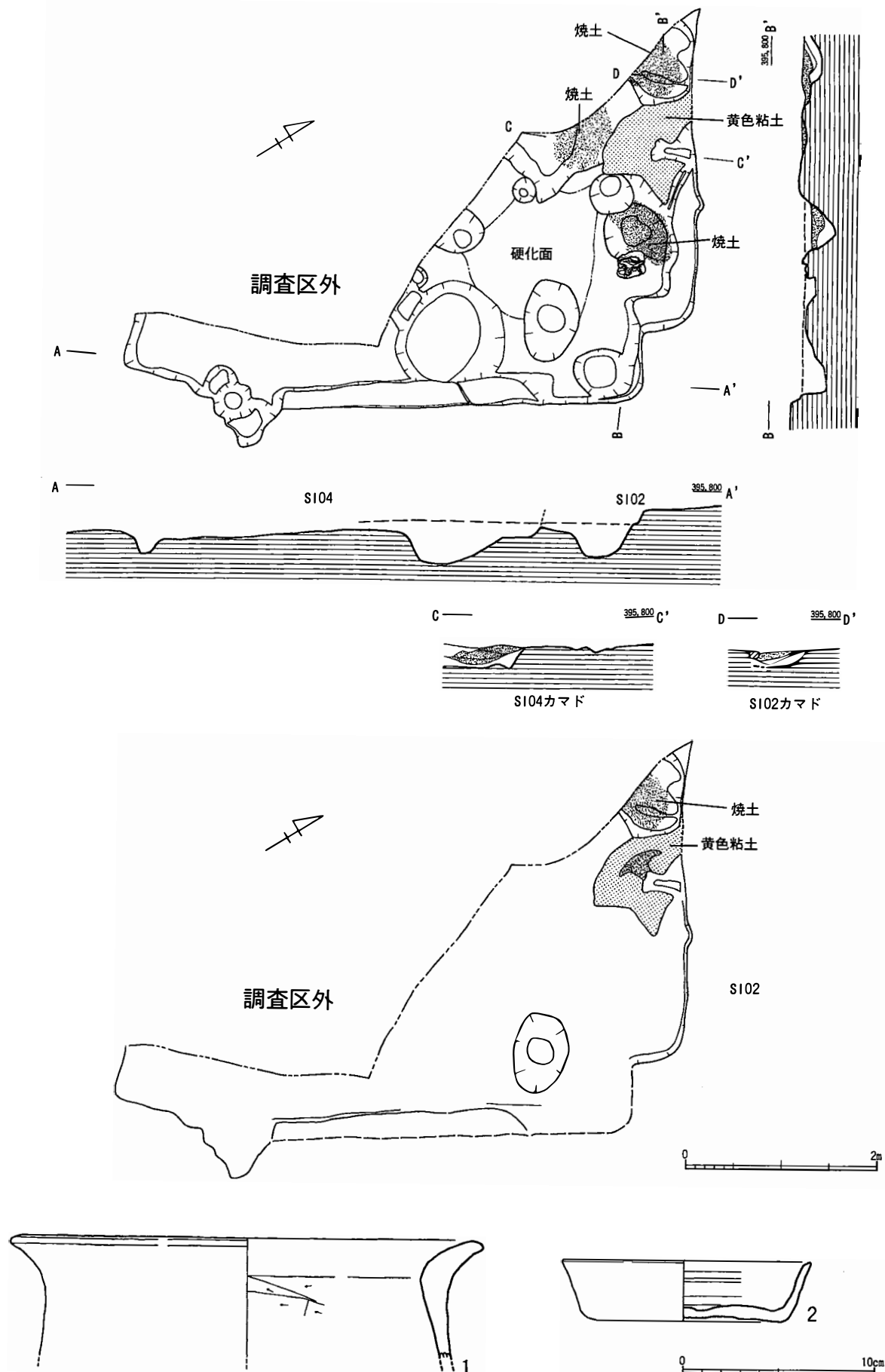
S106 (第9図)

【遺構】

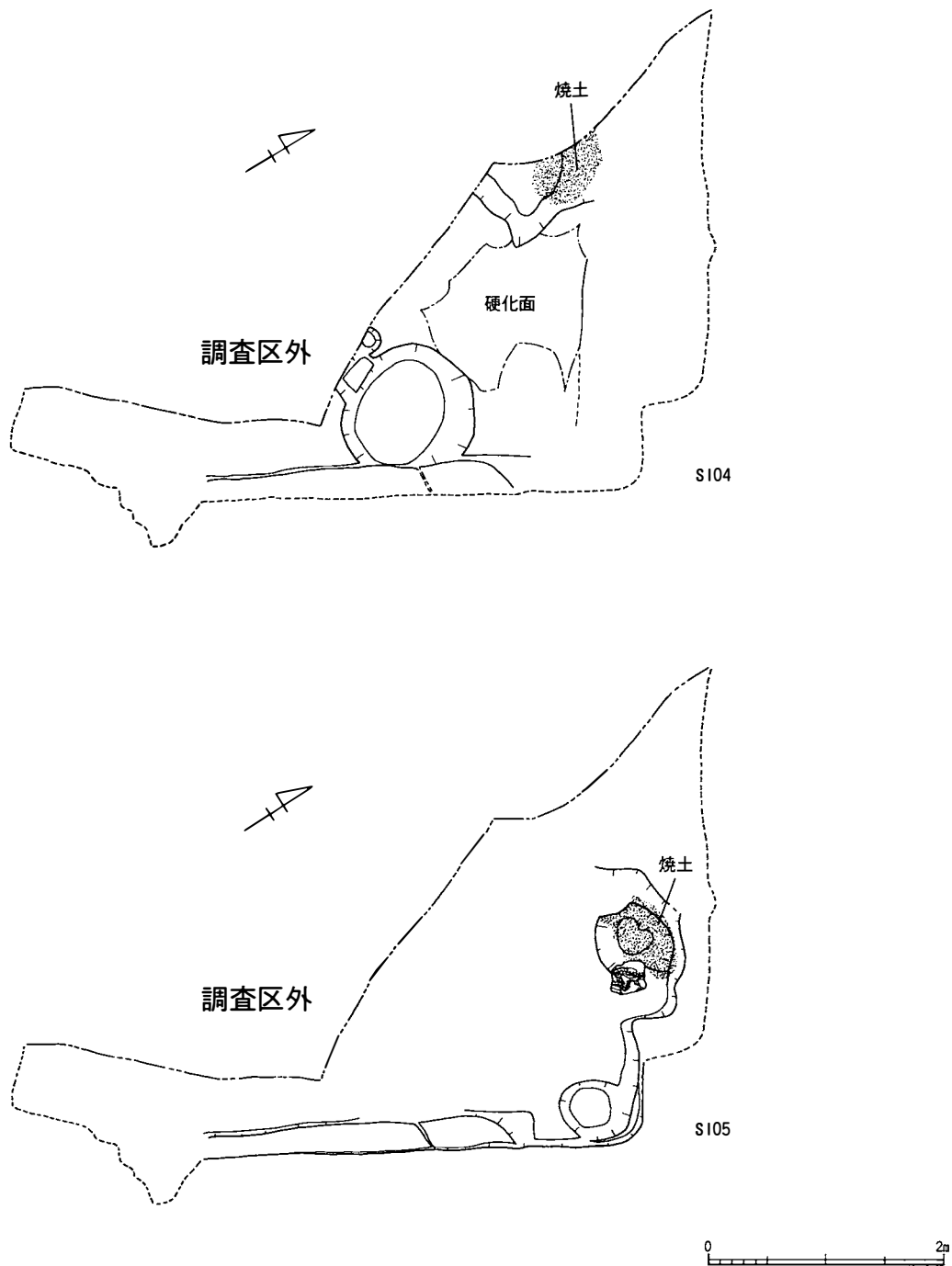
I区東側(F・G-4・5区)に位置する遺構で、切り合いはない。ほぼ正方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN30°Eである。

南北軸5.4m、東西軸5.2m。深さは15cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本で、直径15~23cm。柱穴の深さは48~52cmである。硬化面は遺構中央部に東西に広がる。遺構北東隅に直径80cmほどの不定形の貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、燃焼面とそれに伴う浅い土坑が確認できたが、ソデは残っていない。



第6図 S102、04、05遺構実測図 (1/60)・出土遺物実測図 (1/3)



第7図 S104、05遺構実測図(1/60)

【遺物】

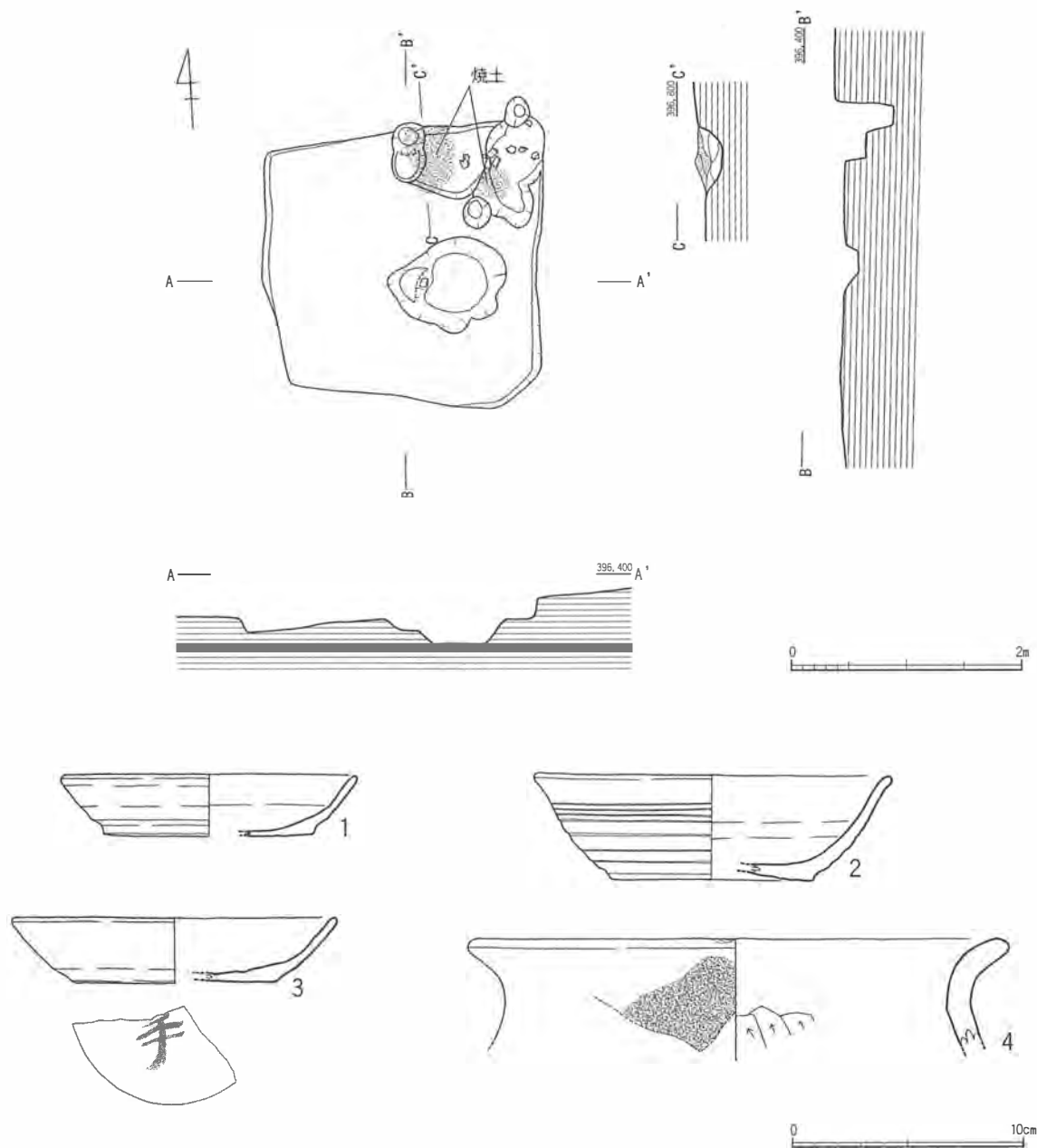
9-1 須恵器坏。復原口径16.4cm。器高5.7cm。
 底部はヘラ切り。胎土は砂粒がやや混じるが細かい。
 底部の器肉が厚く、口縁部にかけて薄く真っ直ぐに
 伸びる。体部内外面は丁寧なナデ調整。見込みを横
 ナデする。色調は橙色。

S109 (第10、11、13図)

【遺構】

I区東側(E-5・6区)に位置する遺構で、S
 I08を切っている。ほぼ正方形のプランを持つ住居
 で、主軸方位はN26°Eである。

南北軸4.8m、東西軸4.8m。深さは10cmで、南西
 側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は
 4本で、直径は約40cm。柱穴の深さは60~70cmであ
 る。明瞭な硬化面は確認できなかった。遺構北東隅



第8図 S103遺構実測図(1/60)

と北西隅に100×80cmほどの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置するが、浅い土坑が確認できたのみで、ソデや燃焼面は残っていない。

【遺物】

13-5 須恵器壺または甕の胴部。胎土は砂粒が少なくきめ細か。外面は細かな格子目のタタキがはいり、内面は同心円の当て具痕が付く。器肉が薄い。色調は、外面が灰色で内面は褐色。

S108 (第10、12、13図)

【遺構】

I区東側(F-5・6区)に位置する遺構で、S

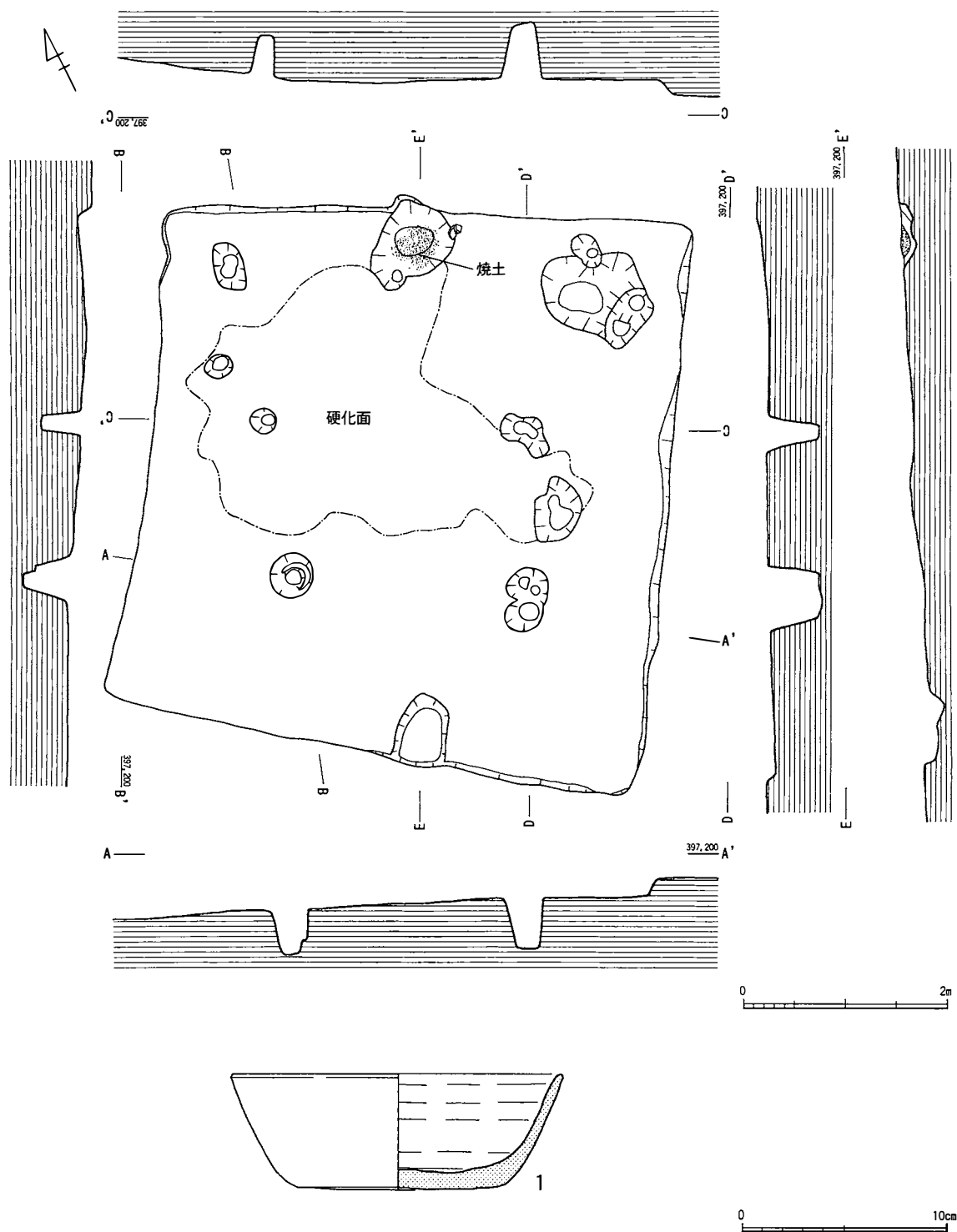
I07、16を切っている。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN26°Eである。

南北軸(4.8)m、東西軸6.2m。深さは12cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本で、直径は約40cm。柱穴の深さは24~30cmである。硬化面は竈周辺に確認できた。遺構北東隅に100×80cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置するが、浅い土坑が確認できたのみで、ソデや燃焼面は残っていない。

【遺物】

13-3 土師器坏。復原口径15.6cm。胎土は砂粒が少ないが、やや粗い。丸みを持った体部から、口縁



第9図 S I 06遺構実測図 (1/60)・出土遺物実測図 (1/3)

端部が外反する。内外面とも細かな単位で手持ちによるヘラ磨きを行う。丹塗りで色調は橙色。

13-4 土師器鉢。復原口径28.3cm。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。口縁部は緩く外反する。体部外面と口縁部内外面はナデ調整で、内面は横方向にヘラ削りを行う。色調は褐灰色。

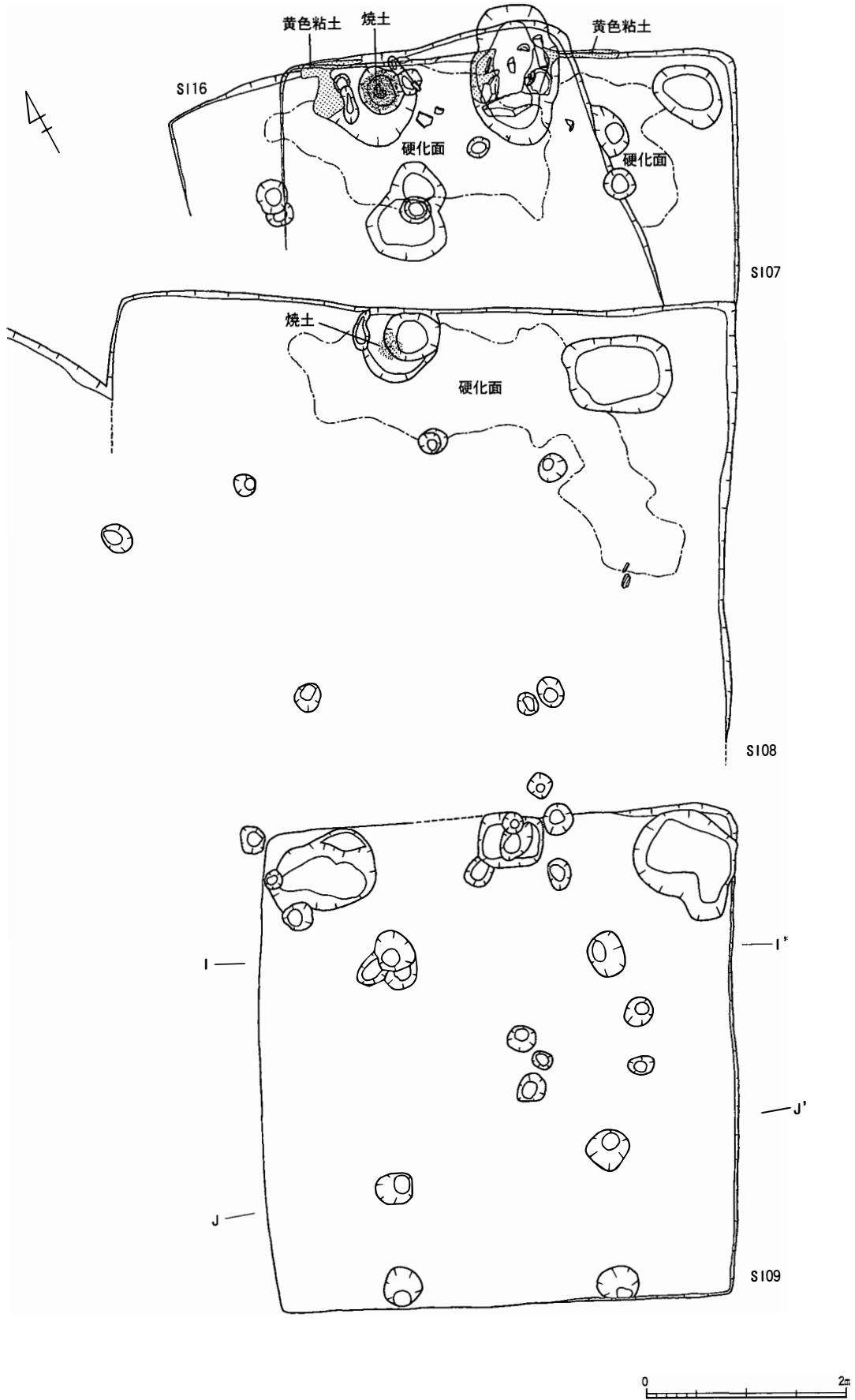
S I 07 (第10、11、13図)

【遺構】

I区東側 (F-5・6区) に位置する遺構で、S I 16を切り、S I 08に切られている。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN26° Eである。

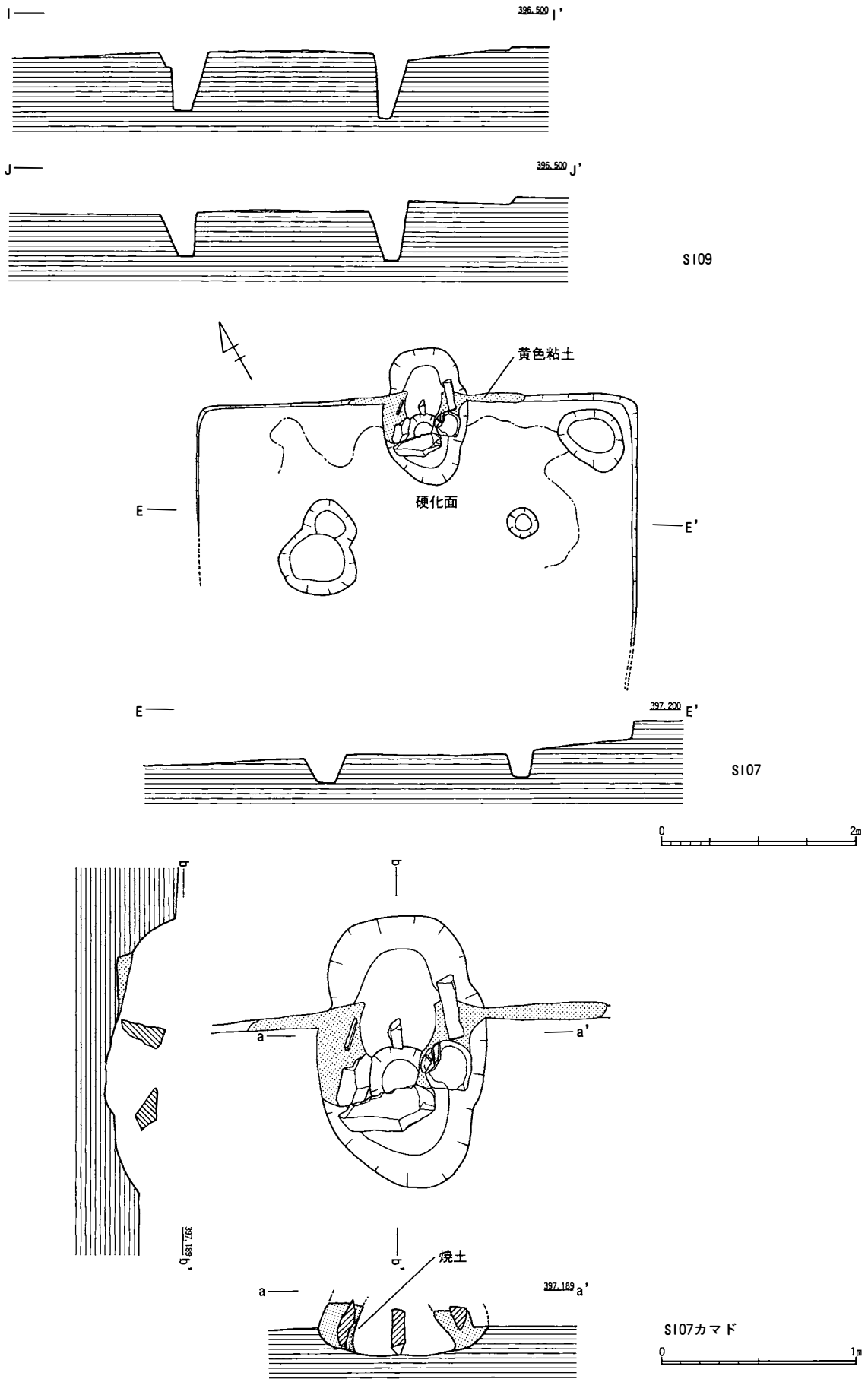
南北軸 (2.6) m、東西軸4.6m。深さは20cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第10図 S107、08、09、16遺構実測図 (1/60)

第三章 調査とその成果



第11図 S109断面図、S107遺構実測図 (1/60)・S107竈実測図 (1/30)

穴は4本と思われるが、3本しか確認できない。柱穴の直径は32～52cm、深さは28cmである。硬化面は竈周辺に確認できた。遺構北東隅に60×40cmほどの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、ソデ石とソデを残している。煙道を含む土坑内の両脇に、花崗岩を芯にして黄色粘土捲いている。土坑中央には甕を支えるための石を据え付ける。土坑内には焼土が厚く堆積していた。

【遺物】

13-1 土師器甕。復原口径19.1cm。胎土は砂粒が多く粗い。口縁部はゆるく外折する。口縁部内面はナデ調整。体部外面は頸部まで縦のハケ目調整し、頸部より口縁部外面まではナデ調整をする。体部内面は斜め上方へヘラ削り。色調はにぶい橙色で、口縁部外面にカーボンが付着する。

13-2 土師器甕。復原口径21.0cm。胎土は砂粒が多く粗い。口縁部はゆるく外折する。口縁部内面はナデ調整。体部外面は頸部まで緩いハケ目調整し、頸部より口縁部外面まではナデ調整をする。体部内面は斜め上方へヘラ削り。色調はにぶい橙色。

S I 16 (第10、12、13図)

【遺構】

I区東側(F-5・6区)に位置する遺構で、S I 07に切られる。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15°Eである。

南北軸(3.0)m、東西軸4.2m。深さは20cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本と思われるが、2本しか確認できない。柱穴の直径は24～32cm、深さは28～40cmである。硬化面は竈周辺に東西に延びる。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、ソデ石を抜いた痕跡と黄色粘土のソデを残している。燃烧室の浅い土坑と焼土が確認でき、焼土中に須恵器坏蓋が出土した。

【遺物】

13-6 須恵器坏の蓋。口径13.9cm。胎土は砂粒が少なくキメが細かい。蓋内面に返りがあり、返りの外面に窪みがある。内外面ともロクロ目が付き、蓋

の上部はヘラ削り調整。上部頂点にはヘラで同心円状に刻みを入れ、つまみの接合部分としている。つまみはとれている。色調は明オリーブ灰色。

13-7 須恵器坏の蓋。復原口径13.0cm。胎土は砂粒が少なくキメが細かい。蓋内面に返りがあり、外面は直線的。内外面ともロクロ目が付き、蓋の上部はヘラ削り調整。色調は暗緑灰色。

S I 10 (第14、15図)

【遺構】

I区東側(E・F-6区)に位置する遺構で、S I 11、12と重複しているが、削平が激しく、切り合い関係は不明。方形のプランを持つと思われる住居で、貯蔵穴が竈の右隣にあると仮定した場合、主軸方位はN65°Eである。

南北軸、東西軸ともに不明。深さは0cmで、遺構の北東側が削平を受けている。柱穴は4本で、直径は30～36cm、深さは30～80cmである。硬化面は確認できない。遺構南東隅に120×100cmほどの貯蔵穴がある。

竈は確認できなかった。

S I 11 (第14、15図)

【遺構】

I区東側(E・F-6区)に位置する遺構で、S I 11、12と重複しているが、削平が激しく、切り合い関係は不明。方形のプランを持つと思われる住居で、貯蔵穴が竈の右隣にあると仮定した場合、主軸方位はN65°Eである。

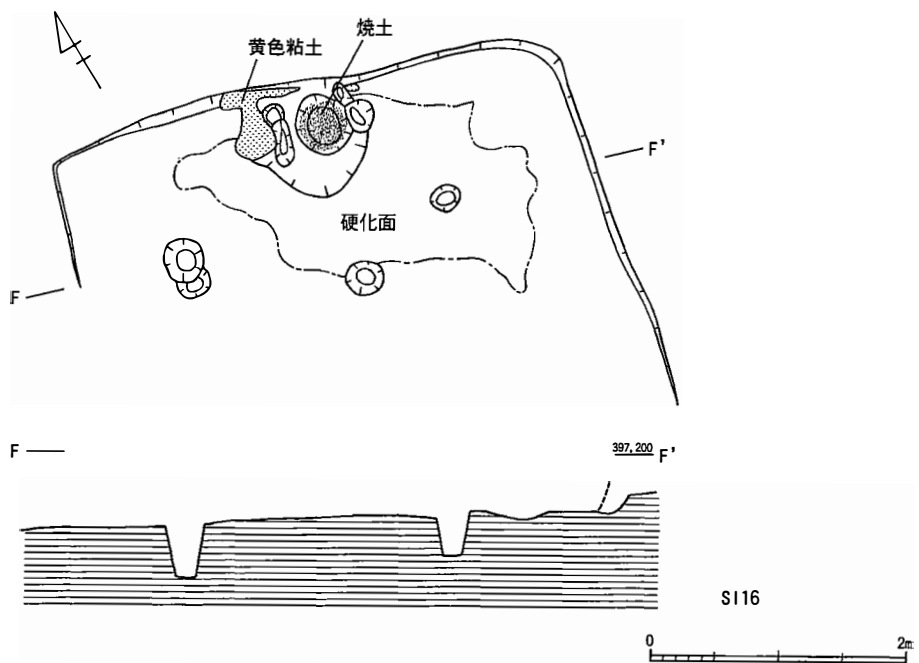
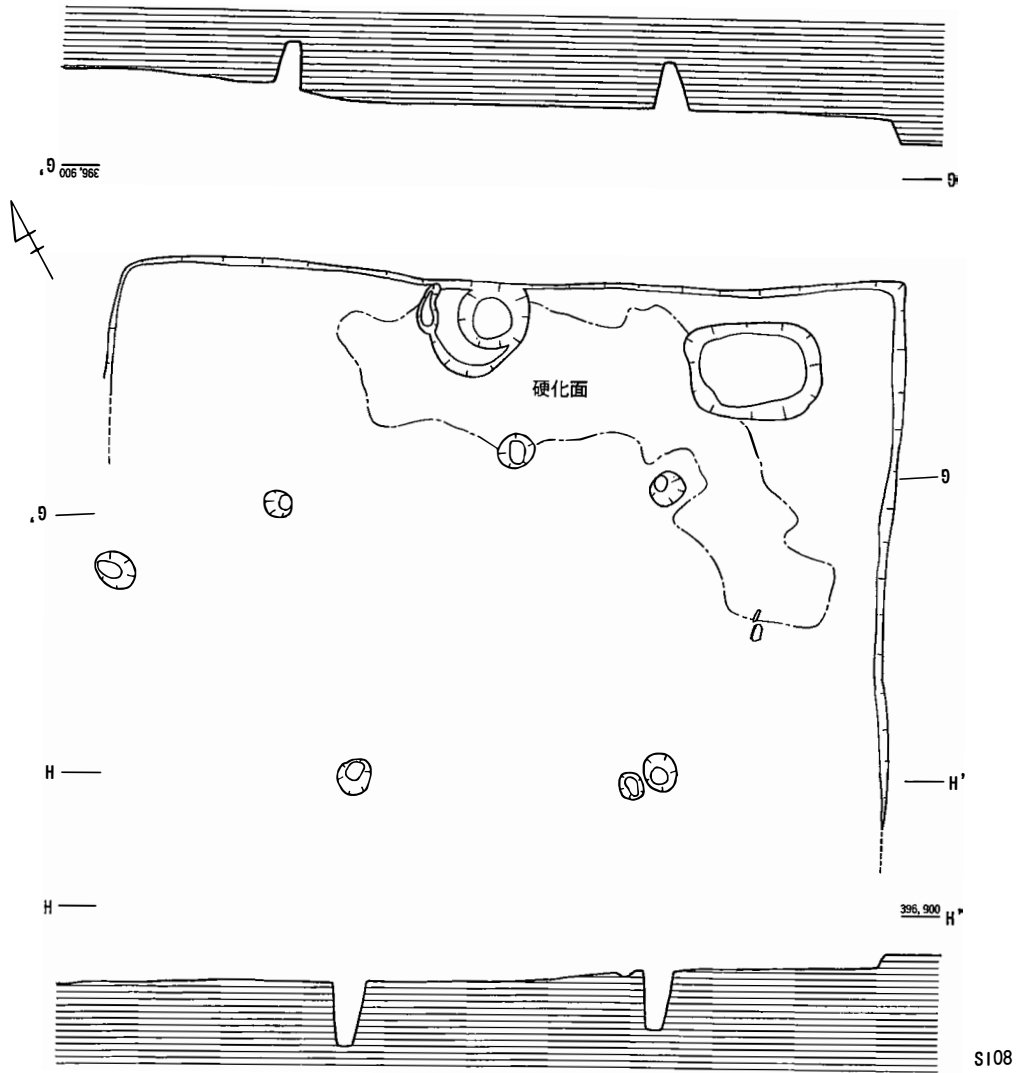
南北軸、東西軸ともに不明。深さは0cmで、遺構の北東側が削平を受けている。柱穴は4本で、直径は32cm、深さは50～60cmである。硬化面は確認できない。遺構南東隅に80×80cmほどの貯蔵穴がある。

竈は確認できなかった。

S I 12 (第14、15、16図)

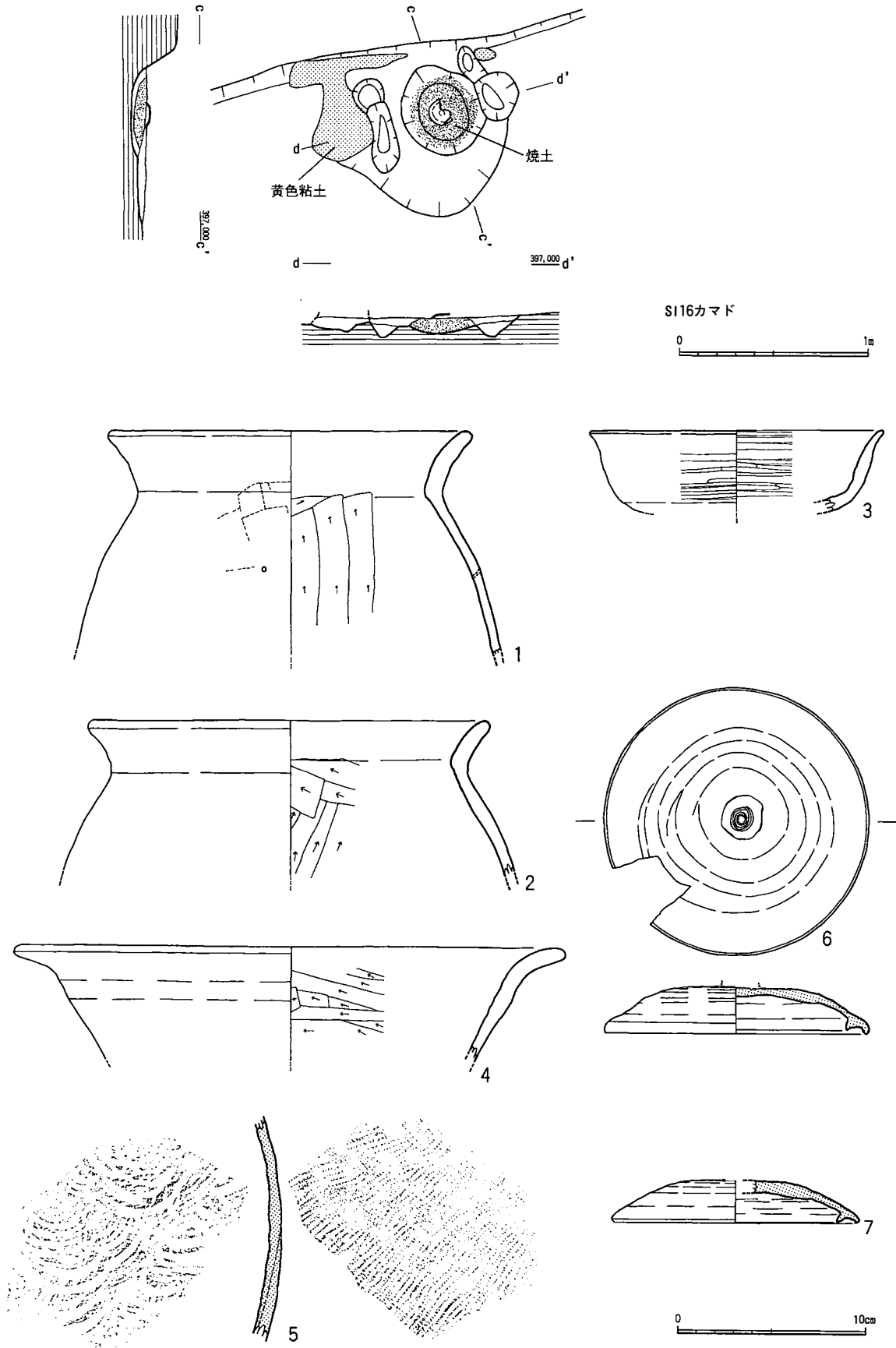
【遺構】

I区東側(E・F-6区)に位置する遺構で、S I 11、12と重複しているが、削平が激しく、切り合い関係は不明。方形のプランを持つと思われる住居



第12図 S108、16遺構実測図 (1/60)

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第13図 S116竈実測図(1/30)・S107、16出土遺物実測図(1/3)

で、貯蔵穴が竈の右隣にあると仮定した場合、主軸方位はN45° Eである。

南北軸、東西軸ともに不明。深さは0cmで、遺構の北東側が削平を受けている。柱穴は4本で、直径は28~40cm、深さは16~36cmである。硬化面は確認できない。遺構南東隅に100×80cmほどの貯蔵穴がある。

竈は確認できなかった。

S I 13 (第17図)

【遺構】

I区西側(D・E-4区)に位置する遺構で、SB05に切られる。ほぼ正方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN30° Eである。

南北軸2.8m、東西軸3.0m。深さは16cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。遺構に伴う柱穴は不明。硬化面は削平を受けていない中央から北東に延びる。

竈は確認できない。

【遺物】

17-1 土師器坏。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。体部底面付近にロクロナデによる1条の窪みがある。見込みは横ナデを施す。丹塗りで色調はにぶい橙色。底部に墨書あり。

17-2 土師器壺。復原口径9.0cm。器高9.5cm。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。口縁部はゆるく開く。口縁部内面はナデ調整。体部外面は頸部まで縦にハケ目調整し、頸部より口縁部外面まではナデ調整をする。底部はヘラ削りにより成形する。体部内面は斜め上方へヘラ削り。色調は橙色。

S I 14 (第18図)

【遺構】

I区南側(D-6区)に位置する遺構で、切り合いはない。ほぼ正方形のプランを持つ住居で、主軸方位は真北である。

南北軸3.4m、東西軸3.4m。深さは20cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本で、直径は24~32cm、深さは36cmである。硬化面は竈周辺より南北に延びる。遺構北東隅に80×80

cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、ソデ部分と燃焼室の浅い土坑と焼土が確認できる。

【遺物】

18-1 須恵器坏。底部はヘラ切り。底部の端部に高台を付ける。高台は接合面より外側に大きく張り出し、高台中位に稜を持つ。畳付きは鋭角に成形する。胎土は砂粒が少なく細かい。見込みは横ナデを施す。色調は明オリーブ灰色。

S I 15 (第19図)

【遺構】

I区東側(D-6・7区)に位置する遺構で、SB07に切られる。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN19° Eである。

南北軸(6.0)m、東西軸5.4m。深さは16cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本で直径は32~60cm、深さは32~48cmである。硬化面は竈周辺より東側に延びる。遺構北東隅には150×120cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、燃焼室の浅い土坑と焼土が確認できる。

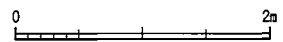
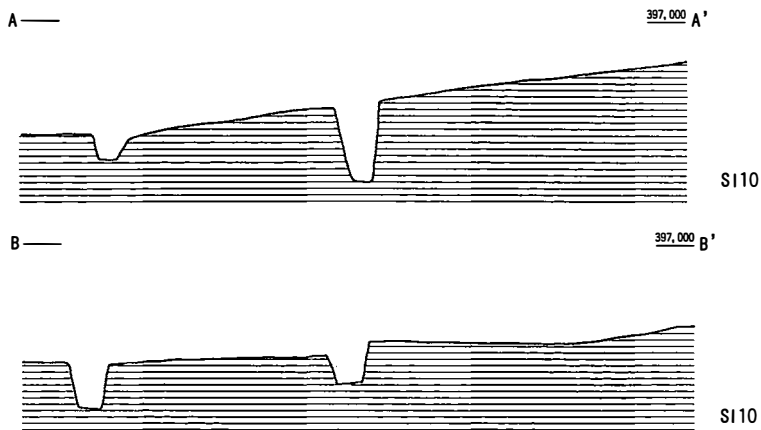
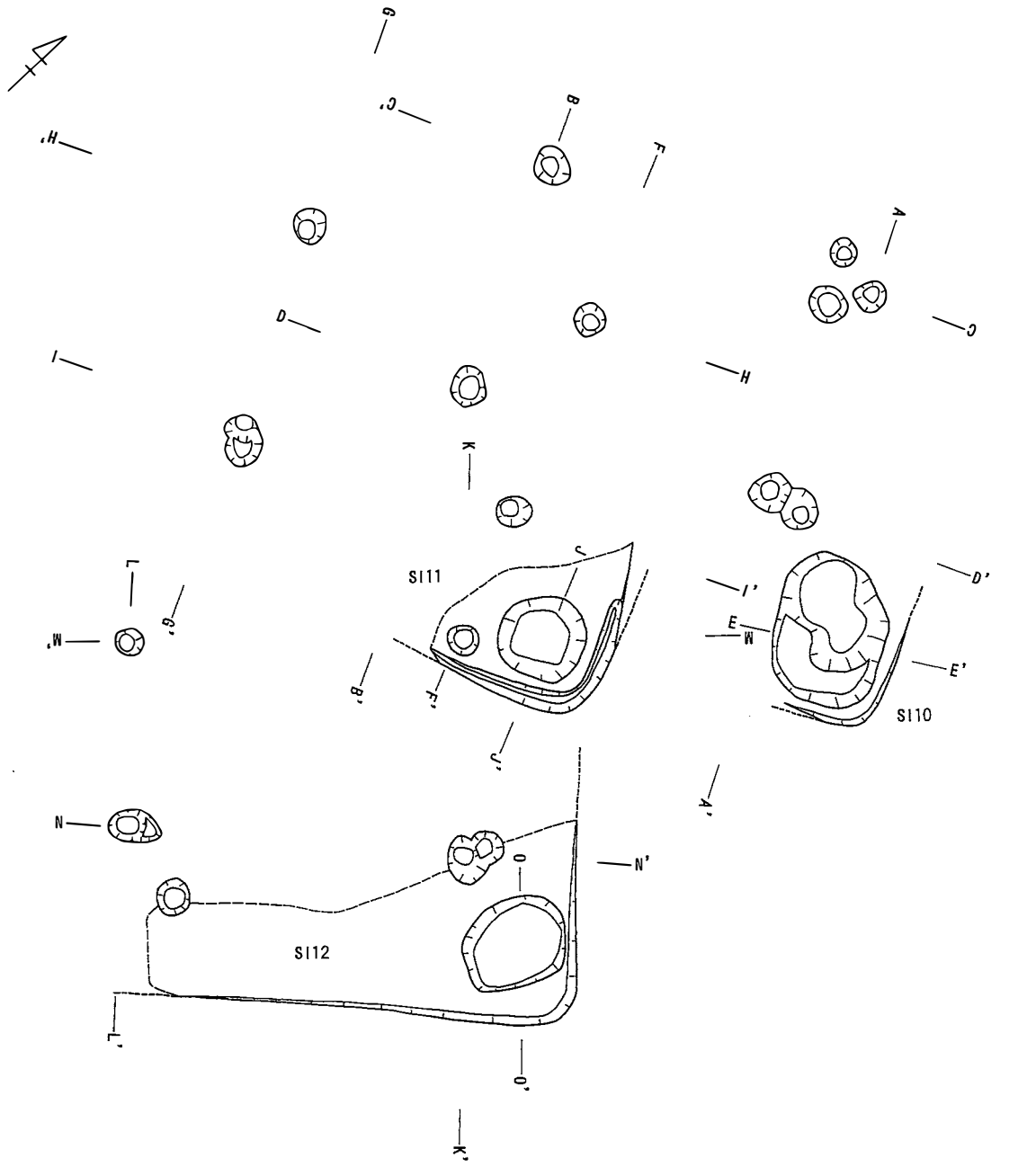
【遺物】

19-1 須恵器坏。復原口径16.6cm。器高6cm。底部はヘラ切り。底部の端部に高台を付ける。高台は接合面がくびれ、外側に張り出した後に内傾し、畳付きは鋭角に尖る。胎土は砂粒が少なく細かい。見込みは横ナデを施す。色調はオリーブ灰色。高台内と体部下位に自然釉が付着する。

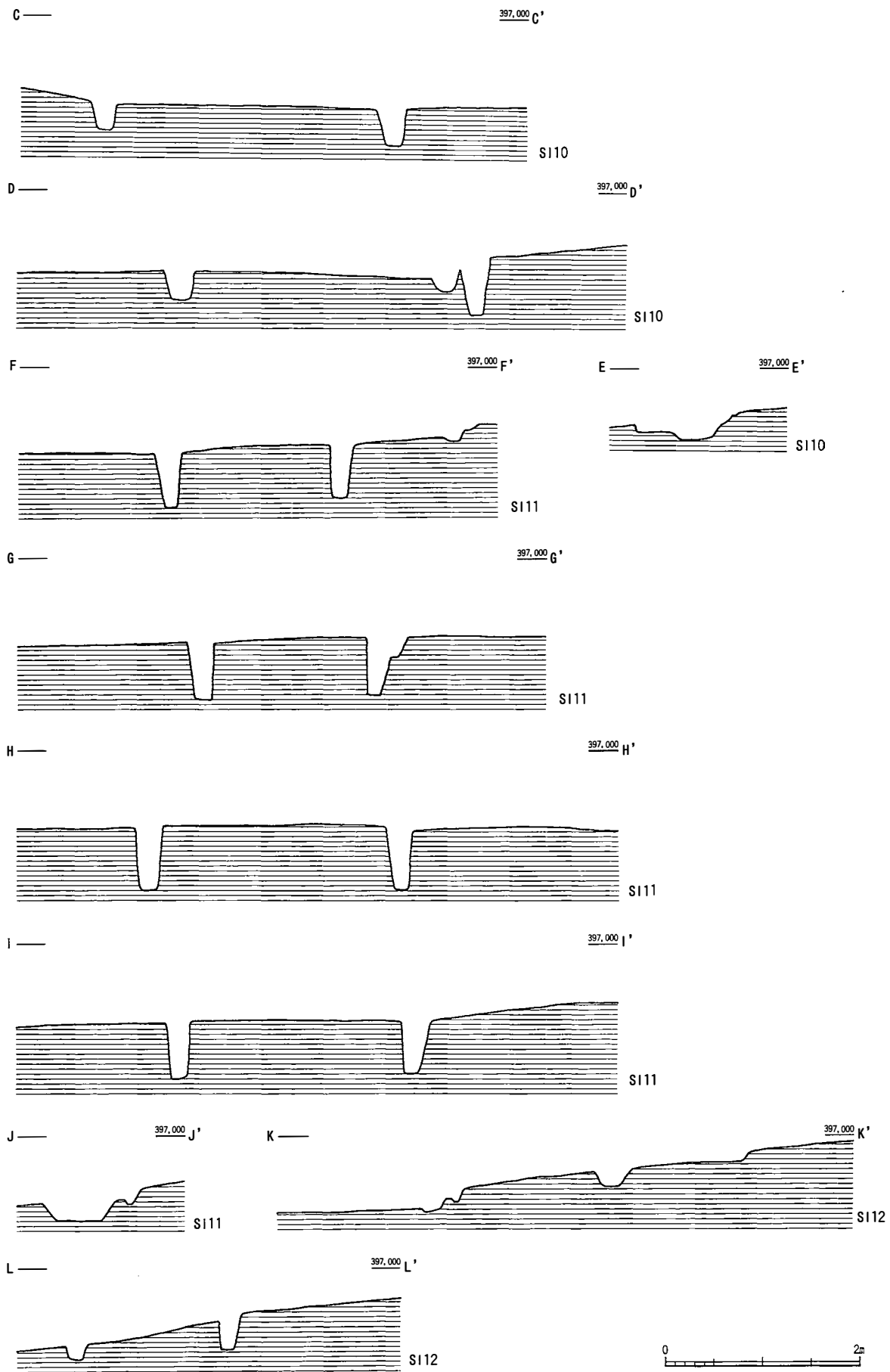
19-2 土師器壺。胎土は砂粒が多く、粗い。体部下半のみで、口縁の形態は不明。体部外面はナデ調整、内面は横方向にヘラ削り。色調はにぶい橙色。

19-3 土師器甕。復原口径12.4cm。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。口縁部は大きく外反する。口縁部内面はナデ調整。体部・頸部外面は頸部までナデ調整。口縁内面はナデ調整。体部内面は横方向へヘラ削り。色調はオリーブ黒色。

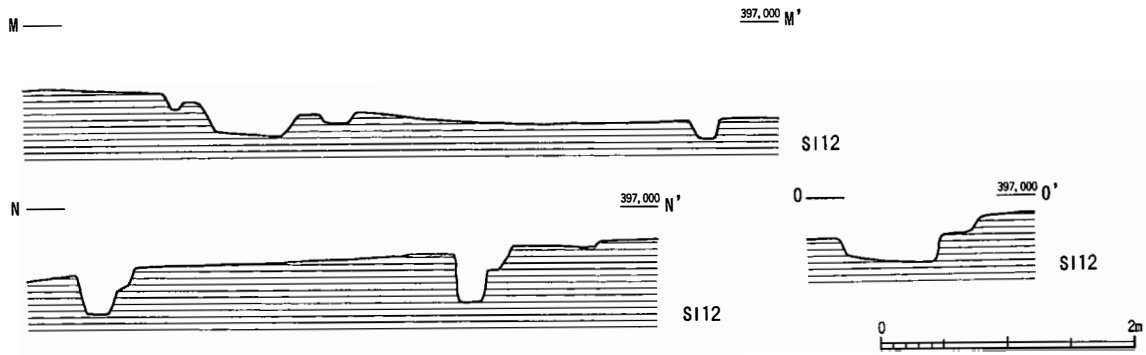
第1節 遺構とそれに伴う遺物



第14図 S I 10、11、12遺構実測図① (1/60)



第15図 S110、11、12遺構実測図② (1/60)



第16図 S I 10、11、12遺構実測図③ (1/60)

S I 17 (第20図)

【遺構】

Ⅱ区西側(H-5区)に位置する遺構で、S I 18、19に切られ、S I 23を切る。長方形のプランを持つと思われる住居で、主軸方位は真北である。

南北軸(3.4)m、東西軸3.4m。深さは20cmで、南側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本で、直径は24~32cm、深さは36cmである。硬化面は竈周辺よりに南北に延びる。遺構北東隅には80×60cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、燃烧室の浅い土坑と焼土が確認できる。

【遺物】

21-1 土師器甕。復原口径25.5cm。胎土は砂粒が少なく、細かい。口縁部はゆるく外折する。口縁部内面は円周に沿ってハケ目調整。胴部内面は縦方向にヘラ削り。体部外面は縦方向にハケ目調整し、口縁部外面から頸部までナデ調整で、ハケ目を消す。色調はにぶい橙色。

21-2 土師器甕。復原口径24.8cm。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。口縁部は強く外折し、口縁部は平らになる。口縁部の器肉が厚い。口縁部内面はナデ調整。体部内面は縦方向にヘラ削り。体部外面は縦にハケ目調整をし、その後ナデ消している。口縁部外面もナデ調整。色調は橙色。

21-3 竈より出土した土師器甕。復原口径25.2cm。胎土は砂粒が少なく、細かい。口縁部は緩く外反する。口縁部端部はやや肥圧する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は縦方向にヘラ削り。頸部外面から体

部外面はナデ調整。色調はにぶい黄橙色。

21-4 土師器甕。復原口径22.5cm。胎土は砂粒が少なく、細かい。口縁部は緩く外反する。体部の調整は残部が少なく不明であるが、口縁部内外面はナデ調整。色調はにぶい黄橙色。

21-5 土師器甕。復原口径24.0cm。胎土は砂粒が混じるが、細かい。口縁部は強く外折し、ほぼ水平になる。口縁部内面はナデ調整。体部内面は縦方向にヘラ削り。体部外面は縦にハケ目を調整の後、頸部外面から体部にかけてナデする。色調はにぶい橙色。体部外面はカーボンが付着する。

21-6 須恵器坏の蓋。復原口径16.2cm。胎土は砂粒が混じるがキメが細かい。内外面ともロクロ目が付き、蓋上面は削りによりくぼむが、つまみの形状は不明。色調はオリーブ灰色。

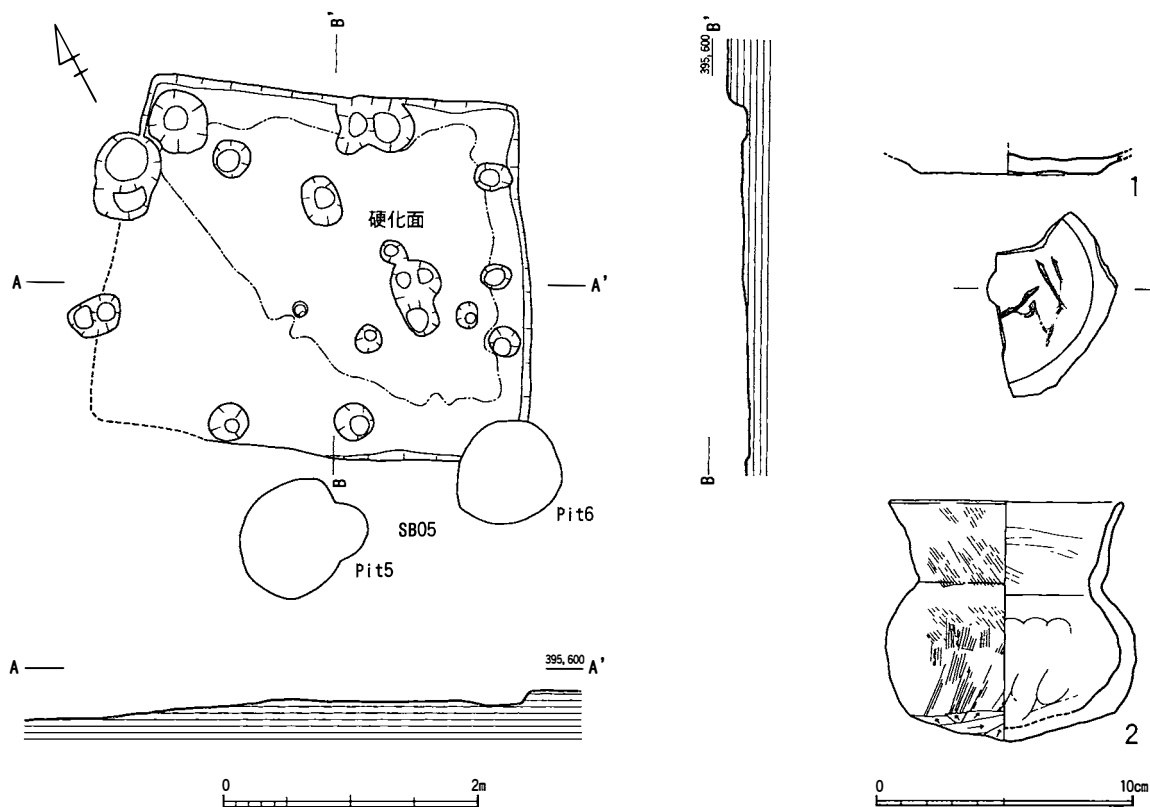
21-7 紡錘車。直径4.1cm。須恵質の焼成で、胎土は砂粒が混じり細かい。須恵器の転用品と思われる、両平面、周辺は平滑に研磨されている。色調は明褐灰色。

S I 18 (第20、21図)

【遺構】

Ⅱ区西側(H-5区)に位置する遺構で、S I 17、23を切り、S I 19に切られる。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15°Eである。

南北軸(3.6)m、東西軸3.8m。深さは20cm。柱穴は4本と思われるが、明瞭に確認できない。硬化面は遺構東側に南北に延び、中央部分はS I 19に切られて不明。遺構北東隅に80×60cmの貯蔵穴がある。



第17図 S I 13遺構実測図 (1/60) 出土遺物実測図 (1/3)

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、燃烧室の浅い土坑が確認できた。

【遺物】

21-8 土師器甕。復原口径22.7cm。胎土は砂粒が少なく、細かい。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は縦方向にヘラ削り。体部外面は縦方向にハケ目調整し、口縁部外面から頸部までナデ調整を行う。色調はにぶい黄橙色。

21-9 竈より出土した土師器甕。復原口径26.9cm。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は縦方向にヘラ削り。体部外面は縦にハケ目調整をし、その後ナデ消している。口縁部外面もナデ調整。色調はにぶい橙色。

21-10 土師器甕でS I 18、19の両方の可能性がある。復原口径25.0cm。胎土は砂粒が少なく細かい。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は縦方向にヘラ削り。頸部外面はナデ調整。色調はにぶい黄橙色。

21-11 土師器蓋で、S I 18、19の両方の可能性がある。復原口径18.4cm。器高1.6cm。底部はヘラ切り。

胎土は砂粒が少なく細かい。体部は緩く開き、口縁端部は屈曲し、平らになる。内外面ともナデ調整。丹塗りで色調は橙色。

21-12 土師器皿で、S I 18、19の両方の可能性がある。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面ともナデ調整。丹塗りで色調は橙色。底部には墨書がある。

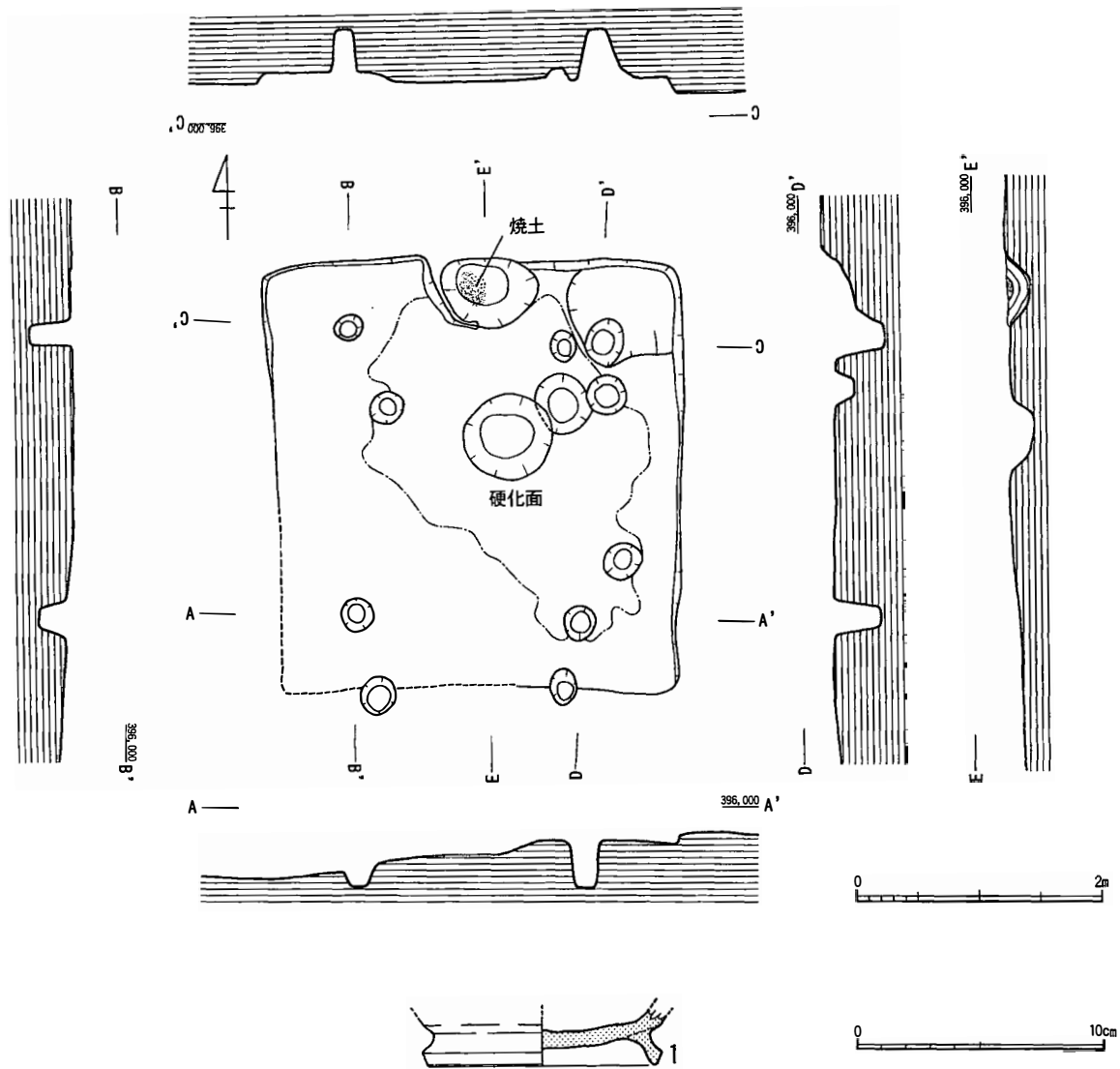
S I 19 (第20、21図)

【遺構】

Ⅱ区西側 (H-5区) に位置する遺構で、S I 17、18、23を切る。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15° Eである。

南北軸 (2.2) m、東西軸3.6m。深さは20cm。柱穴は4本と思われるが、2本しか確認できない。柱穴の直径は24~28cm、深さは28~32cmである。硬化面は竈周辺より南北に延びる。遺構北東隅に70×50cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、燃烧室の浅い土坑と焼土が確認できる。



第18図 S I 14遺構実測図 (1/60) 出土遺物実測図 (1/3)

S I 23 (第20図)

【遺構】

Ⅱ区西側 (H-5区) に位置する遺構で、S I 17、S I 18、19に切られる。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15° Eである。

S I 18のすぐ東となりと重なるようにあり、プランも主軸方向もほぼS I 18と同じと思われる。重複しているため柱穴、竈などの構造も個別に判別できない。

S I 20 (第22、23図)

【遺構】

Ⅱ区西側 (H-6区) に位置する遺構で、S I 22、29を切る。長方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15° Eである。

南北軸6.0m、東西軸4.8m。深さは20cm。柱穴は4本で、直径は28~32cm、深さは48~52cmである。

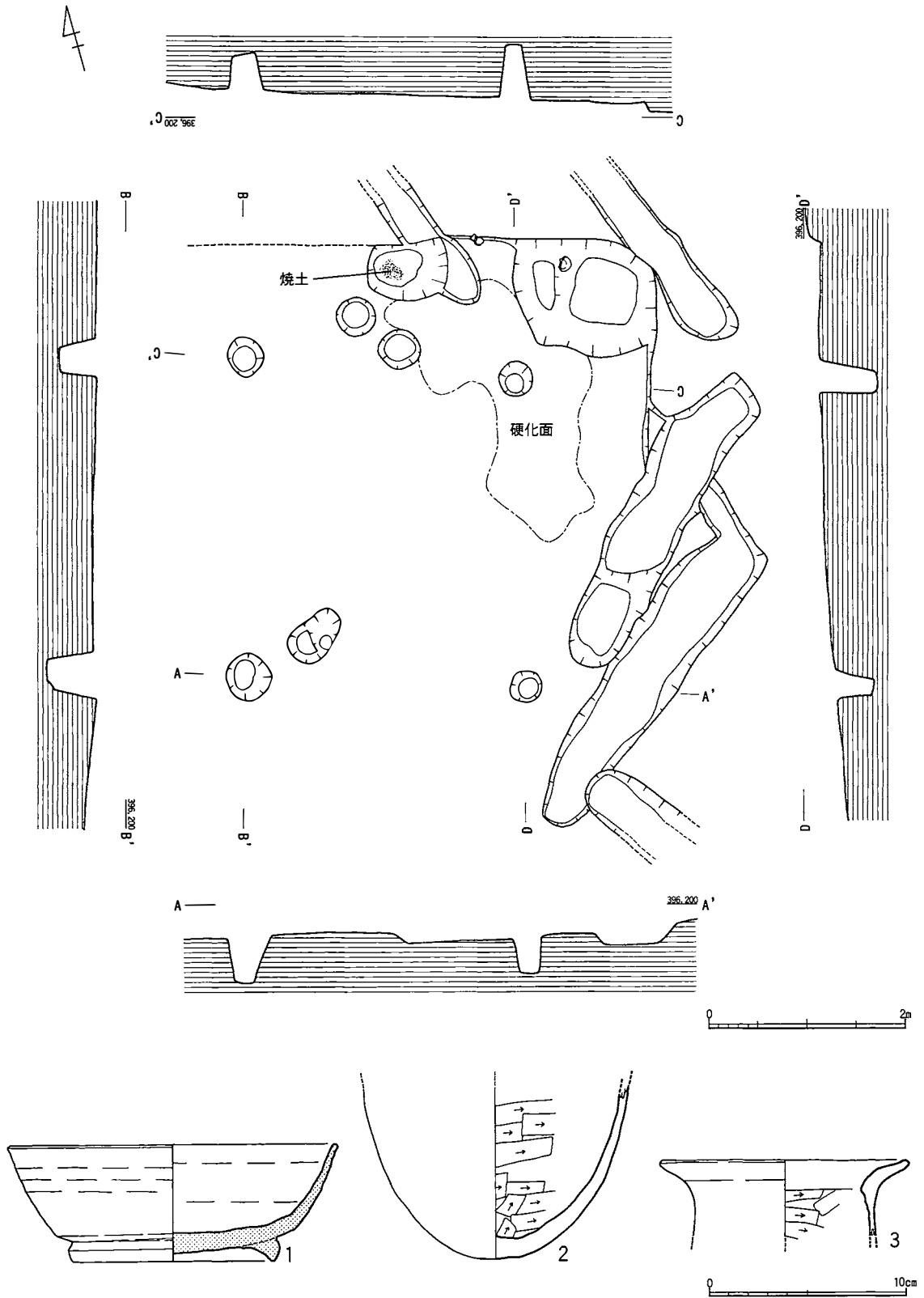
硬化面はプランにそってほぼ全域にひろがる。遺構北東隅に80×60cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、ソデ石と黄色粘土のソデを残しており、燃烧室の浅い土坑と焼土が確認できる。

【遺物】

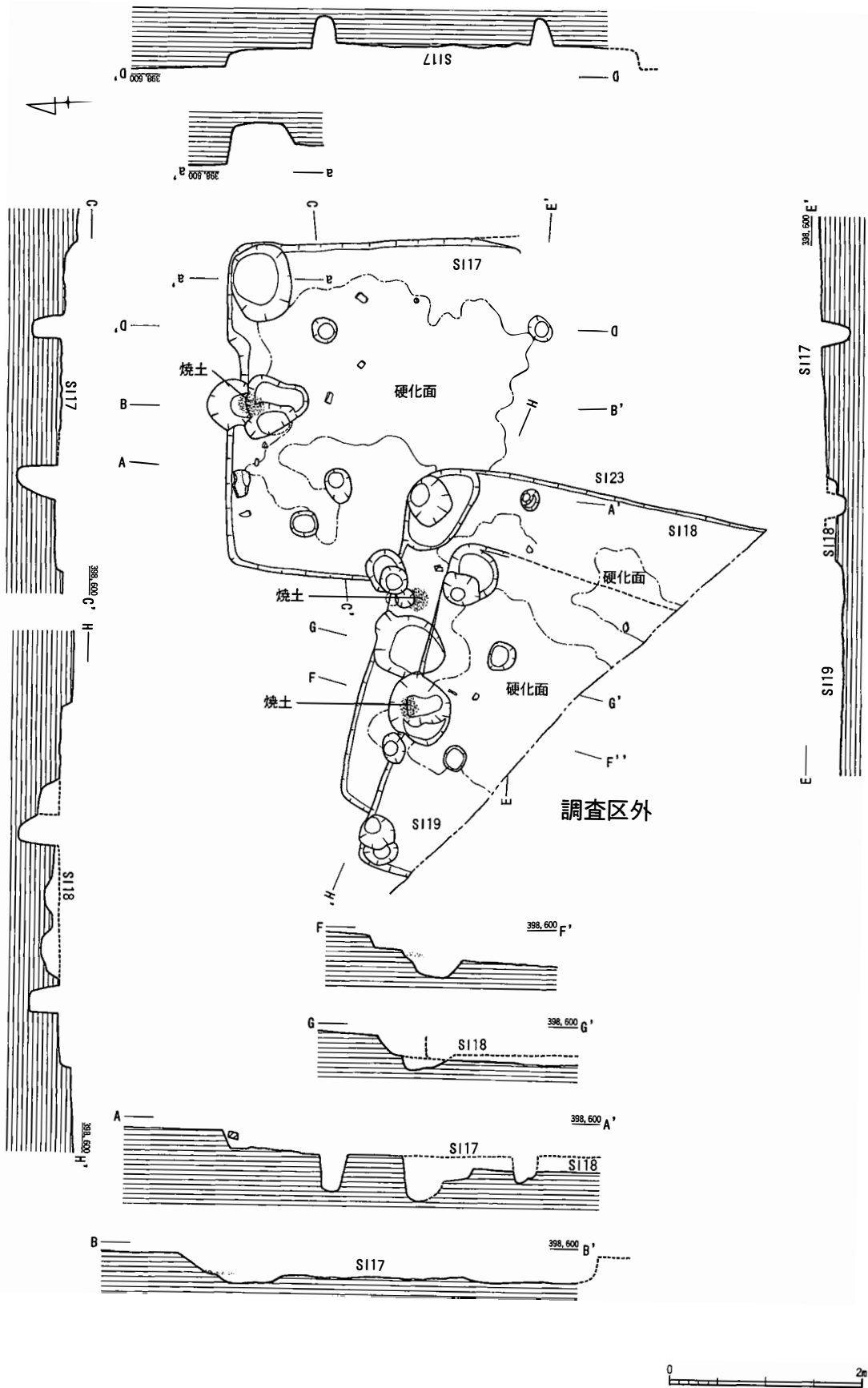
23-1 土師器皿。復原口径13.2cm。器高3.0cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は緩く開く。内外面とも回転ナデ調整。丹塗りで色調は橙色。

23-2 須恵器坏の蓋。復原口径16.7cm。器高2.3cm。胎土は砂粒が混じるがキメが細かい。内外面ともロクロ目が付き、蓋上面は輪状つまみが付く。色調は

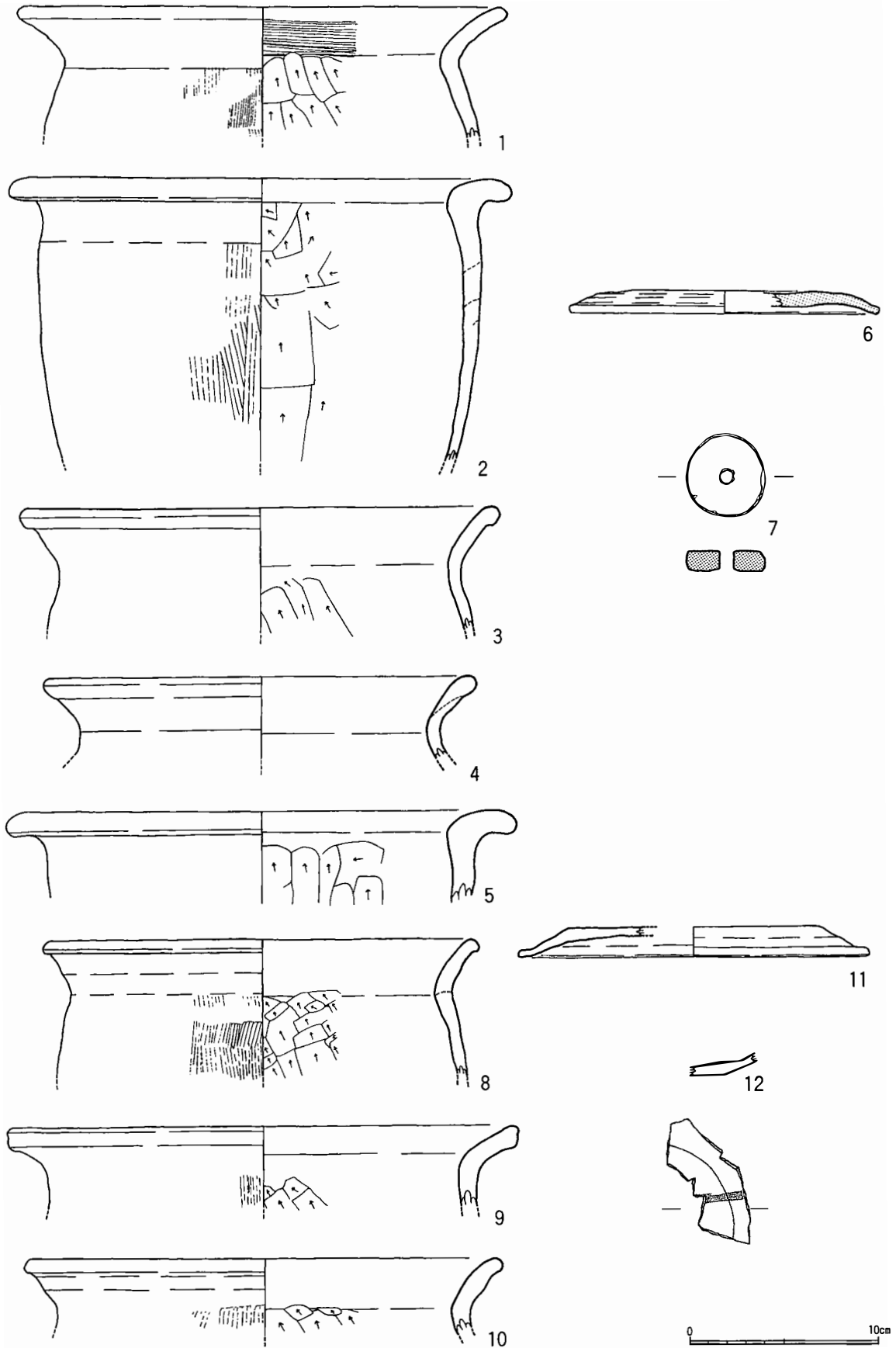


第19図 S115遺構実測図(1/60) 出土遺物実測図(1/3)

第1節 遺構とそれに伴う遺物

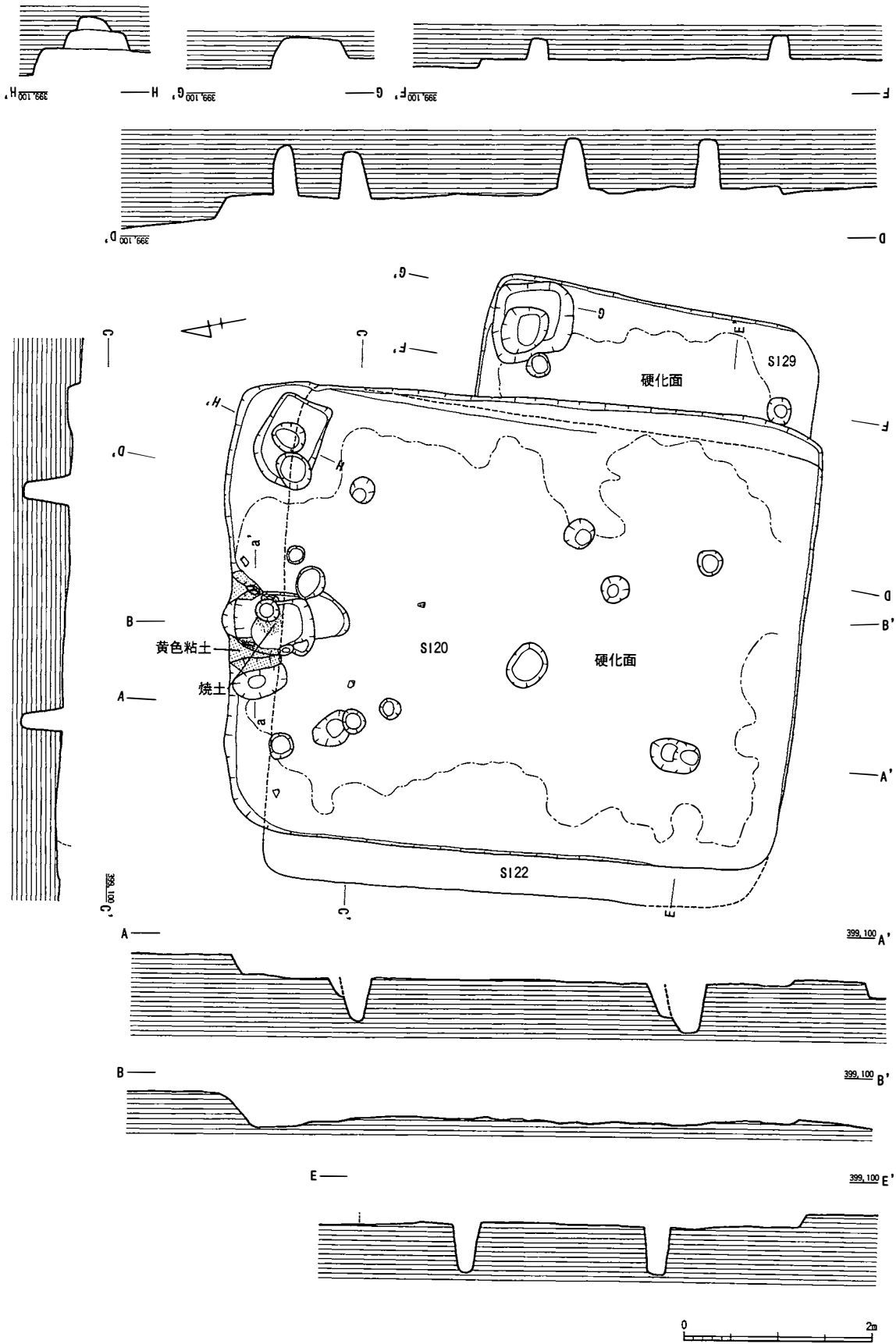


第20図 S117、18、19遺構実測図 (1/60)

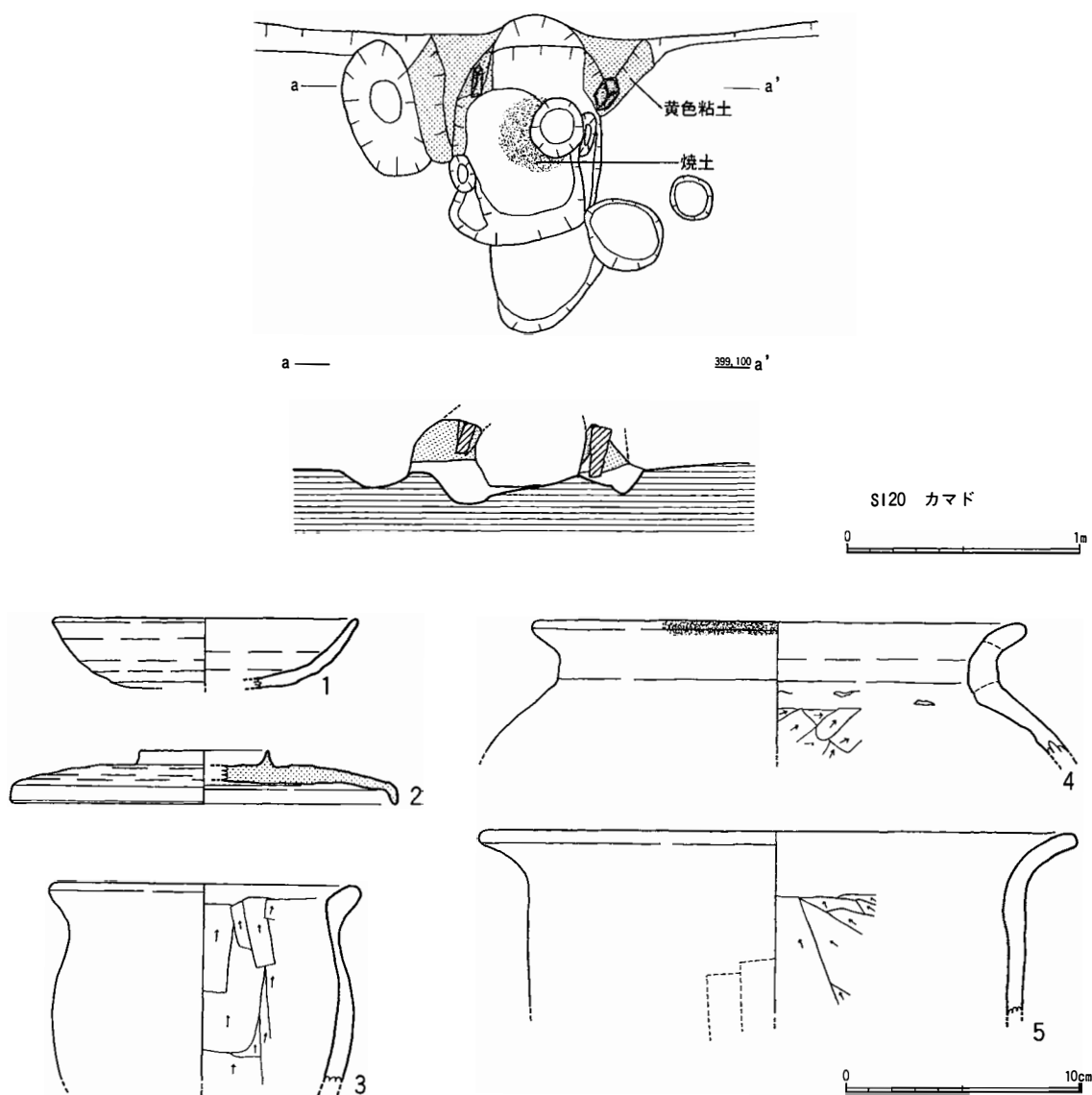


第21図 S117、18、19出土遺物実測図（1／3）

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第22図 S120、22、29遺構実測図 (1/60)



第23図 S I 20竈実測図 (1/30) S I 20、22出土遺物実測図 (1/3)

灰色。

23-3 竈より出土した土師器甕。復原口径12.5cm。胎土は砂粒が少なくやや細かい。口縁部はゆるく外反する。口縁部の器肉が厚く、幅が狭い。口縁部内面はナデ調整。体部内面は縦方向にヘラ削りを行う。体部・頸部の外面はナデ調整。色調はにぶい橙色。外面にはカーボンが付着する。

23-4 土師器甕。復原口径20.9cm。胎土は砂粒が混じるが、細かい。口縁部は大きく外反する。口縁部の器肉が厚く、幅が狭い。口縁部内面はナデ調整。体部内面は縦方向にヘラ削りを行う。体部・頸部の外面はナデ調整。色調は明黄褐色。口唇部にカーボンが付着する。

S I 22 (第22、23図)

【遺構】

Ⅱ区西側(H-6区)に位置する遺構で、S I 20に切られる。長方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15° Eである。

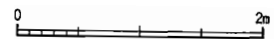
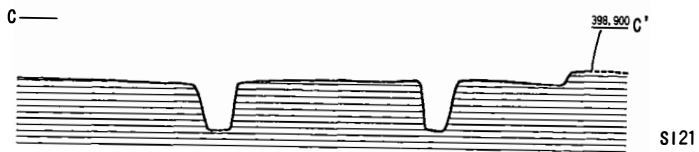
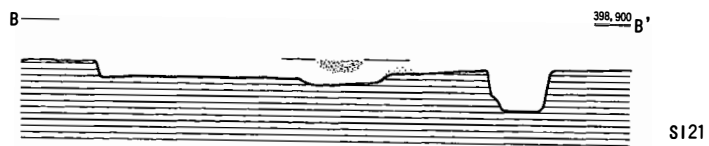
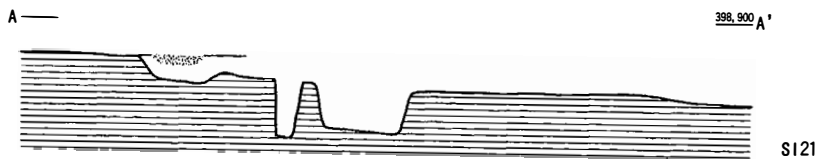
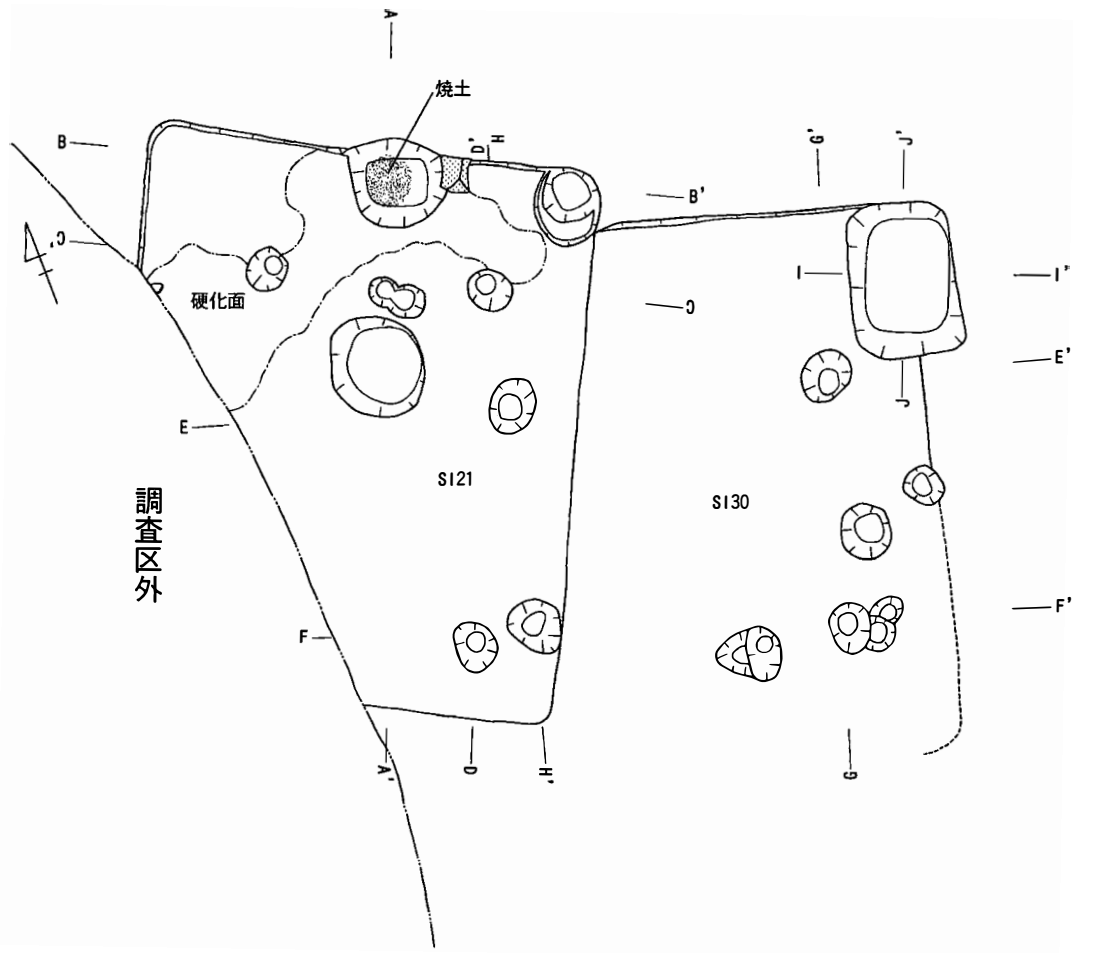
南北軸5.4m、東西軸5.0m。深さは20cm。柱穴は4本で、S I 20の柱穴と同じである。すなわちS I 20が再建時に同じ柱穴を使用したものと思われる。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、これも柱穴と同様に、S I 20がその後に再利用したものと思われ、S I 20と同一である。

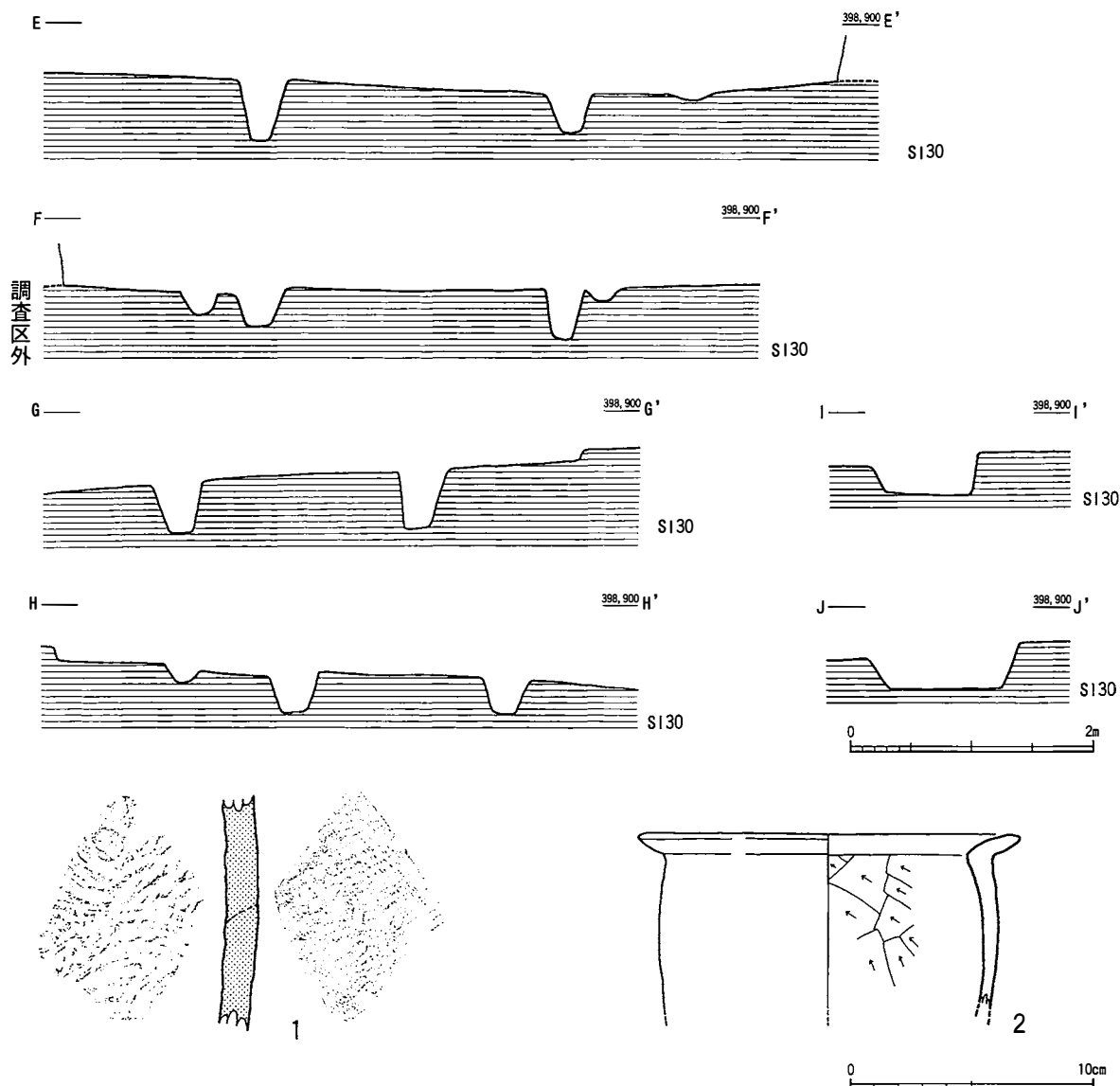
【遺物】

23-5 土師器甕。復原口径25.1cm。胎土は砂粒が

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第24図 S121、30遺構実測図① (1/60)



第25図 S I 21、30遺構実測図② (1/60) 出土遺物実測図 (1/3)

少なくやや粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部は縦方向にハケ目調整を行い、頸部の外面はナデ調整をし、胴部の一部をナデ消す。色調は橙色。外面にはカーボンが付着する。

S I 29 (第22図)

【遺構】

Ⅱ区西側(H-6区)に位置する遺構で、S I 20、22に切られる。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN16° Eである。

南北軸3.6m、東西軸(1.2)m。深さは10cm。柱穴は4本と思われるが、2本しか確認できない。柱穴の直径は24cm、深さは24cmである。硬化面は残存

している遺構面のほぼ全域に広がる。遺構北東隅に80×80cmの貯蔵穴がある。

竈はS I 20、22に切られ消滅している。

S I 21 (第24、25図)

【遺構】

Ⅱ区西側(G-6・7区)に位置する遺構で、S I 30を切る。長方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN25° Eである。

南北軸5.5m、東西軸3.7m。深さは16cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本と思われるが、3本しか確認できない。柱穴の直径は32~36cm、深さは20~40cmである。硬化面は竈周辺から細長く南西に方向に延びる。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、東側に黄色粘土のソデが1枚残り、燃烧室の浅い土坑と焼土が確認できた。

【遺物】

25-1 須恵器壺または甕の胴部。胎土は砂粒が少なくいが、やや粗い。外面は平行タタキで、一部をナデ消している。内面は同心円の当て具痕が付く。器肉が厚い。色調は灰白色。

S I 30 (第24、25図)

【遺構】

II区西側(G-6・7区)に位置する遺構で、S I 21に切られる。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15° Eである。

南北軸(4.6)m、東西軸(3.0)m。深さは10cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本と思われるが、2本しか確認できない。柱穴の直径は40~48cm、深さは32~44cmである。硬化面は確認できない。遺構北東隅には1200×80cmの貯蔵穴がある。

竈は確認できなかった。

【遺物】

25-2 貯蔵穴より出土した土師器甕。復原口径15.2cm。胎土は砂粒が少なくやや粗い。口縁部は強く外折する。口縁部はやや平坦気味。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。頸部・体部の外面はナデ調整。色調は橙色。外面胴部にはカーボンが付着する。

S I 24 (第26、27、28図)

【遺構】

II区西側(G-7区)に位置する遺構。S I 25の上に立て替えをしたもので、同遺構とほぼ同じプランと軸方向で切っている。東西に長軸をとる長方形のプランで、主軸方位はN30° Eである。

南北軸4.4m、東西軸5.2m。深さは40cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本で、直径は24~32cm、深さは32~60cmである。硬化面は竈周辺に南北に延びる。遺構北東隅には100×120cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、ソデ石と黄色粘土のソデを残している。燃烧室の浅い土坑と焼土が確認でき、焼土中央には煮沸具を支えるための石が固定してある。

【遺物】

27-1 S I 24の遺構東側より出土した縄文晩期の土器で深鉢。胎土は砂粒が少なくやや粗い。体部内面は縦方向に、体部外面は横方向にヘラ磨きを行う。色調は黄褐色。外面胴部にはカーボンが付着する。

28-1 竈より出土した土師器甕。復原口径25.0cm。胎土は砂粒が少なくやや粗い。口縁部は強く外反し、口縁部の張り出しは少ない。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部は縦方向にハケ目調整を行い、ナデ消している。頸部外面もナデ調整を行う。色調はにぶい黄橙色。

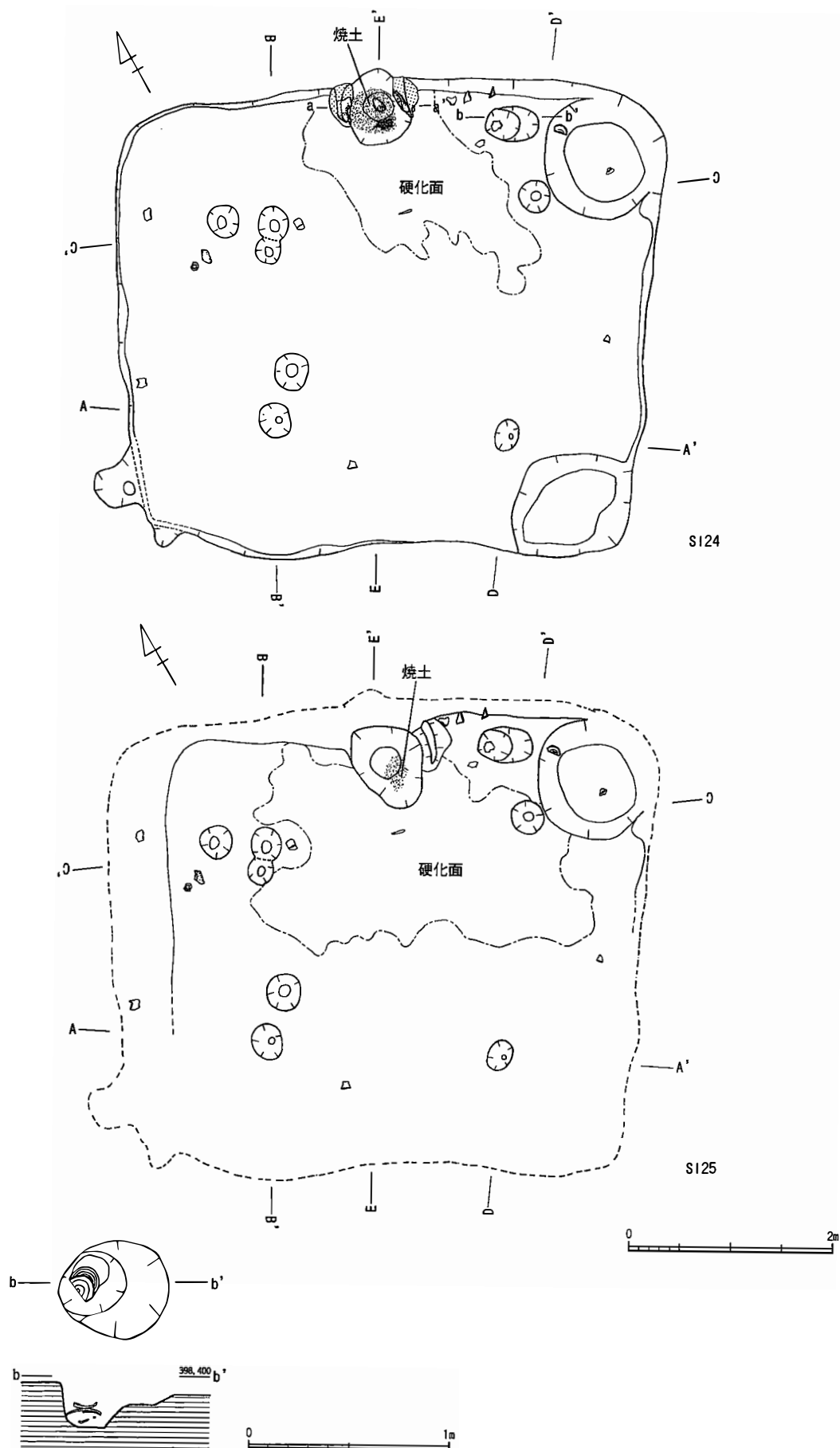
28-2 土師器甕で、S I 24、25双方の可能性がある。復原口径20.0cm。胎土は砂粒が多くやや粗い。口縁部は強く外反し、口縁部の張り出しは少ない。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部は縦方向にハケ目調整を行い、ナデ消している。頸部外面もナデ調整を行う。色調はにぶい黄橙色。

28-3 土師器甕。復原口径17.6cm。胎土は砂粒が多くやや粗い。口縁部は強く外反し、口縁部の張り出しは少ない。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部は縦方向にハケ目調整を行い、ナデ消している。頸部外面もナデ調整を行う。色調はにぶい橙色。

28-4 土師器鉢で、S I 24、25双方の可能性がある。復原口径24.0cm。胎土は砂粒が多くやや粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部は縦方向にハケ目調整を行い、ナデ消している。頸部外面もナデ調整を行う。色調はにぶい黄褐色。

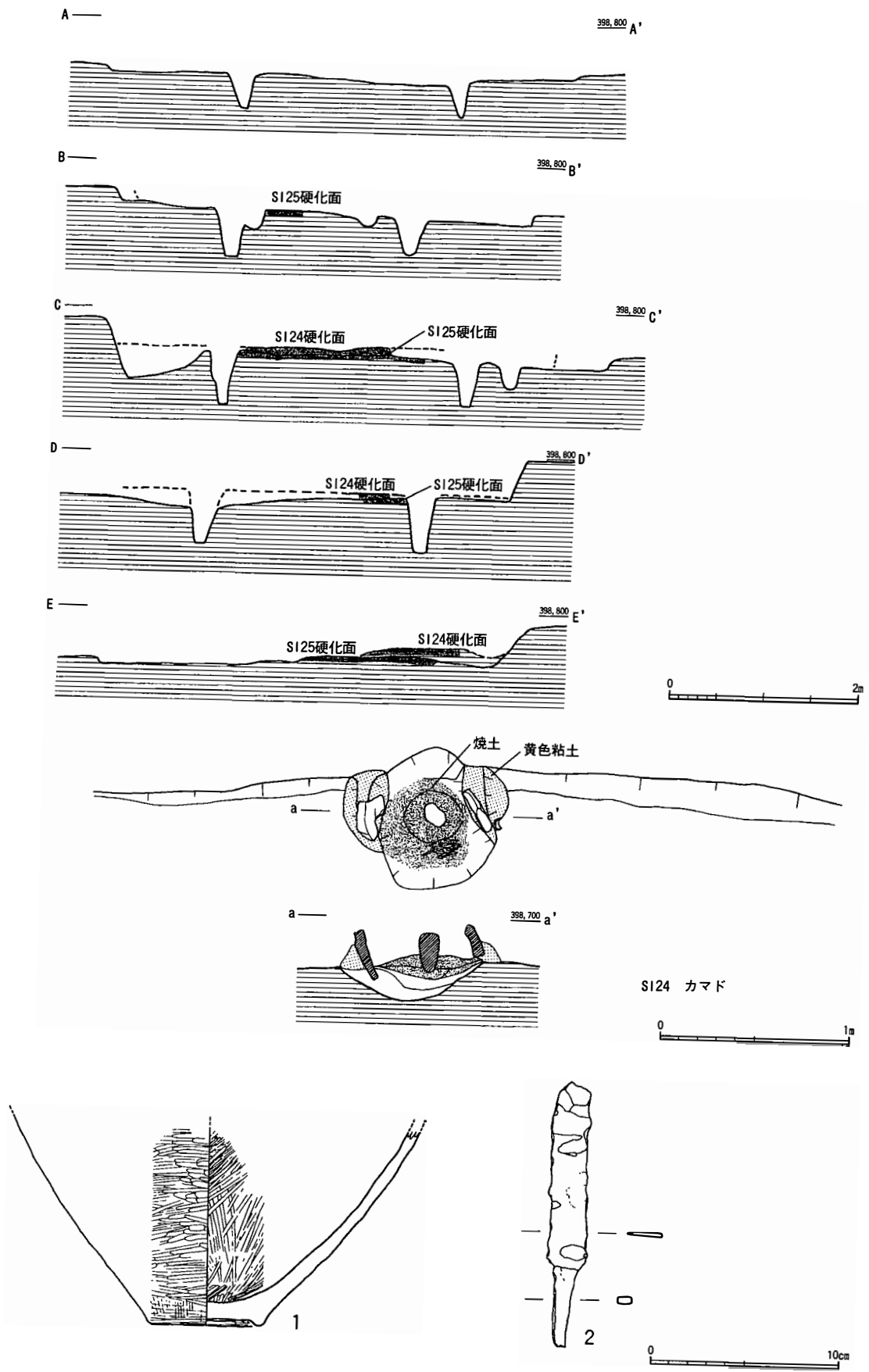
28-5 土師器甕。胎土は砂粒が多くやや粗い。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部外面はナデ調整。色調はにぶい褐色。

28-6 須恵器坏の蓋で、S I 24、25双方の可能性がある。口径15.9cm。器高3.5cm。胎土は砂粒が少なくキメが細かい。内外面ともロクロ目が付き、蓋

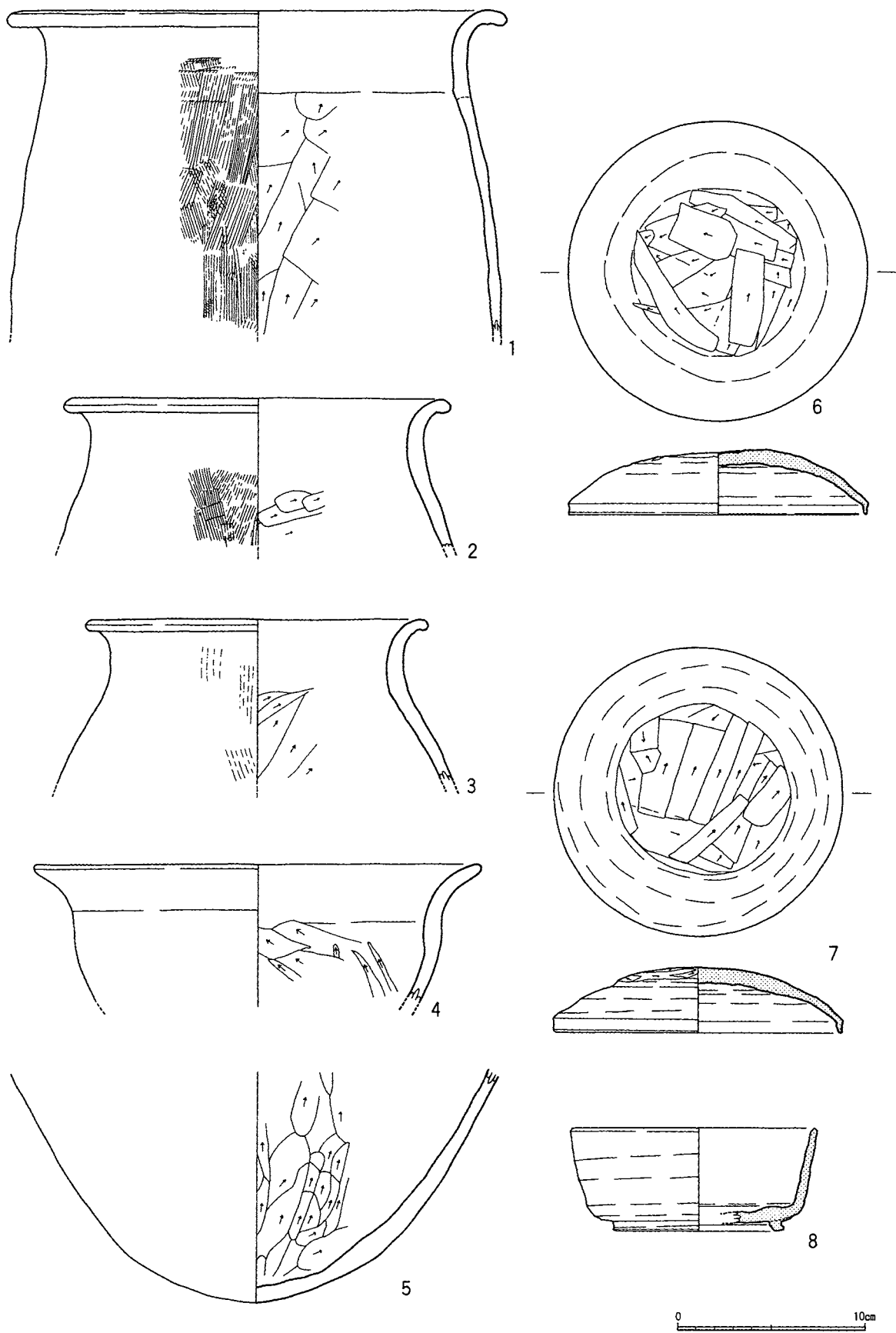


第26図 S124、25遺構実測図① (1/60)

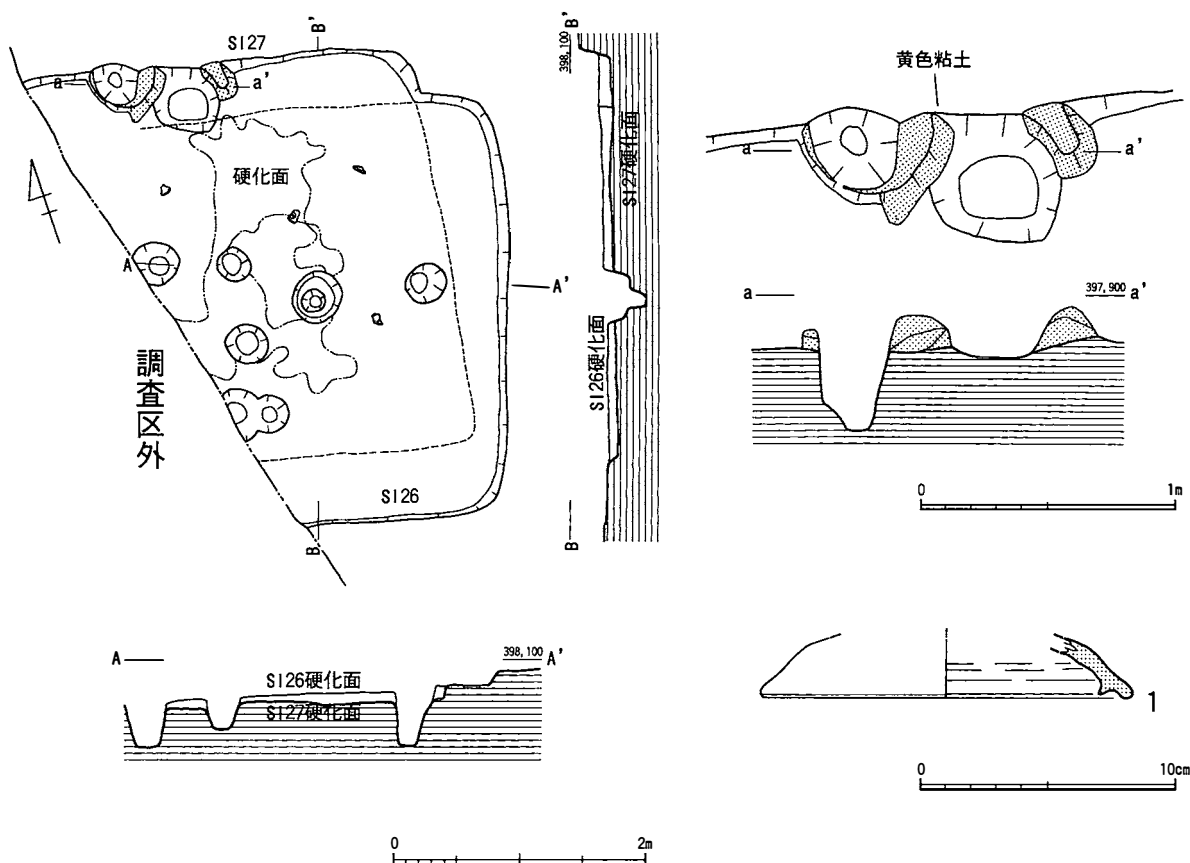
第1節 遺構とそれに伴う遺物



第27図 S124、25遺構実測図②(1/60)・S124竈実測図(1/30)・出土遺物実測図①(1/3)



第28図 S124、25出土遺物実測図②(1/3)



第29図 S I 26、27遺構実測図 (1/60)・S I 27竈実測図 (1/30)・出土遺物実測図 (1/3)

上面はヘラによる調整でつまみが付かない。蓋裏面は1度横ナデを行う。色調は灰白色。

28-7 須恵器杯の蓋で、S I 24、25双方の可能性はある。口径15.3cm。器高3.6cm。胎土は砂粒が混じるがキメが細かい。内外面ともロクロ目が付き、蓋上面はヘラによる調整でつまみが付かない。蓋裏面は横ナデを数回行う。色調は灰色。

28-8 須恵器杯の身。復原口径12.9cm。器高5.6cm。胎土は砂粒が混じるがキメが細かい。内外面ともロクロ目が付き、底部はヘラ切り。高台は断面四角で、やや中央に着ける。色調は灰色。

S I 25 (第26、27、28図)

【遺構】

II区西側(G-7区)に位置する遺構。S I 24に切られる。東西に長軸をとる長方形のプランで、主軸方位はN30° Eである。

南北軸4.0m、東西軸4.4m。深さは40cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴、

貯蔵穴は切られているS I 24と同じと思われる。硬化面は竈周辺に東西に延びる。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、切られているS I 24の竈より南側にあり、燃焼室の浅い土坑と焼土が確認できた。

【遺物】

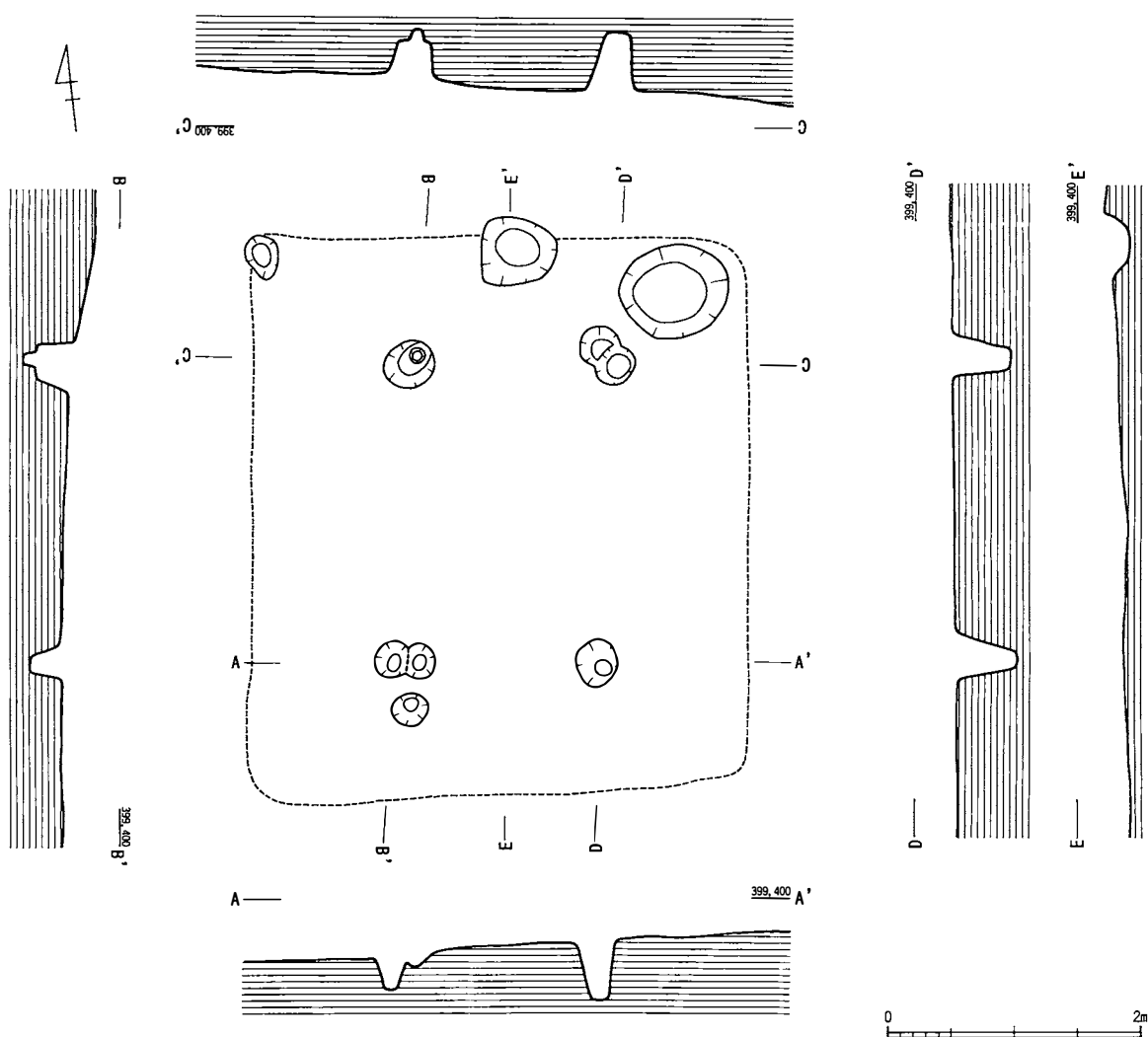
27-2 鉄製刀子で、先端部分が欠損している。長さ14cm。幅1.9cm。茎の部分を残す。

S I 26 (第29図)

【遺構】

II区西側(G・F-7区)に位置する遺構で、S I 27に切られる。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15° Eである。

南北軸(1.5)m、東西軸2.1m。深さは10cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本と思われるが、2本しか確認できない。柱穴の直径は12~16cm、深さは14~20cmである。硬化面は竈周辺に東西に延びる。



第30図 S I 28遺構実測図 (1/60)

竈は確認できない。

S I 27 (第29図)

【遺構】

Ⅱ区西側 (G・F-7区) に位置する遺構で、S I 26を切る。方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN15° Eである。

南北軸 (1.5) m、東西軸2.1m。深さは10cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本と思われるが、2本しか確認できない。柱穴の直径は12~16cm、深さは14~20cmである。硬化面は竈周辺に東西に延びる。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置し、ソデ石を抜いた痕跡と黄色粘土のソデを残している。燃烧室の浅い土坑と焼土が確認でき、焼土中に須恵器坏蓋が出土した。

【遺物】

29-1 須恵器坏の蓋。口径14.5cm。胎土は砂粒が少なくキメが細かい。内外面ともロクロ目が付く。蓋裏面は返りを持つ。色調は灰白色。

S I 28 (第30図)

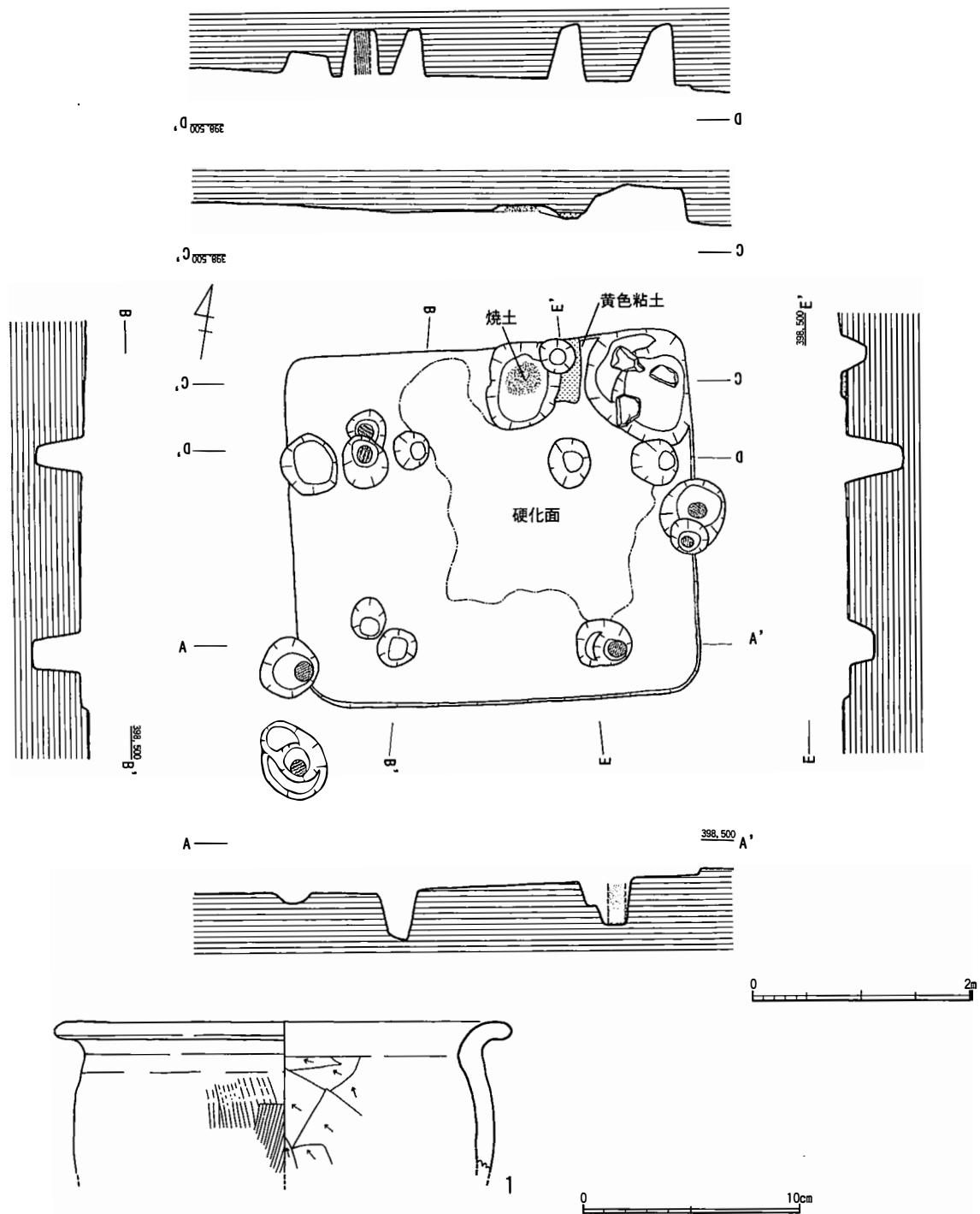
【遺構】

Ⅰ区西側 (H-7・8区) に位置する遺構で、切り合い関係はない。長方形のプランを持つと思われる住居で、主軸方位はN7° Eである。

南北軸4.4m、東西軸4.4m。深さは0cmで、全体に削平を受けており、遺構のプランは痕跡からの推定である。柱穴は4本で、直径は30~45cm、深さは25~50cmである。硬化面は確認できない。遺構北東隅に90×70cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面のほぼ中央に位置するが、燃烧室の

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第31図 S I 31遺構実測図 (1/60)・出土遺物実測図 (1/3)

浅い土坑とのみ確認できた。

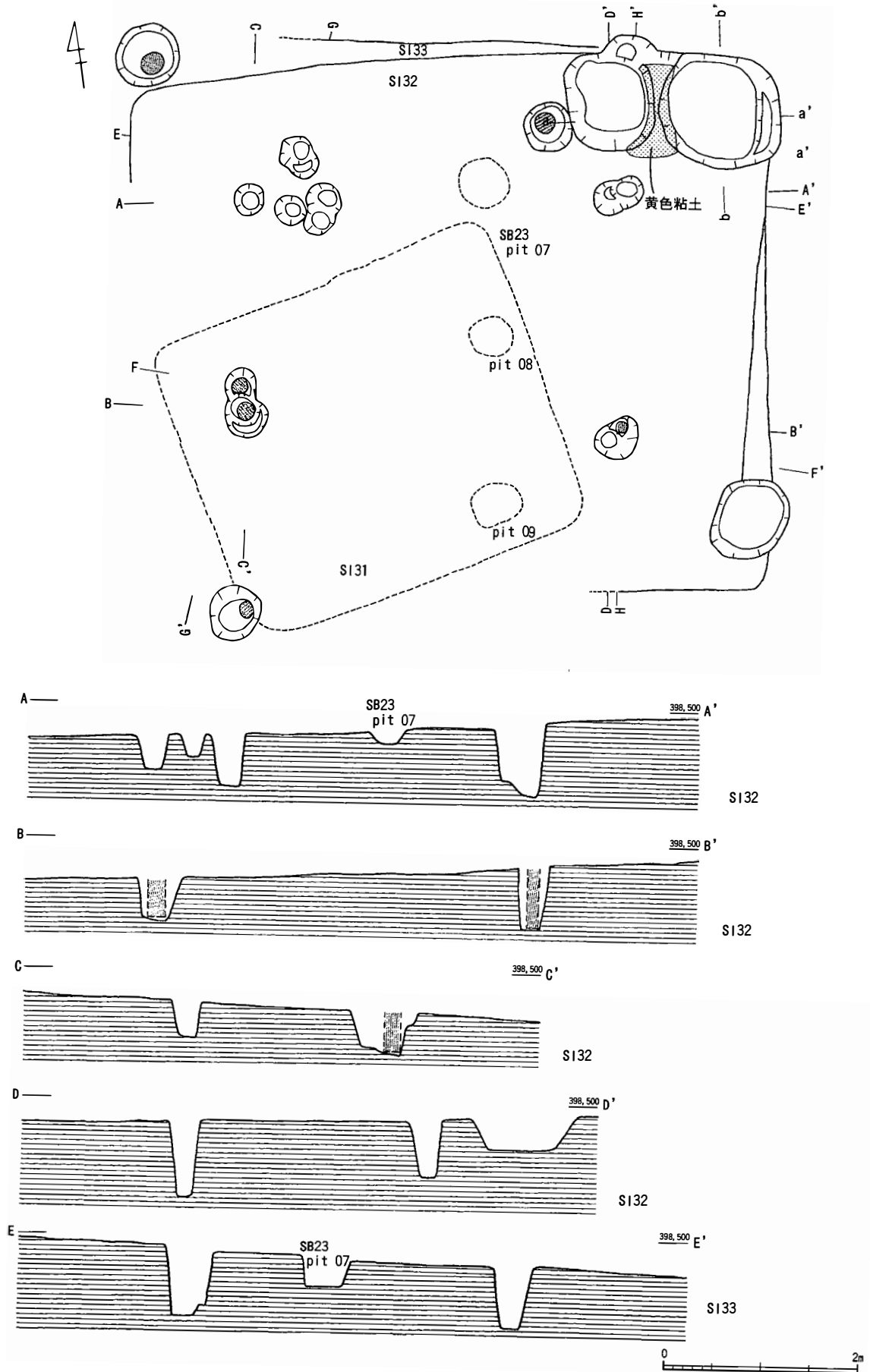
S I 31 (第31図)

【遺構】

II区西側 (E・F-9区) に位置する遺構で、S I 32、33を切っており、S B 23に切られている。長方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN12° Wである。

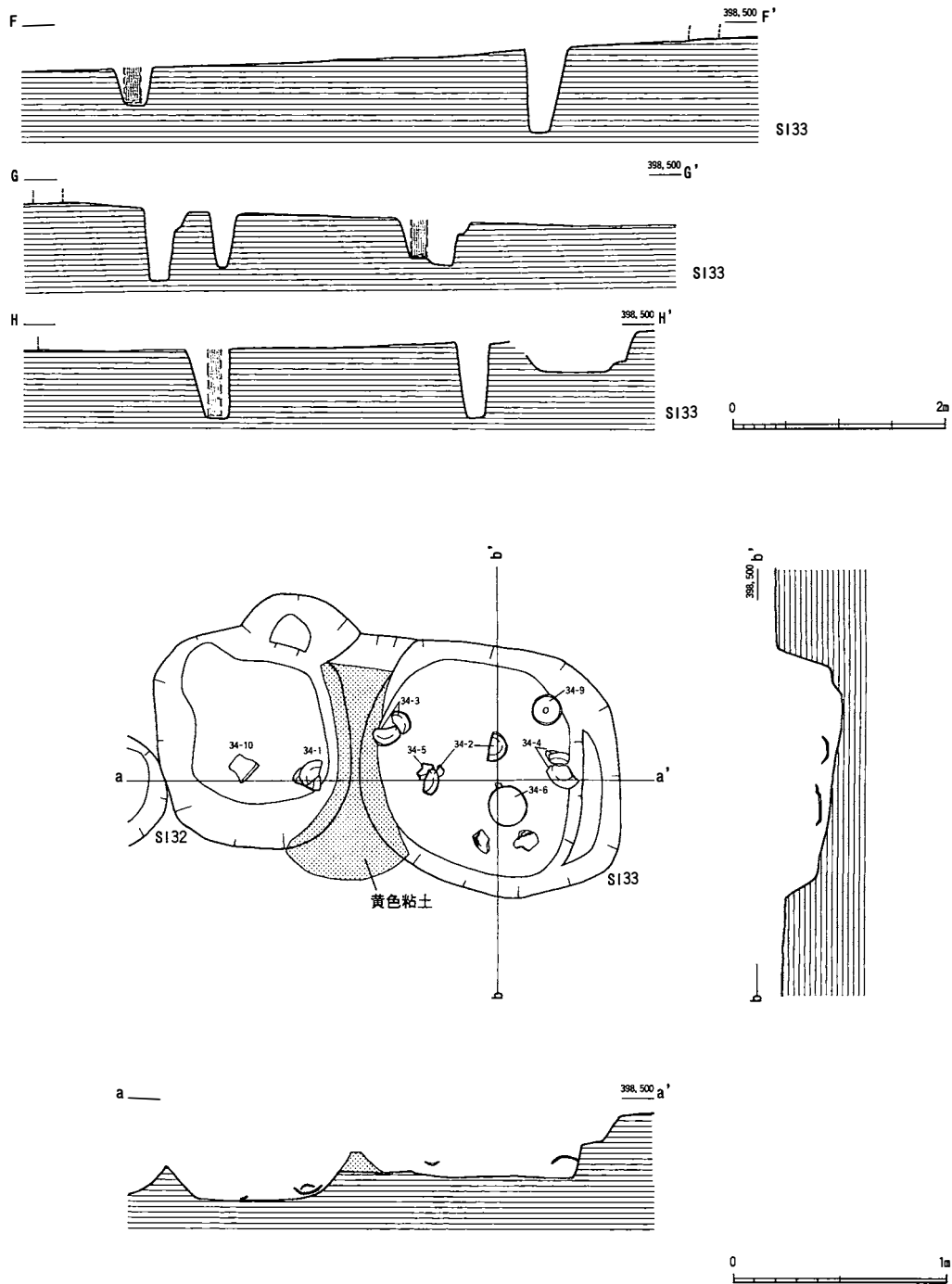
南北軸3.3m、東西軸3.8m。深さは7cmで、南西側は遺跡の傾斜に沿って削平を受けている。柱穴は4本で、直径は35~40cm、深さは50cmである。硬化面は竈周辺より東に延びる。遺構北東隅に100×100cmの貯蔵穴がある。

竈は北側壁面の東よりに位置し、黄色粘土の片側ソデを残しており、燃焼室の浅い土坑と焼土が確認できた。



第32図 S132、33遺構実測図① (1/60)

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第33図 S132、33遺構実測図② (1/60)・S132、33貯蔵穴実測図 (1/30)

【遺物】

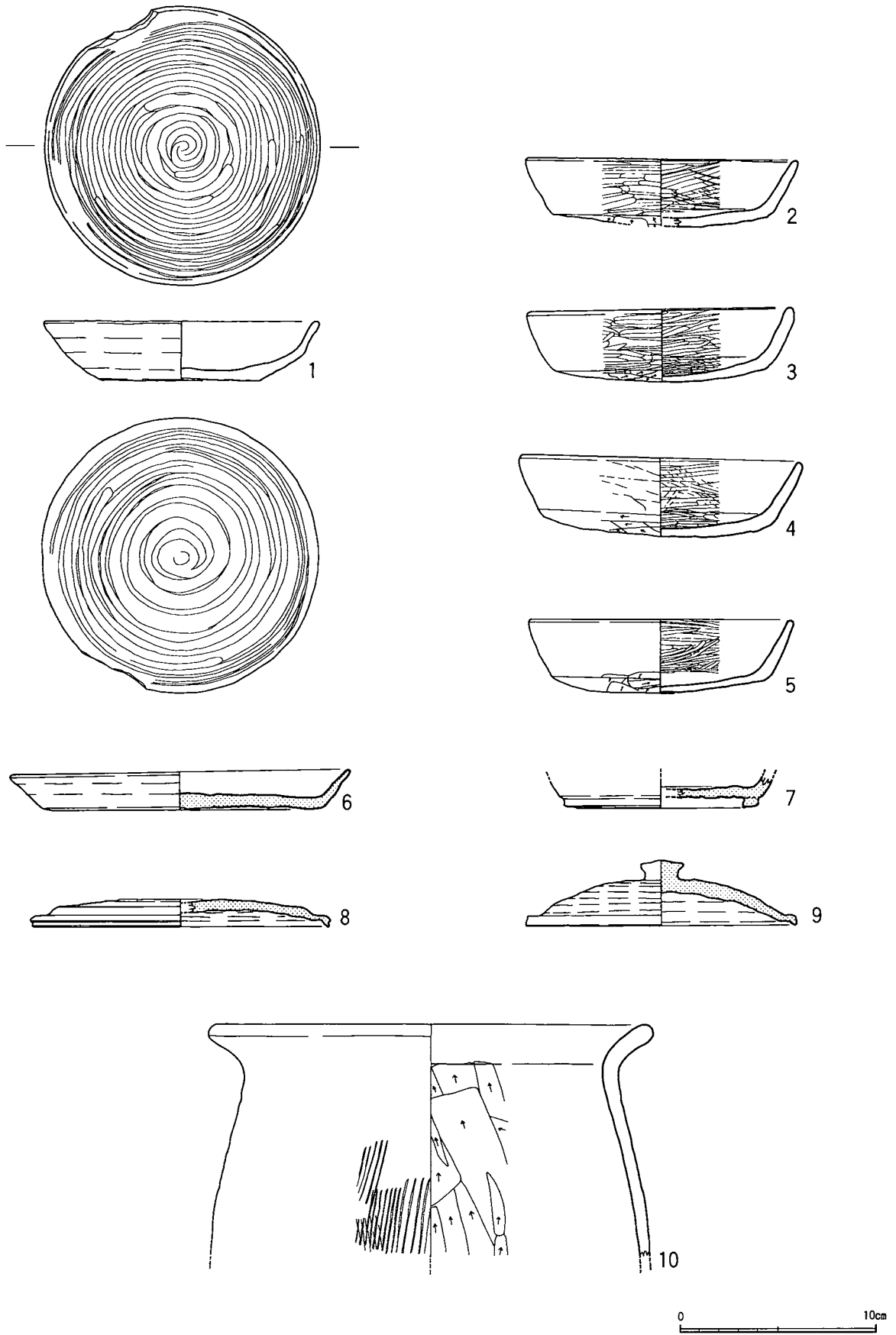
31-1 土師器甕。復原口径19.9cm。胎土は砂粒が多くやや粗い。口縁部は強く外折し、口縁部の張り出しは少ない。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部は縦方向にハケ目調整を行い、頸部外面はナデ調整を行う。色調はにぶい黄橙色。体部外面にはカーボンが付着する。

S132 (第32、33、34図)

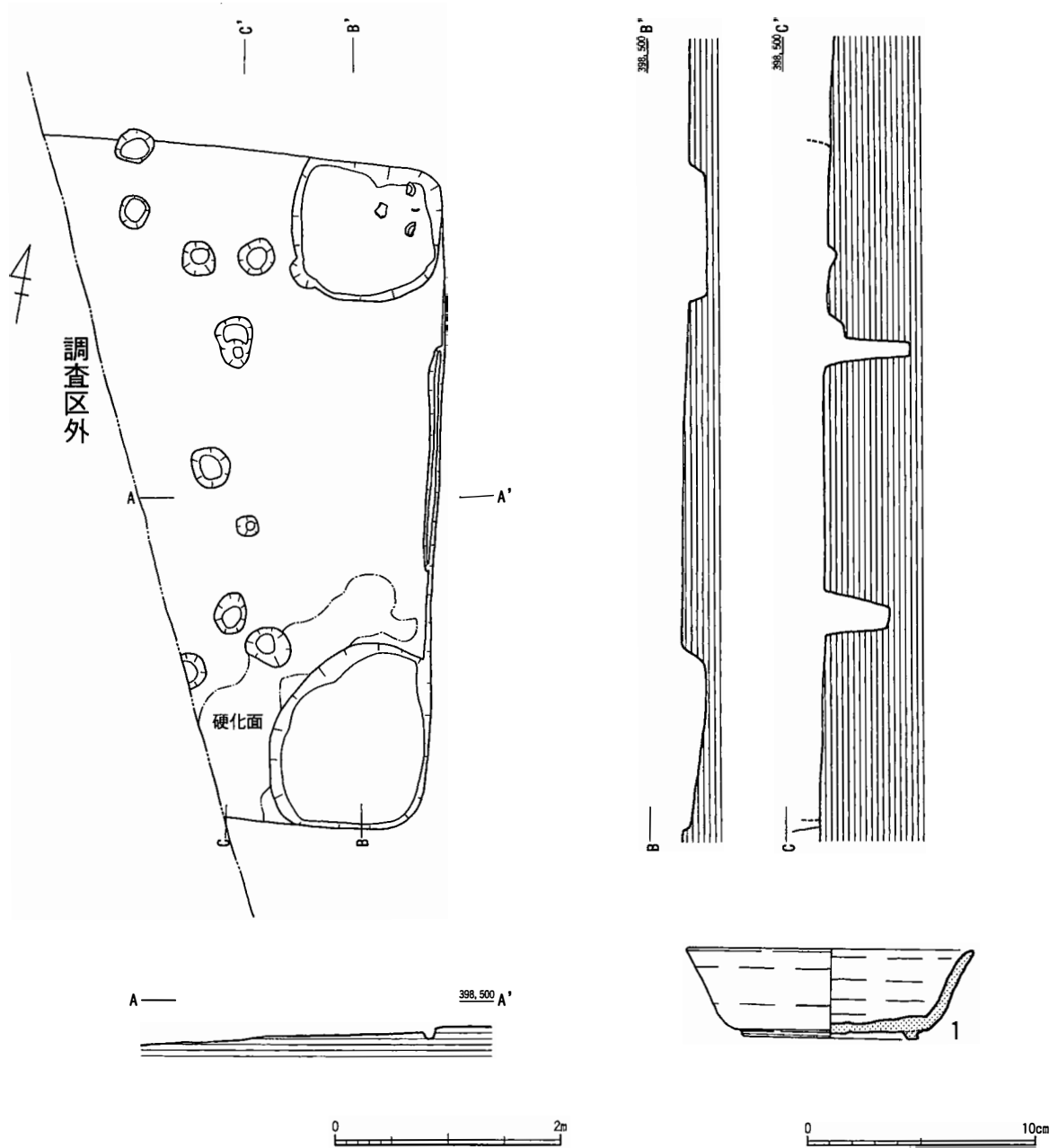
【遺構】

Ⅱ区西側 (E・F-9区) に位置する遺構で、S133を切り、S131とSB23に切られる。長方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN5°Eである。

南北軸5.5m、東西軸6.5m。深さは0cmで、全体に大きく削平を受けている。柱穴は4本で、直径は30~50cm、深さは45~60cmである。硬化面は明瞭に確認できない。遺構北東隅に2つの貯蔵穴があるが、



第34図 S132、33出土遺物実測図(1/3)



第35図 S I 34遺構実測図(1/60) 出土遺物実測図(1/3)

S I 32のものは西のものと思われる。サイズは90×100cm。貯蔵穴の西側には黄色粘土を張り付けて区画している。

竈は確認できなかった。

【遺物】

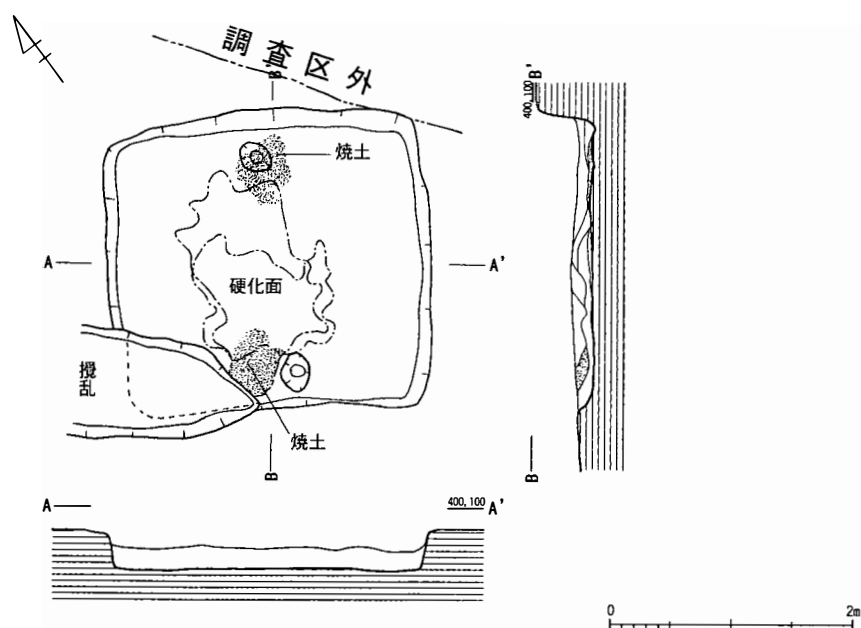
34-1 土師器坏。口径13.9cm。器高3.0cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なくキメ細かい。体部は緩く開き、中位で屈曲して直立気味になる。内外面とも回転ヘラ磨きで丁寧に仕上げる。色調は橙色。

34-2 土師器坏。口径13.8cm。器高3.4cm。底部はヘラ切りで、その後ヘラで横方向に調整。胎土は

砂粒が混じり、やや粗い。体部は直立気味にやや開く。内外面とも手持ちによるヘラ磨きで丁寧に仕上げる。色調は灰褐色。

34-3 土師器坏。口径13.5cm。器高3.5cm。底部はヘラ切りで、その後ヘラで横方向に調整。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。体部は直立気味にやや開く。内外面とも手持ちヘラ磨き調整。色調は橙色。

34-4 土師器坏。口径14.2cm。器高3.8cm。底部はヘラ切りで、その後ヘラで横方向に調整。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。体部は直立気味にやや開く。内外面とも手持ちヘラ磨き調整。色調は灰褐色。



第36図 S I 35遺構実測図 (1/60)

34-5 土師器坏。口径13.4cm。器高3.7cm。底部はヘラ切りで、その後ヘラで横方向に調整。胎土は砂粒が混じり、やや粗い。体部は直立気味にやや開く。外面はナデ調整、内面は手持ちヘラ磨き調整。色調は灰褐色。

34-6 須恵器盤。口径17.5cm。器高2.0cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるが細かい。体部は開く。内外面は回転ナデ調整で、見込みは横ナデを数回行う。色調は緑灰色。

34-7 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部の端に付き、外側を削る。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面は回転ナデ調整で、見込みは横ナデは行わない。色調は灰白色。

34-8 須恵器坏の蓋で完形品。復原口径15.2cm。器高1.3cm。胎土は砂粒が少なくキメが細かい。内外面ともロクロ目が付き、蓋上面はつまみを固定する窪みがある。蓋裏面は数回横ナデを行う。色調は灰白色。

34-9 須恵器坏の蓋で完形品。口径13.8cm。器高3.3cm。胎土は砂粒が少なくキメが細かい。内外面ともロクロ目が付き、蓋上面はつまみがある。色調は灰白色。

34-10 土師器甕。復原口径22.4cm。胎土は砂粒が多くやや粗い。口縁部は強く外反し、口縁部の張り出しは少ない。口縁部内面はナデ調整。体部内面は

斜め上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整を行い、頸部外面はナデ調整を行う。色調はにぶい黄橙色。

S I 33 (第32、33、34図)

【遺構】

Ⅱ区西側(E・F-9区)に位置する遺構で、S I 33、31、S B 23に切られる。正方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN14°Eである。

南北軸(5.0)m、東西軸(5.0)m。深さは0cmで、全体に大きく削平を受けている。柱穴は4本で、直径は30~40cm、深さは40~70cmである。硬化面は明瞭に確認できない。遺構北東隅には2つの貯蔵穴があるが、S I 33の貯蔵穴は東側のものと思われる。大きさは120×110cm。

竈は確認できなかった。

S I 34 (第35図)

【遺構】

Ⅱ区西側(E-9・10区)に位置する遺構で、切り合いはない。方形のプランを持つ住居で、遺構西側は調査区外になり主軸方位はN8°Wである。

南北軸5.8m、東西軸(3.0)m。深さは0cmで、全体に大きく削平を受けている。柱穴は4本と思われるが、2本しか確認できなかった。直径は25~30

cm、深さは55～75cmである。遺構南東隅の土坑付近に硬化面が確認できた。遺構北東隅に120×120cm、遺構南東隅に140×160cmの貯蔵穴がある。

竈は確認できなかった。

【遺物】

35-1 須恵器坏身。口径12.5cm。器高3.9cm。底部はヘラ切り。高台は内よりに付く。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面は回転ナデ調整で、見込みは1、2回横ナデを行う。色調は青灰色。

S I 35 (第36図)

【遺構】

II区中央(I-9区)に位置する遺構で、切りあいはない。長方形のプランを持つ住居で、主軸方位はN36°Eである。

南北軸2.4m、東西軸2.7m。深さは30cm。遺構に伴う柱穴は確認できなかった。遺構中央部に硬化面が南北に広がる。硬化面が2枚あり、同一プランで床を貼り、2時期に渡って使用されたものと思われる。

竈は確認できなかったが、遺構中央の北側と南側に焼土の堆積層があった。

3 掘立柱建物(SB)

3-1 遺構

SB01 (第37図)

I区西側(D-3区)に位置する遺構で、SB02を切っており、SB02を建て替えるように東にずれている。桁行、梁行ともに調査区外にかかるため不明。

柱間寸法は2.0m(6.7尺)の等間隔である。

柱穴は直径56cm、深さ60～80cmである。柱穴下端のレベルはほぼ一定である。

柱痕跡2つで確認でき、直径20～28cmである。

SB02 (第37図)

I区西側(D-3区)に位置する遺構で、SB01に切られている。桁行、梁行ともに調査区外にかかるため不明。

柱間寸法は2.0m(6.7尺)の等間隔である。

柱穴は直径56cm、深さ60～80cmである。柱穴下端

のレベルはほぼ一定である。

柱痕跡は3つで確認でき、直径20～28cmである。

SB03 (第37図)

I区西側(D・C-3・4区)に位置する遺構で、切り合い関係はない。桁行6.4m(約21.3尺)、梁行5.2m(約17.3尺)の4間×2間の東西棟建物で、桁行方向はE15°Sである。

柱間寸法は桁行約2.1m(約7尺)、梁行約2.7m(9尺)である。遺構南東隅の柱穴は削平されて消滅しているが、梁行は南側に開いている。

柱穴は直径28～44cm、深さ16～32cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。

柱穴に柱痕跡は確認できなかった。

SB04 (第38図)

I区西側(C-4・5区)に位置する遺構で、切り合い関係はない。遺構西側が調査区外となっているが、検出する限りでは桁行7.6m(約25.3尺)、梁行6.8m(約22.7尺)の(4)間×(3)間の東西棟建物で、桁行方向はE13°Sである。

柱間寸法は桁行1～5で1.7m(約5.7尺)+1.8m(6尺)+1.7m(約5.7尺)+2.4m(8尺)であり、柱穴間は不均等である。梁行8～5も2.4m(8尺)+2.4m(8尺)+2.0m(約6.7尺)で不均等である。

柱穴は直径72～80cm、深さ60～100cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。桁行方向は柱の立て替えがあり、南より北へずらしている。柱痕跡は7つで確認でき、直径は28～30cmである。

SB05 (第39、40図)

I区中央(C・D・E-4・5区)に位置する遺構で、重複している遺構はないが、S I 13と隣接している。桁行12.0m(40尺)、梁行6.8m(約22.7尺)の4間×2間東西南3面庇の東西棟建物で、桁行方向はE13°Sである。

柱間寸法は桁行1～9で2.1m(7尺)+1.8m(6尺)+1.8m(6尺)+2.3m(約7.7尺)である。桁行3～7では2.2m(約7.3尺)+1.8m(6尺)+1.8m(6尺)+2.4m(8尺)であり、両桁

行は不均等である。

一方、梁行1～3では2.6m(約8.7尺)の等間隔で、梁行9～7では2.6m(約8.7尺)+2.8m(9.3尺)であり、東北側にやや開いている。庇の張り出しは東方向へ約2.0m(約6.7尺)、西方向へ約2.2m(約7.3尺)、南方向へ約1.6m(約5.3尺)である。

柱穴は直径60～80cm、深さ30～100cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。柱痕跡は大部分が確認でき、直径は25～30cmである。

S B 06 (第41図)

I区南側(C-5区)に位置する遺構で、他の遺構と重複はしない。桁行4.2m(14尺)、梁行3.5m(約11.7尺)の2間×2間の東西棟建物で、桁行方向はE15°Sである。

柱間寸法は桁行3～5で2.1m(7尺)の等間隔、桁行1～7では1.9m(約6.3尺)+2.2m(約7.3m)である。梁行1～3、7～5は1.8m(6尺)+1.7m(約5.7尺)で、両梁行は均等である。

柱穴は直径60～70cm、深さ50～90cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。同じ柱穴を利用して立て替えを行ったようで、柱穴内に柱痕跡を2つ確認できるものもあった。

柱痕跡は全ての柱穴で確認でき、直径は24～28cmである。

S B 07 (第42図)

I区中央(D・E-5・6区)に位置する遺構で、S I 15を切っている。桁行7.0m(約23.3尺)、梁行4.4m(約14.7尺)の3間×2間の東西棟建物で、桁行方向はE20°Sである。

柱間寸法は桁行3～6で2.3m(約7.7尺)の等間隔で、桁行1～8では2.3m(約7.7尺)+2.6m(約8.7尺)+2.1m(7尺)である。梁行1～3、8～6はそれぞれ2.1m(7尺)+2.3m(約7.7尺)である。

柱穴は直径32～60cm、深さ20～36cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列は1がはずれるが、他はほぼ直線に整列する。梁行が傾き、いび

つな形になっている。

柱痕跡は6つの柱穴で確認でき、直径は約18cmである。

S B 08 (第43図)

I区中央(E・F-4・5区)に位置する遺構で、他の遺構との重複はない。桁行6.5m(約21.7尺)、梁行5.0m(約16.7尺)の3間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN27°Eである。

柱間寸法は桁行3～6で2.1m(7尺)+1.9m(6.3尺)+2.4m(8尺)、桁行1～8では2.1m(7尺)+2.3m(約7.7尺)である。梁行1～3は2.6m(8.7尺)+2.4m(8尺)で、北東隅の柱穴が削平されているが、7～6は2.7m(9尺)である。

柱穴は直径22～52cm、深さ20～40cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する

柱痕跡は6つの柱穴で確認でき、直径は14～24cmである。

S B 09 (第44図)

I区南側(B・C-6区)に位置する遺構で、S X 01を切っている。桁行5.0m(約16.7尺)、梁行3.1m(約10.3尺)の2間×2間の南北棟総柱建物で、桁行方向はN12°Eである。

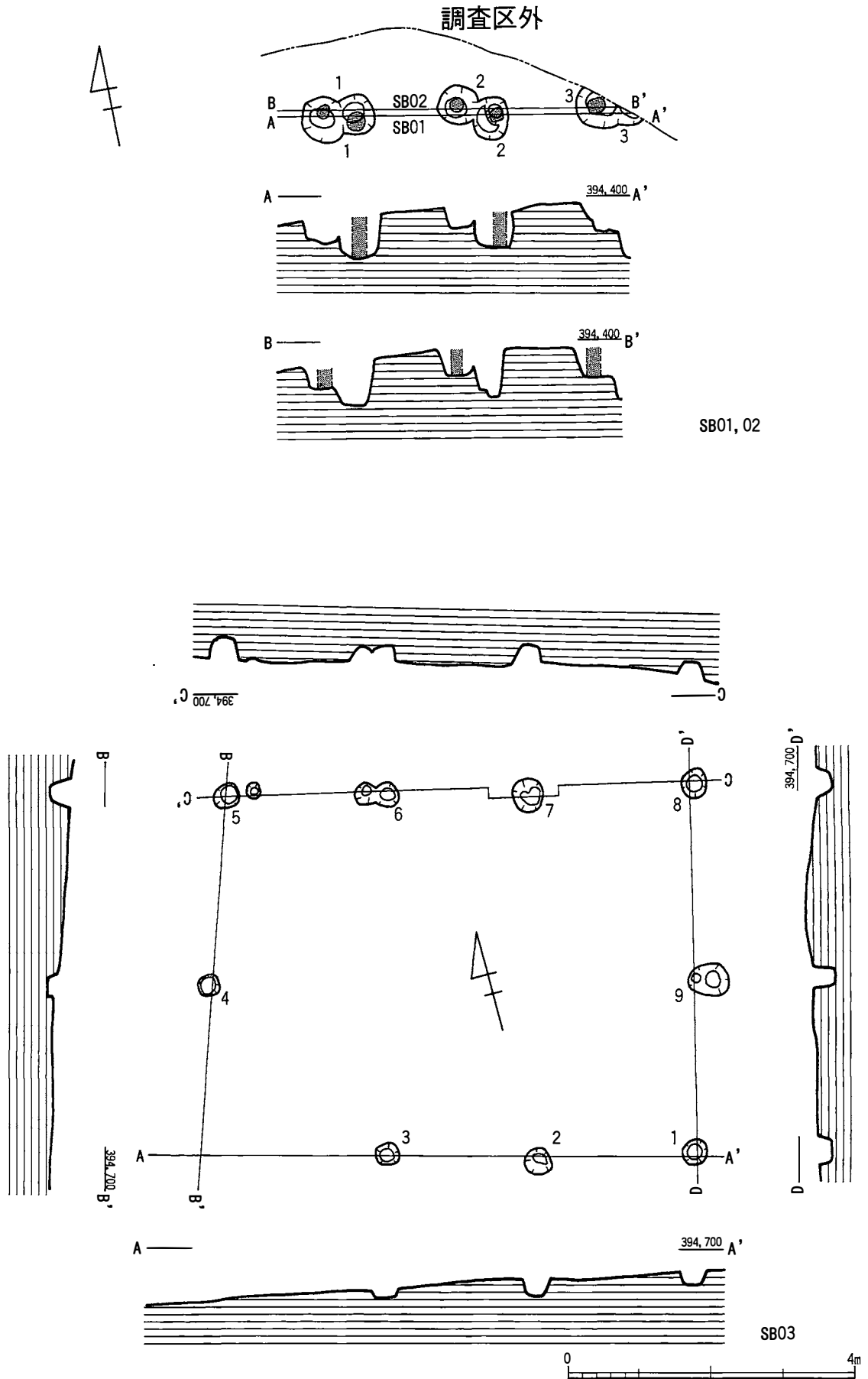
柱間寸法は桁行1～7で2.1m(7尺)+2.3m(約7.7尺)、桁行3～9では2.5m(約8.3尺)+2.3m(約7.7尺)である。桁行は西方向に開き、桁行は不均衡である。梁行3～1は1.5m(5尺)+1.6m(約5.3尺)で、他の梁行も同様ある。

柱穴は直径20～30cm、深さ12～40cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する

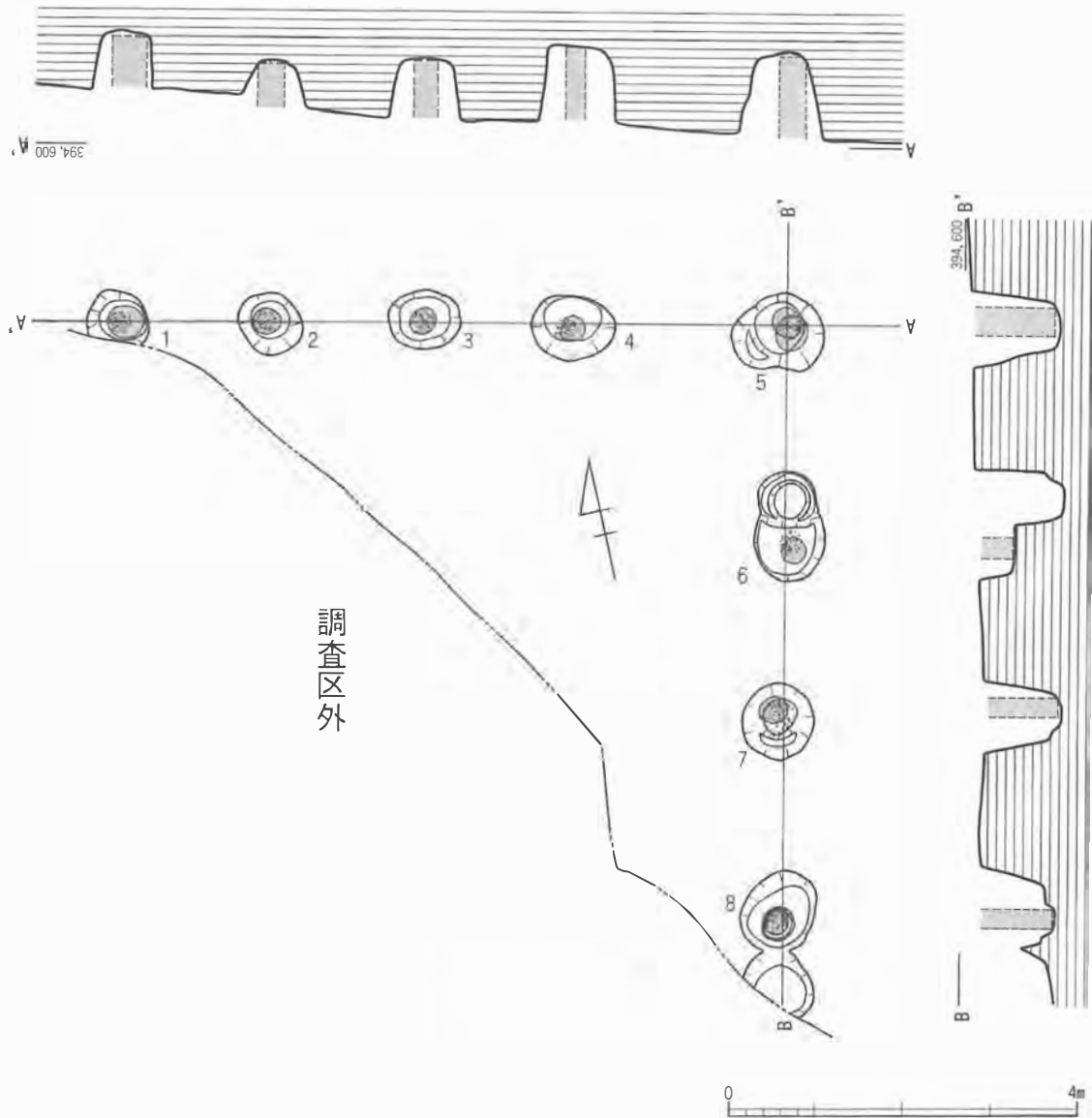
柱痕跡は確認できなかった。

S B 10 (第45図)

II区西側(F・G-8・9区)に位置する遺構で、他の遺構との重複はない。桁行11.4m(38尺)、梁行6.5m(約21.7尺)の5間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN3°Eである。



第37図 S B01、02、03遺構実測図 (1/80)



第38図 S B04遺構実測図 (1/80)

柱間寸法は桁行3～8で2.3m(約7.7尺)+2.4m(8尺)+2.1m(7尺)+2.2m(約7.3尺)+2.4m(8尺)、桁行1～10では2.3m(約7.7尺)+2.2m(約7.3尺)+2.2(約7.3尺)+2.4m(8尺)+2.3m(約7.7尺)である。梁行3～1は3.2m(約10.7尺)+3.3m(11尺)で、8～10も同様である。

柱穴は直径50～60cm、深さ20～65cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する

柱痕跡は全ての柱穴で確認でき、直径は20～24cmである。

S B11 (第46図)

Ⅱ区西側(H-7・8区)に位置する遺構で、S

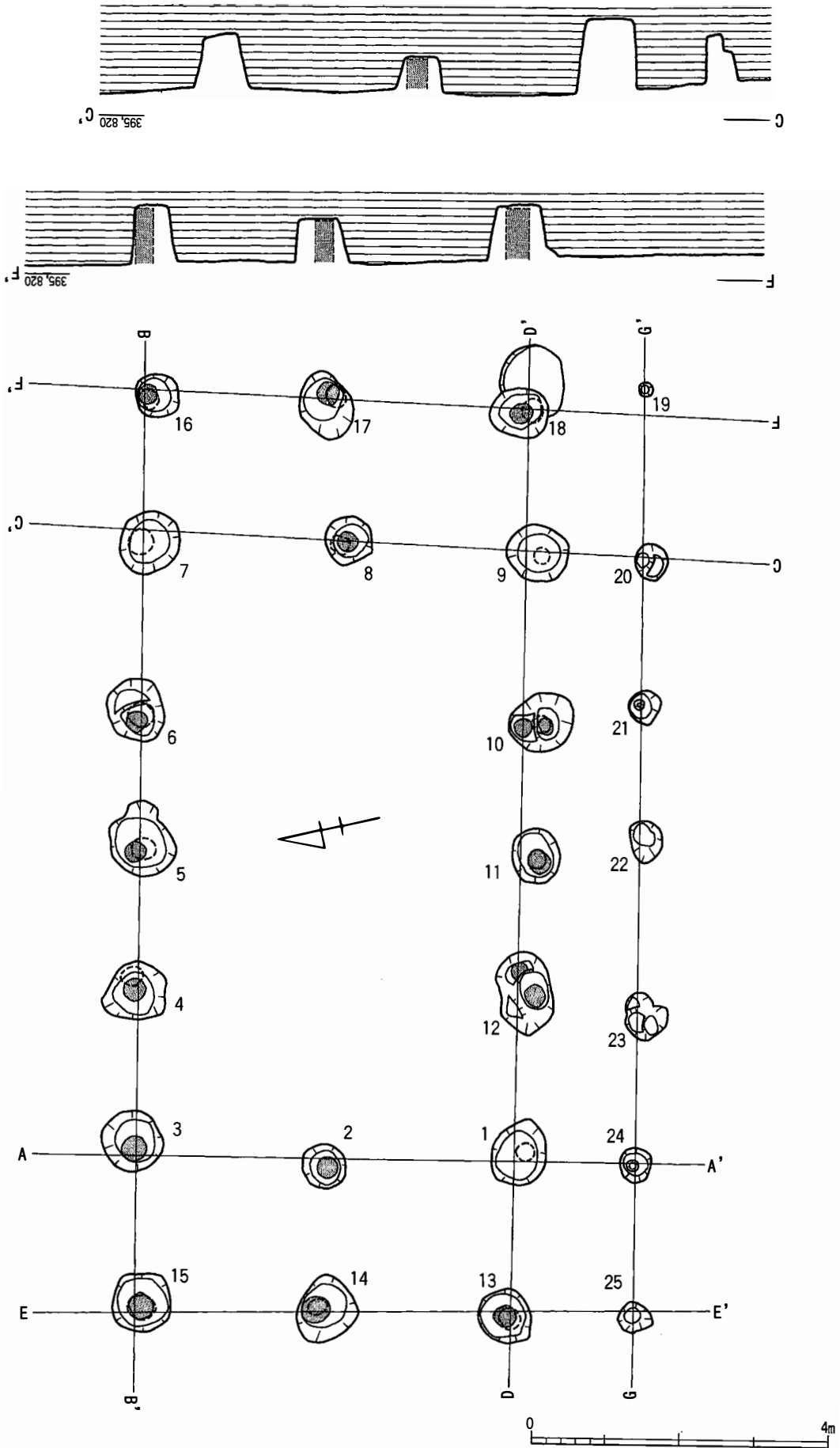
I 28を切っている。桁行6.5m(約21.7尺)、梁行4.6m(約15.3尺)の3間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN 2° Eである。

柱間寸法は桁行4～1で2.3m(約7.7尺)+1.9m(約6.3尺)+2.4m(8尺)、桁行6～9では2.1m(7尺)+2.0m(約6.7尺)+2.1(7尺)である。梁行6～4は2.4m(8尺)+2.2m(約7.3尺)で、9～1は2.3m(約7.7尺)の等間隔である。

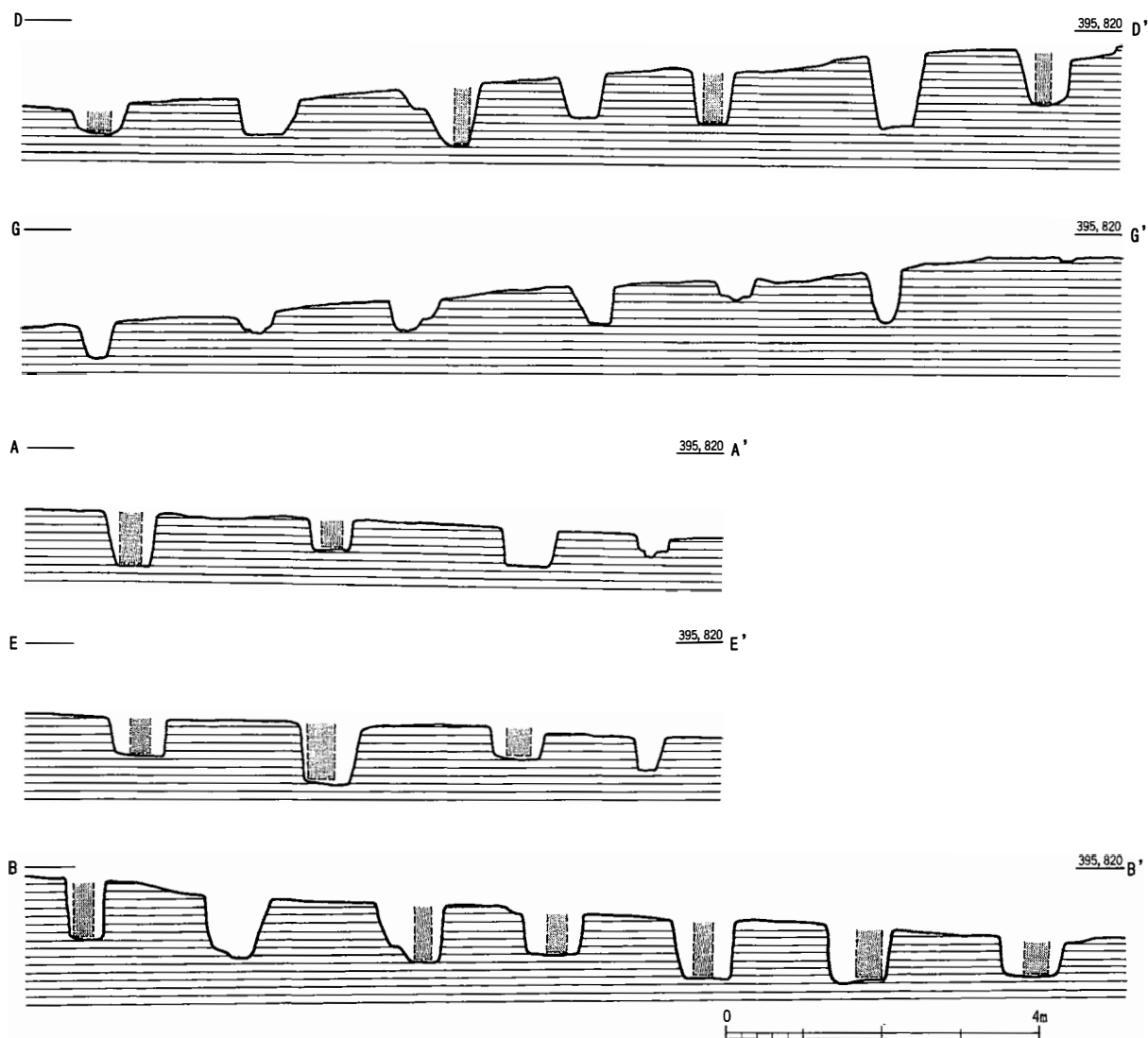
柱穴は直径36～40cm、深さ16～36cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する

柱痕跡は8個の柱穴で確認でき、直径は約16cmである。

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第39図 SB05遺構実測図① (1/80)



第40図 SB05遺構実測図② (1/80)

SB12 (第47図)

Ⅱ区西側 (F-7・8区) に位置する遺構で、他の遺構との重複はない。遺構の西側が調査区外となっているが、検出をする限りでは、桁行8.8m (約29.3尺)、梁行5.2m (約17.3尺) の5間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN2°Eである。

柱間寸法は桁行6~1で1.6m (約5.3尺) + 1.8m (6尺) + 2.0m (約6.7尺) + 1.8m (6尺) + 1.6m (約5.3尺)、梁行4~6では2.7m (9尺) + 2.6m (約8.7尺) である。

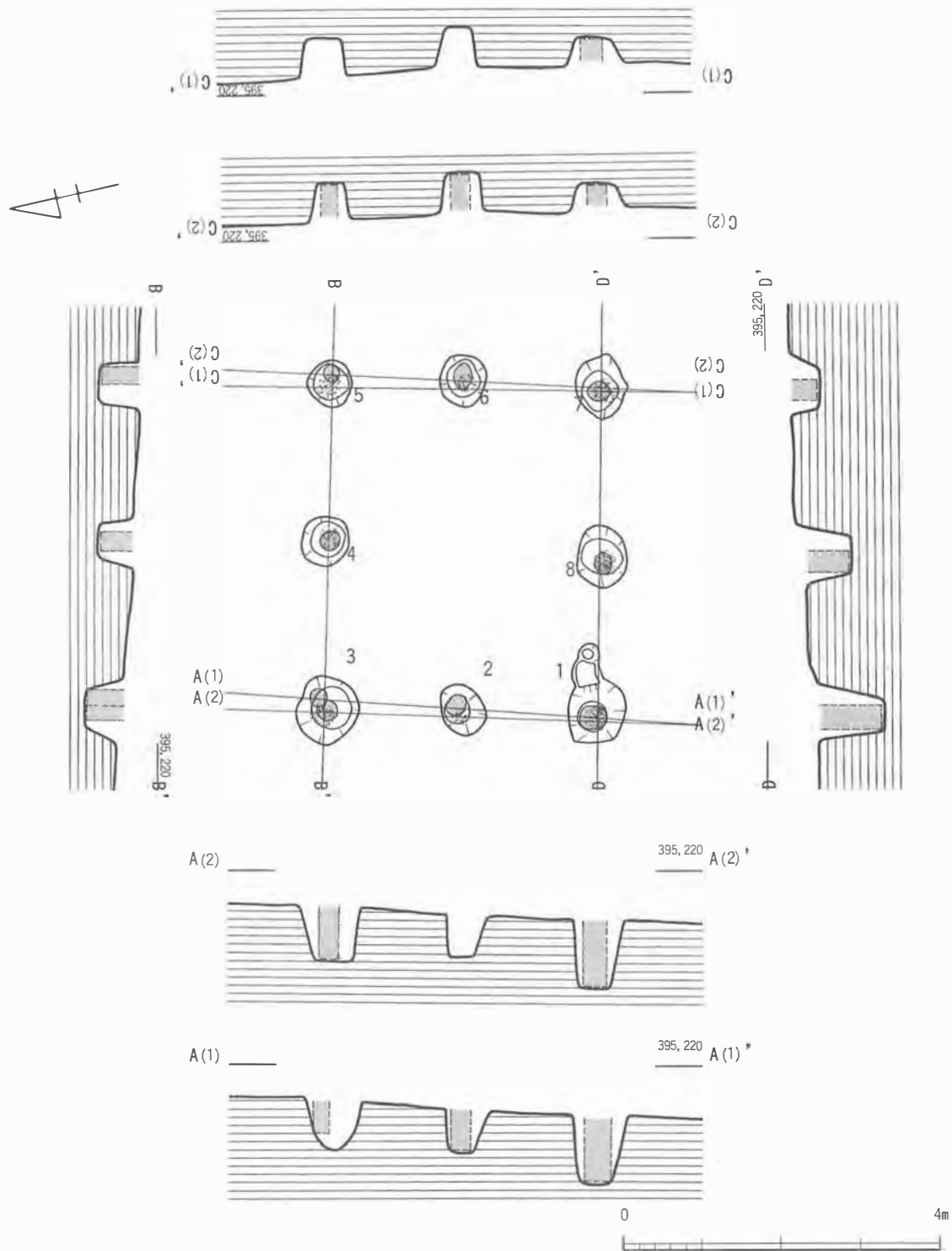
柱穴は直径56~60cm、深さ24~56cm である。柱穴

の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列するが、それぞれの柱穴に立て替えの痕跡があり、柱穴2において柱穴を南にずらしている。

柱痕跡は8個の柱穴で確認でき、直径は約14~24cm である。

SB13 (第48図)

Ⅱ区南側 (E・F-9・10区) に位置する遺構で、他の遺構との重複はない。桁行5.4m (18尺)、梁行3.8m (約12.7尺) の3間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN10°Eである。



第41図 SB06遺構実測図 (1/80)

柱間寸法は桁行3～6で1.6m (約5.3尺) + 2.0m (約6.7尺) + 1.8m (6尺)、桁行1～8では1.6m (約5.3尺) + 2.1m (7尺) + 1.7m (約5.7尺) である。梁行3～1では1.9m (約6.3尺) の等間隔で、6～8は1.9m (約6.3尺) + 2.3m (約7.7尺) であり、北に開いている。

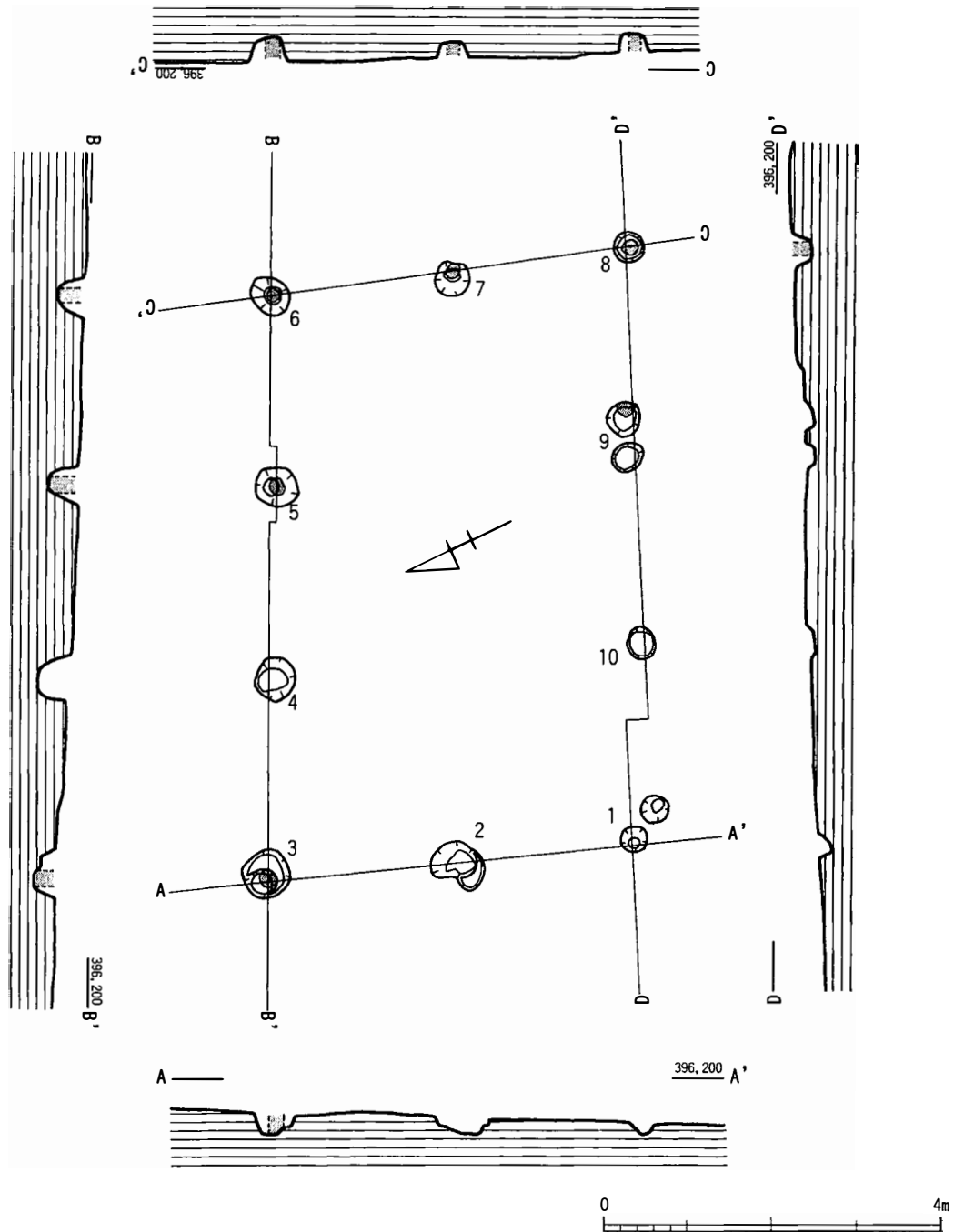
柱穴は直径50～60cm、深さ12～44cmである。柱穴

の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は5個の柱穴で確認でき、直径は約18～24cmである。

SB14 (第49図)

Ⅱ区中央 (F・G-9・10区) に位置する遺構で、



第42図 SB07遺構実測図 (1/80)

他の遺構との重複はない。桁行7.7m (約25.7尺)、梁行4.0m (約13.3尺) の4間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN 6° Eである。

柱間寸法は桁行 3～7 で1.8m (6尺) +1.9m (約6.3尺) +2.0m (約6.7尺) +2.0m (約6.7尺)、桁行 1～9 では1.7m (約5.7尺) +1.7m (約5.7尺) +1.9m (約6.3尺) +2.4m (8尺) である。梁行 3～1 では1.9m (約6.3尺) +2.1m (7尺)、梁行 7～9 は2.0m (約6.7尺) の等間隔である。

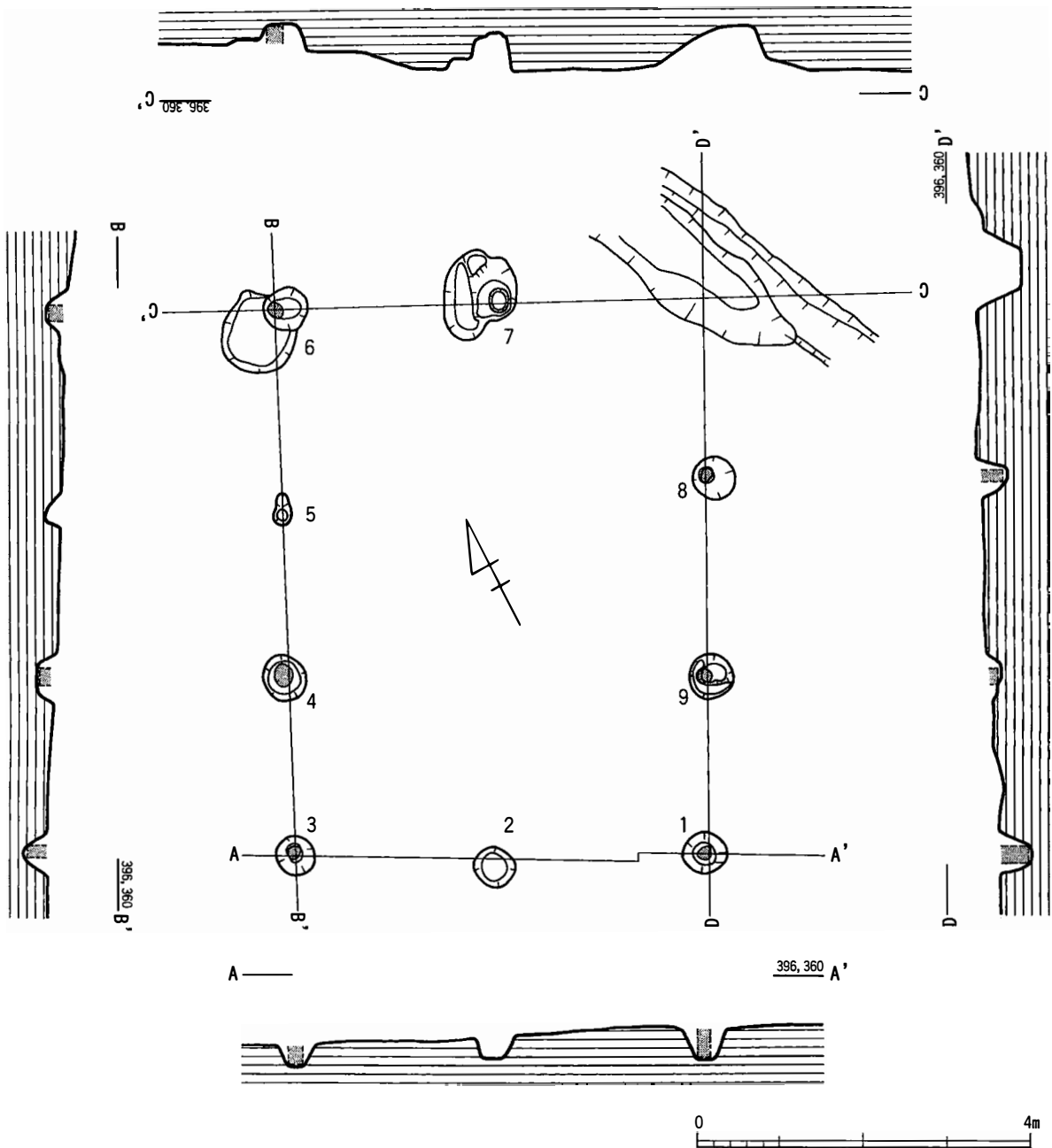
柱穴は直径40～44cm、深さ12～32cm である。柱穴

の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は8個の柱穴で確認でき、直径は約16cm である。

SB15 (第50図)

Ⅱ区中央 (F・G-10・11区) に位置する遺構で、他の遺構との重複はない。遺構南側が調査区外となっているため遺構の全容は不明であるが、検出する限りでは、桁行8.4m (28尺)、梁行6.2m (約20.7尺)



第43図 SB08遺構実測図 (1/80)

の4間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN7°E である。
である。

柱間寸法は桁行1～5で1.9m (約6.3尺) + 2.3m (約7.7尺) + 2.1m (7尺) + 2.1m (7尺)、桁行9～7では1.9m (約6.3尺) + 2.2m (約7.3尺) である。梁行5～7は3.0m (10尺) + 3.2m (10.7尺) である。

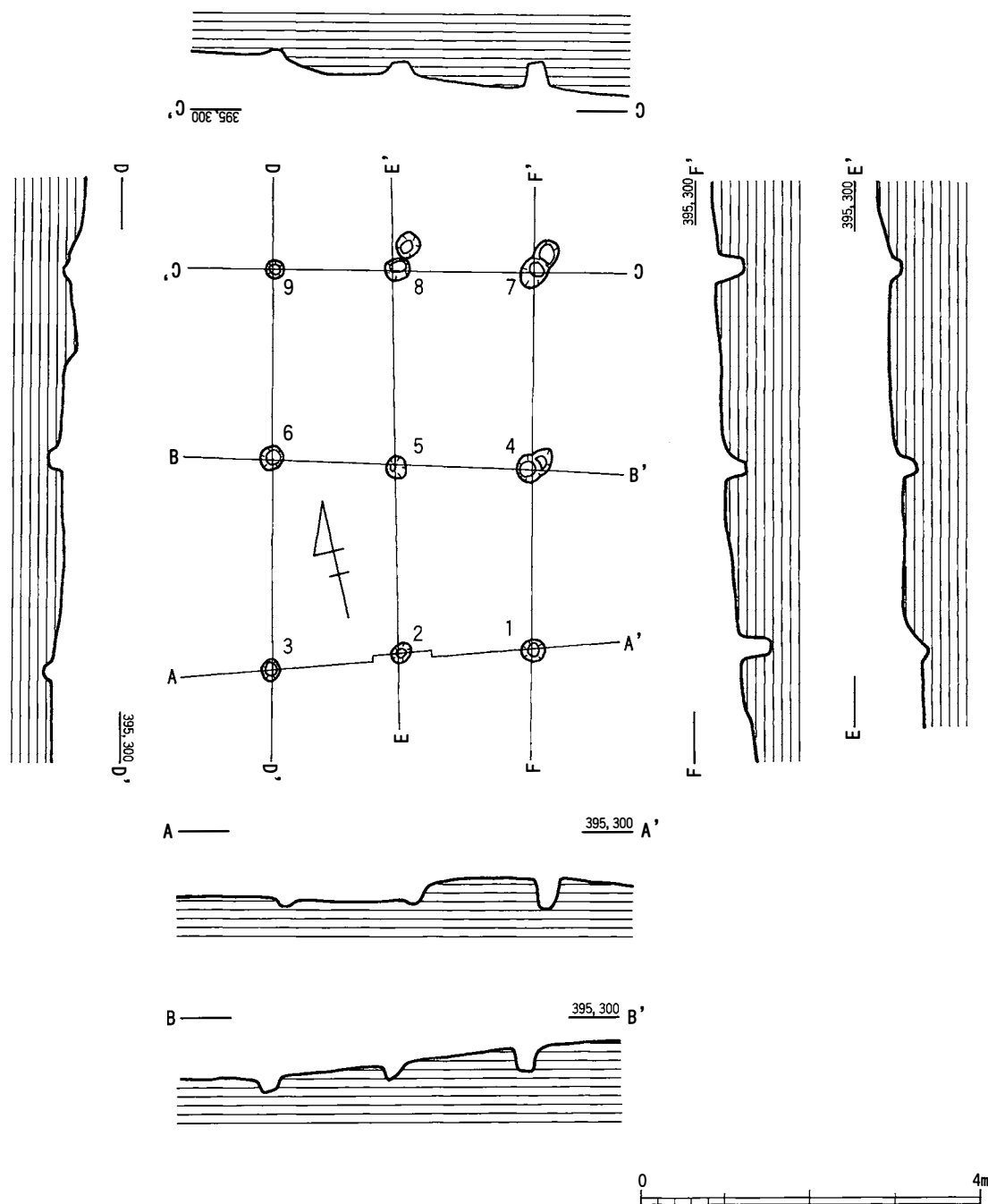
柱穴は直径30～44cm、深さ12～20cm である。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は8個の柱穴で確認でき、直径は約20cmで

SB16 (第51図)

Ⅱ区中央 (H-10・11区) に位置する遺構で、他の遺構との重複はない。桁行6.5m (21.7尺)、梁行3.8m (約12.6尺) の3間×2間の東面庇東西棟建物で、桁行方向はE23°S である。

柱間寸法は桁行3～6で2.2m (約7.3尺) + 2.3m (約7.7尺) + 2.0m (約6.7尺)、桁行1～8では2.2m (約7.3尺) + 2.2m (約7.3尺) + 2.3m (約7.7尺) である。梁行3～1は2.3m (約7.7尺) +



第44図 SB09遺構実測図 (1/80)

1.7m (約5.7尺)、梁行 1 ~ 8 は2.2m (約7.7尺) + 2.2m (約7.3尺) + 2.3m (約7.7尺) である。

柱穴は直径24~36cm、深さ16~36cm である。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は 2 個の柱穴で確認でき、直径は約12cm である。

SB17 (第52図)

I 区南側 (B・C-6 区) に位置する遺構で、他

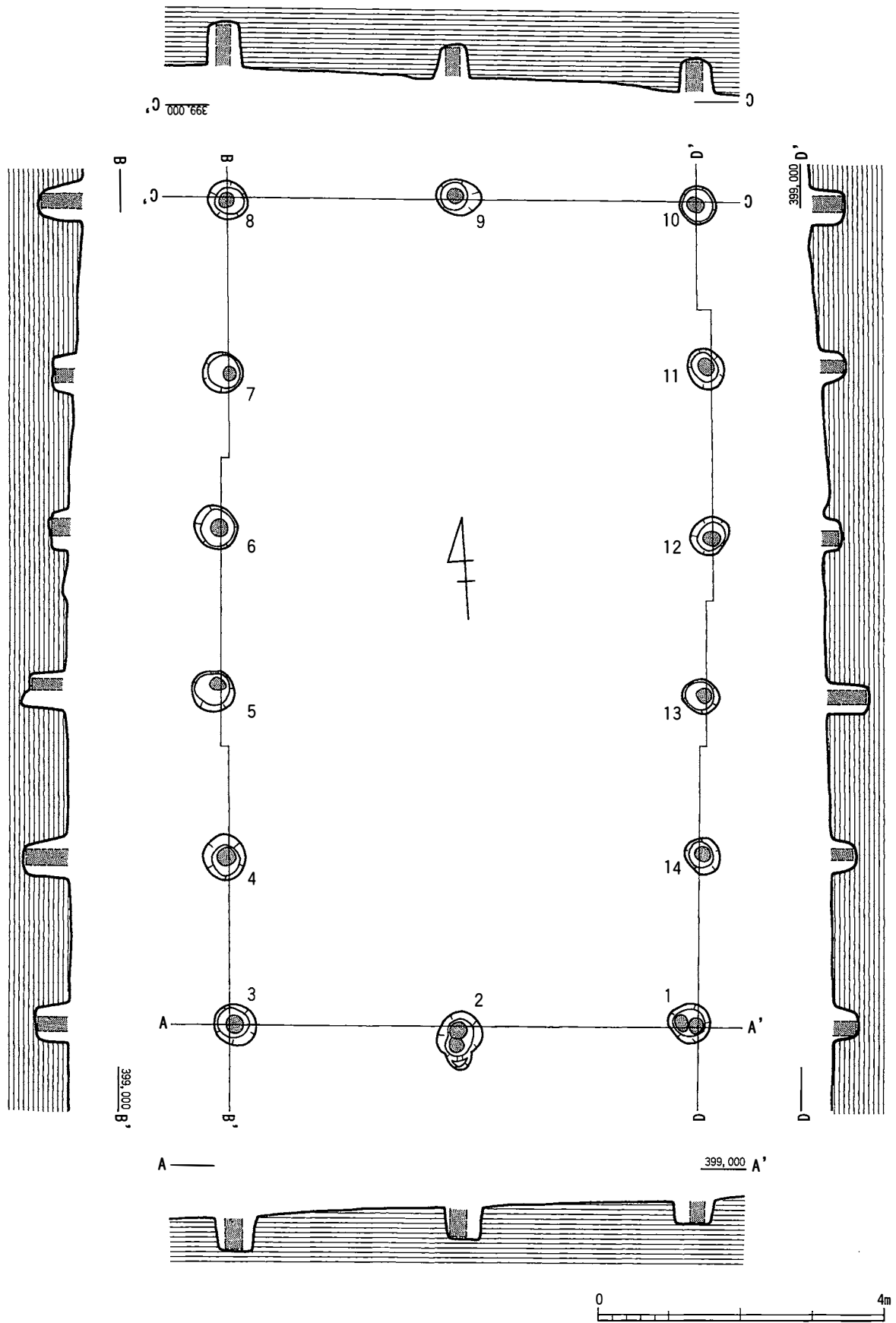
の遺構との重複はない。遺構の大部分が調査区外になり、柱列のみの検出となった。

柱間寸法は 3 ~ 1 で1.7m (約5.7尺) + 1.8m (6尺) である。

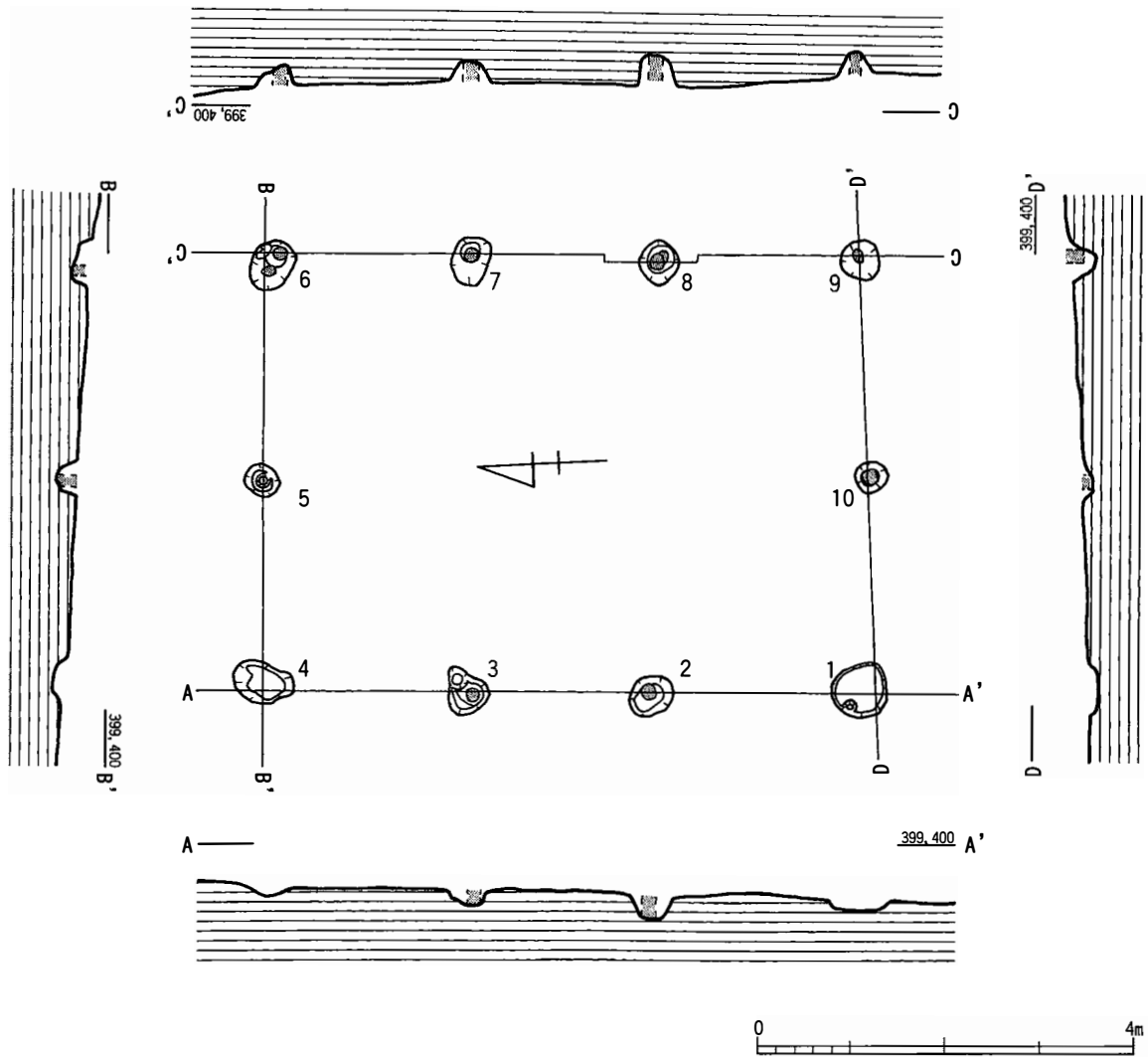
柱穴は直径約80~120cm、深さ約90cm である。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は全ての柱穴で確認でき、直径は約28cm である。

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第45図 S B10遺構実測図 (1/80)



第46図 SB11遺構実測図 (1/80)

SB18 (第53図)

I区東側(E・F-6・7区)に位置する遺構で、他の遺構との重複はない。総柱建物で、桁・梁の方向は不明。南北軸3.8m(12.7尺)、東西軸3.8m(約12.7尺)の2間×2間の総柱建物で、南北軸は桁行方向はN5°Eである。

柱間寸法は南北軸1~7で2.0m(約6.7尺)+1.8m(7尺)で、3~9では2.1m(7尺)の等間隔であり、西へ開いている。一方、東西軸3~1で1.8m(6尺)+2.0m(約6.7尺)で、9~7では2.0m(約6.7尺)の等間隔であり、北側へ開いている。

柱穴は直径26~40cm、深さ24~44cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は確認できなかった。

SB19 (第53図)

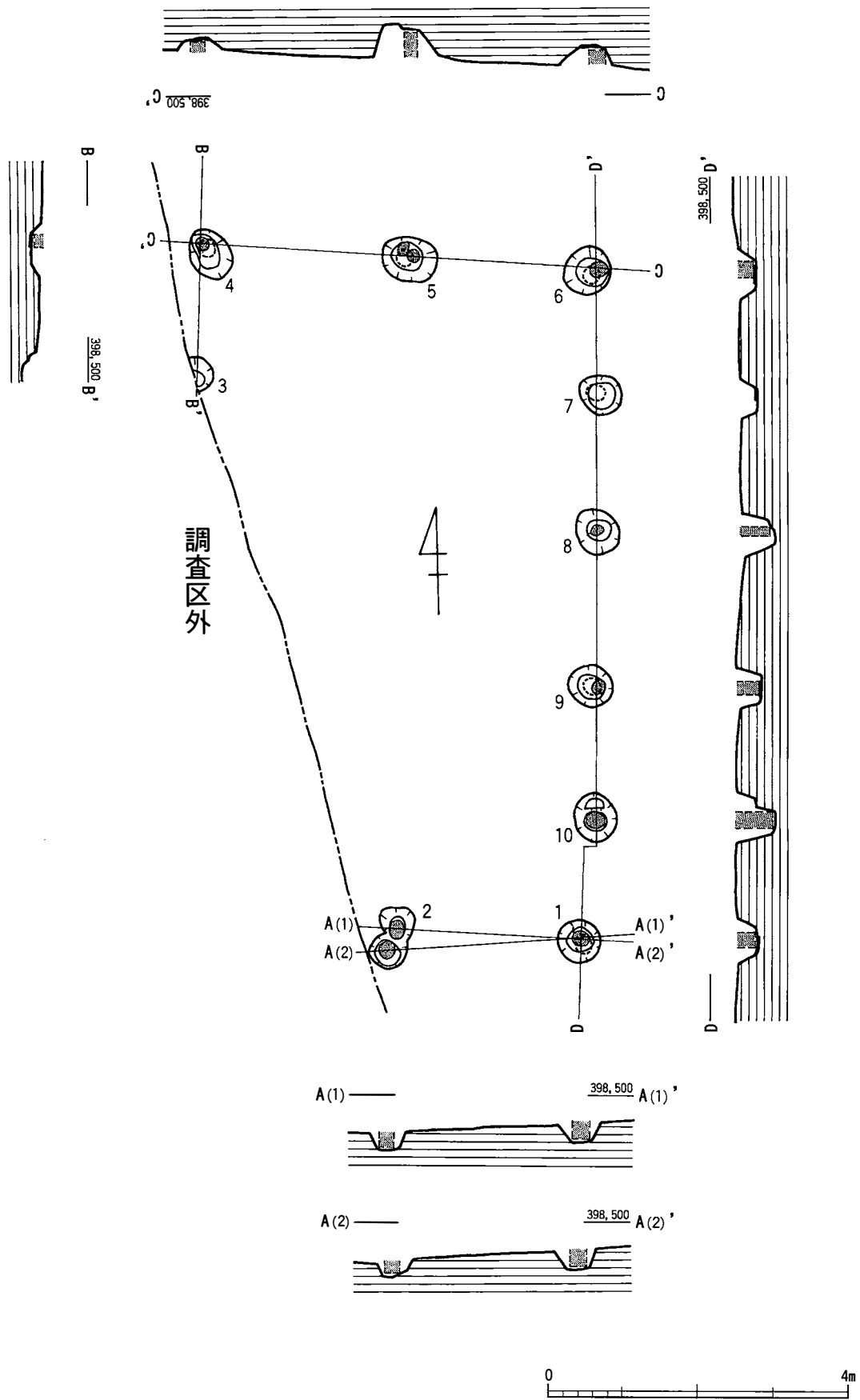
I区東側(E・F-5・6区)に位置する遺構で、SI09、10、11、12と重複している。桁行7.2m(24尺)、梁行5.5m(約18.3尺)の3間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN5°Eである。

柱間寸法は桁行1~7で2.6m(約8.7尺)+2.2m(約7.3尺)+2.4m(8尺)、桁行3~5では2.3m(約7.7尺)+2.8m(約9.3尺)で、遺構南東隅は削平されていて柱間隔は不明である。梁行5~7は2.7m(9尺)+2.8m(約9.3尺)、梁行2~1は3.5m(約11.6尺)である。

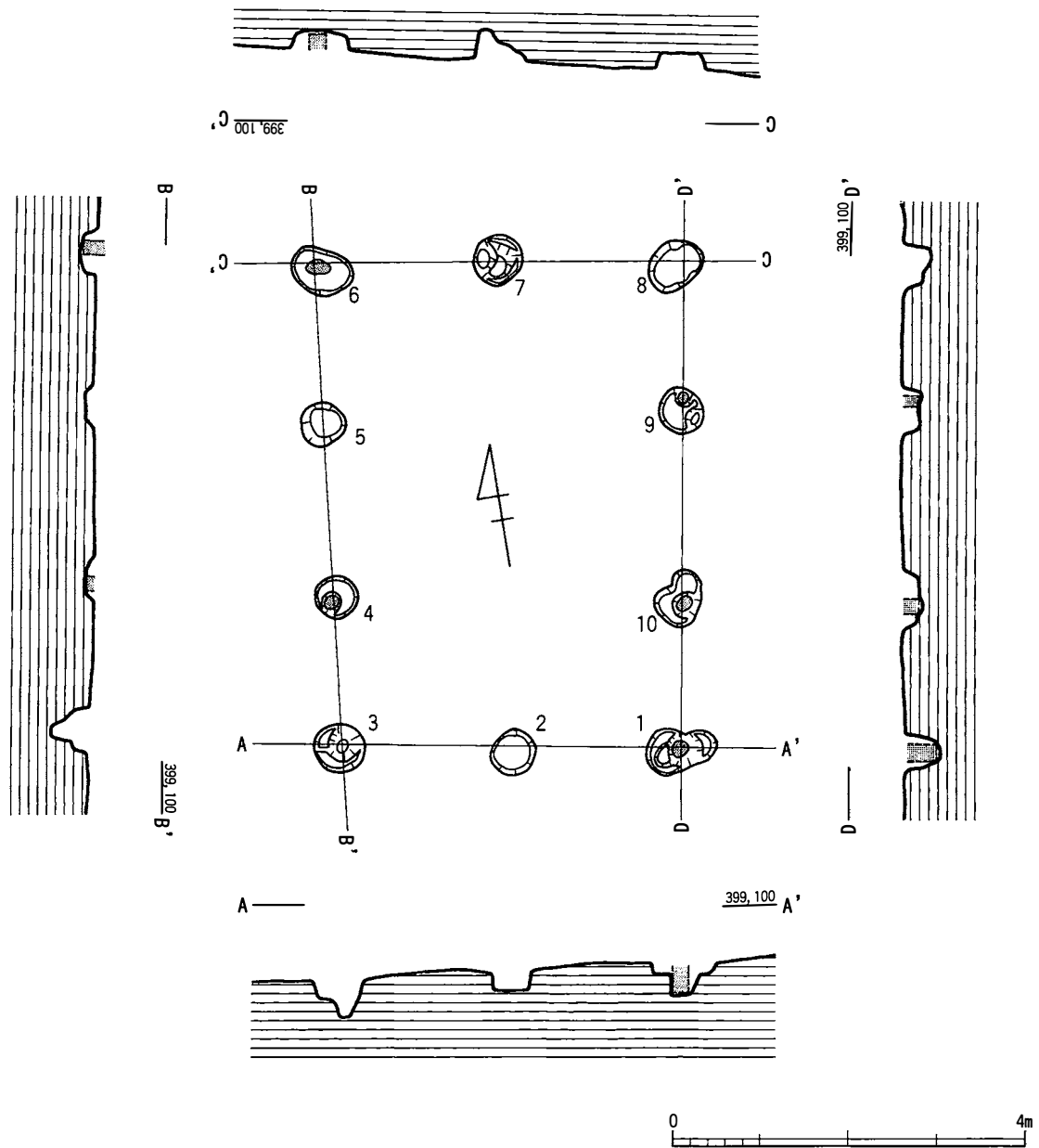
柱穴は直径20~40cm、深さ20~40cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は確認できなかった。

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第47図 SB12遺構実測図 (1/80)



第48図 SB13遺構実測図 (1/80)

SB20 (第54、55図)

Ⅱ区西側 (H・I-5・6区) に位置する遺構で、S I 20、22、29、SB21と重複している。SB21に切れ、各S Iを切っている。桁行6.5m (約21.7尺)、梁行5.0m (約16.7尺) の3間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN10° Eである。

柱間寸法は桁行3~6、1~8ともに2.0m (約6.7尺) +2.5m (約8.3尺) +2.3m (約7.7尺) である。梁行3~1、6~8はともに2.5m (約8.3尺) の等間隔である。

柱穴は直径40~56cm、深さ60~80cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に

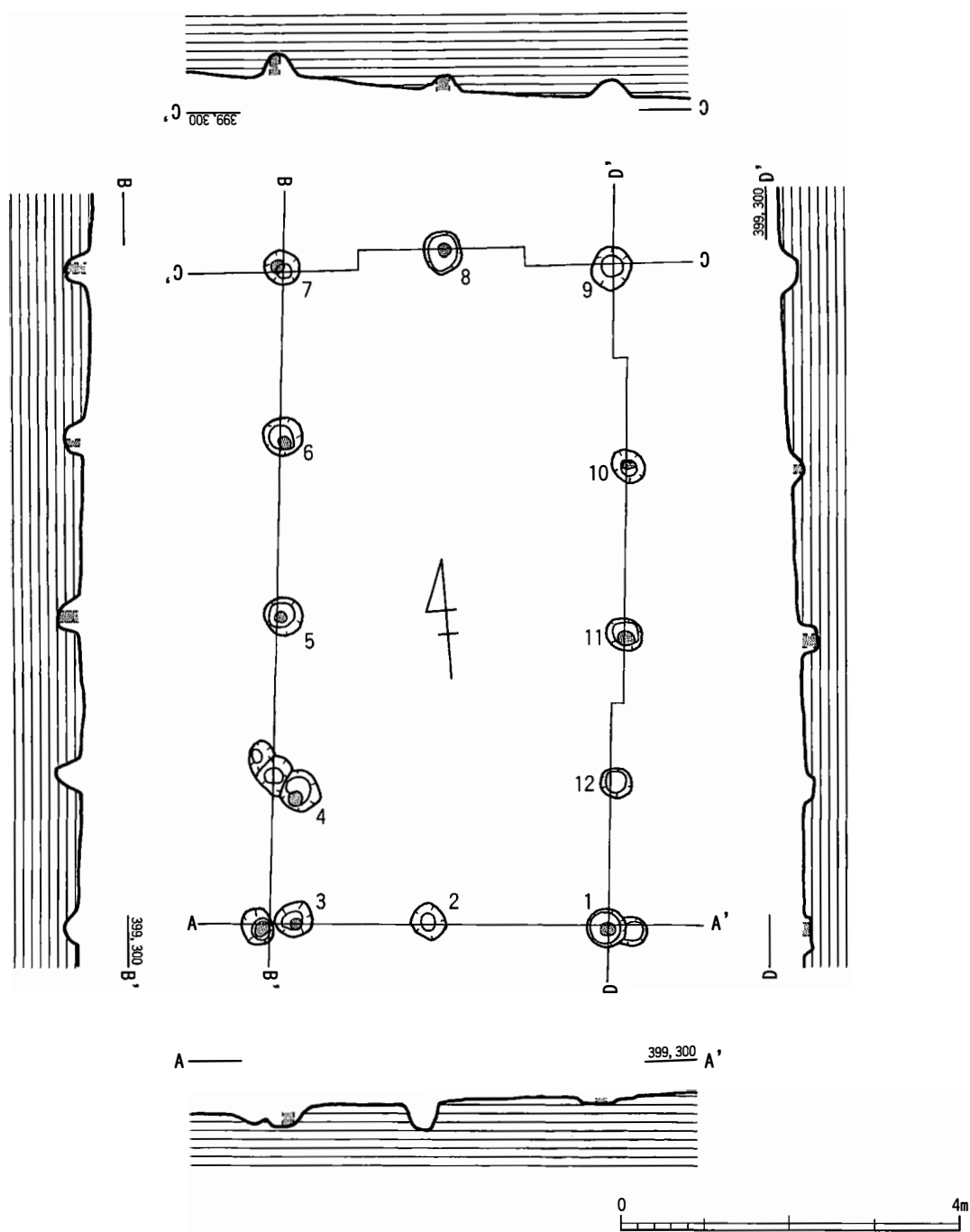
整列する。ほぼ同位置で立て替えが行われており、それぞれの柱穴に2重の痕跡がある。

柱痕跡は全ての柱穴で確認ができ、直径は16~20cmである。

SB21 (第54、55図)

Ⅱ区西側 (H・I-5・6区) に位置する遺構で、S I 20、22、29、SB21と重複している。SB20を切り、各S Iを切る。桁行7.1m (約23.7尺)、梁行4.7m (約15.7尺) の3間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN8° Eである。

柱間寸法は桁行3~6は2.1m (7尺) +2.4m



第49図 SB14遺構実測図(1/80)

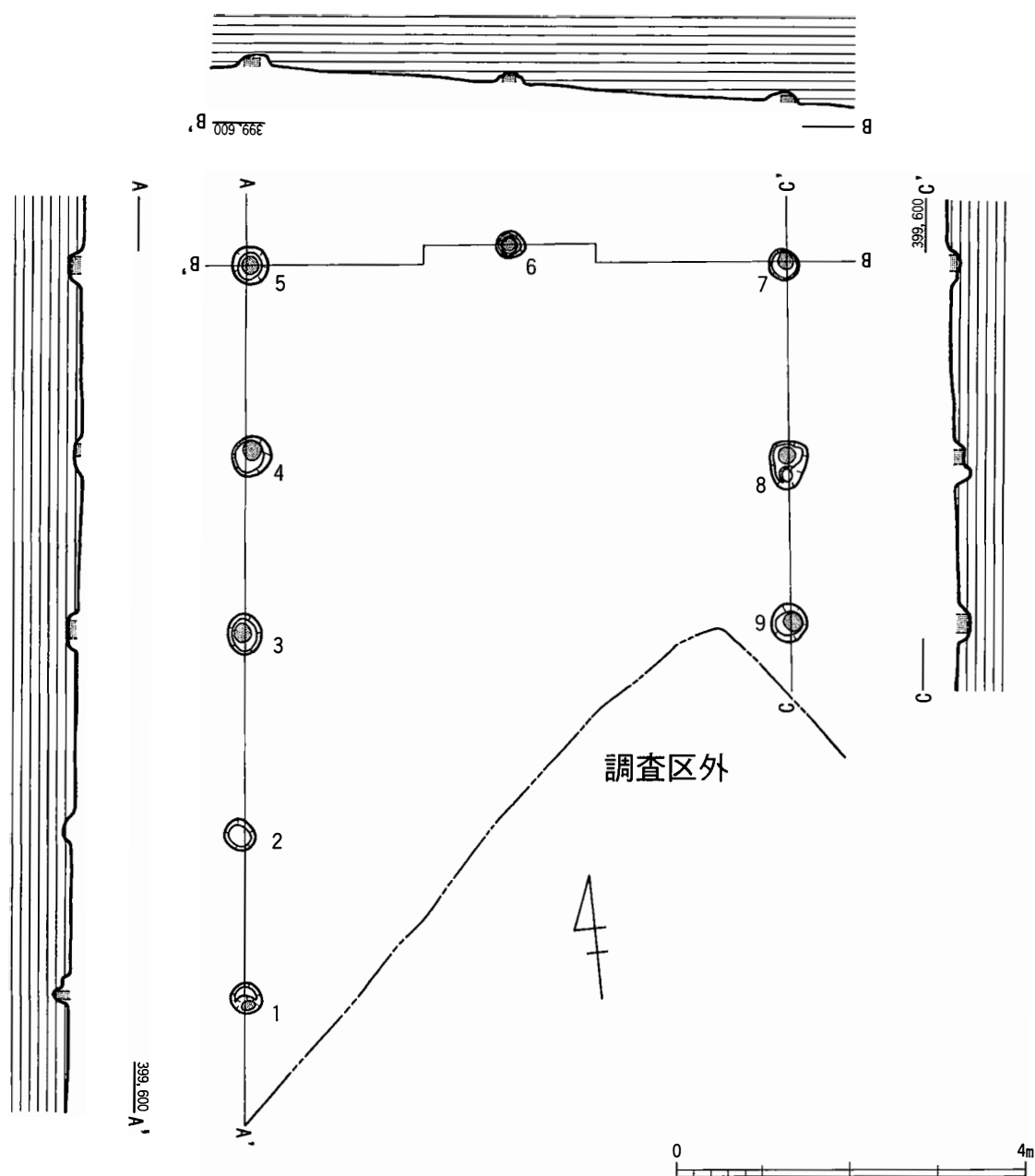
(8尺) + 2.3m (約7.7尺)、1～8は2.5m (約8.3尺) + 2.1m (7尺) + 2.5m (約8.3尺)である。梁行3～1は2.7m (9尺) + 2.4m (8尺)、6～8はともに2.2m (約7.3尺) + 2.5m (約8.3尺)である。

柱穴は直径36～40cm、深さ50～60cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。ほぼ同位置で立て替えが行われており、それぞれの柱穴に2重の痕跡がある。

柱痕跡はほとんどの柱穴で確認ができ、直径は16～20cmである。

SB22 (第56図)

Ⅱ区西側(H-9区)に位置する遺構で、他の遺構との重複はない。南東側を削平され遺構の全容は不明であるが、検出する範囲で桁行5.6m(約18.7尺)、梁行3.5m(約11.7尺)の3間×1間の東西棟建物で、桁行方向はE33°Sである。



第50図 SB15遺構実測図(1/80)

柱間寸法は桁行3～6は1.9m(約6.3尺)+2.1m(7尺)+1.8m(6尺)、梁行2～3は間に柱穴が削平されている可能性があり、1.75m(5.8尺)の等間隔になる可能性がある。

柱穴は直径12～20cm、深さ10～24cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は確認ができなかった。

SB23(第57図)

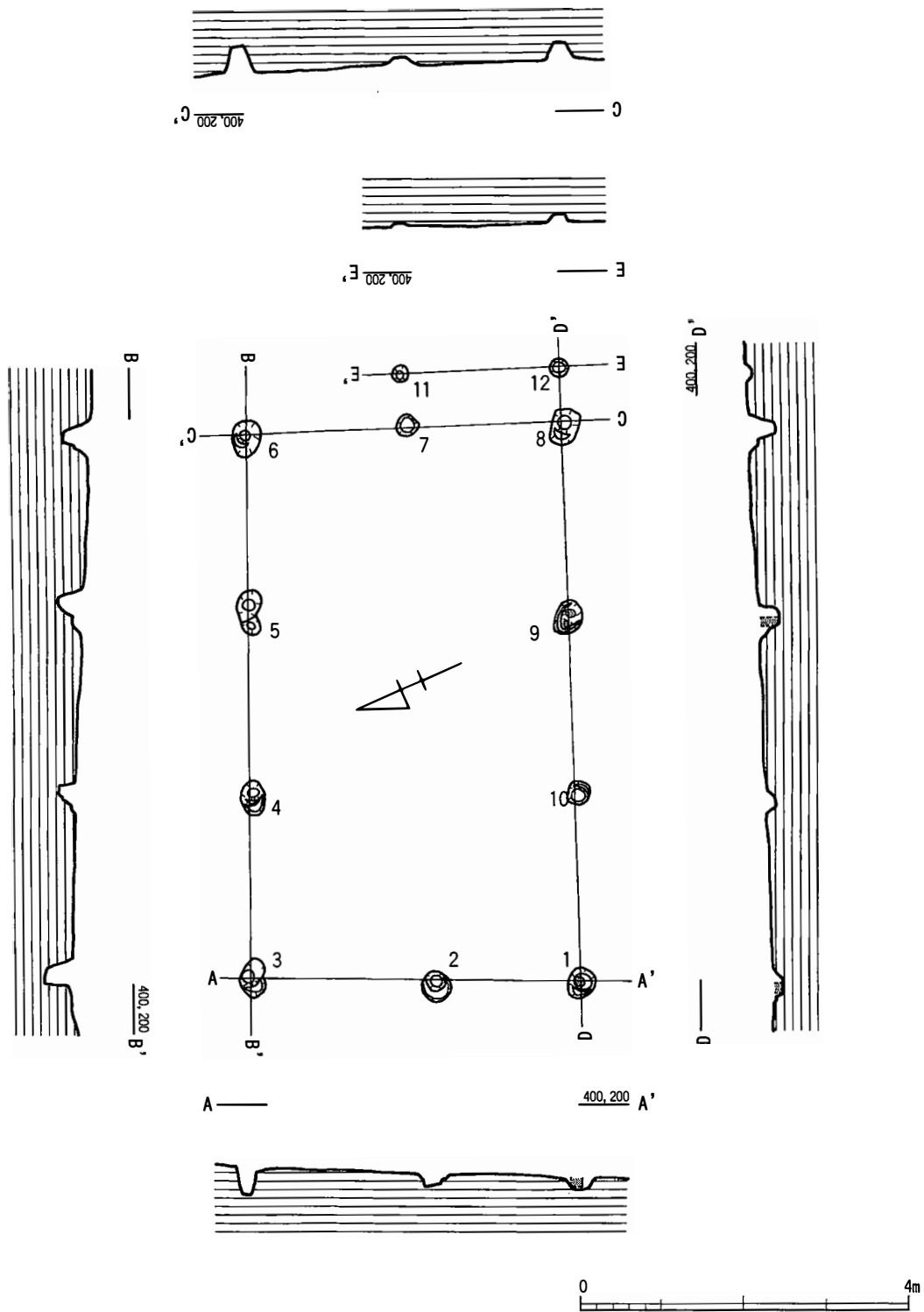
Ⅱ区西側(E・F-8・9区)に位置する遺構で、

SI31、32、33を切っている。切り合い関係は不明。桁行7.0m(約23.3尺)、梁行5.0m(約16.7尺)の4間×2間の南北棟建物で、桁行方向はN5°Eである。

柱間寸法は桁行1～6は1.6m(約5.3尺)+1.8m(6尺)+1.6m(約5.3尺)+2.0m(約6.7尺)、梁行4～6は2.3m(約7.7尺)+2.6m(約8.7尺)+2.5m(約8.3尺)である。

柱穴は直径40～60cm、深さ30～50cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。遺構南西隅が削平され、全体像が不明瞭

第1節 遺構とそれに伴う遺物



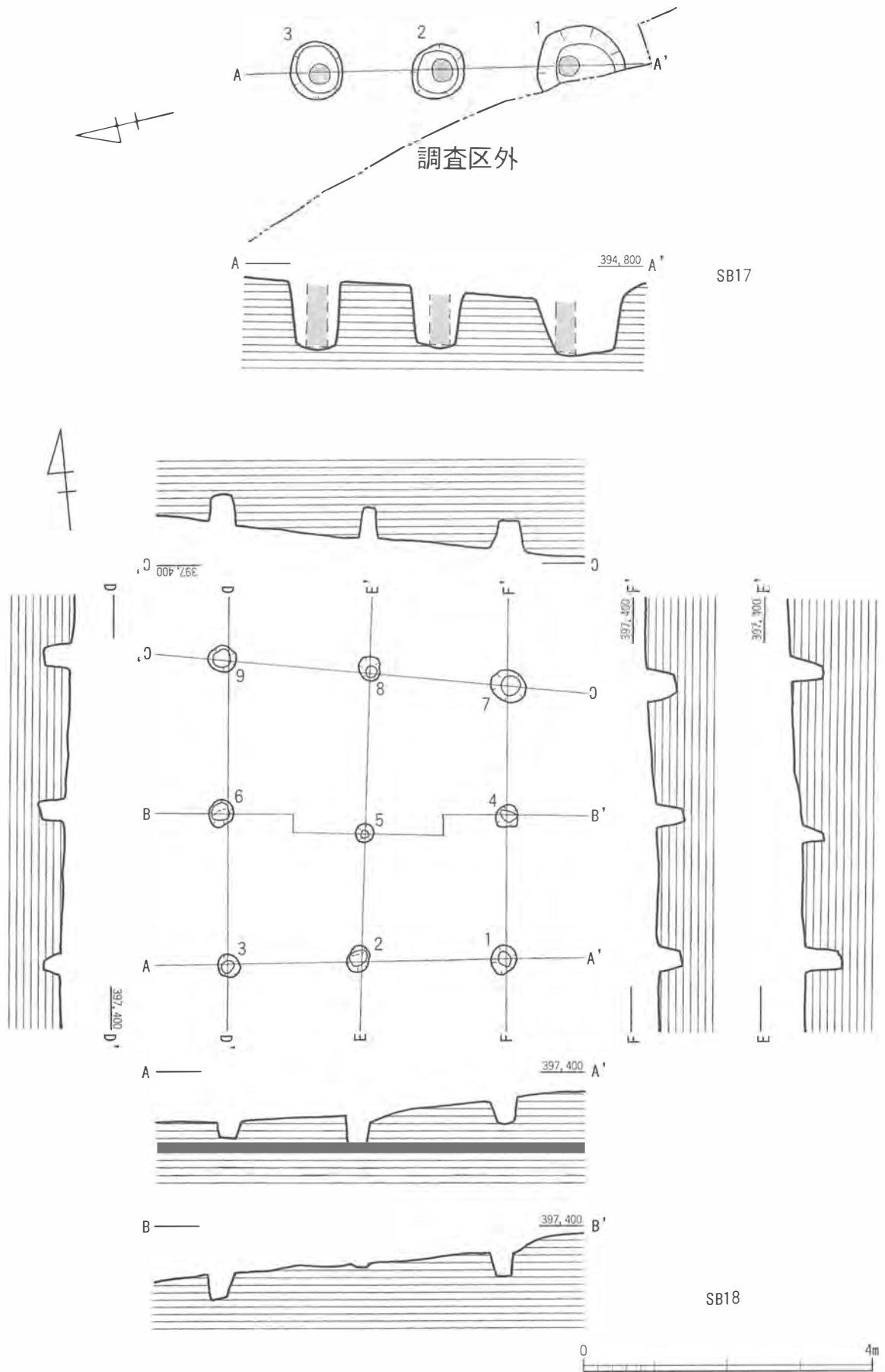
第51図 SB16遺構実測図 (1/80)

である。ほぼ同位置で立て替えが行われており、それぞれの柱穴に2重の痕跡がある。

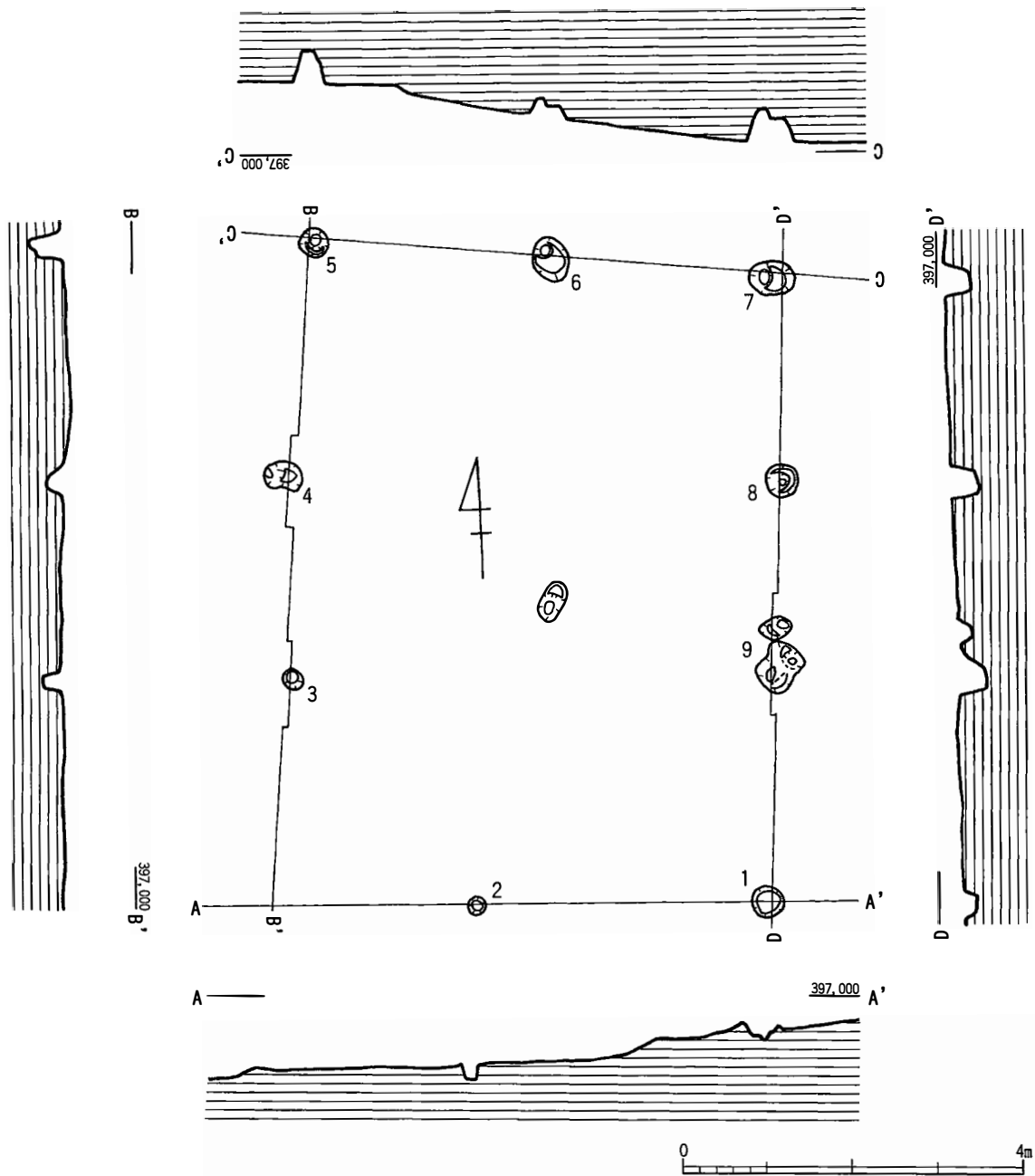
柱痕跡はほとんどの柱穴で確認ができ、直径は16~24cmである。

SB24 (第58図)

Ⅱ区西側 (G・H-13・14区) に位置する遺構で、SB25と重複しているが、切り合い関係は不明。南東隅が削平されているため遺構の全体像は不明であるが、検出する限りでは桁行5.9m (約19.7尺)、梁行3.7m (約12.3尺) の3間×2間の東西棟建物で、



第52図 SB17、18遺構実測図(1/80)



第53図 SB19遺構実測図(1/80)

桁行方向はE23° Sである。

柱間寸法は桁行4～7は1.8m(6尺)+2.3m(約7.7尺)+1.8m(6尺)、梁行2～4は1.7m(約5.7尺)+2.0m(約6.7尺)である。

柱穴は直径20～28cm、深さ16～24cmである。柱穴の下端のレベルはほぼ一定する。柱列はほぼ直線に整列する。

柱痕跡は確認できなかった。

SB25(第58図)

Ⅱ区西側(G・H-13・14区)に位置する遺構で、SB24と重複しているが、切り合い関係は不明。南東隅が削平されているため遺構の全体像は不明であるが、検出する限りでは桁行6.9m(23尺)、梁行4.0m(約13.3尺)の3間×2間の東西棟建物で、桁行方向はE23° Sである。

柱間寸法は桁行5～8は2.3m(約7.7尺)+2.2m(約7.3尺)+2.5m(約8.3尺)、梁行3～5は2.0m(約6.7尺)+1.9m(約6.3尺)である。

柱穴は直径20~40cm、深さ10~30cmである。柱穴の下端のレベルは一定しない。柱列は西側梁行が縮小する。

柱痕跡は確認できなかった。

3-2 遺物

25棟ある掘立柱建物からは、破片を中心に柱穴から多くの遺物が出土している。埋土に混入したと思われる土師器片が最も多かったが、ここでは、その中で図化に足る物を紹介する。

59-1 S B01より出土した土師器坏。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なくキメ細かい。内外面とも回転ナデ調整。内外面に丹が塗ってあり、色調は橙色。底部に墨書がある。

59-2 S B01より出土した須恵器壺。胎土は砂粒が少なく細かい。口縁部と底部が欠損している。体部内面は回転ナデ調整。体部外面は平行タタキの痕があるが、回転ナデで消してある。色調は暗赤色で、肩部には灰白色の自然釉が懸かる。

59-3 S B04より出土した土師器甕。復原口径14.0cm。胎土は砂粒が多く粗い。口縁部は緩く外反し、口縁部の張り出しは少ない。口縁部内面はナデ調整。体部内面は横方向にヘラ削りを行う。体部外面は剥落し、調整が観察できない。色調はにぶい黄橙色。

59-4 S B05より出土した土師器甕。復原口径21.0cm。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。口縁部は強く外折する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は横方向にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整を行い、体部上方と頸部外面はナデ調整を行う。色調はにぶい黄橙色。

59-5 S B05より出土した須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部のやや内側に付き、断面は方形である。胎土は砂粒が混じるが細かい。内外面は回転ナデ調整で、見込みに横ナデを数回行う。色調は青灰色。

59-6 S B06より出土した須恵器壺。口縁部の破片で、復原口径8.8cm。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面は回転ナデ調整。色調は明褐色で、焼きが甘い。

59-7 S B10より出土した土師器坏。復原口径12.6cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は口縁部にかけて開く。内外面とも回転ナデ調整。丹を塗り、色調は橙色。底部に墨書がある。

59-8 S B10より出土した土師器坏。復原口径14.0cm。器高3.4cm。底部はヘラ切りで、その後ナデで横方向に調整。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は口縁部にかけて開く。内外面とも回転ナデ調整。丹が塗ってあり、色調は橙色。

59-9 S B10より出土した土師器坏。底部の破片で、底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。内面見込みは横ナデ。丹が塗ってあり、色調は橙色。底部には墨書がある。

59-10 S B10より出土した須恵器坏。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるが、細かい。見込みは2度横ナデをする。色調は灰白色。底部には墨書があり、「角代」と読める。

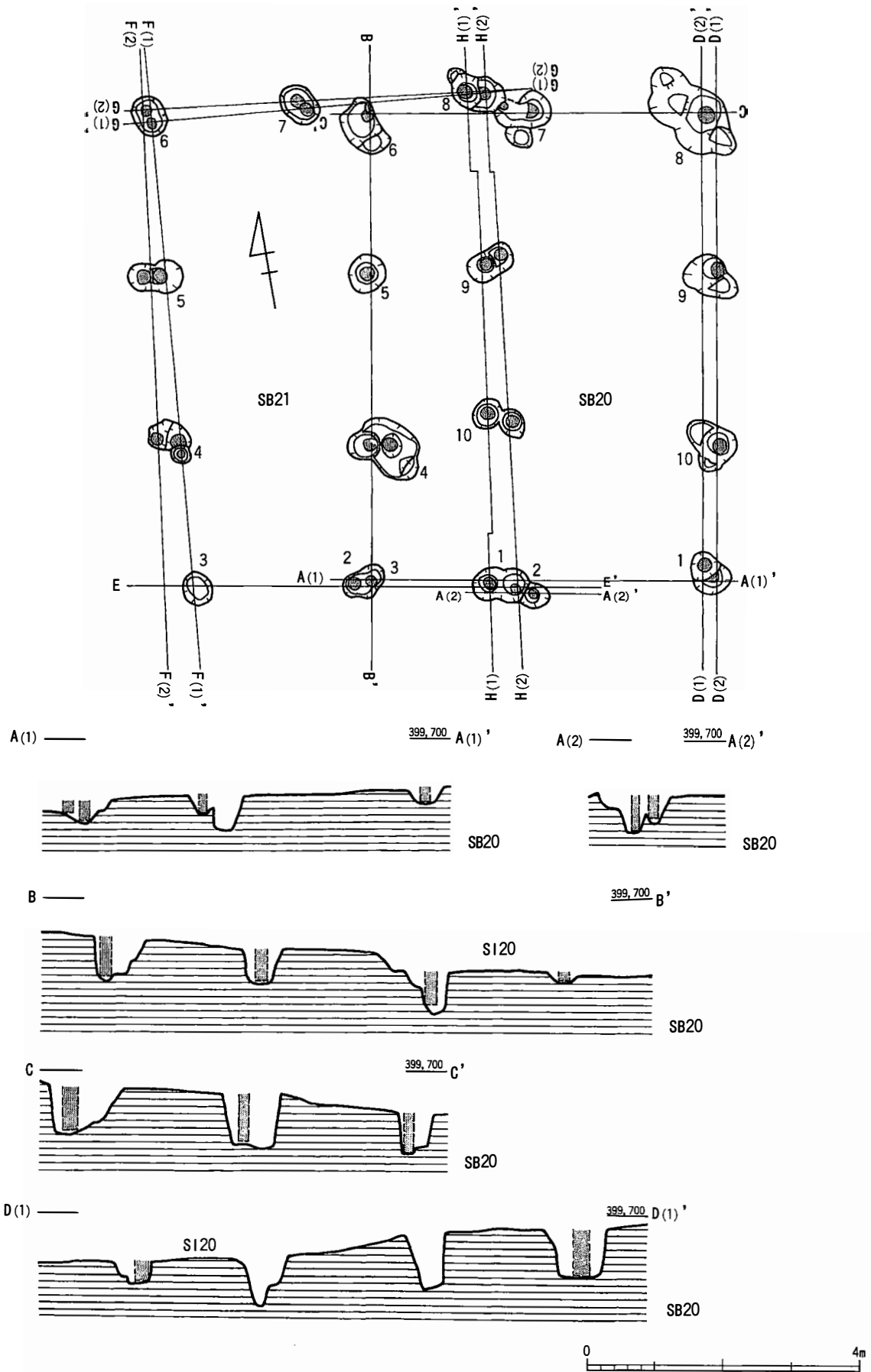
59-11 S B10より出土した土師器坏。復原口径12.8cm。器高3.0cm。底部はヘラ切りで、その後ナデで横方向に調整。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は口縁部にかけて開く。内外面とも回転ナデ調整。見込みは数回横ナデをする。丹が塗ってあり、色調は橙色。

59-12 S B11より出土した土師器坏。復原口径13.3cm。器高2.6cm。底部はヘラ切りで、その後ナデで横方向に調整。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は口縁部にかけて開く。内外面とも回転ナデ調整。見込みは回転方向にナデる。丹が塗ってあり、色調は橙色。底部には墨書がある。

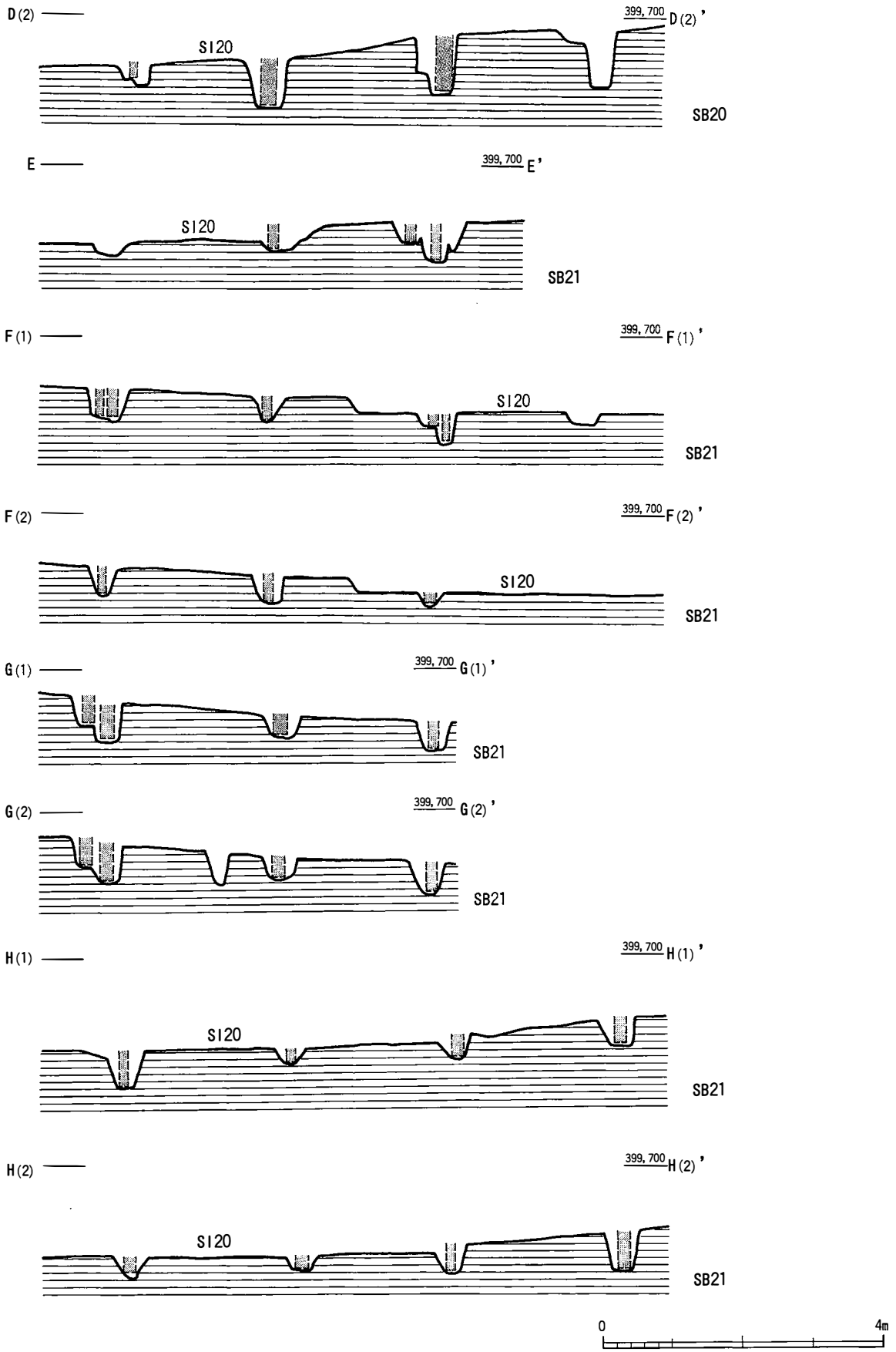
59-13 S B12より出土した土師器甕。復原口径18.0cm。胎土は砂粒がまじりやや粗い。口縁部は緩く外反し、口縁部の張り出しは少ない。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目があるが、口縁部から頸部にかけてナデ調整を行う。色調はにぶい橙色。

59-14 S B20より出土した須恵器坏。復原口径13.7cm。器高3.4cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は口縁部にかけて開く。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰白色。体部外面に墨書があり、「十」と読める。

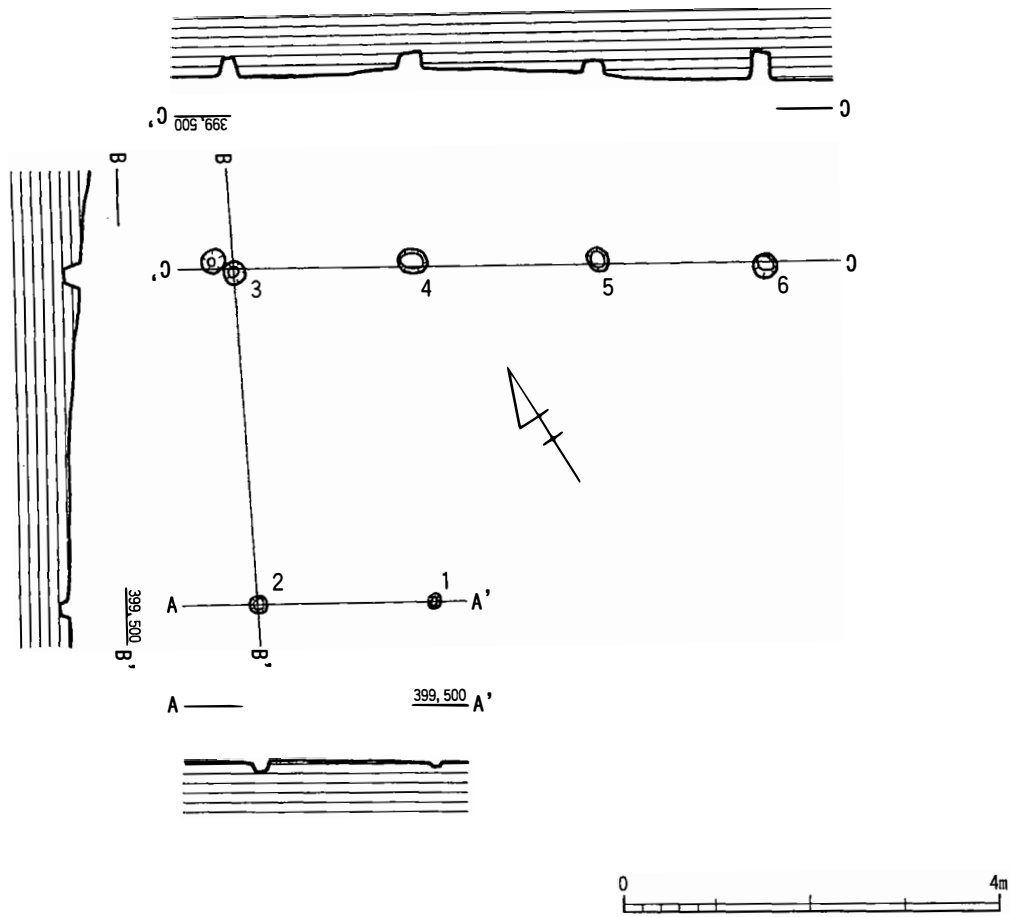
第1節 遺構とそれに伴う遺物



第54図 S B20、21遺構実測図① (1/80)



第55図 S B 20、21遺構実測図② (1/80)



第56図 S B22遺構実測図 (1/80)

59-15 S B20より出土した須恵器坏。复原口径13.3cm。器高4.1cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は口縁部にかけて開く。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰白色。

59-16 S B20より出土した土師器坏。底部はヘラ切りの後横ナデ調整。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は丹が塗ってあり橙色。底部に墨書があり、「十」と読める。

59-17 S B20より出土した土師器坏。复原口径11.7cm。器高3.3cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は口縁部にかけて内湾気味に開く。内外面とも回転ナデ調整。色調は丹が塗ってあり橙色。

59-18 S B20より出土した須恵器坏。复原口径13.2cm。底部はヘラ切りの後、横ナデ調整。胎土は砂粒が混じるが細かい。体部は口縁部にかけて開く。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色。

59-19 S B21より出土した土師器甕。复原口径

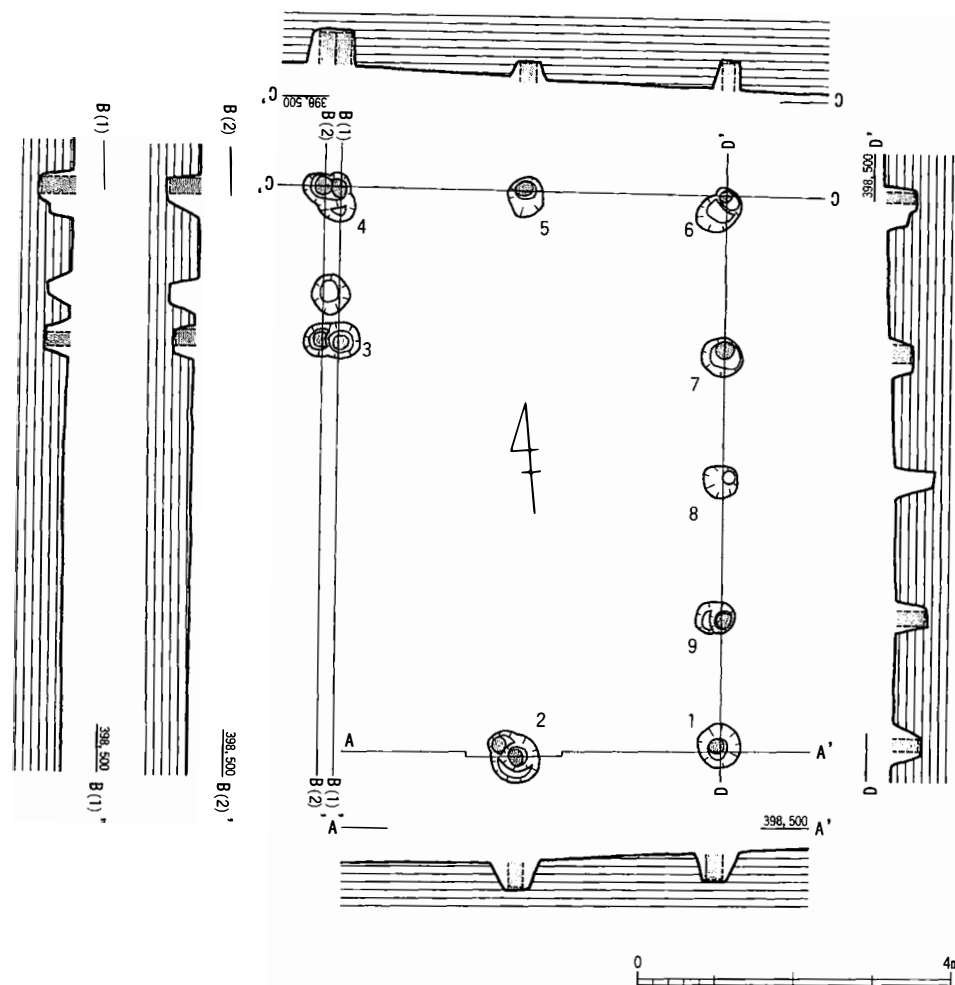
19.1cm。胎土は砂粒が多くやや粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部外面は横方向にハケ目調整を行い、頸部外面はナデ調整を行う。色調はにぶい黄橙色。

59-20 S B23より出土した土師器坏。复原口径13.8cm。器高3.1cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。体部は口縁部にかけて内湾して開く。内外面とも回転ナデ調整。丹が塗ってあり、色調は橙色。

4 不明遺構 (S X01)

4-1 遺構

I区西側(C・B-6・7区)に位置する遺構で、II区方面から流れ込む流路のたまったところと思われる。約12×6mほどの大きさで、80cmの深さがある。上流の流路は特定できないが、多くの遺物が出土したため、ここでは図化に足るものを紹介する。



第57図 S B23遺構実測図 (1/80)

4-2 遺物

61-1 土師器碗。胎土は砂粒が少なく細かい。底面端部に高台を付ける。内外面とも回転ナデ調整。丹が塗ってあり、色調は橙色。

61-2 土師器碗。底部はヘラ切りで、その後ナデで横方向に調整。底面端部に高台を付ける。胎土は砂粒が混じるが細かい。内外面とも回転ナデ調整。見込みは横方向にナデる。丹が塗ってあり、色調は橙色。

61-3 黒色土器碗。底部はヘラ切り。底面端部に高台を付ける。胎土は砂粒が混じるが細かい。外面は回転ナデ調整。内面は磨きで、黒色に燻す。色調は外面はにぶい橙色。内面は黒色。

61-4 須恵器坏身。復原口径14.8cm。器高5.0cm。底部はヘラ切り。高台は底部端のやや内側に付き、高台の外面を削って畳付きは鋭角になる。体部は開き、口縁端部が外反する。胎土は砂粒が混じりやや粗い。内外面は回転ナデ調整で、見込みは数回横ナ

デを行う。色調は灰白色。

61-5 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部端のやや内側に付き、外側を削って畳付きは鋭角になる。胎土は砂粒が混じりやや粗い。内外面は回転ナデ調整で、見込みは数回横ナデを行う。色調は灰白色。

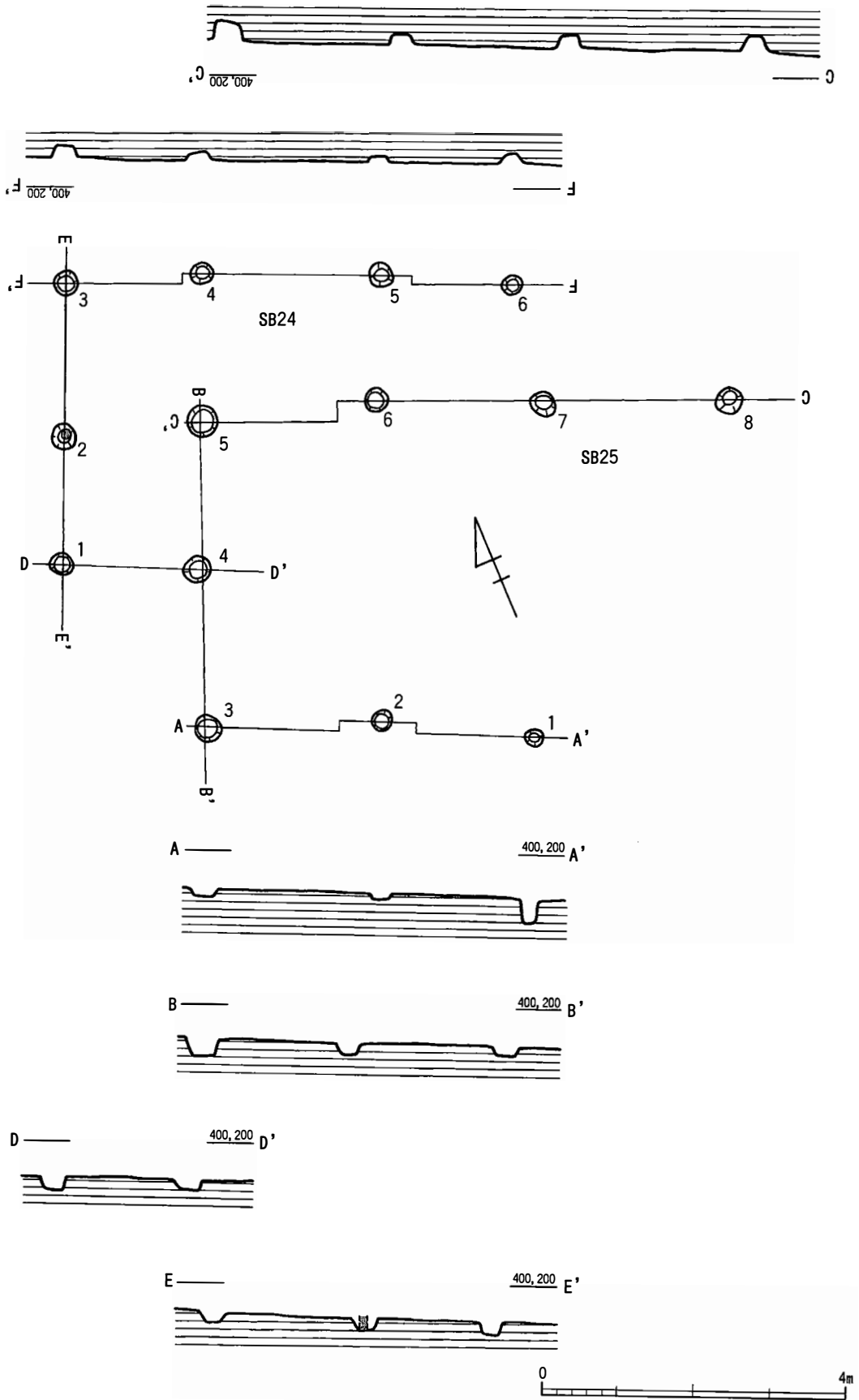
61-6 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部端のやや内側に付く。高台は端部にかけて開く。胎土は砂粒が混じりやや粗い。色調は褐灰色で、見込みには自然釉が懸かる。

61-7 土師器坏。胎土は砂粒が混じるが細かい。内外面とも回転ナデ調整。丹が塗ってあり、色調は橙色。体部外面に墨書があり、「井」と読める。

61-8 土師器坏。胎土は砂粒が少なく細かい。丹が塗ってあり、色調は橙色。底部に墨書がある。

61-9 土師器皿。復原口径9.9cm。器高1.9cm。底部はヘラ切りで、板目圧痕が付く。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。見込みに横ナデを数回行って

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第58図 S B24、25遺構実測図 (1/80)

る。色調はにぶい黄橙色。

61-10 土師器皿。復原口径9.2cm。器高1.8cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。見込みに横ナデを数回行っている。口縁部と見込みにカーボンが付着する。色調は浅黄橙色。

61-11 土師器皿。復原口径11.6cm。器高1.6cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。見込みに横ナデを数回行っている。口縁部と見込みにカーボンが付着する。色調は灰黄橙色。

61-12 土師器皿。復原口径10.2cm。器高1.7cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。見込みに横ナデを数回行っている。色調はにぶい黄橙色。

61-13 土師器皿。復原口径10.2cm。器高1.3cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。見込みに横ナデを数回行っている。色調は浅黄橙色。

61-14 土師器甕。復原口径26.3cm。胎土は砂粒が多くやや粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整を行い、口縁部と頸部外面はナデ調整を行う。口縁部内外面にカーボンが付着する。色調はにぶい黄橙色。

61-15 土師器甕。復原口径27.6cm。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整を行い、口縁部外面はナデ調整を行う。口縁部内外面にカーボンが付着する。色調はにぶい橙色。

61-16 土師器甕。口径26.2cm。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。口縁部は緩く外反する。口縁部内面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部外面は、上半は縦方向にハケ目調整を行い、下半は斜め上方にハケ目調整を行う。口縁部外面はナデ調整を行う。口縁部内外面にカーボンが付着する。色調はにぶい橙色。

62-1 土師器甕。復原口径13.3cm。胎土は砂粒が混じりやや粗い。口縁部は直立気味で、張り出しが小さい。口縁部内面はナデ調整。内面はほぼ横方向にヘラ削りを行う。外面は縦方向にハケ目調整を行い、口縁部外面はナデ調整を行う。色調はにぶい赤

褐色色。

62-2 須恵器壺。口縁部と底部が欠損している。胎土は砂粒が少なく細かい。内面は指おさえのあとナデ調整。外面は摩滅して調整が判りにくいタタキの痕跡が若干残る。色調は灰白色。

62-3 須恵器壺で肩部の破片。胎土は砂粒が少なく細かい。内面は指おさえのあとナデ調整。体部外面は格子タタキの痕跡が残る。色調はにぶい褐色で、肩部上面には灰白色の自然釉が懸かる。

62-4 須恵器壺で底部の破片。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面とも回転ナデ調整。底部上面にはタタキ目が残る。高台は端部に付き、外側に張り出す。色調は、外面は赤褐色で、内面は橙色。

62-5 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じりやや粗い。内面は平行の当て具痕。外面は格子目タタキ。色調は灰色。

62-6 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は平行と同心円の当て具痕。外面は格子目タタキ。色調は灰色。

62-7 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は大きな格子目タタキ。色調は外面が灰色で内面は橙色。

62-8 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は細かな格子目タタキ。色調は灰色。

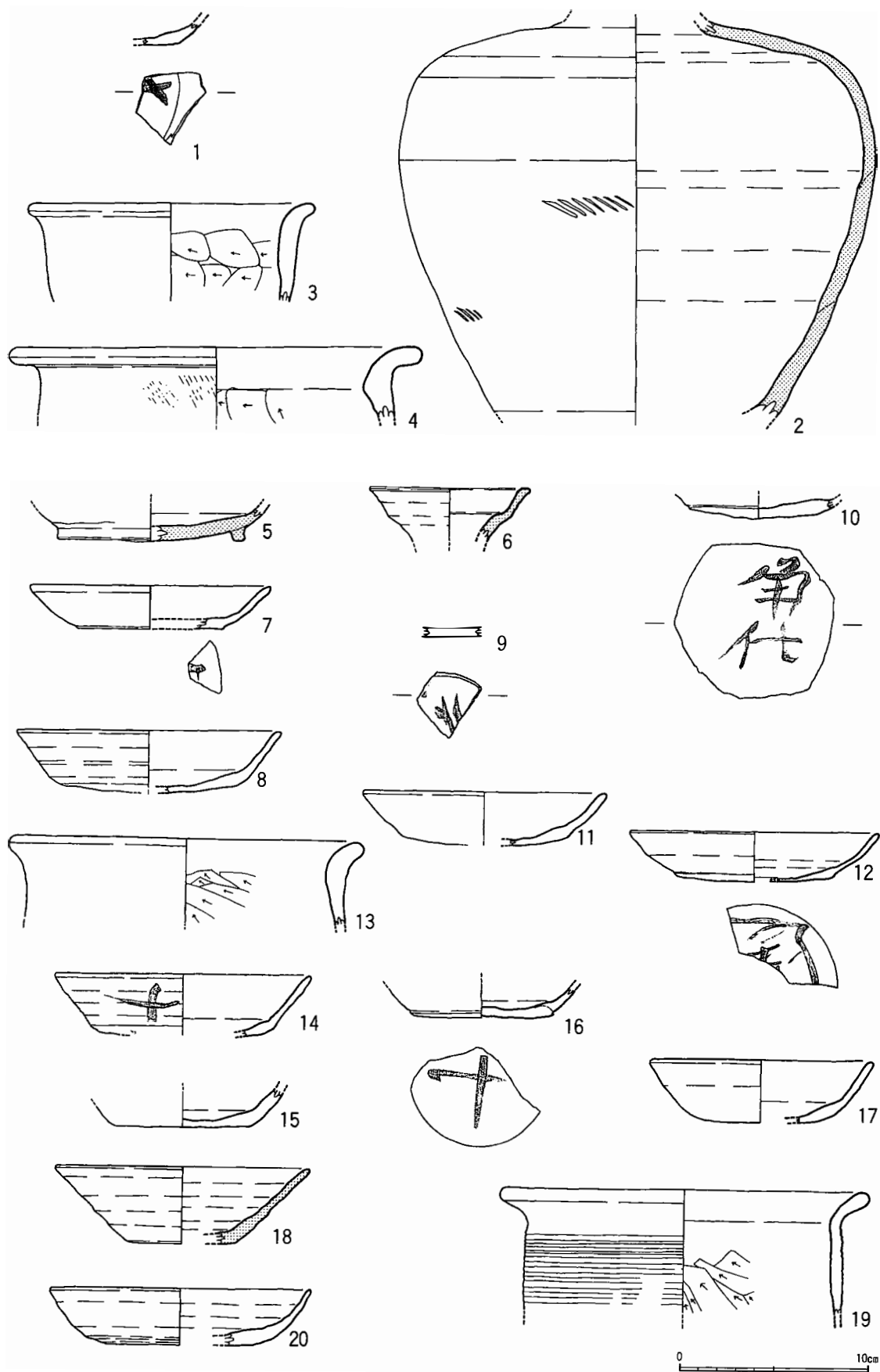
62-9 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じりるがやや細かい。内面は同心円の当て具痕があり、一部をナデ消している。外面は平行タタキ。色調は外面が暗灰色で、内面は灰色。

62-10 須恵器壺で肩部の破片。胎土は砂粒が少なく細かい。器肉は薄い。内面は同心円の当て具痕。外面は平行タタキで、頸部付近は縦方向にはいり、肩部付近は横にはいる。色調は褐灰色。

62-11 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なく細かい。内面は平行の当て具痕。外面は平行タタキ。色調は灰色。

62-12 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なく細かい。内面は平行と同心円の当て具痕が混在。外面は平行タタキ。色調は外面が浅黄色で、内面は暗灰黄色。

第1節 遺構とそれに伴う遺物



第59図 SB出土遺物実測図(1/3)

63-1 須恵器壺で口縁部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。口縁部の内面は回転ナデ調整で、体部内面には同心円の当て具痕がある。口縁部外面は回転ナデ調整。色調は赤褐色。

63-2 土師器鉢。復原口径19.4cm。器高7.8cm。胎土は砂粒が混じりやや粗い。底部は丸みを持ち、口縁部は緩く外反する。底部外面には指押さえ痕が残り、後ナデ調整。口縁部内外面はナデ調整。色調はにぶい黄橙色。

63-3 土師器鉢。復原口径17.6cm。胎土は砂粒が混じりやや粗い。体部は直立気味で、口縁部は外折する。内外面はナデ調整。色調はにぶい褐色。

5 溝 (SD)

5-1 遺構

SD01 (第4図)

Ⅱ区東側に位置し、北から南に流れる溝。G-14区では削平のため消滅しているので、SD02との切り合いは不明。最大幅は約3.0mで、最大深度は50cmである。おおまかに逆台形の掘り方を持つが、底面の荒れている部分もある。礫とともに遺物も多く出土した。

SD02 (第4図)

Ⅱ区東側に位置し、東から西に流れる溝。F-14区で調査区外に入るため流路は不明である。東側は削平されている。SD01との切り合いは不明。最大幅は約3.5mで、最大深度は30cmである。おおまかに逆台形の掘り方を持つ。

5-2 遺物

64-1 土師器坏。復原口径11.0cm。胎土は砂粒が混じるが細かい。内外面とも回転ナデ調整。丹が塗ってあり、色調は橙色。

64-2 須恵器坏。口径12.5cm。器高3.3cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるが細かい。焼きが甘い。体部は開く。内外面は回転ナデ調整で、見込みは横ナデを数回行う。色調は灰白色。

64-3 須恵器坏。口径13.8cm。器高2.5cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるが細かい。体部は開く。内外面は回転ナデ調整で、見込みは横ナデを数回行う。色調は灰白色。

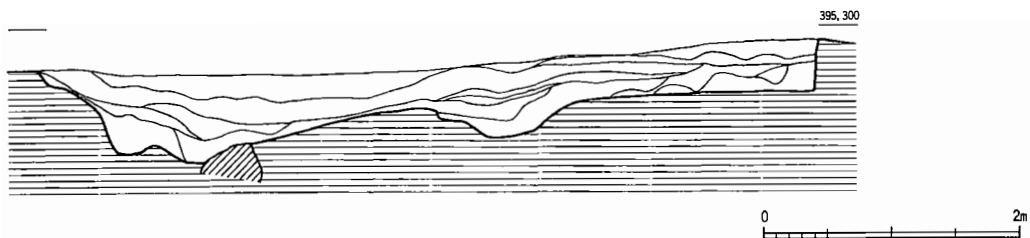
64-4 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部のやや内側に付き、外側に開く。胎土は砂粒が少なく細かい。良く焼き締まる。内外面は回転ナデ調整。色調は灰黄褐色。

64-5 須恵器坏身。復原口径13.4cm。器高5.1cm。底部はヘラ切り。高台は高めで底部のやや内側に付き、端部は外側に開く。胎土は砂粒が少なく細かい。良く焼き締まる。内外面は回転ナデ調整で、腰部に丸みを持つ。色調は暗黄灰色。

64-6 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は高めで底部のやや内側に付く。胎土は砂粒が少なく細かい。良く焼き締まる。内外面は回転ナデ調整で、腰部に丸みを持つ。色調は暗赤灰色。

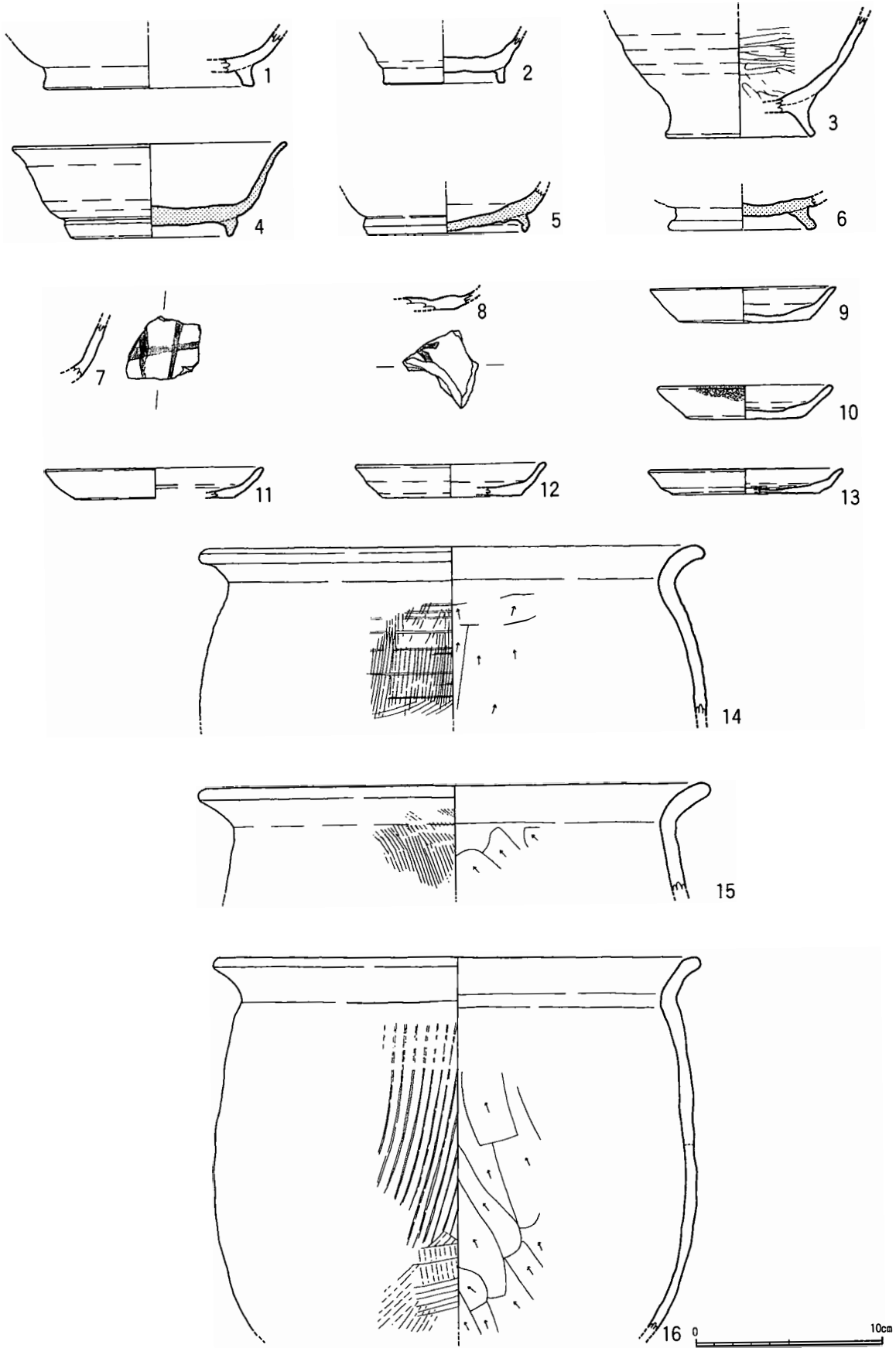
64-7 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部の端に付き、端部は外に開く。胎土は砂粒が混じるが細かい。良く焼き締まる。見込みは数回横ナデをする。色調は灰色。

64-8 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は薄く高めで、底部のやや内側に付く。胎土は砂粒が混じ

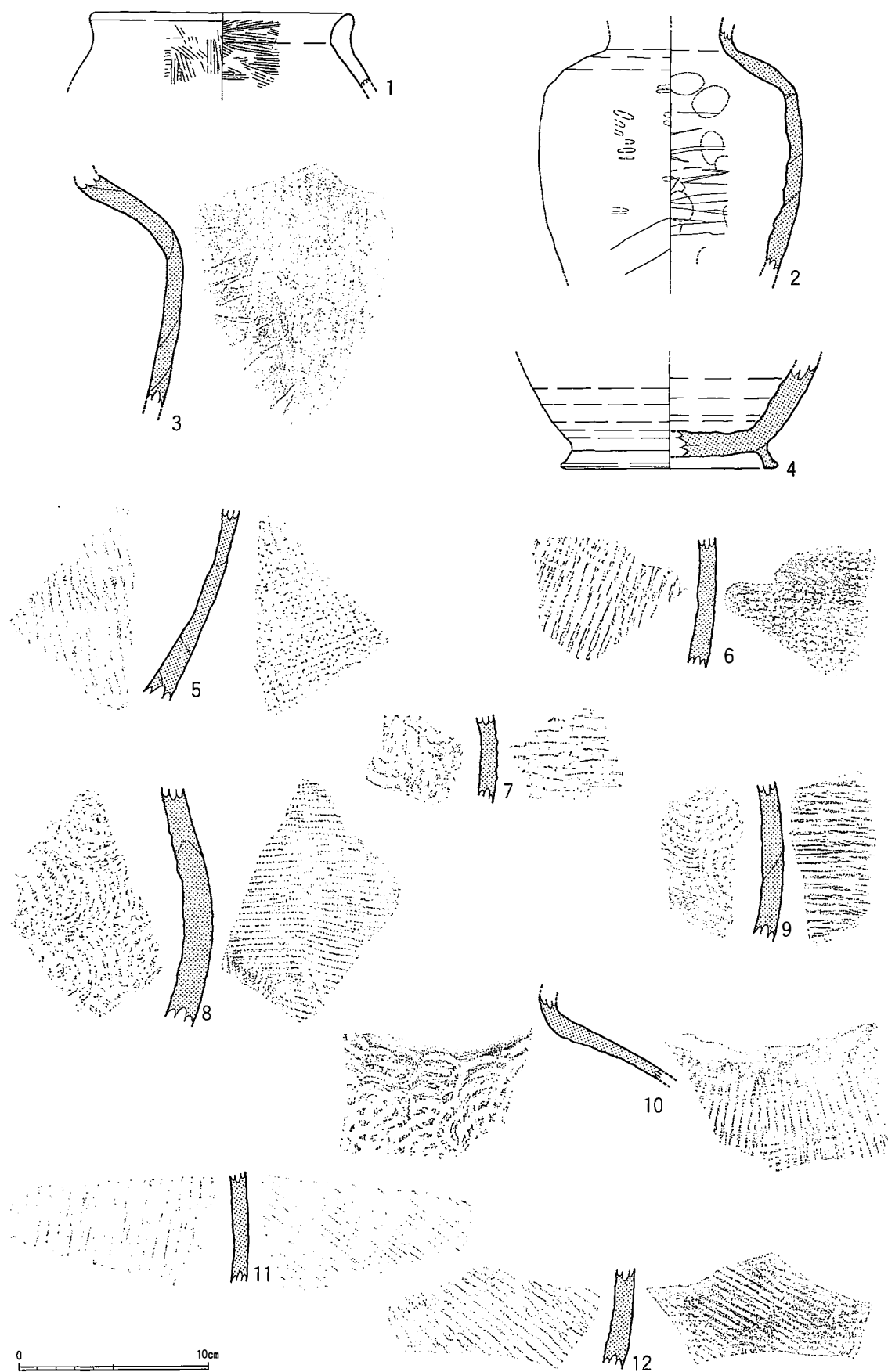


第60図 SX01土層断面図 (1/60)

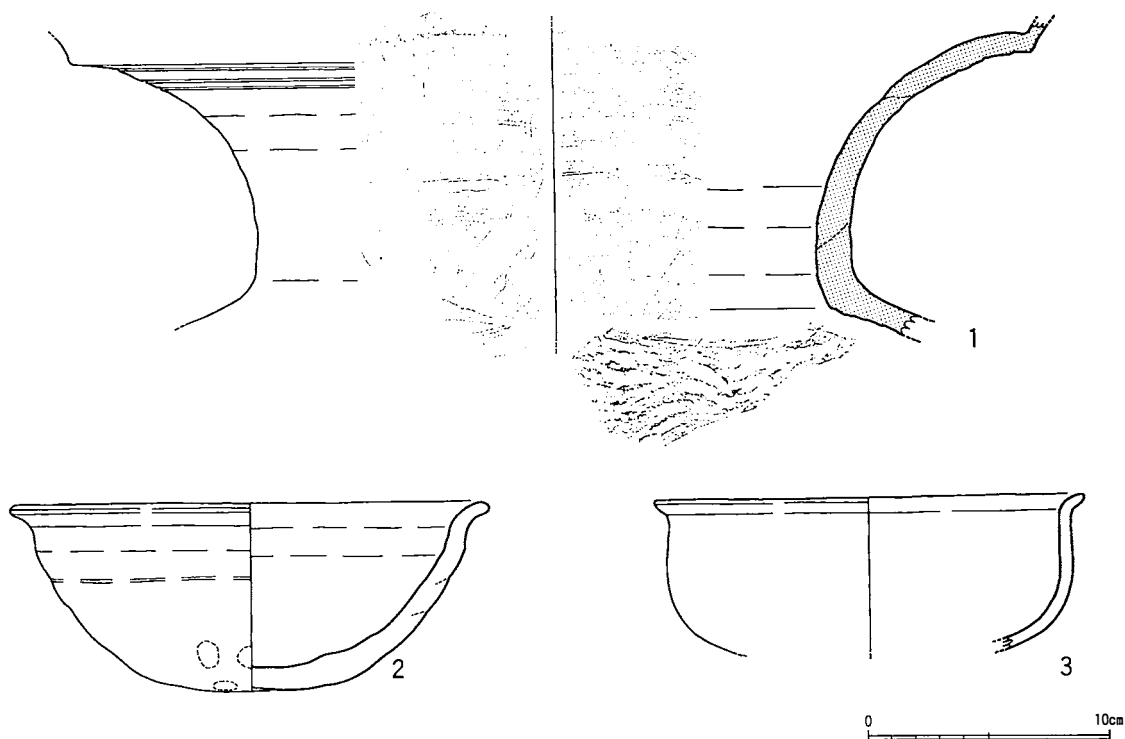
第1節 遺構とそれに伴う遺物



第61図 S X01出土遺物実測図① (1 / 3)



第62図 S X01出土遺物実測図② (1/3)



第63図 S X01出土遺物実測図③(1/3)

るが細かい。焼きはやや甘い。見込みは数回横ナデをする。色調は灰白色。

64-9 須恵器坏身。復原口径15.0cm。器高4.4cm。底部はヘラ切り。高台はやや高く、底部の内側に付く。胎土は砂粒が少なく細かい。良く焼き締まる。内外面とも回転ナデ調整で、腰部に丸みを持つ。色調は暗赤灰色。

64-10 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部の端に付く。胎土は砂粒が少なく細かい。焼きは甘い。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰白色。

64-11 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部の端に付き、外面接着部にヘラによる凹線がある。胎土は砂粒が混じるが細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は外面が灰色、内面は灰白色。

64-12 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底部の内側につく。胎土は砂粒が混じり粗い。見込みは数回横ナデを行う。色調は灰色。

64-13 須恵器坏身。復原口径11.6cm。器高4.0cm。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側につく。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面とも回転ナデ調整。見込みは軽く横ナデをする。色調は外面が青灰色。

64-14 須恵器坏身。復原口径14.5cm。器高3.9cm。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側につく。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は青灰色。

64-15 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側につく。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面とも回転ナデ調整。見込みは数回横ナデをする。色調は灰白色。

64-16 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側につき、端部をナデにより丁寧に調整する。胎土は砂粒が混じりやや細かい。内外面とも回転ナデ調整。見込みは数回横ナデをする。色調は暗灰色。

64-17 須恵器坏身。復原口径12.1cm。器高3.65cm。底部はヘラ切り。高台は底面のかなり内側につく。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰白色。

64-18 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側につく。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色。

64-19 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底面

のやや内側につき、ナデにより端部を尖らせる。。胎土は砂粒が混じりやや粗い。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色。

64-20 須恵器壺蓋。復原口径14.3cm。平らな器形で、上面にはヘラ切り痕が残る。端部にかけてやや上面に反りながら、端部は下方へ曲げる。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰白色。

64-21 土師器椀。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側につく。胎土は砂粒がややまじるが細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は丹が塗ってあり、にぶい黄橙色。

64-22 土師器椀。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側につく。胎土は砂粒がややまじるが細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は丹が塗ってあり、にぶい黄橙色。

64-23 土師器椀。復原口径14.6cm。胎土は砂粒がややまじるがやや細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調はにぶい褐灰色。

64-24 須恵器壺で口縁部の破片。復原口径20.9cm。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。朝顔状に開き、上方へ屈曲する屈折部はヘラにより凸帯を作り出す。口縁端部は水平にする。焼成がやや甘く、色調は褐黄色。

64-25 須恵器壺。復原口径16.5cm。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。口縁部は外反し、端部を肥圧する。口縁部内外面は回転ナデ調整。色調は橙色。

64-26 土師器甕。復原口径18.0cm。胎土は砂粒が混じるりやや細かい。口縁部は緩く外反する。口縁部内外面はナデ調整。色調はにぶい橙色。

64-27 土師器甕。復原口径18.8cm。胎土は砂粒が多くやや粗い。口縁部は強く外折し、水平にする。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。色調はにぶい橙色。

64-28 土師器甕。復原口径16.2cm。胎土は砂粒が混じりやや粗い。口縁部は強く外折する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は横方向にナデ目調整を行う。色調はにぶい黄橙色。

65-1 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じ

るがやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は格子目タタキ。色調は灰褐色。

65-2 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内面は同心円と平行当て具痕が混在。外面は格子目タタキ。焼きが甘く、色調は黄褐色。

65-3 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は格子目タタキ。色調は灰色。

65-4 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は同心円と平行当て具痕が混在。外面は格子目タタキ。色調は灰色。

65-5 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は平行当て具痕。外面は格子目タタキ。色調は外面が赤褐色、内面が褐灰色。

65-6 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は綾杉状タタキ。色調は外面が灰褐色、内面が暗灰黄色。

65-7 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内面は同心円と平行の当て具痕が混在。外面は綾杉状タタキ。色調は灰褐外面がにぶい褐色、内面が暗灰黄色。

66-1 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じりやや粗い。内面は同心円の当て具痕。外面は平行タタキ。色調は外面が自然釉が付き灰褐色、内面は暗褐色。

66-2 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内面は同心円と平行の当て具痕。外面は平行タタキ。色調は外面が自然釉が付き暗オリーブ灰色、内面が灰色。

66-3 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は平行タタキ。色調は外面が黒褐色、内面が灰色。

66-4 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は平行タタキ。色調は灰色。

66-5 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内面は大きな同心円の当て具痕。外面は平行タタキ。色調は褐灰色。

66-6 須恵器壺で肩部、胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は同心円の当て具痕をナデ消している。外面は格子目タタキの後ナデ調整。色調は灰黄色。

66-7 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は大きな平行タタキ。色調は外面が暗赤褐色で内面は灰色。

66-8 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が混じりやや細かい。内面は大きな同心円の当て具痕。外面は平行タタキ。色調は外面が黒褐色、内面が灰黄色。

67-1 須恵器壺で頸部の破片。胎土は砂粒が混じりやや細かい。頸部内面はナデ調整で、体部内面には同心円の当て具痕がある。頸部外面は縦にハケ目調整の後、横にナデ調整を行う。口縁部付近はヘラによる凹線文。色調は暗緑灰色。

67-2 須恵器壺で頸部の破片。胎土は砂粒が混じりやや細かい。頸部内面はナデ調整で、体部内面には同心円の当て具痕がある。頸部外面は縦にハケ目調整の後、横にナデ調整を行う。口縁部付近はヘラによる凹線文。色調は灰色。

67-3 須恵器壺。復原口径17.8cm。復原胴部最大径22.8cm。胎土は砂粒が混じりやや細かい。頸部は外反し、口縁部は直立させる。胴部の最大径は上位にあり、最大径部分と頸部にかけての中位に凸帯を付ける。底部は、底面端に高台を付け、内面中央に同心円のタタキ目がある。調整は内外面ともナデ。色調はにぶい橙色。

67-4 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は丁寧に仕上げ、端部は内径気味にナデ調整。胎土は砂粒が混じりやや細かい。見込みは数回ナデる。色調は灰白色で、高台と高台内には自然釉が付く。

67-5 土師器甕。復原口径29.6cm。胎土は砂粒は少ないがやや粗い。口縁部は緩く外反しする。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。色調はにぶい黄橙色。

68-1 土師器椀。底部はヘラ切り。高台は丁寧に仕上げ、底面端部に体部と連続して接着する。胎土は砂粒が混じりやや細かい。内外面とも回転ナデ調

整。色調は丹が塗ってあり、橙色。

68-2 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底面端部に接着する。内外面は回転ナデ調整。胎土は砂粒が少なくやや細かい。色調は灰白色。

68-3 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底面に接着し、端部は鋭角に尖る。胎土は砂粒が少なくやや細かい。見込みは数回ナデる。色調は灰色。

68-4 土師器甕。復原口径19.4cm。胎土は砂粒は少ないがやや細かい。口縁部は緩く外反する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部外面は横方向にハケ目調整。色調はにぶい黄褐色。

68-5 須恵器壺。口径10.4cm。胎土は砂粒が混じりやや粗い。頸部は開き、端部は外反し折り曲げる。頸部と体部の内面はナデ調整。外面もナデ調整で、頸部にヘラ記号がある。色調は灰色で頸部から肩部にかけて自然釉が懸かる。

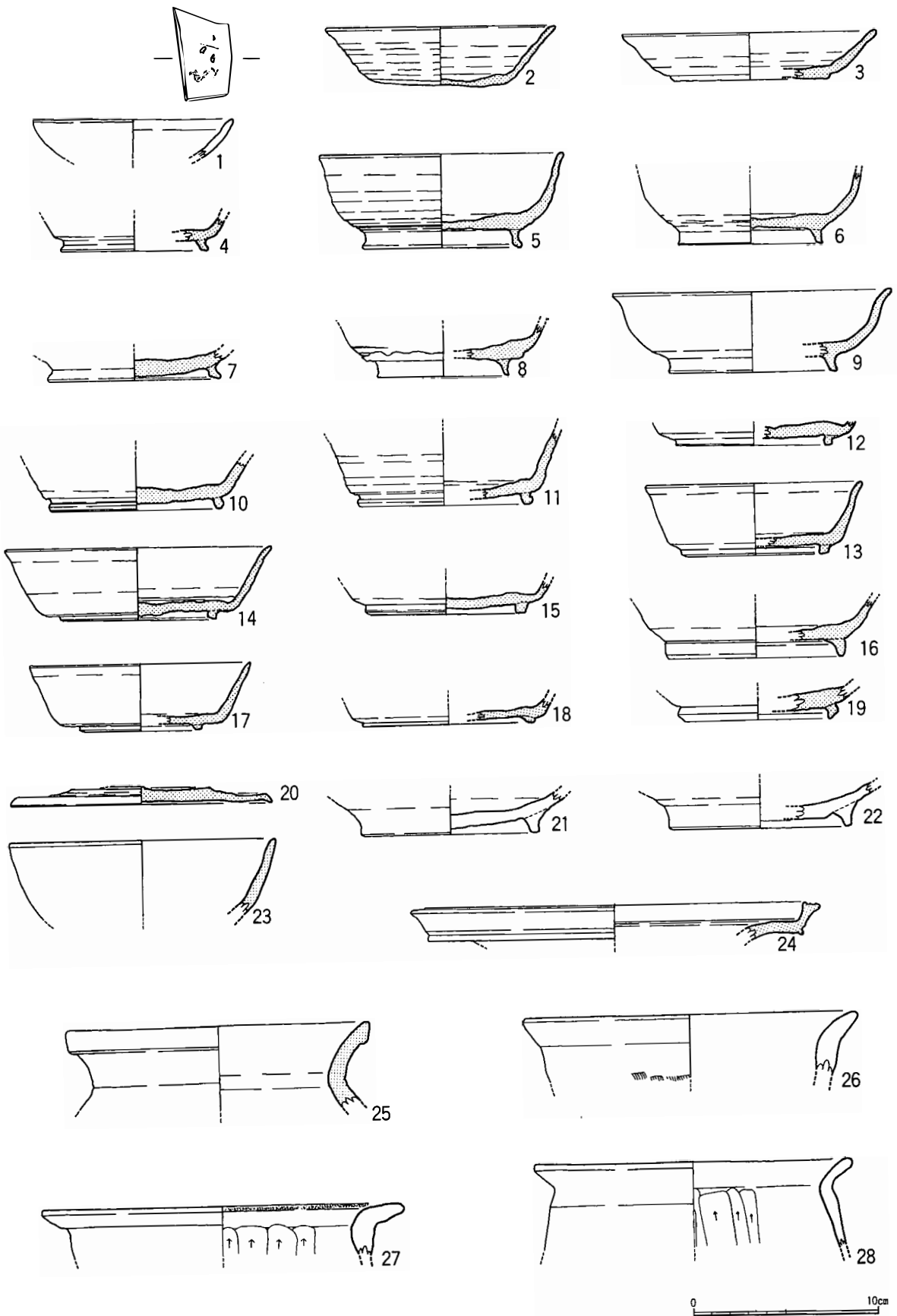
68-6 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は格子目タタキ。色調は暗灰黄色。

68-7 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は格子目タタキ。色調は灰色。

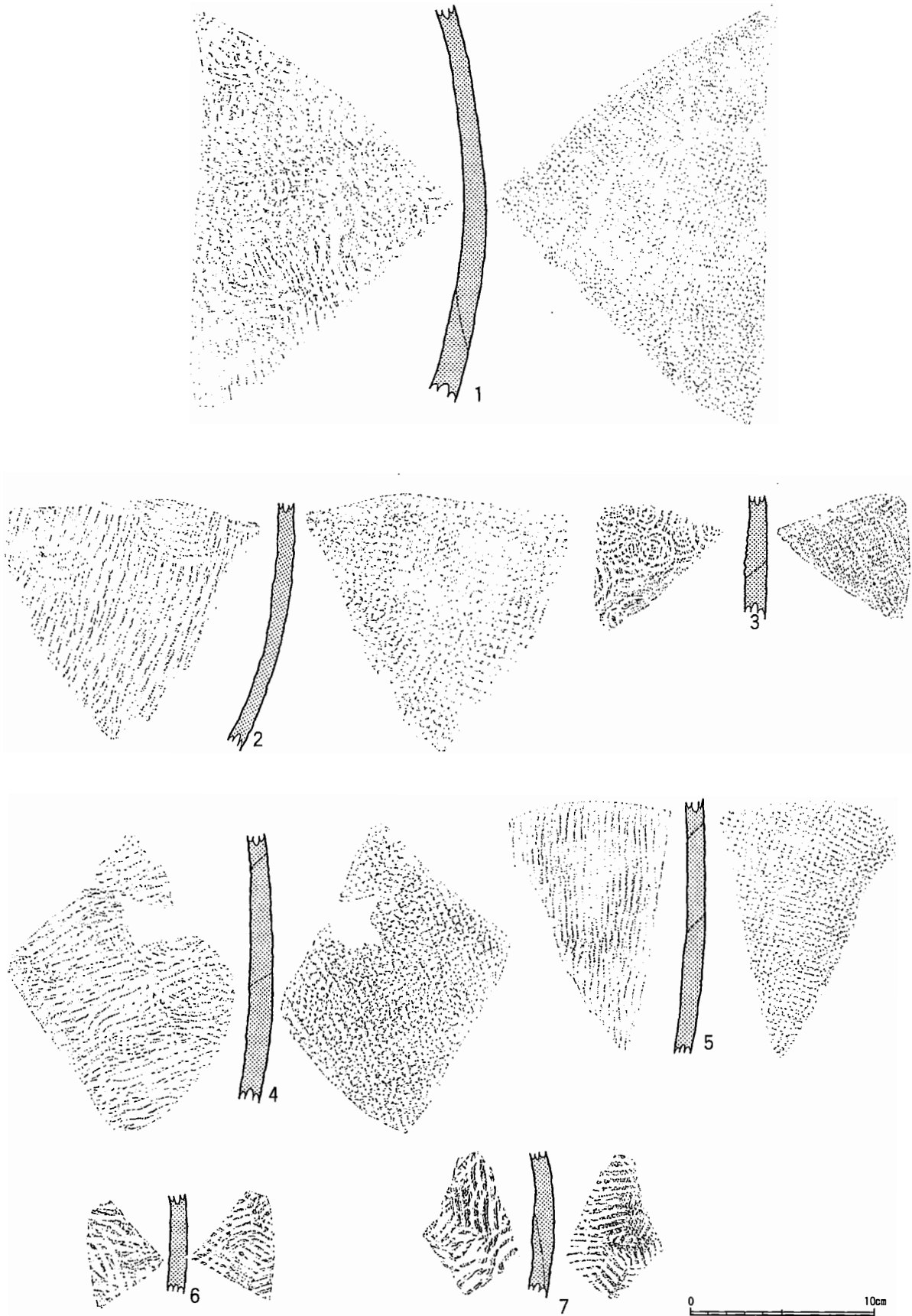
68-8 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面は同心円の当て具痕。外面は大きな平行タタキ。色調は灰色。

68-9 須恵器壺で肩部の破片。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内面はタンポ状のものを利用したと思われる、布目と糸目の当て具痕。外面は格子目タタキで一定間隔でナデ消している。色調は灰色。

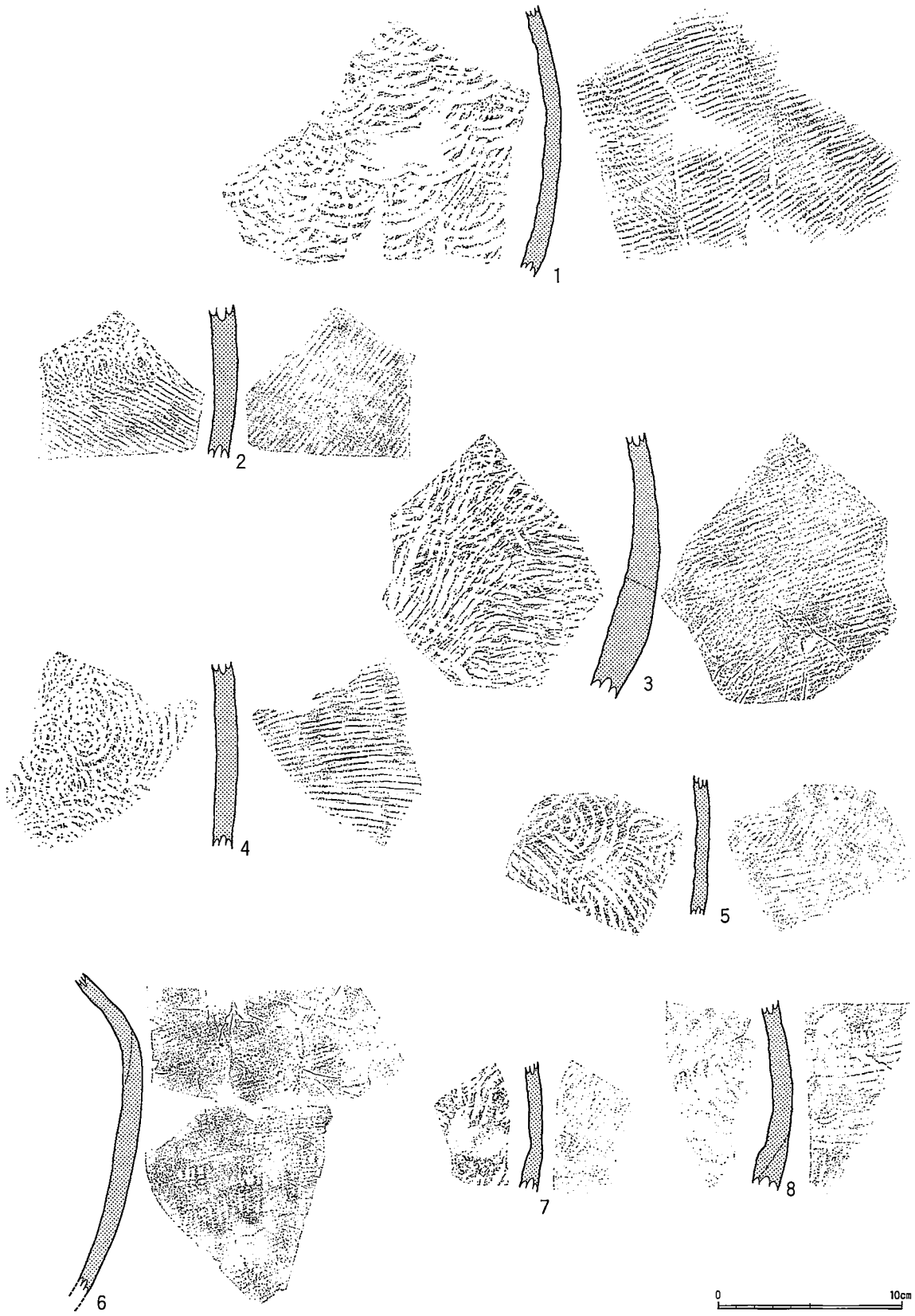
68-10 須恵器壺で胴部の破片。胎土は砂粒を含みやや粗い。内面は同心円の当て具痕。外面は平行タタキ。色調は灰色。



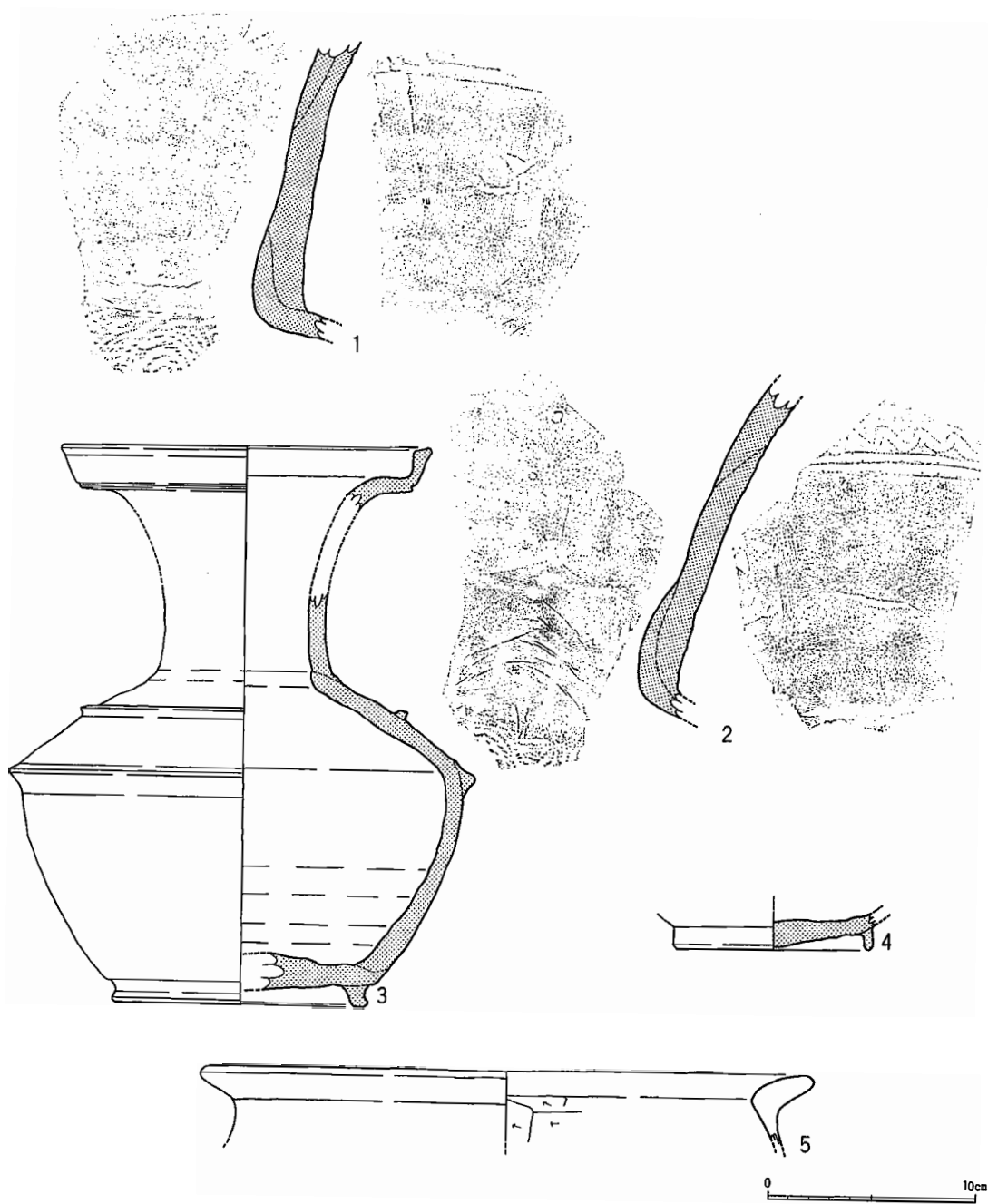
第64図 S D01出土遺物実測図① (1 / 3)



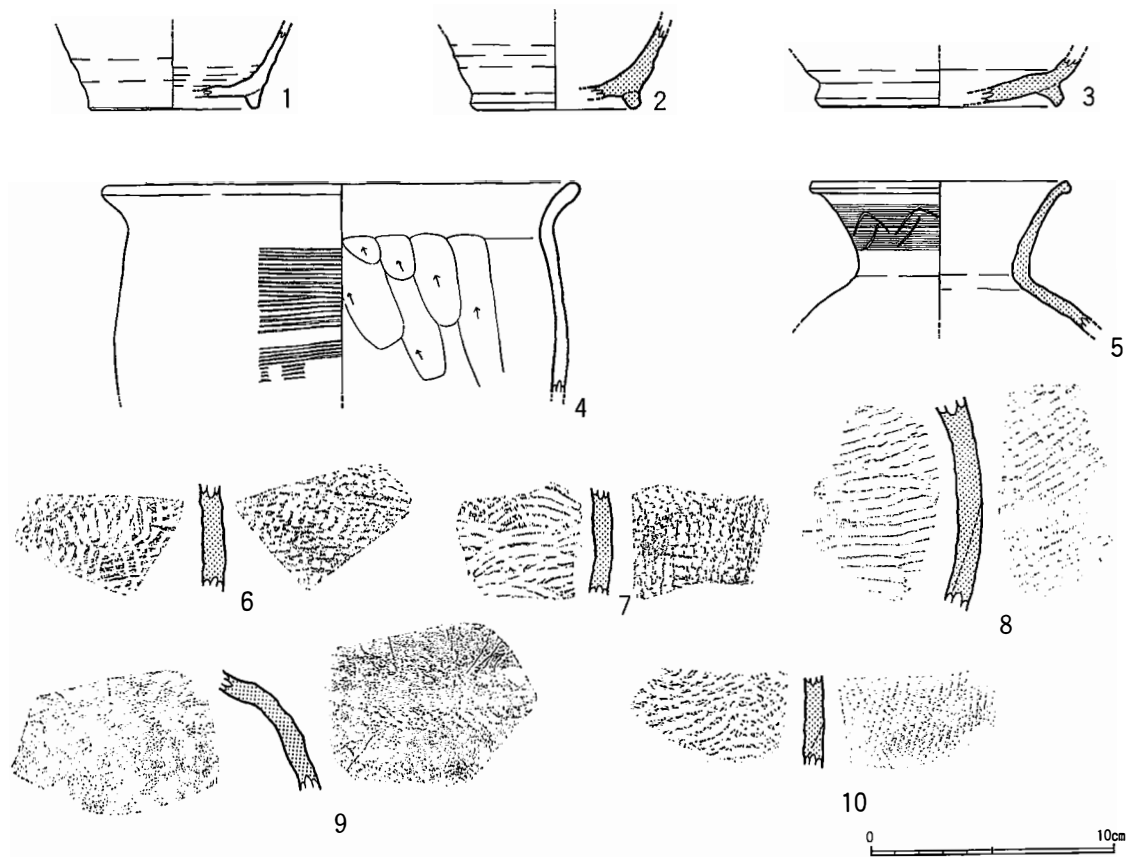
第65図 S D01出土遺物実測図②(1/3)



第66図 S D01出土遺物実測図③ (1 / 3)



第67図 S D01出土遺物実測図④ (1 / 3)

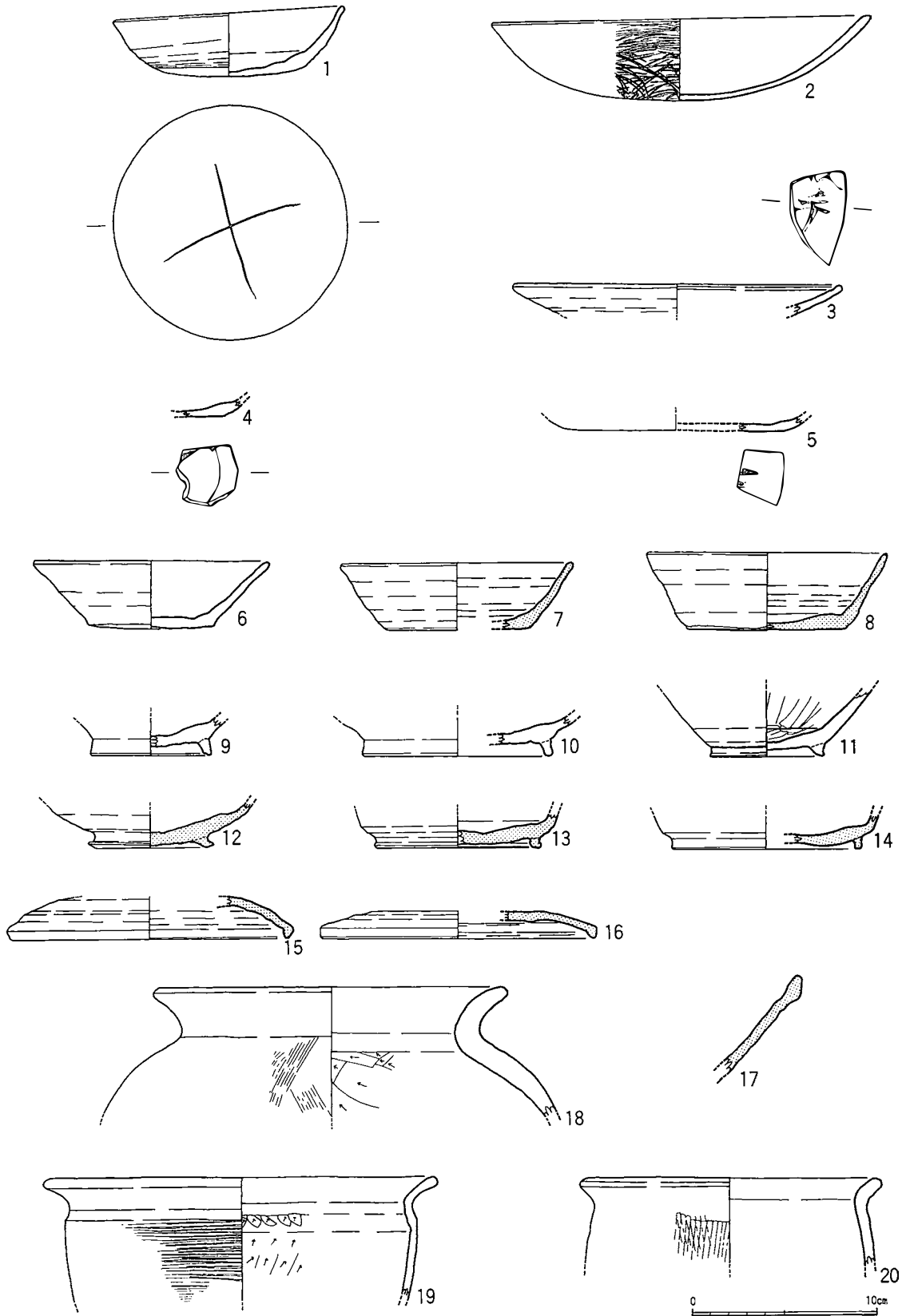


第68図 S D02出土遺物実測図 (1 / 3)

第2節 その他の遺物

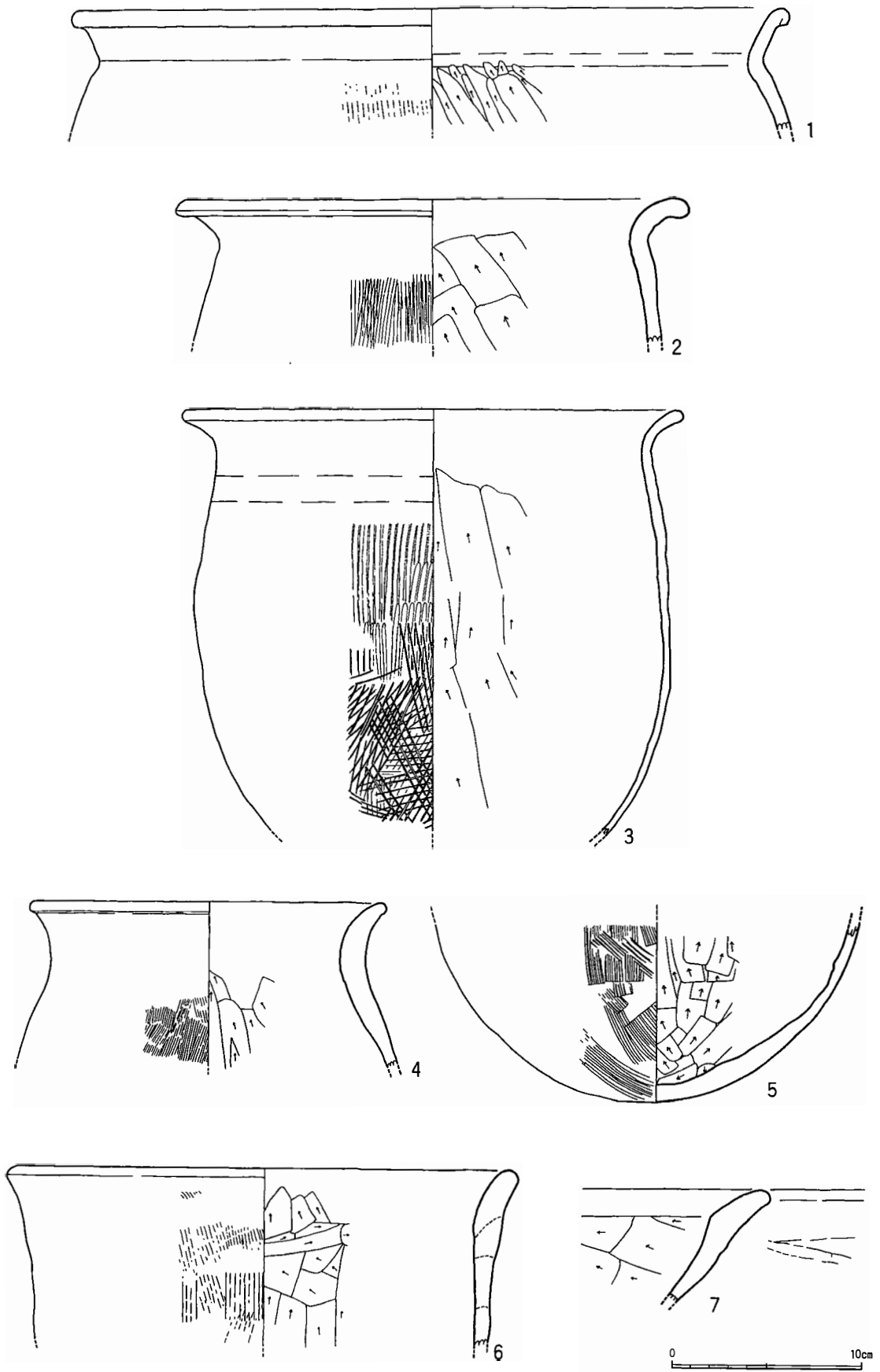
杉の本遺跡は削平が激しく良好な包含層は存在しないが、掘立柱建物として建たなかった柱穴や若干の包含層から遺物が出土している。ここでは実測に足る遺物を紹介する。

- 69-1 土師器坏。口径12.4cm。器高3.8cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるが細かい。内外面とも回転ナデ調整。見込みは横ナデを1回。底部にはヘラ記号がある。丹が塗ってあり、色調は橙色。
- 69-2 土師器皿。口径20.6cm。器高4.8cm。胎土は砂粒が少なく細かい。大型の皿で、底部は丸く整形。外面は丁寧なヘラ磨き。内面は、口縁部付近は回転ナデ調整だが、見込みは丁寧な静止ナデ。色調は橙色。
- 69-3 土師器皿。復原口径17.8cm。胎土は砂粒が少なく細かい。大型の皿。内外面とも回転ナデ調整。内面口縁部付近に墨書があり、「□手」と読むことができ、最初の字は判読できない。色調は橙色。
- 69-4 土師器坏。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少ないがやや粗い。内外面とも回転ナデ調整。見込みは横ナデを行う。底部に墨書がある。色調は橙色。
- 69-5 須恵器坏。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が少なく細かい。内外面は回転ナデ調整。焼きが甘く、色調はにぶい橙色。
- 69-6 土師器坏。復原口径12.8cm。器高3.6cm。底部はヘラ切り。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。体部は開く。内外面は回転ナデ調整で、見込みは横ナデを数回行う。色調は橙色。
- 69-7 須恵器坏。復原口径12.7cm。器高3.5cm。底部はヘラ切り。体部は開く。内外面は回転ナデ調整。胎土は砂粒が少なく細かい。色調は灰白色。
- 69-8 須恵器坏。復原口径13.0cm。器高4.2cm。底部はヘラ切り。体部は開く。胎土は砂粒が少なくやや細かい。内外面は回転ナデ調整。色調は灰白色。
- 69-9 土師器碗。底部はヘラ切り。高台は底面端に付く。胎土は砂粒が混じりやや粗い。内外面は回転ナデ調整で、見込みを1回横ナデする。色調は橙色。
- 69-10 土師器碗。底部はヘラ切り。高台は底部のやや内側に付く。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。見込みは数回横ナデをする。色調はにぶい橙色。
- 69-11 黒色土器碗。いわゆる内黒土器。底部はヘラ切り。高台は幅広で、底面端に付く。胎土は砂粒は少ないがやや粗い。見込みは数回横ナデをする。体部内面は縦方向にナデ。色調は、外面がにぶい黄橙色で、内面は黒色。
- 69-12 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は幅広で低く、底面内側に付く。高台端部は外に開く。胎土は砂粒が少なく細かい。良く焼き締まる。内外面とも回転ナデ調整で、見込みは数回なでる。色調は灰色。
- 69-13 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側に付く。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内外面とも回転ナデ調整で、見込みは数回ナデする。色調は灰色。
- 69-14 須恵器坏身。底部はヘラ切り。高台は底面のやや内側に付く。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は外面が灰色、内面は灰色。
- 69-15 須恵器坏蓋。復原口径15.0cm。胎土は砂粒が混じり粗い。内外面とも回転ナデ調整。色調は暗灰色。
- 69-16 須恵器坏蓋。復原口径15.1cm。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色。
- 69-17 須恵質土器捏鉢。東播系の製品で口縁部の破片。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。内外面とも回転ナデ調整。色調は外面が灰白色で、口唇部は暗灰色。
- 69-18 土師器壺。復原口径18.9cm。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。口縁部は大きく外反する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は斜め上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調は橙色。
- 69-19 土師器甕。復原口径21.2cm。胎土は砂粒が混じるがやや細かい。口縁部は大きく外折する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は横方向にハケ目調整。色調はに

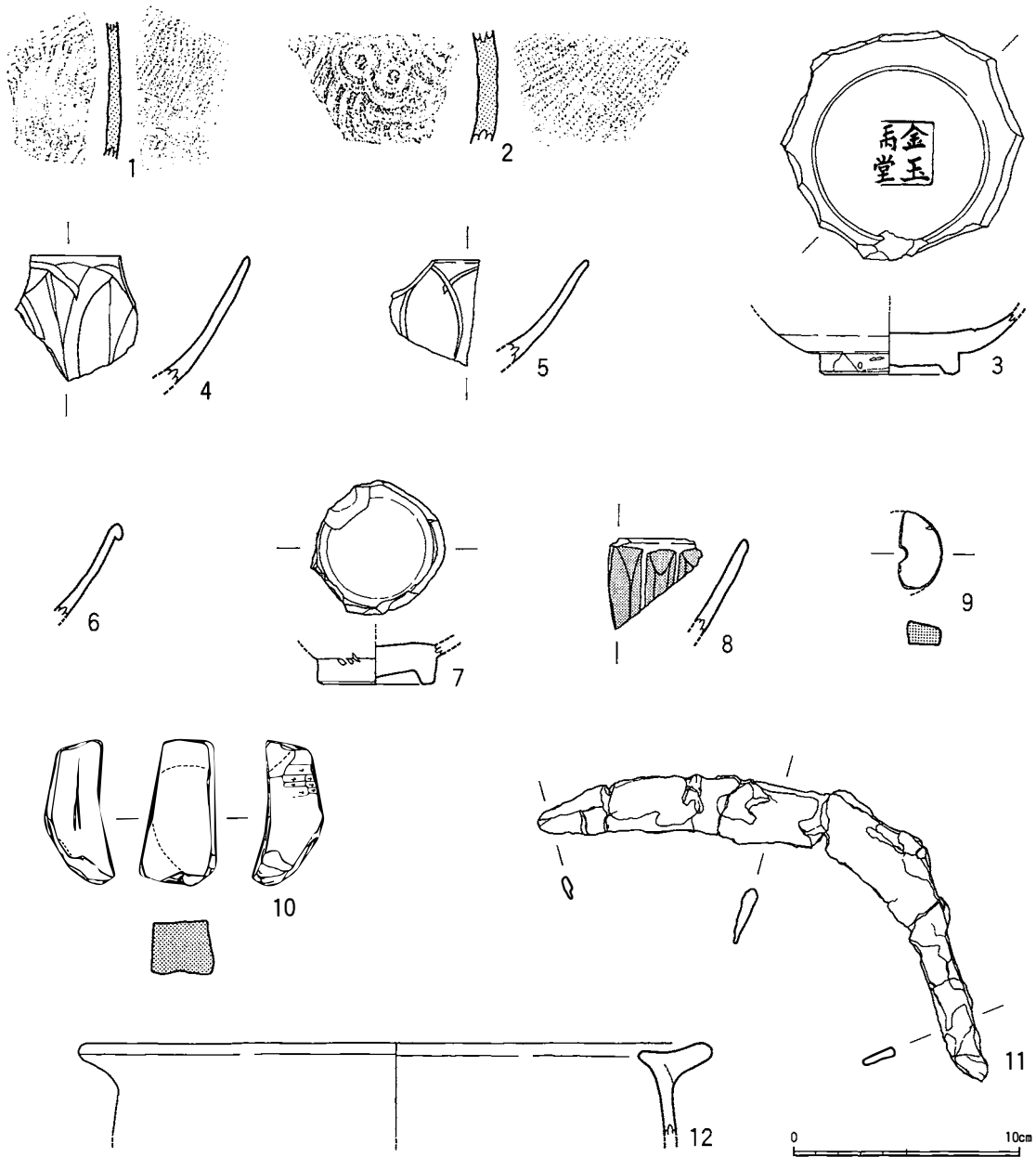


第69図 その他出土遺物実測図①(1/3)

第2節 包含層に伴う遺物



第70図 その他出土遺物実測図② (1 / 3)



第71図 その他出土遺物実測図③(1/3)

ぶい橙色。

69-20 土師器甕。復原口径15.6cm。胎土は砂粒が混じるがやや粗い。口縁部は緩く外折し、張り出しが小さい。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調はにぶい橙色。

70-1 土師器甕。復原口径27.4cm。胎土は砂粒が少なくやや細かい。口縁部は緩く外折し、端部を肥圧する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調はにぶい橙色。

70-2 土師器甕。口径25.5cm。胎土は砂粒が少なくやや細かい。口縁部は大きく外折し、端部を曲げる。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調はにぶい黄橙色。

70-3 土師器甕。口径26.2cm。胎土は砂粒が少なくやや細かい。器肉は薄い。口縁部は大きく外折する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調はにぶい黄橙色。

70-4 土師器甕。復原口径18.3cm。胎土は砂粒が

まじりやや粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調はにぶい橙色。

70-5 土師器甕。底部の破片で、胎土は砂粒がまじりやや粗い。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調はにぶい橙色。外面にはカーボンが付着する。

70-6 土師器甕。復原口径26.2cm。胎土は砂粒がまじりやや粗い。口縁部は僅かに外反する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調はにぶい橙色。

70-7 土師器鉢。胎土は砂粒がまじりやや粗い。口縁部は緩く外反する。口縁部内外面はナデ調整。体部内面は上方にヘラ削りを行う。体部外面は縦方向にハケ目調整。色調はにぶい橙色。外面にカーボンが付着する。

71-1 須恵器甕で胴部の破片。胎土は砂粒が少なく細かい。内面は平行当て具痕。外面は平行タタキ。器肉が薄く焼き締まっている。色調は外面は灰黄褐色、内面は灰色。

71-2 須恵器甕で胴部の破片。胎土は砂粒が多くやや粗い。内面は同心円の当て具痕。外面は細かな格子目タタキ。色調は灰色。

71-3 大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類。体部外面はヘラ削りを行い、内外面無文。見込みには「金玉満堂」のスタンプがある。釉調はオリーブ灰色で、畳付き付近まで施釉する。

71-4 大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-bcd類。体部外面はヘラ削りを行い、ヘラの片彫りで蓮弁文を描く。釉調は明青緑色。

71-5 大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-bcd類。体部外面はヘラ削りを行い、ヘラの片彫りで蓮弁文を描く。釉調は灰黄褐色。

71-6 大宰府編年の白磁碗Ⅰ-1類。体部外面はヘラ削りを行い、口縁部は玉縁状に肥圧する。内外面無文。釉調は灰白色。

71-7 大宰府編年の同安窯系青磁碗Ⅰ類。胴部を打ち欠ぎ、高台部分のみを残す。釉調は明緑青色。

71-8 大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2類。体

部外面はヘラ削りを行い、ヘラの片彫りで蓮弁文を描く。釉は厚く、釉調は明青緑色。

71-9 石製の紡錘車で、直径約4.8cm。厚み0.8cm。

71-10 石製の砥石で、片方の端部が欠損しているが、長さ6.2cm。厚み2～3cm。使用面は2面。

71-10 鉄製の鎌で、長さ約25cm。厚み2～1mm。茎の部分も残り、ほぼ完形。

71-11 弥生式土器。黒髪式の甕。口縁部の破片で、胎土は砂粒がまじりるがやや細かい。体部内外面はナデ調整。色調は灰黄色。

第Ⅳ章 自然科学分析

熊本県、杉の本遺跡のテフラ分析

熊本県、杉の本遺跡のテフラ分析

古環境研究所

1. はじめに

世界でも最大規模を誇る阿蘇カルデラは、少なくとも4度の大規模火砕流の噴出によって形成された。そのうち最後(約7-9万年前)に発生した阿蘇4火砕流の噴火はとくに大規模で、火砕流は九州一帯に分布したほか、海を超えて中国地方にまで到達したことが知られている(Matsumoto, 1943, 小野ほか, 1977, Wata-nabe, 1978)。またこのとき火砕流と共に上空高く舞い上がった火山灰は、遠く北海道にも20cm以上の厚さで降灰したことが知られている(町田ほか, 1985)。現在、阿蘇4火山灰(Aso-4)と呼ばれるこの時のテフラ(火山砕屑物、いわゆるテフラ)は日本列島各地で、後期更新世前半の指標として地質学や考古学の編年学的研究に利用されている。

過去にこのような巨大噴火を起こしてきた阿蘇火山は、カルデラ形成以後もほとんど休止することなく噴火活動を続けてきた。その結果カルデラ内部には、中央火口丘群が形成された。そして阿蘇カルデラの内外には、中央火口丘の形成に伴って放出されたテフラが分布することになった。これらのテフラ層の層序を記載するとともにその岩石記載学的な特徴を把握し、それらを過去の時間軸として利用できるようになれば、阿蘇カルデラとその周辺の地形発達の歴史をたどれるようになる。また考古学に応用することにより、遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代を明らかにでき、阿蘇カルデラ内の人々の生活の詳細な歴史を解明することも可能になる。

杉の本遺跡の発掘でも土層断面で多くのテフラ層が認められた。そこで杉の本遺跡とその周辺地域において地質調査やテフラ検出分析さらに屈折率測定を行い、阿蘇カルデラ内とくに南郷谷地域の歴史を明らかにするための基本的な資料の収集を行うことになった。

2. 地質層序

(1) 長陽村喜多

ここでは南郷谷に堆積する火山灰土のうち、最下

位の火山灰土を観察することができた。本地点では葉理が発達した灰色砂層(層厚300cm以上)の上位に、下位より褐色土(層厚17cm)、暗褐色土(層厚33cm)、灰色粗粒火山灰層(Sm-1:層厚28cm)、褐色灰色砂質土(層厚15cm)、黄白色細粒軽石(Sm-2)に富む灰褐色土(層厚12cm, 軽石の最大径2mm)、黒褐色土(層厚6cm)、成層した軽石層(Sm-3, 層厚96cm)、褐色土(層厚5cm)の連続が認められた(図1)。成層した軽石層は、下位より黄色軽石層(層厚29cm)、黄色細粒火山灰層(層厚4cm)、黄色軽石層(層厚35cm)、灰色細粒火山灰層(層厚5cm)、橙色細粒軽石層(層厚23cm)の連続から構成される。

(2) 杉の本遺跡西露頭

本地点では層相から長陽村喜多の成層した軽石層に対比されるテフラの上位の火山灰土中に、多くのテフラ層が認められた(図2)。ここでは、下位より黄橙色軽石層(Sm-3:層厚27cm以上, 軽石の最大径41mm, 石質岩片の最大径22mm)、褐色土(層厚36cm)、上面が起伏に富む黄白色土(層厚4cm)、成層したテフラ層(Sm-4;下部3cm:赤褐色粗粒火山灰層, 上部5cm:黒灰色粗粒火山灰層)、黄灰色砂質土(層厚15cm)、黒灰色粗粒火山灰層(Sm-5:パッチ状, 層厚2cm)、黄灰色砂質土(層厚12cm)、黒褐色粗粒火山灰層(Sm-6, 層厚2cm)、黄灰色砂質土(層厚10cm)、黄色土(層厚4cm)、青灰色粗粒火山灰層(Sm-7, 層厚2cm)、黄灰色砂質土(層厚7cm)、黒褐色粗粒火山灰層(Sm-8, 層厚4cm)、黄灰色砂質土(層厚14cm)、黄褐色土(層厚10cm)、成層したテフラ層(Sm-9, 下位より青灰色粗粒火山灰層:層厚4cm, 赤褐色粗粒火山灰層:層厚2cm, 青灰色粗粒火山灰層:層厚3cm, 赤紫色粗粒火山灰層:層厚3cm, 青灰色粗粒火山灰層:層厚16cm)、黄灰色砂質土(層厚23cm)、赤褐色スコリアに富む黄色土(層厚32cm, スコリアの最大径3mm)、黄灰色砂質土(層厚32cm)、黄色土(層厚10cm)、黄灰色砂質土(層厚23cm)、成層したテフラ層(Sm-10, 暗灰色粗粒火山灰層:層厚3cm, 固結した赤紫色粗粒火

山灰層：層厚 5 cm)、黄褐色砂質土 (層厚56cm)、暗褐色土 (層厚23cm)、黒褐色土 (層厚30cm)、褐色土 (層厚17cm)、暗褐色土 (層厚24cm)、黒色土 (層厚42cm)、垂角礫混じり暗褐色土 (層厚21cm, 礫の最大径150mm)、褐色土 (層厚20cm 以上) の連続が認められた。

(3) 白水村城後

本地点では、暗褐色土 (層厚39cm 以上) の上位に、下位より褐色土 (層厚16cm)、暗褐色土 (層厚26cm)、暗褐色土 (層厚15cm)、黄白色細粒軽石混じり暗褐色土 (層厚10cm, 軽石の最大径 3 mm)、バブル型火山ガラスに富む褐色土 (層厚12cm)、黒褐色土 (層厚54cm)、暗褐色土 (層厚24cm)、黒褐色土 (層厚22cm)、暗褐色表土 (層厚62cm) の連続が認められた (図 3)。

(4) 久木野村六ツ小石古墳群

ここでは黒褐色土 (層厚40cm 以上) の上位に下位より、褐色土 (層厚27cm)、黄色細粒火山灰層 (Sm-11, 層厚 7 cm)、褐色土 (層厚123cm)、暗褐色土 (層厚13cm)、黒色土 (層厚53cm) の連続が認められた (図 4)。

(5) 杉の本遺跡 I-9 グリッド北壁

杉の本遺跡 I-9 グリッド北壁は、奈良時代の遺構が確認された杉の本遺跡の標準的な土層断面である。ここでは砂質黄灰色土 (層厚20cm) とその上位の暗褐色土を不整合に覆って、下位より赤紫色礫混じり褐色土 (層厚43cm)、暗灰色土 (層厚38cm)、暗褐色土 (層厚25cm)、褐色土 (層厚28cm)、灰褐色土 (層厚68cm)、赤紫色土 (層厚 8 cm)、黒褐色表土 (層厚23cm) の連続が認められた (図 5)。これらの土層のうち、褐色土の上面は奈良時代の遺構の確認面とされている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

示標テフラが検出される可能性の大きい杉の本遺跡西露頭、杉の本遺跡 I-9 グリッド、白水村城後、六ツ小石古墳群の 4 地点の土層断面から採取された土壌試料29点について、テフラ検出分析を行い、テフラ粒子の特徴から肉眼で検出できない示標テフラ

の層位把握およびテフラ層中のテフラ粒子の特徴記載を試みた。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料20 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃ で高温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表 1～4 に示す。西露頭ではいずれの試料にも軽石は認められなかった。一方、分析試料のうち試料番号35～8のいずれの試料にも、透明な軽石型の火山ガラスがごく少量ずつ認められた。しかし火山ガラス質のテフラの降灰層準を示すような顕著な火山ガラスの濃集層準は認められなかった。試料番号7より上位の試料には、平板状のいわゆるバブル型の透明な火山ガラスが混じるようになる。さらに試料番号3以上の試料には褐色のバブル型火山ガラスが混じるようになり、とくに試料番号1に火山ガラスの出現ピークが認められるようになる。すなわち西露頭においては、試料番号1に透明や褐色のバブル型火山ガラスで特徴づけられるガラス質テフラの降灰層準があると推定できる。

また試料番号7以上で透明なバブル型ガラスが認められることから、試料番号7付近に透明なバブル型ガラスで特徴づけられるテフラのある可能性も考えられる。ただし火山ガラスの量がごくわずかであることから、このテフラの降灰層準はより下位にあり、本層準に含まれる火山ガラスは再堆積した可能性も考えられる。

一方、I-9 グリッドでは、試料番号2および4に透明や褐色のバブル型火山ガラスがとくに多く認められた。このことから試料番号4付近に透明や褐色のバブル型火山ガラスで特徴づけられるガラス質テフラの降灰層準があると考えられる。

長陽村城後の露頭の試料番号1には、透明や褐色のバブル型火山ガラスがとくに多く認められた。このことから試料番号1に透明や褐色のバブル型火山ガラスで特徴づけられるガラス質テフラの降灰層準があると考えられる。また久木野村六ツ小石古墳群の試料番号1の火山灰層にも透明や褐色のバブル型火山ガラスがとくに多く認められた。このことから

表1 杉の本遺跡西露頭のテフラ検出分析結果

試料	軽石			火山ガラス			テフラ
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
1	-	-	-	++++	bw>pm	透明>褐	K-Ah
2	-	-	-	++	bw>pm	透明>褐	
3	-	-	-	++	bw>pm	透明>褐	
4	-	-	-	+	bw>pm	透明	
5	-	-	-	+	bw>pm	透明	
6	-	-	-	+	bw>pm	透明	
7	-	-	-	+	bw>pm	透明	
8	-	-	-	+	pm	透明	
9	-	-	-	+	pm	透明	
11	-	-	-	+	pm	透明	
12	-	-	-	+	pm	透明	
13	-	-	-	+	pm	透明	
14	-	-	-	+	pm	透明	
15	-	-	-	+	pm	透明	
21	-	-	-	+	pm	透明	
22	-	-	-	+	pm	透明	
24	-	-	-	+	pm	透明	
26	-	-	-	+	pm	透明	
27	-	-	-	+	pm	透明	
29	-	-	-	+	pm	透明	
31	-	-	-	+	pm	透明	
34	-	-	-	+	pm	透明	
35	-	-	-	+	pm	透明	

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない。最大径の単位はmm。bw：バブル型。pm：軽石型。

表2 杉の本遺跡1-9グリッドのテフラ検出分析結果

試料	軽石			火山ガラス			テフラ
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
1	-	-	-	++++	bw>pm	透明>褐	K-Ah
2	-	-	-	+++	bw>pm	透明>褐	
3	-	-	-	+++	bw>pm	透明>褐	
4	-	-	-	+	bw>pm	透明>褐	

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない。最大径の単位はmm。bw：バブル型。pm：軽石型。

表3 杉の本遺跡白水村城後のテフラ検出分析結果

試料	軽石			火山ガラス			テフラ
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
1	-	-	-	++++	bw>pm	透明>褐	K-Ah

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．最人径の単位はmm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表4 久木野村六ツ小石古墳群のテフラ検出分析結果

試料	軽石			火山ガラス			テフラ
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
1	-	-	-	++++	bw>pm	透明>褐	K-Ah

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．最人径の単位はmm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表5 杉の本遺跡の屈折率^{*1}結果

地点	試料	屈折率	
		火山ガラス (n)	斜方輝石 (y)
西露頭	1	1.509-1.515 (1.510-1.512)	-
西露頭	36	-	1.699-1.703 (1.700-1.702)
I-9グリッド	2	1.509-1.515 (1.510-1.512)	-
六ツ小石古墳	1	1.509-1.516 (1.510-1.512)	-

*1：測定は位相差法（新井，1972）による．

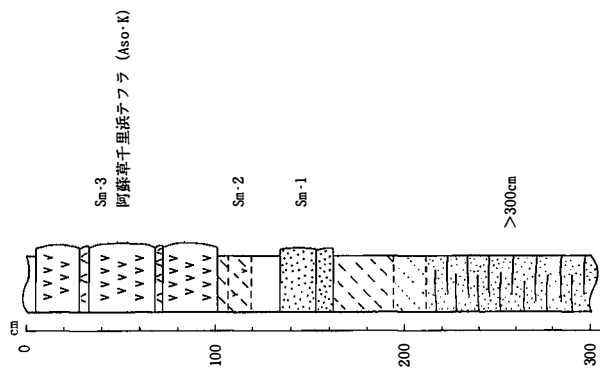


図1 長賜村喜多の地質柱状図
数字は、テフラ検出分析の試料番号。

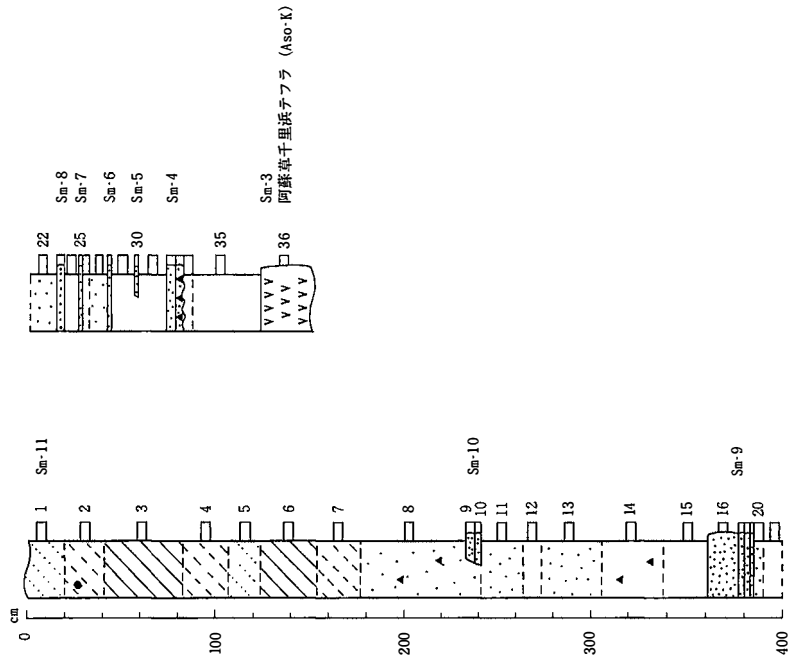


図2 杉の本遺跡西端部の地質柱状図
数字は、テフラ検出分析の試料番号。

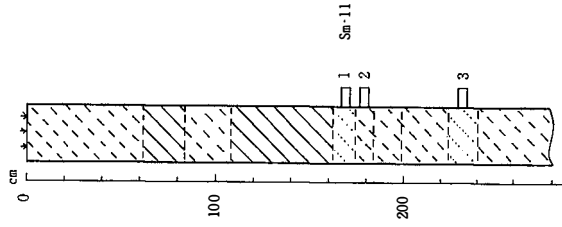


図3 白水村跡後の地質柱状図
数字は、テフラ検出分析の試料番号。

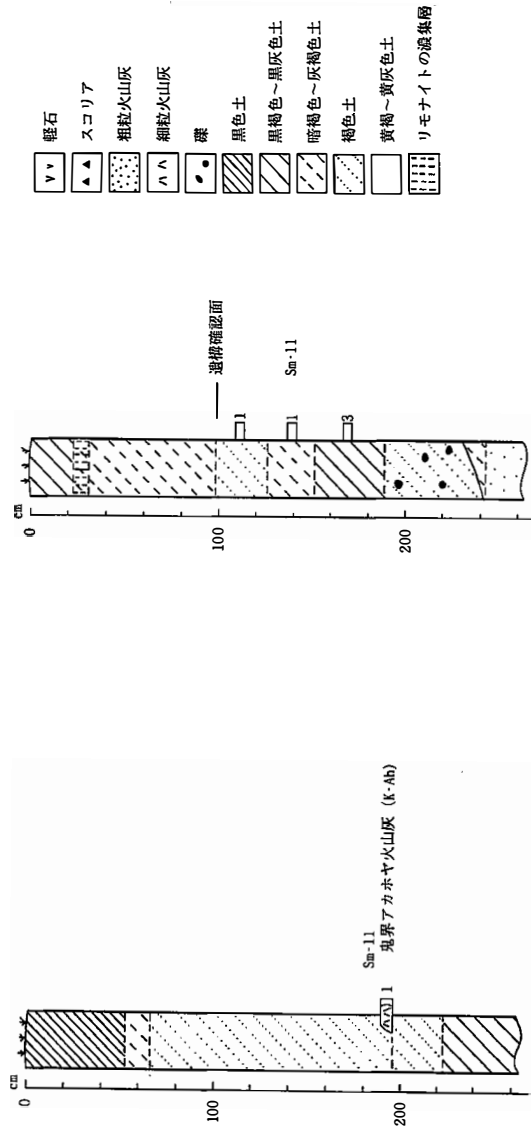


図4 久木野村六子古墳群の地質柱状図
数字は、テフラ検出分析の試料番号。

図5 杉の本遺跡I-9グリッド北壁の地質柱状図
数字は、テフラ検出分析の試料番号。

西露頭試料番号1、I-9グリッドの試料番号4、長陽村城後の試料番号1に降灰層準のあるテフラは、六ツ小石古墳群の試料番号1の火山灰層に由来するものと考えられる。このテフラを仮にSm-11と呼ぶ。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と方法

示標テフラとの同定精度を向上させるために、杉の本遺跡西露頭、I-9グリッド、六ツ小石古墳群で採取された4点の試料について、含まれるテフラ粒子の屈折率測定を行った。測定は位相差法(新井, 1972)による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表5に示す。杉の本遺跡西露頭で認められるSm-3には、斜方輝石や単斜輝石さらに磁鉄鉱などの重鉱物が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は1.699-1.703で、その中央値は1.700-1.702である。また試料番号1付近に降灰層準のあるSm-11には斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱などの重鉱物が少量含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は1.509-1.515、中央値は1.510-1.512である。I-9グリッドの試料番号2にも斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱などの重鉱物が含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は1.509-1.515、中央値は1.510-1.512である。さらに六ツ石古墳群のSm-11(試料番号1)にも斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱などの重鉱物が少量含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は1.509-1.516、中央値は1.510-1.512である。後三試料における含まれる重鉱物の種類が類似していること、さらに火山ガラスの屈折率がほぼ一致することは、前述のテフラ検出分析による同定を支持している。

5. 考察—示標テフラとの同定

今回の分析によって認められた多くのテフラ層のうち、Sm-3は降下軽石層であること、斜方輝石や単斜輝石で特徴づけられること、さらに斜方輝石の屈折率などから、約2.7万年前に阿蘇火山草千里浜火口から噴出した阿蘇草千里浜テフラ(Aso-K, 高田・渡辺, 1988, 高田, 1989, 早川・井村, 1991,

町田・新井, 1992)に同定される。またSm-11は、透明や褐色のバブル型火山ガラスに富むこと、また火山ガラスの屈折率などから、約6,300年前に南九州鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井, 1978)に同定される。Sm-11を除くいずれのテフラも、その層相などから阿蘇中央火口丘起源のテフラの可能性が大きい。なお本地域には、これらのテフラのほかに、約2.2-2.5万年前に南九州始良カルデラから噴出した広域テフラ、始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976)の分布することがすでに知られている(高田・渡辺, 1988)。今回の分析では杉の本遺跡西露頭の試料番号7付近に降灰層準のある可能性がごくわずかに考えられたのみで、降灰層準を明確に把握することはできなかった。阿蘇カルデラ中央火口丘起源のテフラ層序を確立するとともに、今後他の地点で分析を行い旧石器時代の重要な示標テフラATの降灰層準を明らかにしておく必要がある。

6. まとめ

杉の本遺跡における発掘調査では、土層断面中に多くの示標テフラが認められた。土層断面についてテフラ層の記載さらに周辺露頭での記載と試料採取を行い、室内においてテフラ検出分析ならびに屈折率測定を行った結果、合計11層(下位よりSm-1~11)のテフラ層が検出された。これらのうちSm-3は阿蘇草千里浜テフラ(Aso-K, 約2.7万年前)に、Sm-11は鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前)に同定された。そのほかのテフラはいずれも阿蘇中央火口丘起源のテフラの可能性が大きいと考えられる。今後阿蘇中央火口丘起源のテフラの層序の確立を行うとともに、南九州始良カルデラ起源の広域テフラATの降灰層準を把握する必要がある。このようなテフラに関する研究成果は、阿蘇南郷谷における地形発達史や歴史を知る上で重要な資料となる。

文献

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。

第四紀研究, 11, p. 254-269.

早川由紀夫・井村隆介 (1991) 阿蘇火山の過去 8 万年の噴火史と1989年の噴火.

火山, 第 2 集, p. 25-35.

Matsumoto, T. (1943) The four gigantic caldera volcanoes of Kyushu. J.

Geol. Geogr., 19, p. 1-57.

小野晃司・松本征夫・宮久三千年・寺岡易司・神戸信伸 (1977) 竹田地域の地質.

地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅).

地質調査所, 156 p.

町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰 - 始良 T n 火山灰の発見とその意義.

科学, 46, p. 339-347.

町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアカホヤ火山灰.

第四紀研究, 17, p. 143-163.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会.

町田 洋・新井房夫・百瀬 貢 (1985) 阿蘇 4 火山灰 - 分布の広域性と後期更新世示標層としての意義 - .

火山, 30, p. 49-70.

高田英樹 (1989) 阿蘇火山中央火口丘群のテフラ概報. 熊本地学会誌, n o. 90, p. 8-11.

高田英樹・渡辺一徳 (1988) 阿蘇火山中央火口丘群の降下火砕物 (1).

日本火山学会1988年春季大会予稿集,

火山, 33, p. 224-225.

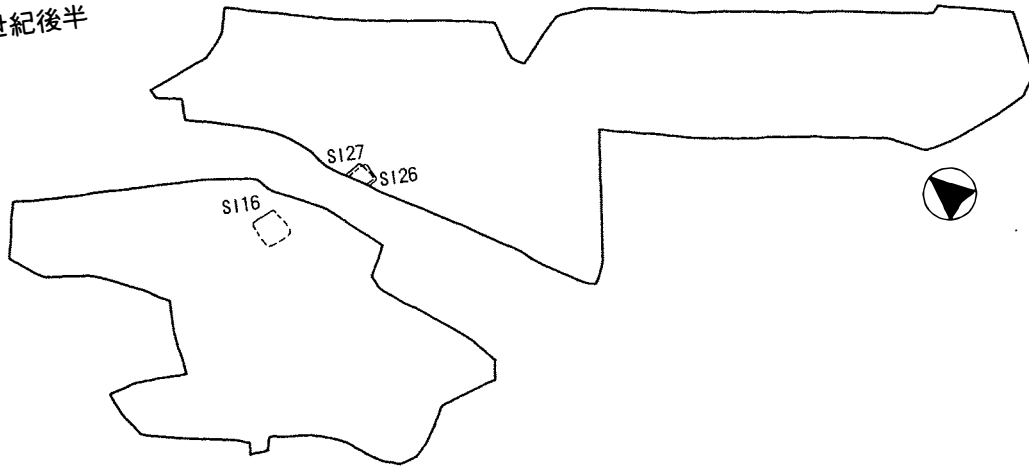
Watanabe, K. (1978) Studies on the Aso pyroclastic flow deposits in the region to the west of the Aso caldera, southwest Japan, I. Geology,

Mem. Fac. Educ. Kumamoto Univ. (Natural Science),

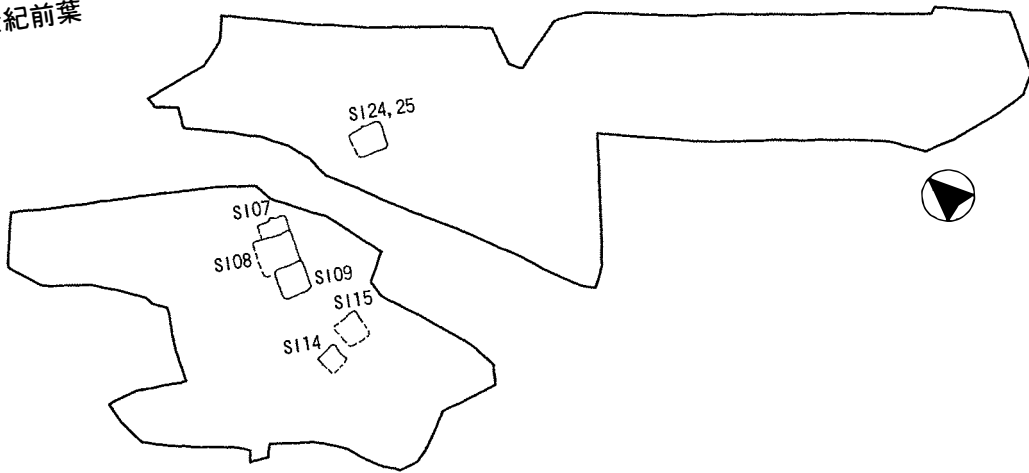
27, p. 97-120.

第V章 ま と め

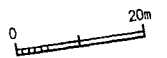
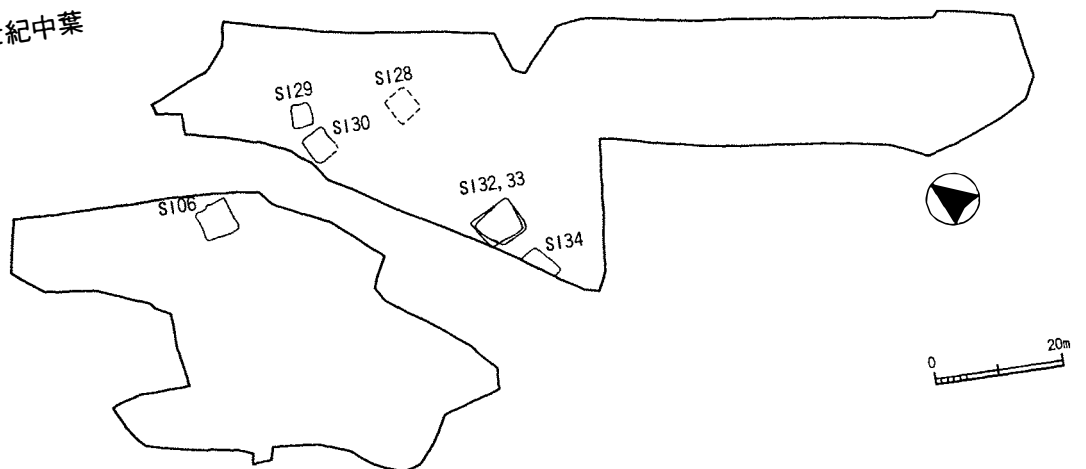
① 7世紀後半



② 8世紀前半

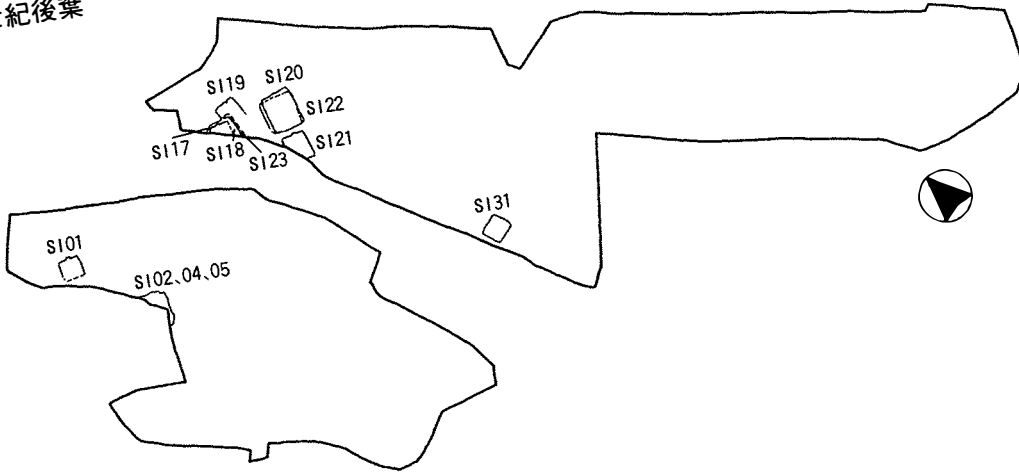


③ 8世紀中葉

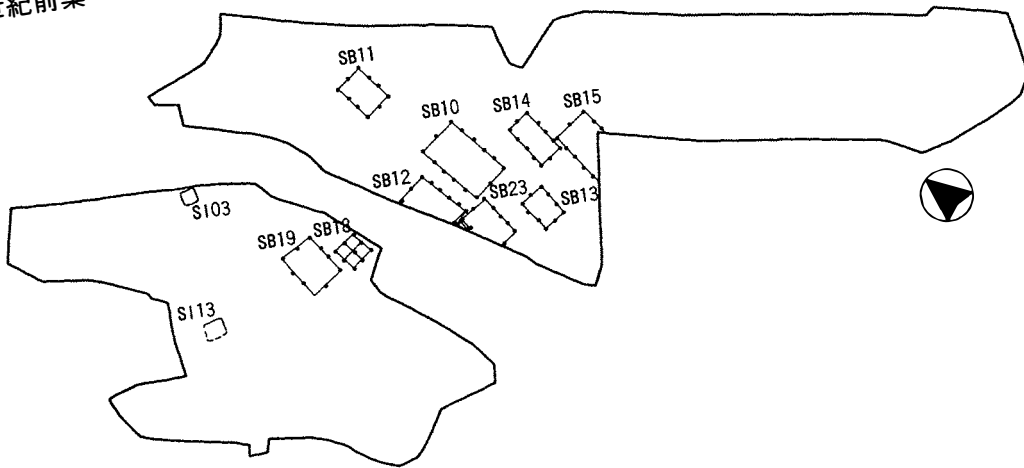


第72図 遺構変遷図①

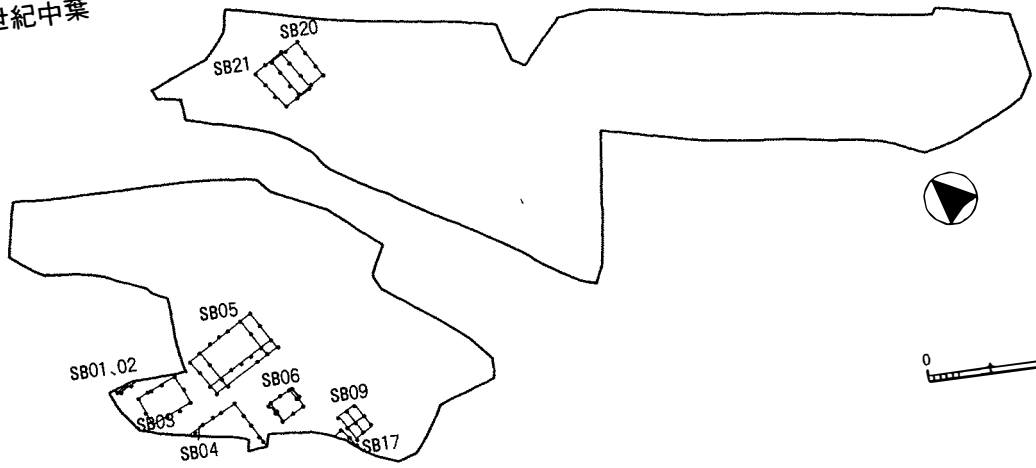
④ 8世紀後葉



⑤ 9世紀前葉

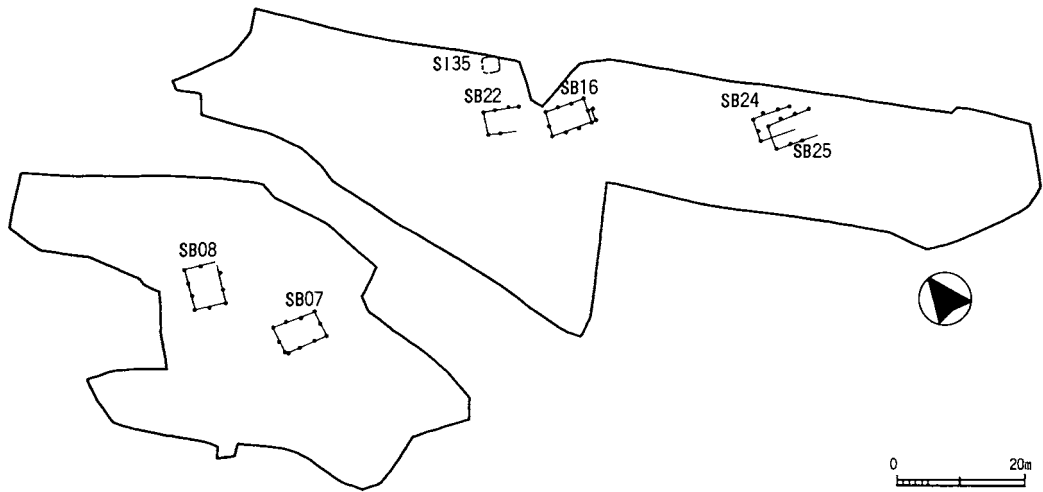


⑥ 9世紀中葉



第73図 遺構変遷図②

⑦11～13世紀



第74図 遺構変遷図③

本遺跡は竪穴住居35基、掘立柱建物25棟からなる、古代から中世にかけての集落跡である。集落の営まれた中心の時期は8～9世紀であると思われるが、ここではその遺構の変遷の様子と、遺跡の性格について若干の考察を加えてみたい。

1 遺構の変遷

遺構上面の包含層より、古代の遺物に混じって縄文晩期の土器や石鏃、13世紀代の青磁碗などが出土し、本遺跡の時期幅は縄文晩期より中世前期とすることができる。だが、本遺跡で明確な遺構をともなつて現れる人々の営みの痕跡は7世紀後半からで、主に古代を中心とする集落遺跡とすることができる。

遺構の変遷を考えるにあたって、出土遺物や建物のプラン、方向、埋土の状況、斬り合い関係を考慮して変遷図を作成した(第72～74図)。遺構のなかには出土遺物が少ないものもあり、特に掘立柱建物の埋土中の遺物には評価の問題もあるが、前述の総合的な見地から遺構の変遷を考えた。

①7世紀後半にあたる時期である。S I 16、短い時間に重複したと思われるS I 26、27はこの時期のものである。3基ともN15° Eでプランの軸方向を一にする。柱数は異なるが、面積に応じたものであろう。住居の平均面積は8.82m²である。比高差のあるI区とII区の境に3基確認できたがのみで、集落の

広がりには不明であるが、規模の小さな集落であったと思われる。

②8世紀前葉にあたる時期である。重複があるがS I 07、08、09とS I 14、15、24、25がこの時期にあたる。ここでも比高差のあるI区、II区の境に集中をしている。S I 14以外はほぼN30° Eの方角にプランの軸をとる。柱数は4本で、S I 08が38m²ほどの大型住居である。住居の平均面積は22.6m²である。S I 07～09の切り合いがあるが2～3基が同時期に存在したと思われ、2つの単位をみることができる。

③8世紀中葉にあたる時期である。S I 06、28、29、30、32、33、34がこの時期にあたる。方位はI区のS I 06の軸が東に振るが、他はほぼN15° E前後である。柱数は4本で、住居の平均面積は25.1m²である。長方形のプランをもつ住居が現れ、①②期の集落の空間を取り巻くように住居が拡散し、3つの単位をみるることができる。

④8世紀後葉にあたる時期である。すなわちS I 01、02、04、05、17、18、19、20、21、22、23、31がそれにあたり、1地点での重複が激しい。方位はS I 01、02、04、05、21がN30° E前後、S I 17がN0° E、他はN15° E前後とばらつく傾向にある。柱数は4本で、住居の平均面積は19.3m²である。大型の住居は長方形のプランを持つ。集落の配置は③期と同じ状況で、①②期の住居跡を取り巻くように

集落が営まれ、3つの単位を見ることができる。

⑤ 9世紀前葉にあたる時期である。すなわちS I 03、13、S B 10、11、12、13、14、15、18、19、23がそれにあたり、Ⅱ区を中心に軸をほぼ同じくして並ぶ。方位はN 5° E前後で南北棟建物を中心とする。住居の平均面積は38.0㎡でS B 10、15などの大型建物を中心とした集落である。S I 03、13などといった規模の小さな竪穴住居も併存しているが、場所的には離れている。

⑥ 9世紀中葉にあたる時期である。S B 01、02、03、04、05、06、09、17、20、21がそれにあたる。建物の中心はⅠ区西側に移り、規模の大きな建物が整然と並ぶ。方位はE 15° S前後で、東西棟建物を中心とする。住居の平均面積は37.5㎡であるが、⑤期に比べて柱穴が大きくなり、集落の規模の拡大や質の向上を看取できる。中でも3面庇を持つS B 05は中心的な建物で、大型建物が西方向に広がるものと考えられる。

⑦ 11～13世紀にあたる時期である。S I 35、S B 07、08、16、22、24、25がそれにあたる。建物の桁行きの軸が大きく東に振れており、建物も柱穴が小さく、貧弱である。方位はE 20～3° Sで東西棟建物を中心とする。住居の平均面積は26.2㎡である。

2 集落の性格

本遺跡に集落の形成された時代は7世紀後半より13世紀半ばまでということが出来る。すなわち、いわゆる白鳳時代から鎌倉時代までであるが、言い換えれば律令制社会より荘園制社会への移行期ということができる。そのような社会の移行期の様子を、村落の変化という観点で読みとり、考察することが可能であると思われるが、ここでは本調査の事例によって読みとることのできる点をいくつかあげて、その糸口を指摘するに留めたい。

律令制国家体制の整備に伴い、地方行政組織は国一郡一里に縦割りされ整備されたと言われる。末端に位置づけられた里は50戸を単位に設定され、里長がおかれたとされる。戸の単位に目を移すと、50戸で1郷(里)を形成し、その中の10人前後の小家族からなる単位を房戸と呼んでいる。律令制国家は、自然村落を郷戸に編成し、租庸調雑徭などの課税の

単位としたとされるが、これが当時の実体に合うものなのか、法制上の擬制的なものなのか議論のあるところである。

遺跡形成の当初(①期)は2戸ほどの住居から形成されており、②～④期にかけては原初集落を取り囲むように戸数を増やしながら集落が拡大していることがわかる。この時期も2～3戸の住居をグループにまとめることが可能で、直系親族を基本に単位を形成したものと思われる。住居には立て替えて繰り返すものとそうでないものがある。⑤期にはいると小規模な竪穴住居を残して大半が掘立柱建物に移行する。竪穴住居から掘立柱建物への移行は機内では7世紀初めごろ、北部九州では8～9世紀にかけて行われるとされ、肥後においては9世紀前半に行われるとされる(網田1997)。本遺跡でもその傾向を伺うことできるようである。建物の規模も大きく、これまでの住居の空白地に集中して建てている。⑥期に入ると全てが掘立柱建物に移行し、規模の大きな建物を中心に集落が形成されている。また、⑤期と同様に、これまでの住居空白地を選んで建てているところも特徴的である。⑦期は細かく時期を限定することができないが、古代末から中世にかけての建物群であると思われる。掘立柱建物も2×3間の小規模なものになり、集落は縮小している。

杉の本遺跡での集落の移り変わりを見て行くと、以下の点に要約できようであろう。

- (1) 班田農民のものと思われる小規模な集落から、戸数が増え集落が拡大して行く。1房戸の単位の集落と推測され、傍系親族の拡大を看取できるのではないかと。
- (2) 9世紀初めに集落規模が拡大し、建物も掘立柱建物へと移行する。集落拡大の背景には、公地公民制の崩壊と荘園制の浸透、生産力の増大をあげることができる。
- (3) 9世紀以降の集落は、開墾によって生産力を高めた開発領主によって営まれたものと推測される。
- (4) 本遺跡においても古代の土器の様相は、基本的には熊本平野と同質で、回転台土師器の普及は8世紀後半になる。

第2表 S I 観察表

S I 名	グリッド	規		面積 (m ²)	高さ (cm)	型式	方位	柱			竈			貯蔵穴	
		長径 (m)	短径 (m)					本数	直径 (cm)	高さ (cm)	有無	位置	有無	位置	
S I 01	F-2	3.30	3.00	9.90	15	正方形	N30° E	2	25~40	40~60	○	北	○	北	
S I 02	E-3・4	6.00	(3.20)	(36.0)	15		N27° E				○	北	○	北	
S I 03	G-4	2.40	2.40	5.76	15	方形	N5° E						○	東	
S I 04	E-3・4	4.80	(2.60)	(23.4)	15		N27° E				○	北	○	東	
S I 05	E-3・4	4.00	(3.20)	(16.00)	15		N29° E				○	北	○	東	
S I 06	F-G-4・5	5.40	5.20	28.08	15	正方形	N30° E	4	15~23	48~52	○	北	○	北東	
S I 07	F-5・6	4.60	(2.60)	(21.16)	20	方形	N26° E	3(4)	32~52	28	○	北	○	北東	
S I 08	F-5・6	6.20	(4.80)	(38.44)	12	方形	N30° E	4	40	24~34	○	北	○	北東	
S I 09	E-5・6	4.80	4.80	23.04	10	正方形	N27° E	4	40	60~70	○	北	○	北東・北西	
S I 10	E-F-6				0	方形?	N65° E	4	30~36	30~80	○		○	南東	
S I 11	E-F-6				0	方形?	N65° E	4	32	50~60	○		○	南東	
S I 12	E-F-6				0	方形?	N45° E	4	28~40	16~36	○		○	南東	
S I 13	D-E-4	3.00	2.80	8.40	16	正方形	N30° E								
S I 14	D-6	3.40	3.40	11.56	20	正方形	N0° E	4	24~32	36	○	北	○	北東	
S I 15	D-6・7	(6.00)	5.40	(36.0)	16	方形	N19° E	4	32~60	32~48	○	北	○	北東	
S I 16	F-5・6	4.20	(3.00)	(17.64)	20	方形	N15° E	2(4)	24~32	28~40	○	北	○	北東	
S I 17	H-5	3.40	(3.40)	(11.56)	20	長方形	N0° E	4	24~32	36	○	北	○	北東	
S I 18	H-5	3.80	(3.60)	(14.44)	20	方形	N15° E	(4)			○		○	北東	
S I 19	H-5	3.60	(2.20)	(12.96)	20	方形	N15° E	2(4)	24~28	28~32	○	北	○	北東	
S I 20	H-6	6.00	4.80	28.80	20	長方形	N15° E	4	28~32	48~52	○	北	○	北東	
S I 21	G-6・7	5.50	3.70	20.35	16	長方形	N25° E	3(4)	32~36	20~40	○	北	○	北東	
S I 22	H-6	5.40	5.00	27.00	20	正方形	N15° E	4	28~32	48~52	○	北	○	北東	
S I 23	H-5					方形	N15° E								
S I 24	G-7	5.20	4.40	22.80	40	長方形	N30° E	4	24~32	32~60	○	北	○	北東	
S I 25	G-7	4.40	4.00	17.60	40	長方形	N30° E	4	24~32	32~60	○	北	○	北東	
S I 26	G-F-7	2.10	(1.50)	(4.41)	10	方形	N15° E	2(4)	12~16	14~20	○	北	○	北東	
S I 27	G-F-7	2.10	(1.50)	(4.41)	10	方形	N15° E	2(4)	12~16	14~20	○	北	○	北東	
S I 28	H-7・8	4.40	4.40	19.36	0	長方形	N7° E	4	30~45	25~50	○	北	○	北東	
S I 29	H-6	3.60	(1.20)	(12.96)	10	方形	N16° E	2(4)	24	24	○		○	北東	
S I 30	G-6・7	(4.60)	(3.00)	(21.16)	10	方形	N15° E	2(4)	40~48	32~40	○		○	北東	
S I 31	E-F-9	3.80	3.30	12.54	7	長方形	N12° W	4	35~40	50	○	北	○	北東	
S I 32	E-F-9	6.50	5.50	35.75	0	長方形	N5° E	4	30~50	45~60	○		○	北東	
S I 33	E-F-9	(5.00)	(5.00)	(25.00)	0	正方形	N14° E	4	30~40	40~70	○		○	北東	
S I 34	E-9・10	5.80	(3.00)	(33.64)	0	方形	N8° E	2(4)	25~30	55~75	○		○	南東	
S I 35	I-9	2.70	2.40	6.48	30	長方形	N36° E								

第3表 SB観察表

SB名	グリッド	間数	桁長		梁長		向き	型式	方位	庇	桁行平均		梁間平均		柱穴直径	柱穴深さ	柱痕跡	重	複	
			m	尺	m	尺					m	尺	m	尺						cm
SB01	D-3	(2)									(等)	(2.0)	(6.7)	(等)	(2.0)	(6.7)	56	60~80	20~28	SB02
SB02	D-3	(2)									(等)	(2.0)	(6.7)	(等)	(2.0)	(6.7)	56	60~80	20~28	SB01
SB03	C-D-3・4	4X2	6.4	21.3	5.2	17.3	東西	側柱	E15°S		等	2.1	7.0	等	2.7	9.0	28~44	16~32		
SB04	C-4・5	(4)X(3)	(7.6)	(25.3)	(6.8)	(22.7)	東西	側柱	E13°S		不等	1.9	6.3	不等	2.3	7.6	72~80	60~100	28~30	
SB05	C・D-E-4・5	4X2	12	40	6.8	22.7	東西	側柱	E13°S	東西南	不等	2.0	6.7	等	2.6	8.7	60~80	30~100	25~30	S I 13
SB06	C-5	2X2	4.2	14.0	3.5	11.7	東西	側柱	E15°S		等	2.1	7.0	等	1.8	6.0	60~70	50~90	24~28	
SB07	D-E-5・6	3X2	7.0	23.3	4.4	14.7	東西	側柱	E20°S		不等	2.3	7.7	不等	2.2	7.3	32~60	20~36	18	S I 15
SB08	E-F-4・5	3X2	6.5	21.7	5.0	16.7	南北	側柱	N27°E		不等	2.1	7.0	不等	2.5	8.3	22~52	20~40	14~24	
SB09	B・C-6	2X2	5.0	16.7	3.1	10.3	南北	総柱	N12°E		不等	2.3	7.7	等	1.6	5.3	20~30	12~40		S X01
SB10	F・G-8・9	5X2	11.4	38.0	6.5	21.7	南北	側柱	N3°E		不等	2.3	7.7	等	3.3	11.0	50~60	20~65	20~24	
SB11	H-7・8	3X2	6.5	21.7	4.6	15.3	南北	側柱	N2°E		不等	2.2	7.3	不等	2.3	7.7	36~40	16~36	16	S I 28
SB12	F-7・8	5X2	8.8	29.3	5.2	17.3	南北	側柱	N2°E		不等	1.8	6.0	等	2.7	9.0	56~60	24~56	14~24	(SB23)
SB13	E-F-9・10	3X2	5.4	18.0	3.8	12.7	南北	側柱	N10°E		不等	1.8	6.0	不等	1.9	6.3	50~60	12~44	18~24	
SB14	F-G-9・10	4X2	7.7	25.7	4.0	13.3	南北	側柱	N6°E		不等	1.9	6.4	不等	2.0	6.7	40~44	12~32	16	
SB15	F-G-10・11	4X2	8.4	28.0	6.2	20.7	南北	側柱	N7°E		不等	2.1	7.0	不等	3.1	10.3	30~44	12~20	20	
SB16	H-10・11	3X2	6.5	21.7	3.8	12.6	東西	側柱	E23°S	東	不等	2.2	7.2	不等	1.9	6.3	24~36	16~36	12	
SB17	B・C-6	(2)									(不等)	(1.8)	(6)	(不等)	(1.8)	(6)	80~120	90	28	
SB18	E-F-6・7	2X2	3.8	12.7	3.8	12.7		総柱	N5°E		不等	1.9	6.3	不等	1.9	6.3	26~40	24~44		
SB19	E-F-5・6	3X2	7.2	24.0	5.5	18.3	南北	側柱	N5°E		不等	2.4	8.0	不等	2.8	9.3	20~40	20~40		S I 08, 09, 10, 11, 12
SB20	H-I-5・6	3X2	6.5	21.7	5.0	16.7	南北	側柱	N10°E		不等	2.2	7.4	不等	2.5	8.3	40~56	60~80	16~20	S B21, S I 20, 22, 29
SB21	H-I-5・6	3X2	7.1	23.7	4.7	15.7	南北	側柱	N8°E		不等	2.3	7.7	不等	2.6	8.7	36~40	50~60	16~20	S B20, S I 20, 22, 29
SB22	H-9	3X1	5.6	18.7	3.5	11.7	東西	側柱	E33°S		不等	1.9	6.3		(1.7)	(5.8)	12~20	10~24		
SB23	E-F-8・9	4X2	7.0	23.3	5.0	16.7	南北	側柱	N5°E		不等	1.8	6.0	不等	2.5	8.3	40~60	30~50	16~24	S I 31, 32, 33
SB24	G-H-13・14	3X2	5.9	19.7	3.7	12.3	東西	側柱	E23°S		不等	2.0	6.6	不等	1.9	6.2	20~28	16~24		S B25
SB25	G-H-13・14	3X2	6.9	23.0	4.0	13.3	東西	側柱	E23°S		不等	2.3	7.8	等	2.0	6.7	20~40	10~30		S B24

第4表 遺物観察表

図版番号	種類	器形	遺構名	口径	底径	器高	高台高	高台径	長さ	色調
05-01	土師器	坏身	SI01	12.80		3.10				橙
05-02	須恵器	坏身	SI01	12.80	8.30	4.20				にぶい橙
05-03	土師器	甕	SI01	(23.60)						にぶい橙
05-04	土師器	甕	SI01	(26.00)						にぶい橙
05-05	土師器	甕	SI01	(26.50)						にぶい橙
06-01	土師器	甕	SI02	(23.70)						にぶい橙
06-02	土師器	坏身	SI02	(12.90)	9.70	3.20				にぶい橙
08-01	土師器	坏	SI03	(12.70)	(9.20)	2.70				橙
08-02	土師器	坏	SI03	(15.50)	(8.60)	4.60				にぶい黄橙
08-03	土師器	坏身	SI03	(13.80)	9.10	2.80				橙
08-04	土師器	甕	SI03	(22.80)						にぶい橙
09-01	須恵器	坏身	SI06	(16.40)	(10.10)	5.70				橙
13-01	土師器	甕	SI07	(19.10)						にぶい橙
13-02	土師器	甕	SI07	(21.00)						にぶい橙
13-03	土師器	坏	SI08	(15.60)						橙
13-04	土師器	鉢	SI08	(28.30)						褐灰
13-05	須恵器	壺 甕	SI09							灰、褐
13-06	須恵器	坏蓋	SI16	13.90		2.55				明オリブ灰
13-07	須恵器	坏蓋	SI16	(13.00)						暗緑灰
17-01	土師坏	坏	SI13		6.80					にぶい橙
17-02	土師器	壺	SI13	(9.00)	8.15	9.50				橙
18-01	須恵器	坏身	SI14		(9.40)					明オリブ灰
19-01	須恵器	坏身	SI15	(16.60)	10.20	6.00				オリブ灰
19-02	土師器	壺	SI15							にぶい橙
19-03	土師器	甕	SI15	12.40						オリブ黒
21-01	土師器	甕	SI17	(25.50)						にぶい橙
21-02	土師器	甕	SI17	(24.80)						橙
21-03	土師器	甕	SI17	(25.20)						にぶい黄橙
21-04	土師器	甕	SI17	(22.50)						にぶい黄橙
21-05	土師器	甕	SI17	(24.00)						にぶい橙
21-06	須恵器	坏蓋	SI17	(16.20)		1.20				オリブ灰
21-07	紡錘車		SI17							明褐灰
21-08	土師器	甕	SI18	(22.70)						にぶい黄橙
21-09	土師器	甕	SI18	(26.90)						にぶい橙
21-10	土師器	甕	SI18, 19	(25.00)						にぶい黄橙
21-11	土師器	坏蓋	SI18, 19	(18.40)	(13.30)	1.60				橙
21-12	土師坏	皿	SI18, 19							橙
23-01	土師器	皿	SI20	(13.20)		3.00				橙
23-02	須恵器	坏蓋	SI20	(16.70)		2.30				灰
23-03	土師器	甕	SI20	(12.50)						にぶい橙
23-04	土師器	甕	SI20	(20.90)						明黄褐色
23-05	土師器	甕	SI22	(25.10)						橙
25-01	須恵器	壺 甕	SI21							灰白
25-02	土師器	甕	SI30	(15.20)						橙
27-01	縄文土器	深鉢	SI24, 25		5.50					黄褐
27-02	鉄器	刀	SI25						14.1	
28-01	土師器	甕	SI24, 25	(25.00)						にぶい黄橙
28-02	土師器	甕	SI24, 25	(20.00)						にぶい黄橙
28-03	土師器	甕	SI24, 25	(17.60)						にぶい褐
28-04	土師器	鉢	SI24, 25	(24.00)						にぶい黄褐
28-05	土師器	甕	SI24							にぶい褐
28-06	須恵器	坏蓋	SI24, 25	15.90		3.50				灰白
28-07	須恵器	坏蓋	SI24, 25	15.30		3.60				灰
28-08	須恵器	坏身	SI24, 25	(12.90)	8.40	5.60				灰
29-01	須恵器	坏蓋	SI27	14.50						灰白
31-01	土師器	甕	SI31	(19.90)						にぶい黄橙
34-01	土師器	坏身	SI32, 33	13.90	8.30	3.00				橙
34-02	土師器	坏身	SI32, 33	13.80	11.10	3.40				灰褐
34-03	土師器	坏身	SI32, 33	13.50	10.80	3.50				橙
34-04	土師器	坏身	SI32, 33	14.20	12.30	3.80				灰褐
34-05	土師器	坏身	SI32	13.40	11.00	3.70				灰褐
34-06	須恵器	皿	SI32, 33	17.50	14.80	2.00				緑灰
34-07	須恵器	坏身	SI32		(8.40)					灰白
34-08	須恵器	坏蓋	SI32, 33	(15.20)		1.30				灰白
34-09	須恵器	坏蓋	SI32, 33	13.80		3.30				灰白
34-10	土師器	甕	SI32, 33	(22.40)						にぶい黄橙
35-01	須恵器	坏身	SI34	12.50	7.40	3.90				青灰
59-01	土師器	坏	SB01							橙
59-02	須恵器	壺	SB01							暗赤
59-03	土師器	甕	SB04	(14.00)						にぶい黄橙
59-04	土師器	甕	SB05	(21.00)						にぶい黄橙
59-05	須恵器	坏身	SB05		(9.80)			(9.8)		青灰
59-06	須恵器	壺	SB06	(8.80)						明褐
59-07	土師器	坏	SB10	(12.60)	7.80					橙
59-08	土師器	坏身	SB10	(14.00)	(9.70)					橙

図版番号	種類	器形	遺構名	口径	底径	器高	高台高	高台径	長さ	色調
59-09	土師器	坏	SB10							橙
59-10	須恵器	坏	SB10	7.00						灰白
59-11	土師器	坏身	SB10	(12.80)	9.20	3.00				橙
59-12	土師器	坏身	SB11	(13.30)	(8.60)	2.60				橙
59-13	土師器	甕	SB12	(18.00)						にぶい橙
59-14	須恵器	坏身	SB20	(13.70)	(10.00)	3.40				灰白
59-15	須恵器	坏身	SB20	(13.30)	(5.90)	4.10				灰白
59-16	土師器	坏身	SB20		(7.80)					橙
59-17	土師器	皿	SB20	(11.70)	(4.80)	3.30				橙
59-18	須恵器	坏	SB20	(13.20)	7.20					灰
59-19	土師器	甕	SB21	(19.10)						にぶい黄橙
59-20	土師器	坏	SB23	(13.80)	(7.80)	3.10				橙
61-01	土師器	椀	SX01		(11.00)					にぶい黄橙
61-02	土師器	椀	SX01		(6.60)					橙
61-03	黒色土器	椀	SX01		(7.60)					にぶい橙, 黒
61-04	須恵器	坏身	SX01	(14.80)	(8.20)	5.00				灰白
61-05	須恵器	坏身	SX01		(8.60)					灰白
61-06	須恵器	坏身	SX01		(7.10)					褐灰
61-07	土師器	坏	SX01							橙
61-08	土師器	坏	SX01							橙
61-09	土師器	皿	SX01	(9.90)	(7.20)	1.90				にぶい黄橙
61-10	土師器	皿	SX01	(9.20)	(6.60)	1.80				浅黄橙
61-11	土師器	皿	SX01	(11.60)	(8.70)	1.60				灰黄橙
61-12	土師器	皿	SX01	(10.20)	(7.80)	1.70				にぶい黄橙
61-13	土師器	皿	SX01	(10.20)	(8.00)	1.30				浅黄橙
61-14	土師器	甕	SX01	(26.30)						にぶい黄橙
61-15	土師器	甕	SX01	(27.60)						にぶい橙
61-16	土師器	甕	SX01	26.20						にぶい橙
62-01	土師器	甕	SX01	(13.30)						にぶい赤褐
62-02	須恵器	壺	SX01							灰白
62-03	須恵器	壺	SX01							にぶい褐
62-04	須恵器	壺	SX01		(10.00)					赤褐, 橙
62-05	須恵器	壺	SX01							灰
62-06	須恵器	壺	SX01							灰
62-07	須恵器	壺	SX01							橙
62-08	須恵器	壺	SX01							灰
62-09	須恵器	壺	SX01							灰
62-10	須恵器	壺	SX01							褐灰
62-11	須恵器	壺	SX01							灰
62-12	須恵器	壺	SX01							浅黄, 暗灰黄
63-01	須恵器	壺	SX01							赤褐
63-02	土師器	鉢	SX01	(19.40)		7.80				にぶい黄橙
63-03	土師器	鉢	SX01	(17.60)						にぶい褐
64-01	土師器	坏	SD01	(11.00)						橙
64-02	須恵器	坏	SD01	12.50	7.90	3.30				灰白
64-03	須恵器	坏	SD01	13.80	8.20					灰白
64-04	須恵器	坏身	SD01		9.00		0.5	8.0		灰黄褐
64-05	須恵器	坏身	SD01	(13.40)	(8.60)	5.10				暗黄灰
64-06	須恵器	坏身	SD01		(7.90)					暗赤灰
64-07	須恵器	坏身	SD01		(9.30)					灰
64-08	須恵器	坏身	SD01		(7.30)					灰白
64-09	須恵器	坏身	SD01	(15.00)	9.00	4.40	0.8	9.0		暗赤灰
64-10	須恵器	坏身	SD01		9.00					灰白
64-11	須恵器	坏身	SD01		(8.80)					灰, 灰白
64-12	須恵器	坏身	SD01	7.80						灰
64-13	須恵器	坏身	SD01	(11.60)	(7.10)	4.00	0.5	(7.1)		青灰
64-14	須恵器	坏身	SD01	(14.50)	8.20	3.90				青灰
64-15	須恵器	坏身	SD01		7.90					灰白
64-16	須恵器	坏身	SD01		(9.40)					暗灰
64-17	須恵器	坏身	SD01	(12.10)	(6.00)	3.65				灰白
64-18	須恵器	坏身	SD01		9.20		0.2	9.6		灰
64-19	須恵器	坏身	SD01		(8.00)		0.8	(8.0)		灰
64-20	須恵器	坏蓋	SD01	(14.30)		1.00				灰白
64-21	土師器	椀	SD01		(10.00)					にぶい黄橙
64-22	土師器	椀	SD01		(9.30)					にぶい黄橙
64-23	土師器	椀	SD01	(14.60)						にぶい褐灰
64-24	須恵器	壺	SD01	(20.90)						褐黄
64-25	須恵器	壺	SD01	(16.50)						橙
64-26	土師器	甕	SD01	(18.00)						にぶい橙
64-27	土師器	甕	SD01	(18.80)						にぶい橙
64-28	土師器	甕	SD01	(16.20)						にぶい黄橙
65-01	須恵器	壺	SD01							灰褐
65-02	須恵器	壺	SD01							黄褐
65-03	須恵器	壺	SD01							灰
65-04	須恵器	壺	SD01							灰
65-05	須恵器	壺	SD01							赤褐, 褐灰

図版番号	種類	器形	遺構名	口径	底径	器高	高台高	高台径	長さ	色調
65-06	須恵器	壺	SD01							灰褐, 暗灰黄
65-07	須恵器	壺	SD01							にぶい褐, 暗灰黄
66-01	須恵器	壺	SD01							灰褐, 暗褐
66-02	須恵器	壺	SD01							暗オリーブ灰, 灰
66-03	須恵器	壺	SD01							黒褐, 灰
66-04	須恵器	壺	SD01							灰
66-05	須恵器	壺	SD01							褐灰
66-06	須恵器	壺	SD01							灰黄
66-07	須恵器	壺	SD01							暗赤褐, 灰
66-08	須恵器	壺	SD01							黒褐 灰黄
67-01	須恵器	壺	SD01							暗緑灰
67-02	須恵器	壺	SD01							灰
67-03	須恵器	壺	SD01	(17.80)	(12.00)		1.1	(12.0)		にぶい橙
67-04	須恵器	坏身	SD01		(9.40)		1.1	(9.4)		灰白
67-05	土師器	甕	SD01	(29.60)						にぶい黄橙
68-01	土師器	椀	SD02		(6.90)					橙
68-02	須恵器	坏身	SD02		(6.70)					灰白
68-03	須恵器	坏身	SD02		(9.70)					灰
68-04	土師器	甕	SD02	(19.40)						にぶい黄褐
68-05	須恵器	壺	SD02	10.40						灰
68-06	須恵器	壺	SD02							暗灰黄
68-07	須恵器	壺	SD02							灰
68-08	須恵器	壺	SD02							灰
68-09	須恵器	壺	SD02							灰
68-10	須恵器	壺	SD02							灰
69-01	土師器	坏		12.40	8.50	3.80				橙
69-02	土師器	皿		20.60		4.80				橙
69-03	土師器	皿		(17.80)						橙
69-04	土師器	坏								橙
69-05	須恵器	坏			(12.00)					にぶい橙
69-06	土師器	坏身		(12.80)	(7.00)	3.60				橙
69-07	須恵器	坏身		(12.70)	(8.30)	3.50				灰白
69-08	須恵器	坏身		(13.00)	(8.50)	4.20				灰白
69-09	土師器	椀								橙
69-10	土師器	椀			(10.40)					にぶい橙
69-11	黒色土器	椀			5.90					にぶい黄橙, 黒
69-12	須恵器	坏身			6.10					灰
69-13	須恵器	坏身			(9.00)					灰
69-14	須恵器	坏身			10.20		0.5	10.2		灰, 灰
69-15	須恵器	坏蓋		(15.00)						暗灰
69-16	須恵器	坏蓋		(15.10)		1.50				灰
69-17	東播系須恵器	捏鉢								灰白, 暗灰
69-18	土師器	壺		(18.90)						橙
69-19	土師器	甕		(21.20)						にぶい橙
69-20	土師器	甕		(15.60)						にぶい橙
70-01	土師器	甕		(27.40)						にぶい橙
70-02	土師器	甕		(25.50)						にぶい黄橙
70-03	土師器	甕		26.20						にぶい黄橙
70-04	土師器	甕		(18.30)						にぶい橙
70-05	土師器	甕								にぶい橙
70-06	土師器	甕		(26.20)						にぶい橙
70-07	土師器	鉢								灰黄褐, にぶい黄橙 にぶい橙
71-01	須恵器	甕	pit 3							灰黄褐, 灰
71-02	須恵器	甕								灰
71-03	龍泉窯系青磁	碗Ⅰ-1			5.80		0.95	5.8		オリーブ灰
71-04	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ-bcd								明青緑
71-05	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ-bcd								灰黄褐
71-06	白磁	碗Ⅰ-1								灰白
71-07	同安窯系青磁	碗Ⅰ			4.80		1.1	4.8		明緑青
71-08	龍泉窯系青磁	碗Ⅲ-2								明青緑
71-09	紡錘車									にぶい黄橙
71-10	砥石								6.2	浅黄橙
71-11	鉄器	鎌							25.0	
71-12	弥生式土器	甕		(27.60)						灰黄

外器と内器で色調が異なる場合は外, 内の順で入力してある

参 考 文 献

- 橋本康夫、鶴島俊彦 1983 『上鶴頭遺跡』 熊本県文化財調査報告書第63集
木崎康弘編 1993 『狩尾遺跡群』 熊本県文化財調査報告書第131集
江本 直 1993 『柏木谷遺跡』 熊本県文化財調査報告書第134集
丸山伸治、川俣 恵 1996 『陣山遺跡』 熊本県文化財調査報告書第155集
水野哲郎 1998 『二本木前遺跡』 熊本県文化財調査報告書第167集
水野哲郎 2000 『祇園遺跡』 熊本県文化財調査報告書第188集
網田龍生 1999 『池辺寺跡Ⅱ』 熊本市教育委員会
山本信夫 1983 『太宰府条坊Ⅱ』 太宰府の文化財第7集
本田秀行 1984 『阿蘇南郷谷史覚書』
竹内理三編 1991 『角川日本地名大辞典43熊本県』 角川書店
松本雅明監修 1985 『日本歴史地名大系第44巻熊本県の地名』 平凡社
甲元真之・嶋津義昭編 1983 『えとのす第22号特集・阿蘇／海と山と里の文化』 新日本教育図書
「新・熊本の歴史」編集委員会編 1979 『新・熊本の歴史2 古代(下)』 熊本日日新聞社
工藤敬一・平野敏也 1997 『図説 熊本県の歴史』 河出書房新社
工藤敬一他 1999 『熊本県の歴史』 山川出版社
中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
金子裕之編 1989 『古代史復元9 古代の都と村』 講談社
鬼頭清明 1985 『古代日本を発掘する6 古代の村』 岩波書店
小笠原好彦 1996 「古代の家族」『考古学による日本歴史15家族と住まい』
山本輝雄 1996 「住居の変遷」『考古学による日本歴史15家族と住まい』
平川 南 1991 「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集
広瀬和雄 1994 「考古学から見た古代の村落」『岩波講座日本通史第3巻 古代2』
山本信夫 1990 「統計上の土器」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集
中島恒次郎 1992 「奈良・平安土器の移り変わり」『大宰府市史 考古資料編』
網田龍生 1994 「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究』
熊本大学文学部考古学研究室創設20周年論文集
網田龍生 1994 「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究X』
網田龍生 1997 「肥後における竪穴住居の終焉」『肥後考古第10号』
美濃口雅朗 1994 「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究X』

写真図版



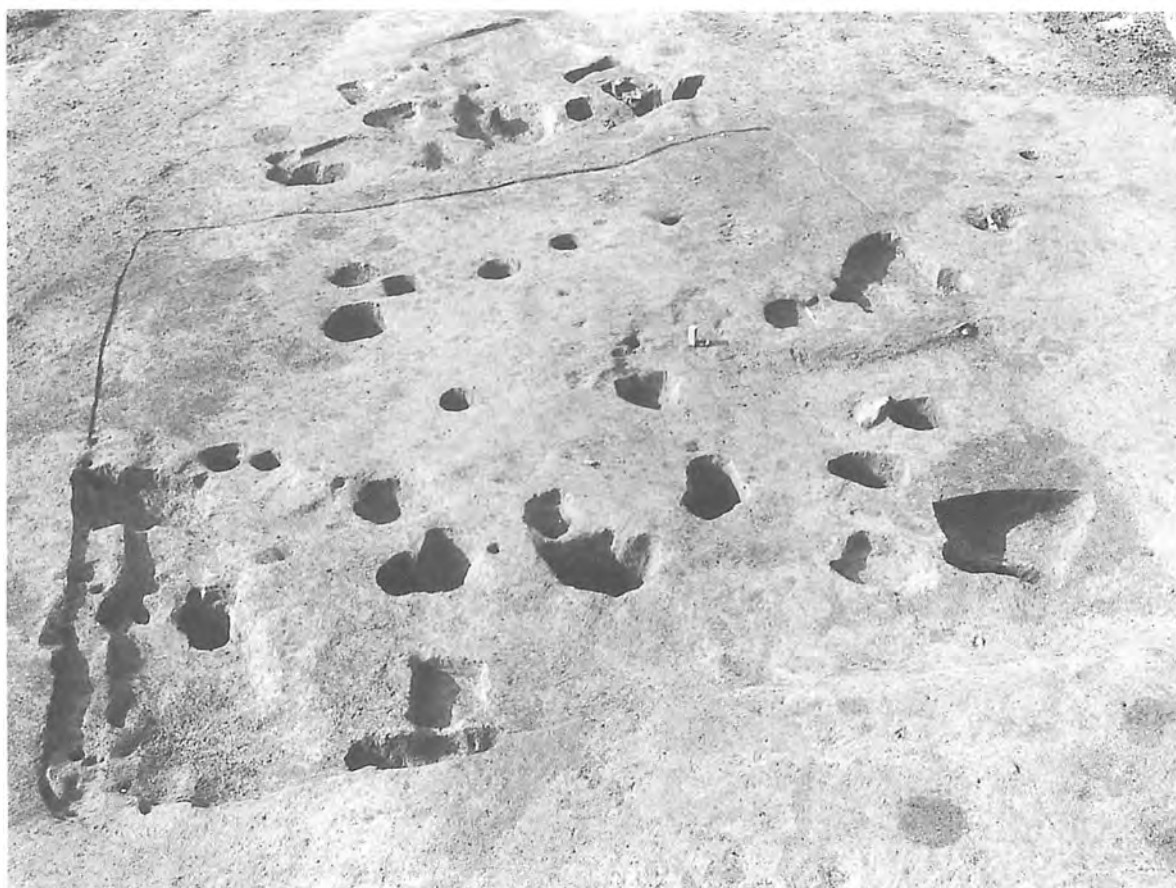
(1) S 101



(2) S 102、04、05



(3) S 103



(4)



(5) S 107、08、09、16



(6) S 107竈



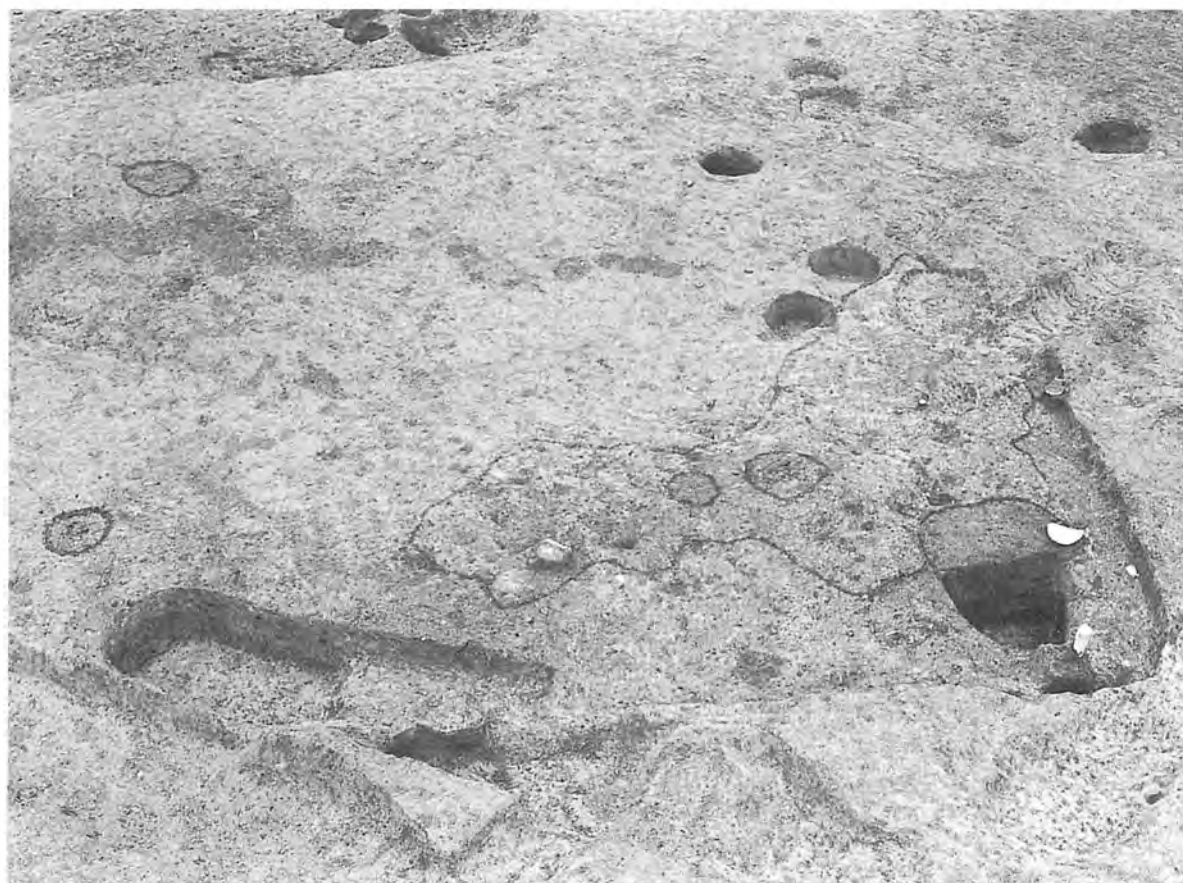
(7) S I 10、11、12



(8)



(9) S I 14



(10) S I 15



(11) S I 17、18、19



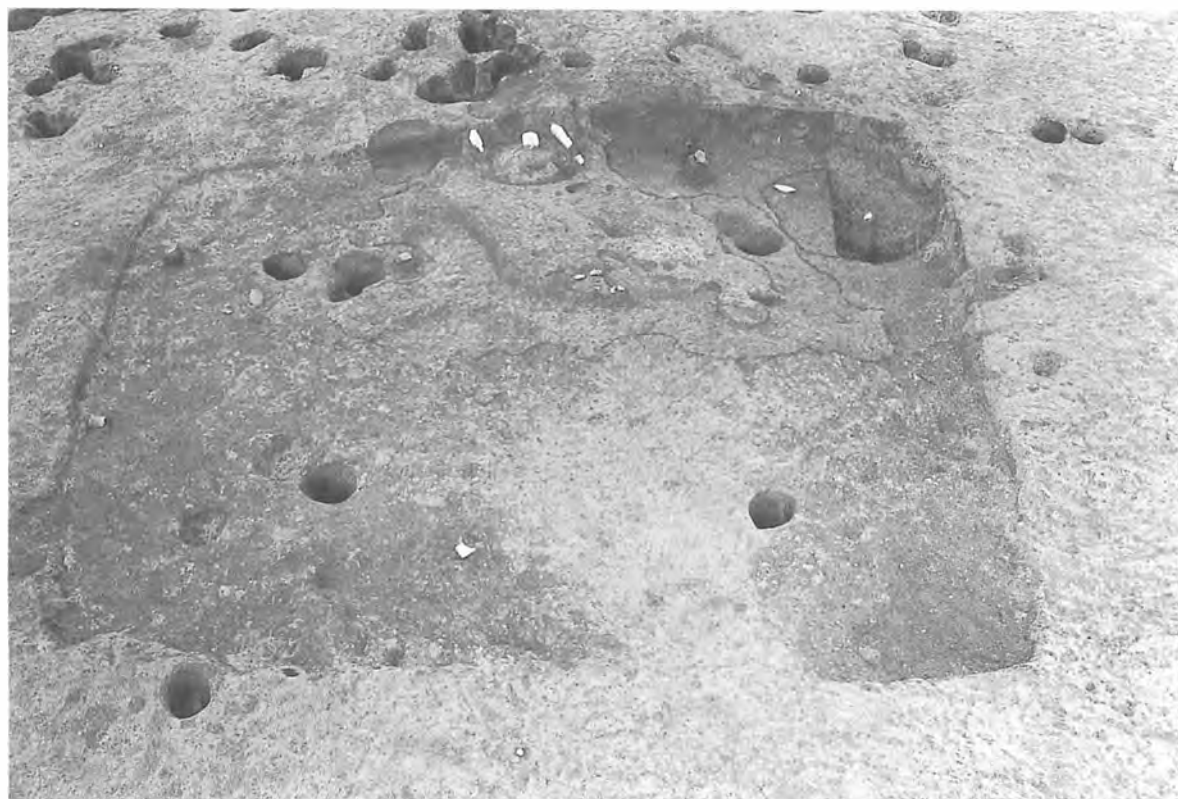
(12) S I 20、22、29



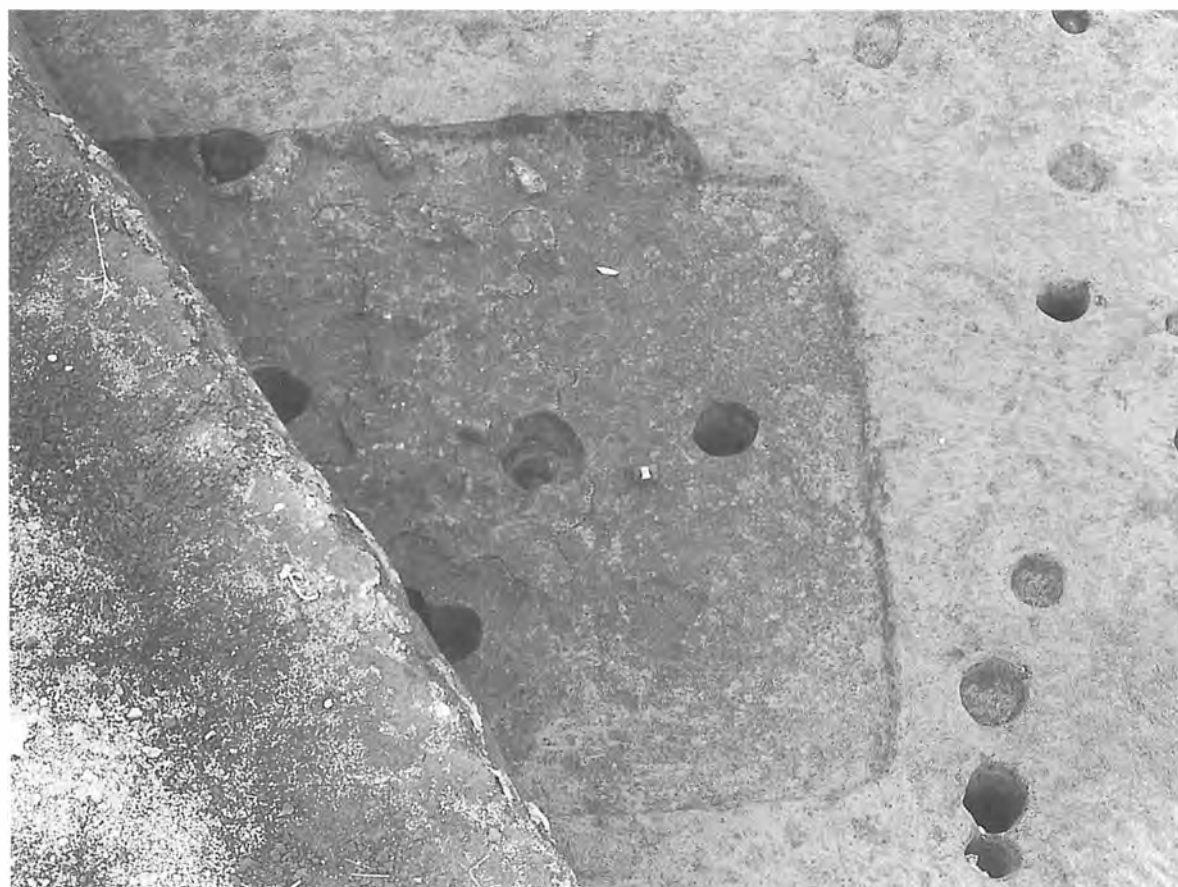
(13) S I 20竈



(14) S I 21、30



(15) S | 24、25



(16) S | 26、27



(17) S I 28



(18) S I 31、32、33



(19) S | 32、33貯蔵穴



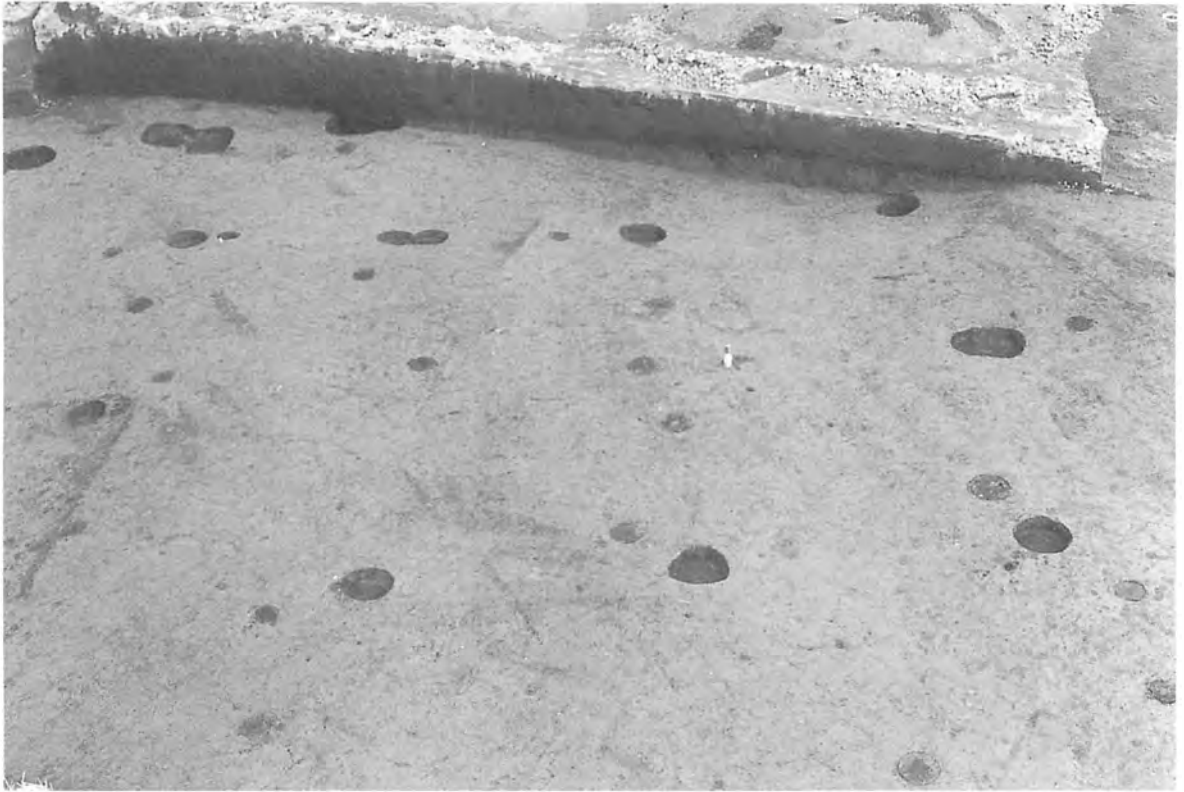
(20) S | 34



(21) S I 35



(22) S B01、02



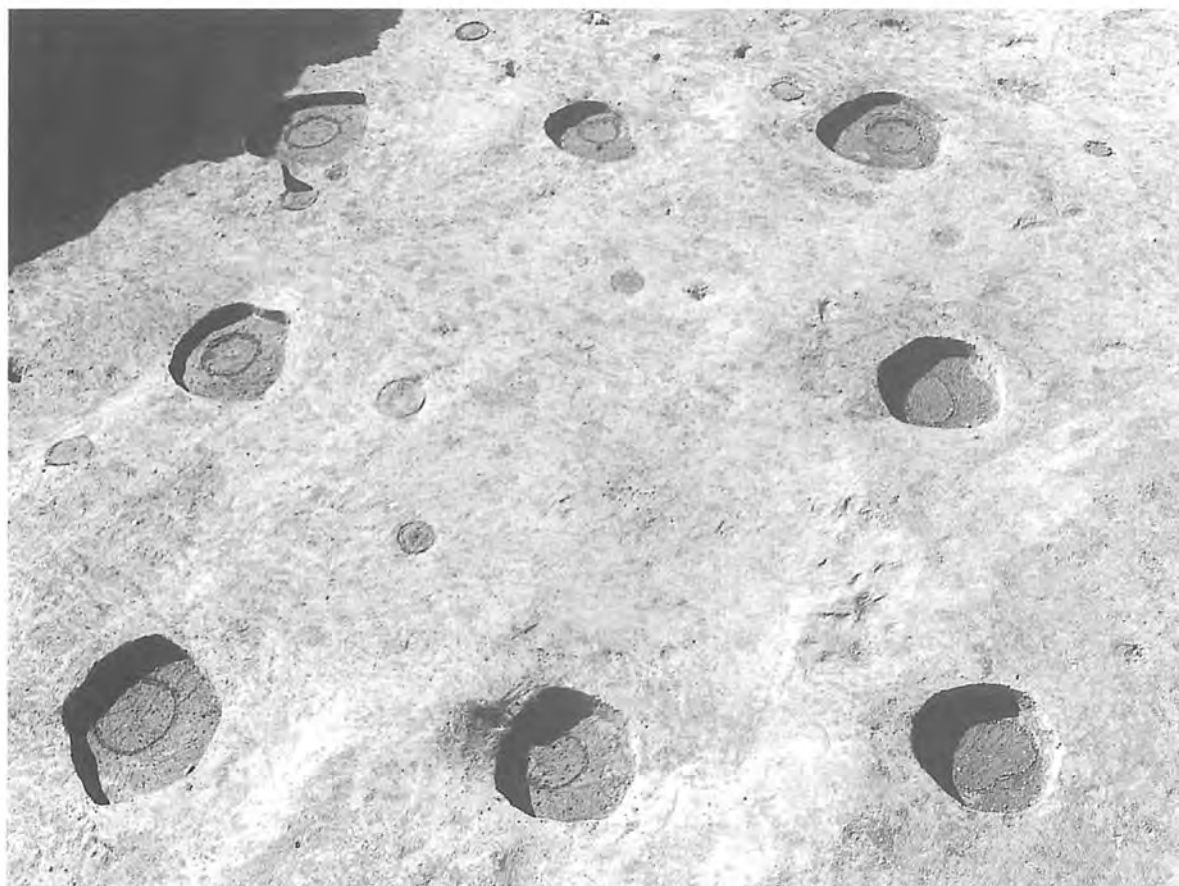
(23) S B03



(24) S B04



(25) S B 05



(26) S B 06



(27) S B07



(28) S B08



(29) S B 09



(30) S B 10



(31) S B11



(32) S B12



(33) S B13



(34) S B14



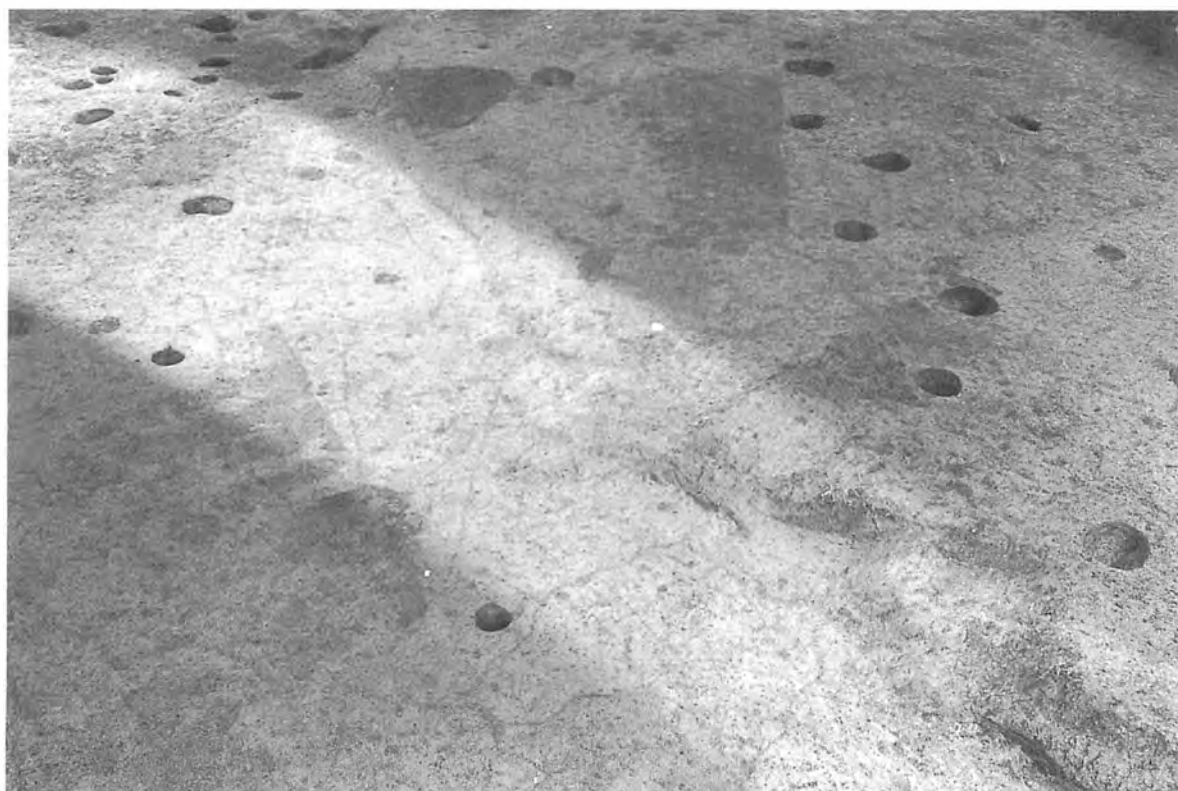
(35) S B 15



(36) S B 16



(37) S B 18



(38) S B 19



(39) S B 20、21



(40) S B 22



(41) S B 23



(42) S B 24、25



(43) S X 01



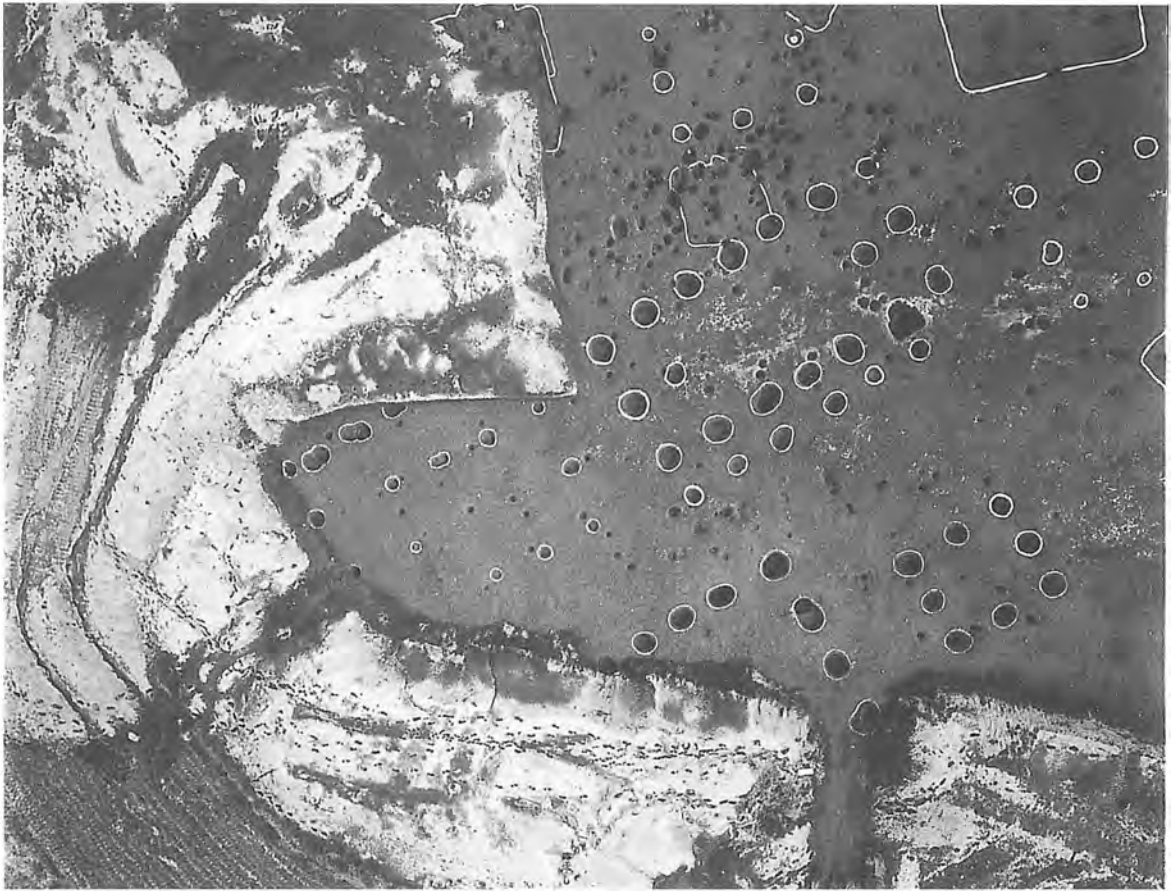
(44) S D 01



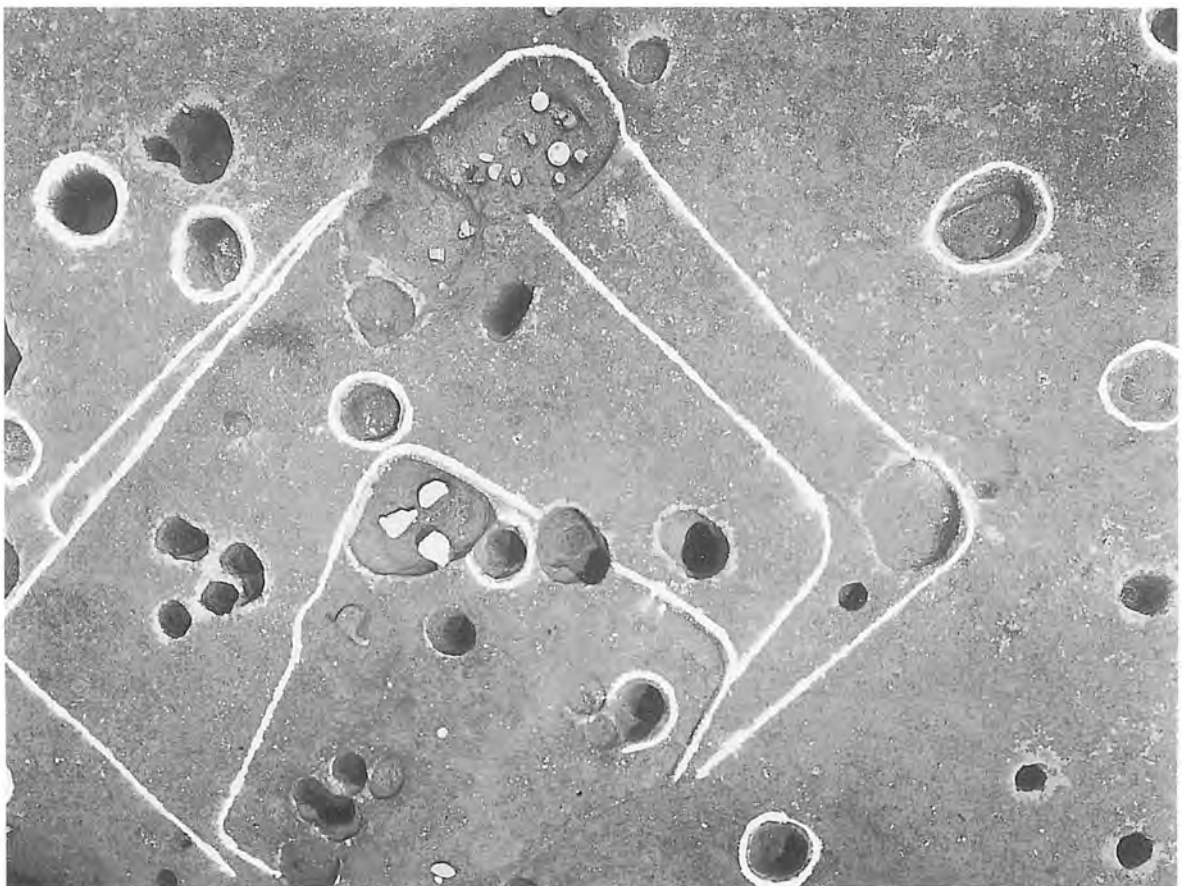
(45) S D01、02



(46) II区S I、S B集中部



(47) I区S1、SB集中部



(48) S131、32、33

(49)
S 1 01出土
須惠器坏
(5-2)



(50)
S 1 02出土
土師器坏
(6-2)



(51)
S 1 03出土
土師器坏
(8-3)



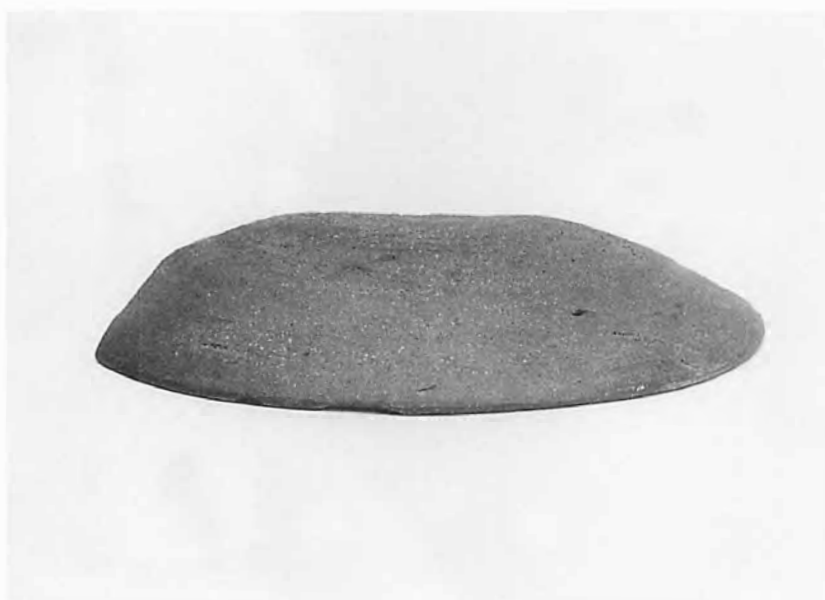
(52)
S 1 06出土
須惠器坏
(9-1)



(53)
S 1 16出土
須惠器坏盖
(13-6)



(54)
S 1 16出土
須惠器坏盖
(13-7)



(55)
S 113出土
土師器杯
(17-1)



(56)
S 113出土
土師器小壺
(17-2)



(57)
S 115出土
須惠器坏身
(19-1)



(58)
S 1 25出土
鉄製刀子
(27-2)



(59)
S 1 25出土
須恵器坏蓋
(28-6)



(60)
S 1 25出土
須恵器坏蓋
(28-7)



(61)
S I 25出土
須惠器坏
(28-8)



(62)
S I 32、33出土
土師器坏
(34-1)



(63)
S I 32、33出土
土師器坏
(34-2)



(64)
S I 32、33出土
土師器坏
(34-3)



(65)
S I 32、33出土
土師器坏
(34-4)



(66)
S I 32、33出土
土師器坏
(34-5)



(67)
S I 32、33出土
須惠器盤
(34-6)



(68)
S I 32、33出土
須惠器坏蓋
(34-9)



(69)
S I 32、33出土
須志器坏蓋
(34-8)



(70)
S I 34出土
須恵器坏
(35-1)



(71)
S B 10出土
土師器坏
(59-10)



(72)
S B 11出土
土師器坏
(59-12)



(73)
S X 01出土
土師器皿
(61-9)



(74)
S X 01出土
土師器壺
(61-16)



(75)
S D 01出土
須惠器坏
(64-2)



(76)
S D01出土
須恵器坏
(64-14)



(77)
土師器皿
(69-2)



(78)
土師器壺
(70-3)



あ と が き

熊本と大分を結ぶJR豊肥線に、阿蘇山の入り口である立野駅がある。外輪山の中腹に位置するこの駅から本線を通る列車は、喘ぎながらスイッチバックのつづら折りを登り、北の阿蘇谷へ降りて行く。一方、分岐して高森へ向かう第三セクターの南阿蘇鉄道に乗り込むと、北向山の原生林を抜けて南郷谷へと下っていく。南郷谷は阿蘇谷に比べて面積が狭く、阿蘇の山々と外輪山が迫り、三日月状に弧を描きながら東へ延びていく。ここは北の阿蘇谷に比べて圃場整備が遅れたため、魚の鱗のように幾重にも棚田が重なっており、古代以来の人々の営みが息づくかのような、のどかな日本の原風景を見せてくれる。

立野駅からしばらく走ると、「水の生まれる里白水高原駅」という駅に着く。旧高森線の第三セクター化にともなって作られた新駅で、そのような棚田の真ん中にぽつんとある駅である。駅名の示すとおり、近くには伏流水の湧き出る池がたくさんあり、古来滔々と人々の生活を潤してきた。杉の本遺跡は「高原駅」の目の前であり、やはり豊かな湧き水の恩恵を受けた古代集落であっただろう。本編で紹介をしたように、阿蘇地方での古代集落の調査は珍しく、本調査によってこの地方の古代史を考える上での資料を報告できたことは貴重な成果であると思う。また当時、白水村での本格的な埋蔵文化財の調査は始めてであり、普段耕作をしている田んぼの下から住居跡や土器類が出てくることは、地元の人にとっても興味深いことであったようで、地元での郷土の歴史に対する関心の高まりも感じる事ができた。

調査に着手したのが12月であり、田んぼの藁こずみに粉雪がうっすらと積もるところであった。厳冬の阿蘇での調査であり、毎朝、凍結した遺跡の条件整備を行うことから調査の始まりであった。大雪により調査が中止となることも多く、厳しい調査であった。このような自然条件の中で無事日程を終えられたのも、調査に携わっていただいた作業員の皆様のお陰であると心より感謝を申し上げたい。

また、整理作業でも、忙しい日程の中に明るく整理作業を続けて下さった皆様にも並々ならぬ苦勞をお掛けした。あわせて感謝を申し上げたい。

報 告 書 抄 録

フリガナ	スギノモトイセキ
書名	杉の本遺跡
副書名	県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第196集
編著者	水野 哲郎
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8570 熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年	2001年3月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
スギノモト 杉の本	クマモトケン アソグンハクスイムラ 熊本県阿蘇郡白水村 オオアザナカマツアザスギノモト 大字中松字杉の本	43429				H. 4.11 ～ H. 5.3	5,500m ²	県営圃場 整備事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
スギノモト 杉の本	集落跡	白鳳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	竪穴住居35棟 掘立柱建物25棟 溝2条 不明遺構1基	土師器（甕、坏、椀、皿） 須恵器（甕、壺、坏、皿） 白磁碗 青磁碗 鉄器（鎌）	

熊本県文化財調査報告 第196集

杉の本遺跡

発行年月日 平成13年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行 熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 中央印刷紙工株式会社
〒860-0053 熊本市田崎2丁目5番38号

12 教委 教文

② 006

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 196 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：杉の本遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>